
ザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方

くま太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方

【Nコード】

N0606X

【作者名】

くま太郎

【あらすじ】

財津功才、高校一年生。

あだ名はザコ。

おもしろいという理由だけで、魔法と剣の世界オーディヌスに召還される。

これは小技を得意とする普通の高校生が異世界で、成長していくかもしれない物語。

ザロ登場する(前書き)

初オリジナルの作品となります。
更新の早さは全く未定です。

ザコ登場する

(今日も嬉しいぐらいに平和だ、いや幸せだっ！)

学校は男子校。

当然、彼女はなし。

できる予定もなし。

ついでに、才能や見た目は、人並み以下。

でも今、俺は幸せなんだ。

昼休みの教室で幸せを実感していると、同級生が声をかけてくる。

「おいザコ。山田先輩が呼んでんぞ」

「わーった。今行く」

「ちーっす。山田さん何か用っすか？」

「おっ、ザコ来たな。こいつがバイト先の後輩の財津功才たかふみ通称ザコだ。ザコこいつらが、お前の幼なじみの話を聞きたいんだとよ」

またか。

俺が知らない人に興味を持たれるのは、俺じゃなく周りの人間に興味があるからだ。

「いいっすけど、どっちの幼なじみっすか？」

「なっなっ、お前さ。美星学園の三条小百合さんと夏海唯ちゃんと幼なじみって本当か？」

三条小百合

黒髪の長髪、白い肌に日本人形並みに整った顔。
性格はおしとやかで、生け花や茶道を好むリアル大和撫子。

夏海唯^{なみゆい}

元気の固まりのスポーツ少女。
誰にも分け隔て無く接する明るい性格。
それでいてモデルが勤まる美貌をもつ。

「そっつすよ。2人共、俺の幼なじみっすよ」

この後の答えは、決まっている。
そしてその後の答えも。

「いやー。うらやましい、あんな美人の幼なじみがいるんなて
よ」

「そっつすか？ついでに風雅院隼人と鷹丘勇牙も幼なじみなんすよ」

風雅院隼人^{ふうがいはやと}

美星学園野球部の四番でエース。

頭脳も天才、そして綺麗系なイケメン。

たかおかゆうが
鷹丘勇牙

同じく美星学園の生徒。

暴走族マッドエンペラー総長。

男気溢れる性格で、メンバーに絶対的な信頼をもたれている。

こいつはワイルド系イケメン。

ちなみに4人共も俺と同じ年の高1。

「こいつの周りは美少女、イケメンばかり。しかも揃いも揃って多芸多才。それでこいつについたあだ名が財津巧才を縮めたザコって訳だ。悪い奴じゃないから可愛がってやってくれや」

山田先輩が、ニヤニヤしながら俺を指差している。

山田先輩の友達は、生暖かい目で俺を見ていた。

それは確実に同情の目。

その扱いには、慣れてるし同情ならむしろありがたい。

ガキの頃は、何も気にせずあいつらと遊んでいた。

小学校にあがって努力では埋めれない才能の差を思い知る。

周りの大人達からは、いつも5人一緒なのに君だけ努力をしていないんじゃないかと良く言われた。

努力ならあいつらの数倍努力をしていた。

勉強もスポーツも。

中学になると、あいつらに嫉妬をした奴が俺に八つ当たりをしてきた。

やれ三条に振られたのはお前のせいだとか、夏海に嫌われたのお前

が悪口を言ったんだろとか。
挙げ句の果てに、風雅院に女を盗られたとか、鷹丘にケンカをうって負けたのが腹がたつとか、そんな理由で俺に八つ当たりをしてくる奴もいた。

高校になって、あいつらと離れた俺には、美少女の幼なじみと絡める特権やイケメンや暴走族リーダーの幼なじみの恩恵を失ったけど、比較をされずに済む幸せが待っていてくれた。

- - - - -

その日の夜。

俺がコンビニのバイトを終えて、帰る途中に女の子の叫び声が聞こえてきた。

普段ならそんな面倒事は知らないフリをする。

しかし叫び声の主は幼なじみの夏海唯に違いない。

無視をしたら、小百合に泣かれ隼人に嫌味タツプリに叱られ、勇牙にしばかれる。

何より唯が、傷つく姿を見たくはない。

あいつらから離れたのは、俺の勝手にしかないんだから。

今俺が持っているのは、飲みかけの缶コーヒーと通学カバンぐらい。

(武器になる訳ないよな)

声のした方に走っていくと、唯が男に絡まれている。

周囲を雑居ビルに囲まれて、逃げ場がないらしい。

男は180以上ある筋肉質でスキンヘッド。

できる事なら、一生関わりたくない人物。

ケンカじゃ絶対に勝つ自信がない。
でも俺はこの場を切り抜ける自信はあった。

飲みかけの缶コーヒーを男の頭目掛けて投げつけた。

カッーンと良い音を立てて、缶コーヒーは男の頭にクリーンヒット。

「良かったじゃねえか、ハゲに髪が生えたぜ」

男の頭からは、コーヒーが滴り落ちていた。

「功才っ！！」

唯、できたら名前を読んで欲しくなかったな！。

「唯、ここは俺が何とかする。勇牙がああ公園で集会をしているから逃げろっ」

逃げて、勇牙や暴走族のお友達に俺を助ける様をお願いしてちょうだい。

男は小馬鹿にされたと思ったらしく、唯から俺に標的を変えて襲いかかってきた。

それならチヨコマカ逃げて、唯の逃走時間を稼いでやる。

（唯の奴、心配をして残ってないだろうな）

… さすがは部活少女、ちゅうちよなく走り去った様で唯の姿は既に消えていた。

それなら俺が取る行動は1つ。

雑居ビルの隙間から逃走をはかるのみ。

あの体なら隙間に入ってこれないだろうし、隙間を抜ければ駅前通りだ。

思った通り、男は追って来れなかったが、何故か隙間は延々と続いていった。

どれ位歩いたんだろう。

確実に雑居ビル以上は歩いている。

でも、後ろを振り向く勇氣なんて俺にある訳がない。

その後も歩いていくと、ようやく明かりが見えてきた。

ここを抜けたら駅前通りの筈なんだが。

でもそこはレンガ造りの部屋で、ソファーに男が腰を掛けていた。

男は俺を見つけると、ニヤリと笑いこう言った。

「ようこそ。魔法と剣の世界、オーディヌスに」

なに、この状況は？

ザロ登場する(後書き)

幼なじみ4人は、しばらく、でてきません。

ザラと怪しい師匠（前書き）

2話目です。

ザコと怪しい師匠

雑居ビルの隙間を抜けたら、レンガ造り部屋だった。

これは夢か？

そうだ、俺は、あのでかい奴にしばかれて気絶をして夢を見るに
違いない。

「夢じゃないですよ、財津功才君。この世界で夢なんて見ていたら
天国に行っちゃいますよ」

俺は、何とも嫌な注意をしてくれた男を改めて見てみる。

年は、50才くらいだろうか。

第一印象は、怪しい。

第二印象も、怪しい。

どこまでいっても怪しい。

体型は、細いが筋肉質。

顔は、渋めで俳優をしてもおかしくないだろう。

モミアゲから続いているヒゲが渋さを増している。

しかし、真っ赤なシルクハットに真っ赤ジャケット、ズボンも靴
も赤一色だ。

(趣味わりー。今時芸人にもあんな格好する奴いないって)

「趣味が悪いなんて、失礼ですね。私は魔導士ですし、きちんとシ
ヤツは白ですよ。魔導士を見て戸惑うのはいけないですよ」

「はあ… すんません」

俺の危険回避レーダーが、関わるな危険と全力で注意を促してくる。

「はー、魔導と戸惑うをかけた駄洒落を無視するなんて立派な紳士になれませんよ。まあ功才君には冒険者になってもらうからいいんですけどね」

これが、俺と師匠のファーストコンタクトだった。

.....

「何時までも、ポケットと突っ立っているんです。こっちに来て座ってゆっくりと話をしましょう」

（座ったら、いざって時に逃げれないだろうか）

「心配しなくても、何もしませんよ。それともう逃げられませんよ」

「へっ？どう言う事っすか？」

「だからここはオーディナス。功才君が住んでいた世界とは別世界なんですから」

「はっ？別世界ってなんすか？」

「言い方を変えると異世界ですね。ちなみに功才君を喚んだのは私、ロッキー・バルボーです。気軽にロッキ師匠と呼んで下さい」

戸惑う俺を無視して、話を進めていくロッキさん。

「貴男には、ここで修行をした後に、オーディヌスで冒険者になってもらいます」

「冒険者っすか？秘境の探検とかをすればいいんすか？」

「冒険者の仕事は、討伐・護衛・採取とかですね。その辺はギルドに聞いて下さい」

「討伐って、何を倒せばいいんすか？」

「魔物や犯罪者とかですよ？頑張ってください」

この親父は何をぬかしてるんだ。

「お断りするっす。っーが無理っすよ。俺ケンカ弱いんすよ」

「だ・か・ら修行をするんじゃないですか。私の話聞いてました？」

聞いてたから拒否するんだって

「それなら俺じゃなくても、いいじゃないっすか。俺より強い奴なんて、いくらでもいるっすよ」

「貴男が良いんですよ。財津功才君、貴男はとても面白いですからね」

「それだけ？」

「強い人間、優れた人間は上を見たら限りがありません。でも貴男は面白い、貴男と言う小石を磨いてオーディヌスの荒れる大海原に投げ込んだらどうなるかを見てみたいんですよ」

確実に碎けるか、海に沈むって。

「もし、拒否したら？」

「元の世界に帰れないし、ここから放り出すだけですよ。いまの貴男じゃ魔物の餌になるのを確定ですけどね」

「うっ、何か特別な才能くれるんすか？筋力増強とか？」

「ないですよ。軽自動車しか運転した事がない人間が、いきなりF1を運転できる訳ないじゃないですか？」

(F1って、この人お疲れな人なんじゃないか？)

「本当に失礼ですね。私は貴男を召還するに辺り貴男の世界の事を色々学んだですよ」

ロッキさんの指差した先には、図鑑、小説、ビデオが積み重ねられていた。当然、その中には種馬垂れ目ボクサーのビデオもあった。

ザコと怪しい師匠（後書き）

今の若い人は種馬垂れ目ボクサーをわかるんだらうか？
指摘、感想お待ちしております

ゼロの修行（前書き）

じみーな展開です

ザコの修行

半ば強制的に、修行の日々が始まった。
でもこれがかかなり地味。

ライトノベルみたいに、

「そんな簡単に魔法を使いこなせれるなんて」

そんな都合の良い展開が俺にある訳がなかった。

朝は、基礎体力作りから始まる。

この建物は8階層の塔らしく、その1階から8階までを、荷物を持ちながら、ひたすら歩かせられた。

師匠曰わく

「この世界の移動手段は徒歩が基本ですからね。当然、サバイバル道具を持ちながらの移動ですよ」

ちなみに今朝のロッキ師匠の服は、黄緑色バージョン。

疲れたから休憩をお願いしたら、魔法で強制回復させられて再開をさせられた。

次は武術の修行。

槍や剣でひたすら、人形を攻撃していく。

師匠の一言

「基本がない君が、必殺技なんて無理ですよ。まずは武器の重さに慣れる。自由に扱える筋肉をつける。物を斬った時の衝撃にも慣れる。それが先です」

手の皮が、むけたと言ったらやっぱり回復させて再開。

次は座学。

座学で分かった事。

オーディヌスの国の殆どは、王政が敷かれているとの事。
つまりは身分制度が、きっちりしている。
俺の立場を聞くと

「功才君はちゃんと市民にしてあげますよ。でも貴族に絡まれたら泣き寝入りだから気をつけて下さい」

師匠は、そう笑いながら教えてくれた。

いきなり貴族待遇は勘弁して欲しかったから、まあ、これだけは感謝をしている。

俺は、ジユテムやセトレポーンな礼儀はできないし、ドロドロの権力闘争を防ぐ力も後ろ盾もねえーもん。

そして俺の世界との一番の違い、エルフやドワーフが存在する事。

「間違つても、亜人なんて言葉は使わないで下さい。彼らはプライドが高いですから。ちなみに功才君なら猿人族になります」

猿人族の他に猫人族・犬人族など様々な種族がいるそうだ。

他民族の風習とかが、分からないうちは近づかない様にしておこう。
犬耳や肉球は魅力的だけでも、猿人族と仲が悪いかもしれないから、君子危うきに近寄らずが一番だ。

魔法に関しては、さらに地味。

魔法は神聖魔法、精霊魔法、簡易魔法、特別魔法に分かれています。
らしい。

神聖魔法は、エルフに認めれないと無理との事。

師匠からの一言。

「エルフは美しい者を評価しますから。まあ君は無理でしょ」

言わなくも分かってますよー。

美しい者好きって、聞いた時点で諦めました。

精霊魔法も、精霊に認めれないといけならしい。

師匠からの説明

「精霊がどこにいたって？それぞれの信仰神殿の奥に匿われていますよ。軟禁に近いかもしれないですけど。つまりその神殿に仕えて修行して才能がある者が多額の寄付金を払った者にのみチャンスがある訳です」

「俺には無理と？」

「神殿にいるのは、人の信仰を糧にしている一部の精霊ですからね。秘境とかにいけば強力な精霊がいますよ。行く間に死ぬ確率や会ったら襲われる確率の方が、半端じゃなく高いですけどね」

うん、これも諦めよう。

今、俺が勉強しているのが簡易魔法。

自分の魔力を指先に集中して空中や地面に魔法陣を描き、簡単な自然現象を発動させれるとの事。

その為に魔力の集中の仕方、魔法陣を覚える、素早く正確に魔法陣を書く技術を身につけなければいけないらしい。

俺が最初に覚えさせられた魔法は、アイスキューブ。

読んで字の如く、空気中の水分を冷却させて1?角の氷を生み出す魔法。

師匠のお言葉。

「冒険中、生水を飲んでお腹を壊したらシャレになりませんからね。凍らせた後に煮沸消毒して下さいね」

レベルが上がれば1ダースの氷を1回に作れるらしい。

レベルが上がって製氷機レベル、それが俺。

そして特別魔法。

触媒を使い、多人数の魔法使いが何日もかけて発動させる簡単魔法のパワーアップバージョン。

お金も時間も、とんでもなく掛かるらしい。

国の外交の上で、どれだけ強力な魔法陣を所有しているか、強力な触媒を保有しているのかも重要視されるとの事。

これも俺には関係ないと思っていたら

「可愛い弟子の為に、特別です。私が知っている特別魔法の一つを授けましょう。絶対結界です」

絶対結界。

魔物や山賊から、身を隠せる魔法。

「絶対結界は便利ですよ。野営でぐっすり眠れますし、お便所も安心してできます」

確かに無謀な体勢で、臭いを放つあれの時は狙われやすいだろうし。

そんな地味な修行が、1ヶ月近く続けた。

ザロの修行（後書き）

功才が使える魔法は、アイスキューブレベルしかありません。
それを使って戦っていく予定です。
作者に書けたらですけど。

感想、指摘お待ちしております。

ザロとコロニン(前書き)

残酷な表現があるので、ご注意ください&ザロの初実戦です。

ザコとゴブリン

オーディヌスには魔物と呼ばれる生き物がいるらしい。

ロッキ師匠曰わく

「魔物は普通の動物が、マナの影響で進化した種族なんですよ。だから動物とちがって属性の影響が濃いですよ。火を吐く魔物も珍しくありませんから」

ちなみに、今日のロッキ師匠のジャケットは星柄。

「まあ、功才君が火を吐ける魔物に会ったら逃げられるだけで奇跡と
思っして下さい。今の貴男はゴブリンに勝てるか、どうかですから」

あれだけ修行をして、ゴブリンって。

「功才君、君はゴブリンを馬鹿にしたでしょ？確かに力も知能もゴブリンに比べたら君の方が数倍上ですよ。でもねゴブリンは基本集団で戦いますし、獲物に対して躊躇なく襲います。君は生き物に対してためらいなく剣を振るえますか？」

「ゴブリンから逃げるのは無理っすか？」

できたら殺しは、避けたいんだよな。

「無理ですね。ゴブリンは自分より弱いと思ったら容赦なく襲いますし、ゴブリンを倒せない冒険者に依頼は来ませんよ」

「冒険者が、ゴブリンと戦う頻度は多いんすか？」

「初心者からベテランまで幅広く戦う機会が多いですよ。何しろ数が多い分、被害も多いですからね」

「被害つて、やっぱり女をさらったりするんすか？」

もしかして、ヒーローになれるチャンスも？。

「それは誤解ですよ。ゴブリンは女性が身につけている貴金属が欲しいだけです。まあ金持ちと農婦の区別もつきませんし、裸にして貴金属を探すから誤解が生まれたんでしょうね。ちなみにゴブリンの美人度はゴブの多さで決まるそうですよ」

ゴブリンらしいゴブリンが人気な訳ね。

「それなら、何でゴブリンの被害があるんすか？」

「簡単ですよ。彼らの知能じゃ畑を耕すとか家畜を育てるのを理解できませんからね。村があれば美味しい食べ物があるだから襲うんですよ」

バイトしないでカツアゲしてるヤンキーみてえ

「座学ばかりじゃ、飽きますね。修行もある程度したから、戦ってみましょ。ゴブリンと」

「確認しますけど俺に拒否権は？」

「ある訳ないですよ」

「ですよねー」

塔にはロッキ師匠の楽しそうな笑い声と、俺の渴いた笑い声が響いた。

.....

こっちの世界に来て、初めて外に出た。
そして改めて日本じゃない事を実感する。
俺が連れて来られたのは、ただっ広い湿原。

「ここに出る魔物はゴブリンくらいですからね。さあ功才君、実戦デビューですよ。ワクワクしませんか？」

「ワクワクじゃなく、ドキドキはしてるっすよ。嫌なドキドキですけどね」

ちなみ俺の装備は皮の鎧に、皮の兜、鉄の槍。

「本当に君はシャイですね。そして運も良い。あそこにゴブリンが一匹でいますよ。さあレッツ！バトル」

師匠が指差す先は、緑色のボコボコした生き物がいる。
あれがゴブリンか。

ゴブリンはボロボロの服に、錆びた剣を持っていた。
ゴブリン見学をしている俺の背中をロッキ師匠が思いつ切り押してくれた。

「は、はるー」

俺と目をあわせたゴブリンが

「ゲギョー」

と、絶叫して襲い掛かってくる。
ファーストコンタクト大失敗。

「功才君ー、逃げてるだけじゃダメですよー」

傍観者を決めたロツキ師匠が遠くから叫んだ。
逃げてるんじゃない、戦略だったの。

俺が目指しているのは湿原にある水溜まり。
ジャンプでそれを飛び越し、少し離れた場所でゴブリンを待ち構える。

ゴブリンの両足が、水溜まりに入ったのを見計らって、水溜まりに
アイスキューブの魔法を掛ける。
空気中の水分を凍らせる程に低温状態を作れるなら、水溜まりの水
も凍らせる事ができる筈。

「ギユゲ？ギユゲゲ？」

足を凍り漬けにされた所為で、身動きがとれなくなっているゴブリン。

氷の厚さは、剣で壊せるぐらいなんだけどな。

ゴブリンは焦っているらしく、剣を振り回している。
そんな奴に、正面から挑む程俺は自信過剰じゃない。

大回りして、ゴブリンの背後へ。
決して槍で突く事はしない、槍が刺さったら抜くのは結構難しいんだよ。

まずは槍の石突きで、ゴブリンの頭をぶん殴り動きを止めて、フラフラした所で、首を斬りつける、何回も斬りつける。

「ふえー、ようやく動かなくなった。師匠、これでいいんすか？」

俺は、できるだけ平然な振りをして師匠に話しかけた。
本当は涙やら酸っぱい物が溢れだそうなんだけども。

「ゴブリン一匹に随分と手間暇をかけたみたいですけども。まあ良いでしょう」

「ちえっ、少しは誉めてくれてもいいじゃないっすか」

side ロッキ

うん、やはり彼は面白い。

私が彼に目を付けたのは必要なら利用できる物をなんでも利用しようとする所。

そしてそれは自分の欲には決して使おうとせず、自分や誰かが危険に晒された時にのみに、形振り構わずに行える所。

有名な冒険者は、無謀な勇氣より臆病さを持っていますからね。

臆病で卑怯でせこい戦い方をする彼の活躍を見てなさい。

勇気や戦いの美しさを、第一としている元我が一族達。

ザコとゴブリン（後書き）

功才君の戦いかは、卑怯でせこい戦い方、ザコらしい戦い方にした
いです。

当然チートな大技は、使えません。
感想指摘お待ちしております。

ザコと家族（前書き）

頑張って2話の投稿。

見てくれてる人いるのかな？

ザコと家族

ゴブリン退治の後も、俺の修行は続いた。
結果、体力はついた。
そして覚えた魔法。

スモールファイヤー

指先に小さな火を灯す。

早い話が、人間ライター。

師匠曰わく、焚き火をおこすのに便利。

アースタン

地面に小さな出っ張りを作る。

気づかなきゃ敵が転げるかもしれない。

当然オークぐらいに大きいと踏み潰される。

ウインドアーマー

体に風をまとわせて、敵の攻撃を逸らす事ができる。

対象は小鳥ぐらいの質量まで。

グラビティソード

自分の武器に重量をまとわせて重くできる。

だから制御できないと腕を痛める。

スモールシャープ

対象物を気持ち鋭利にできる。つーか鋭くなりすぎて、人形を斬りつけたら先が欠けた。

師匠曰わく包丁を研ぐのに便利。

ストーンレイン

足元の小石を上空に巻き上げて対象に降らす事ができる。
地味に痛いだけ。

ちなみに小石がない場合は、砂でも可能。
でも拳大の石で重くて無理だった。

マジックキャンセル

自分が放った魔法の効果を消せる、それだけ。

プチパラライズ

対象者に正座した後の足の痺れを与える事ができる。

フラッシュ

眩しい光をだして目くらましをする。

当然、自分も眩しい。

光を調節すれば明かり代わりにできる。

夜中トイレに行く時には重宝した。

他にも幾つか覚えたが、みんな生活を便利にできるレベルでしかない。1度、師匠に強力な魔法を教えて欲しいとお願いしたら

「良いですけど、制御できない魔法を使うと、下手すりゃ精霊から総スカンをくらいますよ。強力な魔法は自然破壊ですからね」

精霊魔法が使えなくても、精霊に嫌われると簡易魔法も使えなくなるらしい。

強力な魔法を使える様になるには、対象者のみに影響を与えれるぐらいに制御ができなきゃいけないとの事。

こんなので、俺は生き残れるのか？

いや、まだ修行すれば強くなれる筈だ。

できるだけ強くなつて、結果を出して地球に帰るんだ。きつと、家族やダチが心配しているに違いない。

彼奴らはどうだろう。唯は、俺が居なくなつた原因なんだから気に病んでなきやいいが。

でも全く気にしてもらえなかつたら、それはそれでへこむ。

「師匠、俺の親が心配していないか、わかりませんか？」

「わかりますよ。……あー、やめときましょ」

「その間は何なんすか。いや、わかつてましたけどね」

親父達は、俺に興味ないし。

「良かったら、聞かせてくれませんか？君は私の大事な弟子なんですから」

「うちの両親は芸能人なんすよ。結構有名な俳優と女優でね。忙しくて殆ど家にいないんすよ。それに……」

「まだあるんですか？」

「姉と妹がいるんですけど2人共お袋似で顔が良くて小さい頃から芸能人になつてるんですよ。まあ当たり前ちゃ当たり前なんですけども親父達は自分のプライドを満たしてくれる姉貴達の方が可愛い

らしくてね。1回雑誌のイタンビューで仲の良い4人家族なんて紹介されてましたし」

「それじゃ功才君の小さい頃は誰が面倒を見てくれてたんです？」

「爺ちゃんと婆ちゃんですよ。親父の親のね、家族で俺を褒めてくれたのは爺ちゃん達だけでしたし。そっか、やっぱり俺が居なくてもうちの家族は変わらないか」

運動会や授業参観に来てくれたのも、爺ちゃん婆ちゃんだけだし。その爺ちゃん達も、親父達とケンカして田舎に戻ったし。

「でも、でも君を心配している人がいましたよ。5、6人ぐらい」

「少なっ、学校は親父が手を回したんでしょ。俺は病欠か下手すりゃ転校扱いになってますね」

「そうですね。それならこの世界で新しい絆を結びなさい。誰でもない、君だけの絆をね」

「俺にできますかね」

「当たり前じゃないですか。君は私の大事な弟子なんですよ」

side ロッキ

功才君が、妙に物分かりが良いのには納得しました。

彼は色んな事を、諦めてきたんでしよう。

そして多才な友達に追いつく為に、努力をしたんですね。

能力が足りないから、小技や工夫で補う様にしたんでしょう。
家族に恵まれないか、師匠が師匠なら弟子も弟子ですね。

ザコと家族（後書き）

ちなみに功才の見た目は中の下くらいです。

美男＋美女の子供が、格好いいとは限りません。

感想指摘お待ちしております。

見てくれている人がいたらですけどねー

ゼロと卒業試験（前書き）

この作品に感想がきて、嬉しくて又書いちゃいました。

ザコと卒業試験

「くあー、ねみ。スモールファイヤーっ」と

外はまだ薄暗いが、修行の時間を考えると朝飯の支度は早めにしておきたかった。

この塔に住んでいるのは、俺と師匠だけ。だから必然と家事は弟子である俺の仕事になる。

来た当初は勝手がわからないので、師匠任せでだったんだけども出てきた料理は三食とも薬草のスープのみ。

つうか、薬草をすり潰して水で煮ただけ。味付けは塩のみ。

師匠曰わく特別な薬草で栄養も補えるし、魔力も強くできるらしいけど。

料理は、婆ちゃんに教わってるし家での生活も殆ど一人暮らしに近かったから料理はお手の物。

師匠が、低温の魔法を付与した箱から野菜と卵を取り出す。パンは何日か置きに来てくれる行商人のおっちゃんから買っている。

鍋に水を張り火にかけ、干し肉を入れて出汁をとる、後は師匠ブレンドの薬草と溶き卵、トマトを入れると俺流薬草スープの出来上がり。

何とか慣れた何時も通りの異世界での日常が始まる筈だった。

「おはようございます。今日も良い匂いですね。あっそっだ功才君、今日卒業試験をしますから頑張っつて下さいよ」

「はいっ？もう卒業試験ですか？てか試験なんて今までしてないっ

すよ」

「言っていないだけですよ。今の功才君なら初級冒険者として立派に通用しますよ。…多分」

師匠、多分は止めて欲しいんですけども。

「マジツすか？それで卒業試験は、何をすれば良いんですか？」

「簡単ですよ。墓場にでるオーガを倒すだけですから」

「師匠、オーガって人を食べる巨人のオーガつすか？無理っすよ、餌になって終わりです」

「大丈夫、大丈夫。そのオーガは、オーガの中では弱くて死肉しか食べませんし、巨人って言っても功才君の倍くらいの大きさですし」

「俺の身長が170だから単純に3m40??勝てる訳ないじゃないですか」

第一、足にしか槍が届かない。

「オーガは夜にしか出ませんから、昼のうちに墓場を良く見て下さいねっ。ご飯を食べたら墓場に行きますよ」

- - - - -

師匠に連れられて来た墓場に人気はまるでなかった。

ただでさえ人気の少ない墓場にオーガ騒動なんてあれば人が来ない

のも、頷ける。
行列のできる墓場なんてやだけど。
墓場は木が鬱蒼と茂っていた。

「オーガはあそこから来るみたいですね。ほらっ」

師匠が指差した森の一部が薙ぎ倒されていた。
オーガの大きさからして、通れる道は限れてくる。

「師匠、オーガを倒せたら他の魔法も教えて下さいよ」

「流石は功才君、せこい手を思いつきましたか。いいですよ、卒業記念に他の魔法も教えてあげます」

「わかりました。まずロープと木の杭が欲しいんですけども」

夜の墓場が楽しいのは、髪がピンと立つ 太郎ぐらいな訳で。

「ちきしょー、師匠の奴。墓場に置いてけぼりって酷くね？」

いくら魔物が来ない絶対結界の中にいるとはいえ、怖いんだって。
その恐怖もあれを見た時よりはましだった。
何あれ？

俺が見つけたのは目的のオーガさん。
簡単に言うと3m近いプロレスラーって感じ。
それが、よだれを垂らしながら歩いてくる。

あんなの見た後なら、唯に絡んで来たスキンヘッドボーイにハグする事もできそうだ。

(確か恐くないって言う意識しすぎて、余計に恐くなるんだよな。……無理だ、あれはどうやっても怖いし)

でもオーガは段々近づいてくる。

俺がオーガの通り道にいるから当たり前なんだけども。

仕方ない、ザコの悪あがきをみせてやる。

「フラッシュ」

まずはオーガの目の高さにフラッシュを発動する。

当然怒って追いかけてくるオーガさん。

予め木に張っておいたロープを超えて、お次は

「プチパラライズ」

オーガの足を痺れさせる。

埋めて置いた木の杭の間をすり抜けて、さらに逃げる。

よっしゃ、オーガがロープにけつまずいた。

そんでもって

「グラビティソード」

対象は俺の武器でも、木の杭でもなくオーガ。

痺れた足で、モロにこけた上に体重を増加させられたオーガが木の杭に倒れていく。

静かな墓場に地響きと一緒にオーガの絶叫が響き渡る。

「し、師匠。倒したから出て来て下さいよ。腰が抜けました」

side ロッキ

グラビティソードを、オーガにかけましたか。

いやはや窮鼠猫を囓むとは、まさにこの事ですね。

オーガは私が倒す予定だったんですけどね。

あくまで功才君には、適わない敵と相対した時の冷静さを、教えようとしただけですし。

「功才君、オーガキラーの名前をあげましょうか？オーガを倒せる冒険者なんて中々いませんよ」

「いらないうすよ。あんなギリギリなヤバさは、もう勘弁すからね」

あの限られた魔法で、オーガを倒しましたか。

卒業記念に小技な魔法をもう幾つか、私の背中で喚いてる弟子に授けましょう。

ザコと卒業試験（後書き）

使い古された倒し方になっちゃいました。

でもこれがザコの戦い方です。

あまり戦闘描写を多くするとネタ切れになりそうだから自重しな
ぎや。

ちなみに普通に功才君がオーガと戦ったら瞬殺されます

ゼロの旅立ち（前書き）

異世界物なのに、美少女どころか女性すら出ていません。
今回も欠陥魔法が目白押しです。

ザコの旅立ち

「功才君、卒業おめでとございます。先ずは新しい魔法です」

プチサンダー

ちよつとビリつとする。

慣れると癖になるかも？

ライトソード

対象物を軽くする。

引っ越しに最適。

ヒートハンド

触れた物を温かくする。

お年寄りや冷え性の人の人気者になれるかも？

シールドボール

敵の大抵の魔法・攻撃を防げる。

アイスハンド

触れた物を冷やす。

風邪の看病をする時には喜ばれる。

プチヒーリング

スリキズぐらいは治せる

プチデス

殺菌作用満点

相変わらず、使えない魔法ばかり、選んでくれて…

「まともなのシールドボールぐらいじゃないですか」

「あつ、シールドボールを使う時は気をつけて下さい。毒霧を防ぐ為に気密性を高めたんで、酸欠になりやすいです。後頑丈にしすぎても中からも壊しにくいですし」

死の棺桶ならぬ、死の球と。

「それならせめて装備は強力なのをお願いしますよ」

「いやだーな。功才君が強力な装備を身に着けていたら賊や貴族に直ぐに目をつけられますよ」

「賊はともかく、貴族はなんでつすか？」

「簡単ですよ。あの人達が大事なのは名誉。ポツとでの一般市民冒険者が強力な装備を身に着けていたら妬みますよー。難癖つけて奪い取るか、配下に命じて強奪するでしょうね」

「マジつすか？」

この様に素晴らしい物は、高貴な人にこそ相応しいですから。多分そんなやり取りをするんだろう。

どこの世界でも点数稼ぎは重要と。

「マジですよ。大概の貴族はそんな者だと、思っていた方が安全ですよ」

「皮の鎧と鉄の槍をお願いします……」

「流石は功才君、物分かりがいい。特別に砥石もつけて上げます。それと饞別にお金とデータボール、パーソナルカードをあげますから」

「データボールとパーソナルカードってなんすか？」

「データボールには、オーディニスの魔物や植物のデータが入ります。功才君の戦い方には情報が重要ですし、折角の弟子が毒キノコを食べて死んだじゃつまりませんしね」

「持ち歩きに便利な図鑑って感じですか」

「そんな所です。パーソナルカードは重要です。平たく言えば身分証明書ですけど、なくしたら市民から奴隷にされかねません」

再び…

「マジっすか？」

「マジですよ。まあそれは犯罪者とか妬まれてる人限定ですけどね」

「でも盗まれたりしたら、ヤバいっすよね」

「それは大丈夫ですよ。体に埋め込みますから」

「へっ？埋め込むってなんすか？」

「そのまんまですよ。手とかに埋め込んだら斬られちゃいますからね。頭のに埋め込みます」

「ヤバいですって。頭はヤバいですよ」

「頭にその人のデータが一番集まっているんですよ。動いてくれたりしたら、それこそヤバいですよ。データボールも一緒に埋め込んであげますね」

ちなみに俺のデータは

名前

コウサ・ザイツ

種族

人間・猿人族

年齢

16

身分

一般市民

職種

無職

やばい、なんか泣けてきた。

「次にお金ですよ。愛弟子への餞別ですからね。奮発して十万デユクセンあげちゃいます」

データボール参照

デユクセン

デユクセン皇国で使われているお金の単位なんですよ。

1デユクセンは1円と思って下さい、功才君。

データボール、なんかむかつく。

しかし十万円とは、リアルな金額。

「安心して下さい。サバイバルキットもあげますから。いざとなったらリアルサバイバル生活です」

「師匠、前から思っていたんですけど、人の気持ちが読めるんすか？」

「それは私が凄い魔導士ですし。あつ私は研究に邁進しているから無名ですんで、弟子と名乗ってもネームバリューは期待できませんよ」

怪しい。

この人が本当に魔導士かどうかも怪しい。

「とりあえず、近くの町に着いたらギルドに登録して下さい」

「はい。それで？」

「後は仕事をこなしながら、野となれ山となれです」

「魔王を倒せとか、姫を救えみたいな具体的な目標はないんすか？」

「そんな都合いい目標なんてないですよ。依頼をこなして自分で目標を作ってください」行こう。

師匠の事は忘れて、とりあえず前に進もう。

でなきゃ、何にも変わらない。

「分かりました。それでは行ってきます。それとお世話になりました」

side ロッキ

ロッキは功才が、いなくなったのを確認すると手早く魔法陣を構築する。

それは、どれだけ高名な魔導士でも構築するのが不可能に近い高度な魔法陣。

その魔法陣から呼び出された者も、力や誇りの高さから決して人間に従う事はない種族。

「お呼びでしょうか？」

「貴男、功才君の動きを逐一私に教えて下さい。貴族みたいな馬鹿

共に殺されそうなら助けてあげて下さいね。でも普段は決して手を貸さないで下さい、彼は追い詰められた時な方が、面白い事をしてくれますから」「はっ、わかりました。しかし何故そこまで気にかけるのですか？たかが人間の猿人族1人を」

「見たいんですよ。最弱が階段を駆け上がり、最強と渡り合う瞬間を。そしてそれが私の目的にも繋がります」

ザロの旅立ち（後書き）

次から師匠は、傍観者になっていきます。

またキャラの名前を考えなきゃ。

感想指摘お待ちしております。

ゼロの旅（前書き）

今回は、殆ど功才君しか登場しません。

ザコの旅

師匠の住んでいた塔を後にした俺は街道を歩いている。

魔物はマナの濃い地域に多く出没するらしい。

マナの濃い地域は自然が豊かな地域って事。

当然、人の手が入っている街道には、魔物は出没しにくいらしい。

あくまで、らしいだから今の俺はフル装備。

皮の鎧を身につけて、手には、鉄の槍を装備。

背中には、荷物一式を詰めたりユックサック。

行き交う人々は、普通の格好をしている人が多いから目立ちまくっている。

だって獅子は兎を襲うのにも全力をだすんだぜ？

だったらザコが、身を守る為には世間体なんて気にしてられない。

それもこの街道を進んだ先にある街、ブラングルまでの辛抱。

そしてそこで冒険者ギルドに、登録をすればフル装備でも、ただ今冒険中の言い訳ができる。

ギルドに登録をして依頼をある程度こなしたら、どこかのパーティーに加入をする予定。

俺としては、直ぐにでも、パーティーに入りたいんだけど、実績のない冒険者をいきなり加入させてくれるパーティーはないらしい。

あるとしても下心を疑った方が安全との事。

それは装備品の強奪、下心による暴行、身代わり等々。

逆にある程度の実績があれば、周囲の目があるから大丈夫らしい。

まあ、俺としては簡単な採集やゴブリン退治で生活を維持できるのなら、それが一番だ。

それが無理ならバイトをする予定。

俺の冒険方針は、身の丈にあつた冒険なんだし。

夕方前にはブラングルの街に到着する事ができた。

ブラングルの街は、周囲をグルリと堀に囲まれていた。

街に入る人を観察していると門をくぐった時にパーソナルカードをスキャンする仕組みらしい。

そりゃ畑帰りの農家の人達や観光客を一々チェックしていたらキリがないだろうし。

門を通る前に、鉄の槍に布を被せて、皮の鎧から布の服に装備を変更する。

だって、俺のデータは無職の一般市民なんだから。

今は夕方、冒険者ギルドは明日にする。

今から新規登録なんて行ったらヒンシユク者確定だし。

俺が今しなきゃいけないのは宿屋探し。

その為に俺が目を付けたのが、普通のパン屋さん。

高級な宿屋なら、自分の所でパンを焼くだろうけども、普通の宿屋なら客に提供するパンは、地元のパン屋から買っている可能性が高い。

夕食を兼ねたパンを買ってパン屋の親父に尋ねる。

「このパン美味しそうですね。明日の朝も食べたいから、このパンが食べれる宿屋はありますか？」

パンを誉められたら上に、宿屋に客を紹介できるとあつて親父は大張り切りで教えてくれた。

紹介された宿屋は、夕飯抜きだから、一泊3千デユクセン。

ちなみに宿屋の受付も親父だった。

異世界のパン屋や宿屋に可愛い看板娘がいるっていうお約束は俺に

はないらしい。

翌朝

朝飯を誉めて、宿屋の親父から冒険者ギルドの場所を教えてもらう。

うん……、犬耳やエルフの冒険者がいるなんてお約束も消された。

ギルドの中は、男子校並みの汗臭さ。

受付にいるのも、確実に元冒険者なオッサンだし。

パーソナルカードの確認で登録を完了。

初心者用の掲示板には、あったのは

ゴブリン退治1匹3千デユクセン。

薬草採集

100ガン3千デユクセン

ちなみに1ガンは1グラムに相当するらしい。

でも薬草100グラムって、結構な量なんじゃね？

ちなみにオーク退治は、1匹3万デユクセンらしい。

ゴブリンは集団行動を常としているけど、オークは単独行動が多いらしい。そして俺も1人。

ゴブリンの集団に、囲まれてばこられるよりもオークに狙いを定めた方が安全に違いない。

オークのデータは

功才君、オークは2本足で歩く猪だと思って下さい。

知能はゴブリンより、少し高めですけども決して高くはありません。ゴブリンとの一番の違いは、自分の力を誇る為に単独行動を好んで

います。

データボールは、便利なんだけども師匠の音が頭に響いてくるのが辛いんだよな。

ゼロの旅（後書き）

感想、指摘お待ちしております。

ザコとオーク（前書き）

オーク退治に一話必要なのが、この小説です。

10月4日一部内容変更しました

前からご指摘があつた電気抵抗のくだりです

ザコとオーク

オークは、猪に近い性質をもっているらしい。
んでもって、夜中に畑を荒らしに来るから、農家から退治依頼が多い。

オークは、体がでかい分1回の被害も半端じゃないらしい。
夜中に畑を荒らしに来るとは流石は、猪から進化した魔物だよな。

とりあえず猪を基本にオークへの対策を考えてみた。

オーク対策 1

猪は犬並みに鼻がきく

つまり背後からの攻撃は無理、つーか先に気付かれる可能性大

対策 2

猪突猛進は嘘。

まあ、二本足な時点で、その可能性はないし

つまり俺が奇襲に成功する可能性は、限りなく低いと……。
それなら逆に向こうに気づかせてからの作戦をたてた方が現実的だよな。

……

よっし！

これなら、他の魔物にも使えるかもしれない。

武器屋で、中古の銅の槍を2万デユクセンで購入。

中古なだけに、槍の頭はあまり尖ってないけど。

準備よし、後は結界をはって畑で、夜とオークを待つだけだ。

……暇だ……

夜の畑に1人ぼっち、当然話し相手なんかいる訳がない。

まあ、話し声がしていたら、オークが警戒して来ないかもしれないけどね。

(久しぶりに携帯でもチェックするか。オーディヌスには電波何てないだろうけど、ここに来る前にきたメールがあるかもしれない)

塔にいた頃は、修行が終わると疲れて速攻爆睡していたから、携帯を見るのはオーディヌスにきて始めだったりする。あつ、唯からメールが来てた。

「功才、怪我は大丈夫？あんなの相手に功才が勝てる訳ないから怪我だけが、心配だよ」

怪我が確定なのね。

絵文字もついてないし。

でも、これから俺は命がけの戦いが待っているから、怪我じゃ済まないかもしれない。

闇夜に光る紅い目、荒い息づかい。

オークさんのご登場です。

いや想像はしてたけど、2m超えの直立で立つ猪は、かなりきつい。フゴーフゴフって鼻音が聞こえてるし。

結界を解除した途端に、紅い目が俺を見つけた様で、オークさんが振り向いてくれた。

オークさんは、人間⇨敵とばかり、殺気満点。

そんなオークさんは、棍棒と言う名の丸太で殴りつけてきた。

「し、シールドボール」

お、遅せー。

シールドボールは開閉式ドーム並みのスピードで俺を包んでいる。

そしてガンツツと、鈍い音が周囲に響く。

ギリギリッ、本当にギリギリのところまで間にあってくれた。

棍棒は、俺の頭数十?の所で止まっている。

(今度からシールドボールを使う時は、早め早めにしないとヤベえよな)

オークさんは、俺に棍棒が当たらなかったのが不思議な様で狂った様に棍棒で殴りつけてきた。

ここからはオークの体力が尽きるか、俺が酸欠になるかの我慢比べ。

意識がもうろうとして、お花畑が見えかけた頃ようやくオークも疲れた様で殴るのを止めた。

深呼吸をして、先ずは

「マジックキャンセル」

シールドボールが壊さないなら、消去をする。

そして

「シャープネス」

鋭さを増した銅の槍で、オークの胸を突く。
予想通り銅の槍は、オークの分厚い胸筋に阻まれる。

「アイスハンド」

槍が十分に冷えるまで槍を押し続ける。

「プチサンダー」

プチサンダーで俺が狙ったのは、銅の槍。

銅は、他の金属に比べて電気抵抗が少ない。
そして冷やされた銅の電気抵抗はさらに少なくなる。

いくら軽く痺れる程度の電撃でも、心臓間近でくらうダメージは計り知れない。

オークは、胸を掻きむしりながら焔に倒れ込む。

ついでに、俺も安堵から焔に倒れ込んだ。

翌朝、依頼主の農家にオークの死体を確認してもらった。

銅の槍の値段を差し引くと、一晩かけて7千デユクセンの稼ぎ。宿屋に泊まるって飯を食べたら、殆どに無くなってしまふ金額だけだ。

「やった、やったー。誰の力でもねえ。俺がオークを倒して依頼をこなしたんだ」

朝日が溢れる畑の中で、向こうにいた時には、味わう事ができなかった充実感を感じていた。

ザコとオーク（後書き）

パーティー加入を先にすべきか、メインヒロインを先にだすべきか。

感想指摘お待ちしております。

ザロとフルアーマ騎士(前書き)

新キャラ登場です

ザコとフルアーマ騎士

初依頼という事もあり、ギルドのおっちゃんが、オークの死体を確認にきた。

「きちんと倒したみたいだな。ふむ、このオークを3万デユクセンで買い取らせてもらおう」

「マジ。マジでそんなに高く買ってくれるんすか？」

「ああ、このオークには、大きな傷が殆どねえ。オークの毛皮は、防寒具から防具まで色々と用途が広いからな。むしろギルドとしては大歓迎さ」

（依頼料と合わせると、6万デユクセン?!ゴブリン30匹分だけ。これからはオーク退治を中心に依頼を受けていこ）

そして

「おっちゃん、オーク退治の依頼は、きてないっすか？」
俺にオーク退治の依頼がくるまでになった。

「お前宛ての依頼はきてねえよ。たまにはゴブリンでも倒してみねえか？」

「パス。俺はパーティーを組んでないから、ゴブリンに囲まれた終わりっすよ」

とりあえず、他にどんな依頼があるか見て回っていると目を合わせ

たらいけない方がいた。

身長は150?くらいで、体格は細身だと思う。
性別は… わからない。

なんせピカピカに磨かれたフルアーマを身につけているんだから。
いや、ビビリの俺でも街中でフルアーマは着ないぞ。

フルアーマは、自分に酔っているのか依頼を見ては歌劇団の様な、
オーバーアクションを披露している。

「薬草採集? 傷ついた民の為に薬草を集めるのも素敵なお仕事じゃないかー」

「ゴブリン退治? 醜いゴブリンは、僕が華麗に退治をしてみせるさ」
フルアーマの声の高さと、背の高さからすると少女か、声変わりする前の少年かもしれない。

でも関わっちゃいけない。

あれは関わっちゃいけない者だ。

フルアーマは、小さいな依頼書の前で立ち止まる。

それは朝から誰も受けていない依頼。

子供の字で、うちのはたけにでるおーくをたおしてください、とだけ書かれていた。

ギルドの職員も、子供から料金は取らなかつたんだろう。

それに依頼料金を書かれていない依頼を受ける冒険者がいる筈ないし。

「諸君見たまえ、この依頼書を。幼子の必死の願いを叶えてあげようという正義の心を持った冒険者はいないのかい? 悲しい事だね」

(それならお前が受けるよ。ボランティアじゃないんだから、無料の依頼なんて受けたら、次の依頼の時に値切られるだろうが)

そんな感想を持ちながら、違う依頼書を見て、気配を消している俺の肩を掴んだ奴がいた。

「君は最近有名なオーク退治のザイツ君だろ？どうだい、僕と一緒にオークを退治してくれないかい？」

「断るつすよ。俺は、そんな立派な鎧を身に着けた騎士様の足を引っ張るだけつすから」

「悲しい事を言わないでくれよザイツ君。君の力なら簡単にオークは倒せるんだろ？」

「断るつす。理由その1・オーク退治は毎回命がけなんすよ。その2・依頼料金のない依頼なんて受けたら、必死に貯めたお金で払ってくれた他の依頼者に申し訳がたたないつす。理由その3・本来は畑を荒らすオークの退治は、国や街を治めてる騎士様のお仕事じゃないつすか」

「有名なザイツ君もお金で依頼を判断するんだね。嘆かわしい。なら僕が3万デユクセン払うから、この依頼を受けてくれないか？」

フルアーマは俺に依頼を受けさせようと必死だ。

そっぴや、俺がオーク退治をする前は貴族の次男坊が、自己満足の為にオークを倒していたらしい。

フルアーマは、その貴族の関係者の可能性が高いな。

断ったら、俺の不評を流すつもりなんだろう。

「4万デユクセンとオークの毛皮の権利を俺にくれるんなら、受けてもいいっすよ」

「なぜ、1万デユクセン高いんだい？君はそんなにお金が欲しいのか？」

「1万デユクセンは、あんたのガード料金っすよ。傷が一つも着いてない鎧は、実戦経験がない証拠っすからね」

フルアーマと一緒に、依頼された畑に着いた。

「ザイツ君、なんで僕を藁の中に押し込めるんだい？」

「オークは、鼻がいいんすよ。鎧の金属臭なんて直ぐ気付いて姿を現さないっすよ」

「わかったよ。仕方ない君に従うよ」よっぽど、俺の事を調べたいらしく、フルアーマは、素直に藁に潜り込んだ。

でも

「ザイツ君、ザイツ君。君は闇は恐くないのかい？」

「怖かったら、オーク退治してないっすよ」

「ザイツ君ザイツ君、何か話でもしないかい？気が紛れると思うんだけども」

「オークは耳もいいんすよ。静かにするっす」

ようやく大人しくなったフルアーマを確認して、結界をはる。

紅い目が闇夜に浮かぶ。

オークが来た。

「出たな。オーク、僕がお前を退治してやる。白雷の精霊よ、我に力を貸したまえ。サンダーブレイ、痛いっ。何をするんだいザイツ君」

「お前は馬鹿か？そんな魔法をぶっ放したらオーク以上に畑を荒らしちゃうんだよ、引っ込んでろ。シールドボール」

俺は銅の槍の石突きで、フルアーマを叩いて、藁に押し戻す。

俺に依頼が増えた一番の理由は、畑を殆ど荒らさないでオークを退治してるからだ。

例の貴族様は、金に飽かせて手に入れた精霊魔法を使いまくって畑を滅茶苦茶にしたらしい。

でも相手は貴族様、依頼主は文句が言えなかったらしい。

.....

「出て来いよ。オークは退治した。お坊ちゃまは、とっと金を置いてお家に帰りな」

「ひどいよザイツ君。僕は女の子なんだよ、女の子に優しくしなきゃいけないんだよ」

藁の中から出てきたのは、兜を脱いだフルアーマ。兜の中は、茶色いショートカットの美少女だった。

ザロとフルアーマ騎士（後書き）

ようやく女性キャラ登場です
感想指摘お待ちしております

ザロウミンソウの出来ご(前書き)

フルアーマ少女の名前がでます。
フルアーマ少女今回も残念に

ザロウミンントの田舎い

side ロッキ

「それで功才君は、その少女に興味を示しましたか？」

「いえ、全く。何か焦っている感じでした」

美少女に興味がない理由はなんとなくわかります。

幼なじみに2人の美少女がおり、家族に芸能人がいる功才君にとって美少女の存在は対して珍しくないでしょうし。

「ふむ、その少女は何か言いましたか？」

「少女がマクスウェル様わかりましたと、呟いた後から功才殿が焦り始めた感じがしましたが」

それだけで、焦るなんて功才君は相変わらず臆病ですね。

うん、安心しました。

side 功才

マクスウェル家

ブラングルを領地にもつデユクセン王国の伯爵家。そして俺は最近マクスウェル家のある男の名前をよく聞いていた。

デユラン・マクスウェル

マクスウェル家の次男にして精霊魔法の使い手。

デュランは俺がオーク退治をする前に、精霊魔法を派手に使いまくってオークを退治していたらしい。

畑で派手に精霊魔法なんて使つと、結果は簡単。

畑にはオーク以上の被害がでる。

でも相手は貴族様、農家は泣き寝入りするしかない。

当然、畑に被害をださない俺の退治方法に人気が集まる。

つまり、デュランの出番は激減。

デュランは、自分の活躍の場を奪われたと憤慨したに違いない。

そしてあの、フルアーマ少女。

フルアーマは騎士の証。

フルアーマ少女は、マクスウェル家に仕える騎士か、その家族と考えるのが自然。

つまり、デュランに俺の正体がばれたんだよな。

それなら俺がとる行動はただ一つ。

ブラングルから、いやマクスウェル家の領内から逃げてやる。

宿を引き払い、ギルドのおっちゃんに紹介状を書いてもらったら直ぐ逃げるんだ。

ブラングル冒険者ギルド

「おっちゃん、おっちゃん。マクスウェル領外の冒険者ギルドへの紹介状を書いて欲しいんすよ。できたら今すぐお願いするっす」

「ザコ、旅支度で紹介状ってブランゲルから出るのか？」

「詳しい話は勘弁して欲しいんすよ。お願いするっす」

お願いをするんだから、俺はきちんとギルドカウンターに頭をつけてお願いをしている。

「いいけど、お前に客が来たみたいだぜ？」

ギルドのおっちゃんが、指差す先にはフルアーマ少女と銀色の髪的美男子。

フルアーマは、俺を見つけるとニヤリと笑った。

「ザイツ君みつけたよ。マクスウェル様、あの男がお探しのオーク退治のザイツです」

「ふむ、ご苦労。ザイツとやら済まぬが、話をしたい」

「いやー、俺みたいなザコと話をしたら貴族の名前が汚れちゃうっすよ？それに俺はマクスウェル様の領内から自己転出させてもらっつすから」

「我が領内から居なくなるか、それは残念だ。それなら僅かでも礼をせねばなるまい」お礼参り？

「いやいや、高貴なマクスウェル家のご次男様とお話できただけでお礼は充分っすよ」

「何か勘違いをしてないか？私の名はシャイン・マクスウェル。マ

クスウェル家の長男だ。そしてお前に接したのが、ミント・ブロッサム」

「ミントだよ。これからよろしく頼むよザイツ君」

ニコリと笑いながら、ミントが手を出してきた。

「これから？」

「ザイツ頼みがある。君の旅にミントを同行させてくれないか？」

地獄への道案内人って、意味じゃないよな。

「シャイン様、何故ですか？」

「ブロッサム家は我が家に仕える騎士の一族でね。ブロッサムの娘のミントにザイツの戦い方を学ばせたいからだよ」

「ザイツ君、僕を無視するのかい？腕が疲れちゃうじゃないか」

ミントが騒いでいるけど無視をしておく。

握手イコール契約を認めた事になるし。

「戦い方なら、同じ精霊使いのデュラン様がご適任かと思えますが」

「ザイツ君、僕を無視するのかい？ねえザイツ君ー」

ミントは、まだ無視。

「あれは駄目だ。民の事を考えぬ馬鹿は、皇国騎士団に送り鍛えなおしている」

「条件があるっす。それを認めてくれれば、旅に同行してもらっす」

「まっ、まさか旅の条件は可愛い僕を自由にさせる、なんてイヤらしい事じゃないだろうね」

「うむ、まず聞こう」

一人で、騒ぐミントを、シャイン様もスルーした。

この人は信用できる。

「デュラン様を始めとする貴族に手出しをさせない事、許可なく精霊魔法を使わない事、最後にあの暑苦しい鎧を着ない事。この3っす」

「シャイン様も僕を無視？それにザイツ君、その精霊魔法と鎧がない僕は無力な少女なんだよ。はっ無力な僕を無理やり。ザイツ君、キミって人は」

「ザイツ、その訳を聞かせてくれないか？」

「ミント様は可愛い容姿をしており、しかも騎士の家柄っす。2人旅なんてしたら貴族の嫉妬の対象にしかならないっすよ。精霊魔法を使えるのは、精霊魔法を買える家の娘だという事っす。つまり身の代金目当ての誘拐の危険性があるっす。鎧はあんなのをつけていたら長旅なんて無理っすからね」

「ザイツさすがだな。認めよう」

「ザイツ君、だったら僕の手を握ってくれよ。もう痺れてきたよ」
「ミント、まだ手をだしてたんだ。」

side シャイン

ザイツは、ミントと握手をすると、ギルドを出て行った。

思わず安堵の溜め息を漏らしてしまう。

ザイツの話は、数週間程前にデユクセン皇帝から聞かされた。

弟のデュランがザイツという冒険者に復讐を企んでいるから、何としても阻止をしようと。

普段は剛毅なデユクセン皇帝が青ざめて震えながら伝えてきたんだ。デュランの悪評は前から目に余る物があつたから、皇国騎士団に入団させて鍛え直す事にした。

そして私はザイツの事を、独自に調べ始めた。

戦い方は面白いが、皇帝が怯える力では、決してない。

しかし敬愛するデユクセン皇帝には、安心してもらいたい。

それならザイツに鈴をつける必要がある。

下手に知恵が回る奴なら、ザイツは警戒するだろう、しかし不真面目でもいけない。

だからミントを選んだ。

side ロッキ

「ミント・ブロッサムがザイツ殿の旅に同行する様です。しかしあのデユクセン皇帝に何をおっしゃったんですか？」

「簡単ですよ。私の可愛い弟子を、お前の所の馬鹿貴族が傷つけな
るなら、デユクセン皇国で本気で暴れますよと言っただけですよ」

ザロとミントの出会い（後書き）

ミントをヒロインにするかどうか悩み中です。
思ったより面白いがキャラになりそうですし。
感想・指摘お待ちしております。

ザロとミントの旅 1 旅の開始

side 功才

ブロッサムさんのパーソナルカードを見せてもらった。

名前

ミント・ブロッサム

種族

人間・猿人族

年齢

16

身分

騎士

職種

魔術騎士見習い

(契約精霊・白雷の精霊)

「魔術騎士のブロッサムさんは、どんな魔法が使えるんすか？」

「ザイツ君、やっぱり僕に興味津津なんだね？色々使えるから喜んでよ。それとこれから一緒に旅をするからミントでいいよ」

「それなら俺の事も、コウサでいいっすよ。ミントさん期待してる

っす」

.....

ミントの親が、精霊魔法を覚えさせた理由がわかった。

「火のManaよ、ここに集結し敵を焼き尽くせ。ファイヤーボール」
スーパーボール大の火の玉が飛んで来た。

ちなみに鉄の槍で叩き落とせた。

「冷気のManaよ。その力で敵を凍りつくせ。アイシクル」

震えるぐらい寒くなったんで、ヒートハンドで温まった。

「雷のManaよ、その閃光で敵を焼き尽くせ。サンダー」

雷が明後日の方向に飛んでいった。

「水のManaよ。奔流をもって敵を彼方に流せ。ウォーター」

俺がずぶ濡れになった。

「大気と火のManaよ。力を合わせて敵を弾け飛ばせ。ボム」

爆竹みたいな爆発が起きる。

「どうだい？コウサ君、僕の魔法は？」

「わかったすよ。ミントは剣術が得意なんすよね」

ミントが使った簡易魔法は、ロツキ師匠の嫌がらせ魔法と違って、本来どれも強力な筈。

多分、ミントは魔法陣にうまく魔力を編み込めていないんだろう。

まあ、1人より2人、組み合わせれば戦略は広がる。

「コウサ君よ、良くわかってくれたね。僕は騎士だから剣術の方が得意なんだよ」

まあ、少なくとも俺よりは強いだろう。

「それじゃ次に向かう街を決めたいんで相談に乗って欲しいすよ。デユクセン皇国で、ブラングルより規模が大きく周りに自然が同じぐらいの街はあるっすか？」

「コウサ君、僕は首都デユクセンに行きたいな」

「デユクセンには皇国騎士団がいるから、駄目っす。ミントさんが騎士団が手に負えない依頼とか騎士団が嫌う依頼を受けていいんなら別っすけど」

本来、魔物退治とかは統治者の役割なんだし、皇国騎士団なんて関わりたくもない。

「それならブルーメンはどうかな？」

ブルーメンはデータボールによると、芸術都市ブルーメンと呼ばれているデュクセン皇国の中核都市。
デュクセン皇国における音楽・美術・演劇の中心地。

芸術都市って事は、貴族が観光に訪れるだろうから治安は、安定していると思う。

観光都市だと宿代が高いから、冒険者の数は多くはないだろう。
俺でも依頼には、事欠かないと。

「ブルーメンか。いいんじゃないっすか」

「そうだよな。ブルーメンは良い街だよ。丁度素晴らしい劇を上演しているんだ、貴族の男性と女性騎士のラブストーリーさ。コウサ君も見たくなつたる？」

ミントは、何かを想像し、頬を赤らめて自分の世界に入り込んだ。

(ミントの頭の中では貴族「シャイン様、女騎士」ミントの劇が頭の中で上演されてるな)

side ロッキ

「功才殿とプロッサム家の子女ミントは、ブルーメンに向かう様です。しかし功才殿は異性としてミントには関心がない様で」

「仕方ありませんよ。功才君は恋愛でも勝てる見込みのない戦いではないでしょうし。マクスウェル家の長男じゃ功才君に勝ち目はありませんからね」

「しかし功才殿の頃のお年なら、恋に恋してもおかしくはないので

は？」

「前にね、功才君が言ったんですよ。確かに自分は美少女に縁があるけど、それ以上にモテる男にも縁があるって。だから異性としての自分に関心をもっていないか直ぐに分かるんだそうですよ」

それを感じた時点で功才君にとって、ミントという女性はシャインから預かった女性で、戦略の1つでしかないでしょう。功才君が、自分から必要以上に親しくはしないでしようね。

side 功才

ミントさんとの旅をする上で約束を決めた。

生活費は自分持ちとする事。

ミントさんは、実家とシャイン様から結構な金額をもらったみたいだし。

宿は別として、依頼も個人で受けてよい。

貴族や騎士が泊まる宿には俺は止まれないし、そんな金もない。夜にしなきゃいけない依頼は、1人でした方が面倒くさくないし。

それぞれ目的を達したと思ったら、相手に話して帰っても文句は言わない事。

早い話、ミントさんは旅が辛かったら、いつでもお帰り下さいと。

ちなみに俺はシャイン様から、身分証明書ももらった。

シャイン・マクスウエルの名においてコウサ・ザイツの身分を証明

する。

またコウサ・ザイツはマクスウエル家の知己であり、マクスウエル家の許可なく危害を加える事を禁ずる。

これがあればマクスウエル家の領内なら、フリーパスだし、ミント絡みで貴族や騎士に絡まれる可能性は低くなる筈。

後はブルーメンまでの旅の道中で、ミントさんの戦力を把握しておこう。

ゼロとミニットの旅 1 旅の開始（後書き）

指摘感想お待ちしております。

ザロウミンソトのゴブリン退治（前書き）

徐々にお気に入り登録や感想も、もらえています。
感謝に尽きません

ザロとミントのゴブリン退治

side 功才

「コウサ君、少し休まないかい？朝から歩きっぱなしじゃないか」

（朝からって、まだ昼前だろ？騎士だから普段は馬で移動しているんだろっな）

「もう少し頑張るっすよ。ミントさん野宿したくないっすよね？」

「でも、今魔物と遭遇したら僕は実力を発揮できない自信があるんだけど」

街道に魔物がでる確率は低いし、満を持した実力にも期待はしてない。

「その時は俺が1人で戦うっすよ」

「コウサ君、あれだろ。君は好きな女の子に意地悪をするタイプなんだろ？」

「残念ながら外れっすよ。それに俺はシャイン様と張り合う気もないっすから。」

「な、何でそれを知っているんだい？コウサ君は人の心が読めるのか？」

ミントは顔を赤らめて、慌てふためている。

「シャイン様にバラして欲しくないんなら、歩くつすよ」

「君は純粋な乙女心を利用するのかい？」

「利用できる者は何でも利用する主義なんすよー」

「コウサ君の、鬼、悪魔、ゴブリン、オーク。君には優しさってものが無さ過ぎる」

「ミントの荷物を半分以上もって、歩く速さをあわせているのは優しさじゃないと？」

「分かってくれて嬉しいつすよ。それだけ喋れたら元気な証拠つす」

「わかったよ。僕はこれから無口でおしとやかな乙女になるさ」

.....

「コウサ君、やっぱりコミュニケーションは大事だよね」

「無口みじかつー！」

「ミントの無口は1時間しか、もたなかった。」

「そんなやり取りをしながら、ブルーメンまで後少しとなったある日の事。」

「ミントさん体力は大丈夫っすか？」

「突然どうしたんだい？どこかの鬼冒険者のお陰で、可憐な魔術騎士はすっかり体力騎士になってしまったよ」

「それなら安心っす。馬車がゴブリンに襲われているから助けるっすよ」

「君が依頼じゃない人助けをするなんて僕は信じれないよ」

「ここで見捨てたら悪評がたつっすからね」

「納得だよ……」

馬車を襲っているゴブリンは5匹か。

ゴブリンは鉄の槍や鉄の剣で、馬車に攻撃している。

「ミントさん、俺が合図したらサンダーを唱えて下さい。お願いするっすよ」

「でも僕のサンダーは気紛れ屋さんだから、ゴブリンに当たらないかもしれないよ？ってコウサ君、小石を拾ってゴブリンにぶつける気かい？」

「俺の魔法には下準備が必要なんすよ」

まずは、ゴブリンとの中間に拾った小石をぶちまける。

「ストーンレイン」

哀しいかなストーンレイン。
下準備をしなきゃ2、3粒の小石の滴になってしまっ。

「コウサ君、ゴブリン達まったく無傷だよ。それどころか怒って標的を僕達に変更したみたいだよ」

「馬車から引き離す為だから当たり前っすよ」

次は

「プチサンダー」

狙うはゴブリン達の武器。

これでゴブリン達の武器は帯電状態になる。

「コウサ君、威力がプちな雷の魔法で、ますますゴブリンさん一行がお怒りだよ。君は女の子の気持ちだけでなく、魔物の気持ちも逆撫でする名人なんだね」

ゴブリン達が、武器を掲げる。

「ミントお嬢様、サンダーをお願いします」

「お、お嬢様？わかったよ。雷のマナよ、その閃光で敵を焼き尽くせ。サンダー」

ミントの放ったサンダーが、ゴブリンに直撃する。

即席避雷針に、何とか当たってくれたみたいだ。
ゴブリンも無事？全滅した。

「す、凄いよ。コウサ君、僕のサンダーがマトモに当たったよ」

正確には帯電した鉄の武器に誘導されたんだけどな。

「それがミントお嬢様の实力ですよ」

「コウサ君、先からどうしたんだい。大声でお嬢様なんて？」

そりゃ、馬車の人達が俺に注目しているからねー。

馬車の中から人が降りてくる。

人数は8人。

服装はバラバラな所を見ると乗り合い馬車かもしれない。

商人風の中年とその従者と思われる若い男。

3人連れの親子。

少女が3人でまとまっているのは友達同士だからか。

3人とも美少女と呼んで差し支えないだろう。

癒し系の茶色のロングヘア。

理知的な水色のショートカット。

赤髪の勝ち気そうなポニーテール。

あの中で使えるのは商人と3人娘だな。

予想通り最初に近づいてきたのは商人風の男。

「危ない所をありがとうございます。私はブルーメンで商売をしているハッサンと申す男です」

「皆様幸運ですよ。ゴブリンを退治したのは、何とあのシャイン・マクスウェル様にお仕えしている魔術騎士のミント・ブロッサムお嬢様なのですから」

計算通り8人の視線はミントに注がれる。

3人娘はシャイン・マクスウェルの名前に反応して黄色い声を挙げていた。

(よっし、これでゴブリン退治の手柄はミントにの物になる)

しかし1人だけ、コウサに視線を注いでいる人がいた。

side ロッキ

「功才殿はゴブリンを退治しましたが、手柄は全てミントの物にする様です」

「流石は私の弟子ですね。自分の実力を上回る名声は身を滅ぼしかねますからね」

「しかし、冒険者は名を売る者ですが」

「功才君はね、有名になる怖さを身に染みて知っているんですよ」

この手柄でミントが満足して帰ってくれるのが、一番ありがたいのでしょうけど。

ザロウミンナのゴブリン退治（後書き）

いよいよメインヒロイン登場するかも？
指摘感想お待ちしております

ザコの天敵？（前書き）

なんとお気に入り登録が300を超えて日刊ランキング11位になつてました。

そしてメインヒロインの登場です。

ザコの大敵？

side 功才

ミントを乗せて走り去って行く馬車を見送る。
笑顔で。

(あんな騒ぎに、巻き込まれてたまるかつーの)

たかがゴブリンとはいえ、馬車に乗っていた8人からすれば、命の
恩人。

そのお陰でミントは、英雄扱いされていた。

親は子供の命も救ってくれた恩人だし。

商人達や3人娘はシャイン様との繋がりを持ちたいからだろう。

一緒に馬車に乗っていったら、俺まで英雄扱いされて割に合わない
依頼を持ち込まれかねない。

まあ、しばらくは周りも英雄と持ち上げてくれるかもしれない。

でも1度ついた英雄のイメージを壊す事をしたら世論の袋叩きにあ
う。

特に俺みたいな戦い方なんて格好の標的にされてしまう。

これからミントと行動する時は名誉をミントに集中させておく、そ
うしたらシャイン様がミントを連れ戻す確率が高くなるし。

有名になった配下の魔術騎士を、いつまでも冒険者にしていたら世
論が納得しないですよ。

ミントの荷物も無くなり、心も軽くなった俺は軽やかなステップで
ブルーメンを目指す。

ウキウキで着いたブルーメンはやたらに派手な街だった。

この世界でも、エンターテイメントには虚仮威しが付き物ってか。それらしい雰囲気で見ると演劇や歌劇は、魅力を倍増させるんだよね。自分にあつた慎ましい宿屋を訪れた俺に先までのウキウキを消し去る事実が突きつけれる。

「1泊1万デユクセン？まじ？むり！！」

ちなみに現在の所持金は30万4千521デユクセン。

ブルーメンは人気の観光地、宿がしょぼくても宿泊費は高いらしい。

（宿どうすっかな。……ここは芸術の街だよな。それならあれがあるかもしれない。ギルドで紹介してもらうか）

それで訪れたブルーメンの冒険者ギルド。

ここ酒場じゃねえよな。

ブルーメンの冒険者ギルドは、真っ赤な外壁に金色の文字でブルーメン冒険者ギルドと書かれた看板を掲げていた。（まあ、こんな街じゃ冒険者ギルドが街並みに合わせなきゃやっていけないか）

「すみません、紹介状を持ってきた者です。ちょっと相談があります。して」

ブラングルの冒険者ギルドを上にはシャイン様の紹介状を下にして職

員に手渡す。

「…どういったご用でしょうか？」

「安い下宿を紹介して欲しいんすよ。この街にならあるっすよね？
俳優や芸術家の卵が暮らす安いやつが」

「紹介状の割に、せこい頼みだな」

「ギルドに保証人代わりになって欲しいんすよね。紹介状はその保証っすよ」

「1ヶ月4万デュクセンの下宿屋を紹介してやる。後依頼はきちん
と受けてくれよ」

「ここか、まあ観光地で4万じゃこんなもんだろ。」

「下宿屋はブルーメンの町外れに建っていた。」

「異世界で昭和の香りがする建物会えるとは思わなかったが。」

「部屋は六畳一間な感じだし。」

「まあ毛布でもあれば十分生活していけそうだ。」

「そう言えば、こっちの世界にも引っ越しソバってあるんだろうか？
そんな事を考えていたら扉をノックする音が聞こえた。」

「今日引っ越しをしてきたんだよね。私は隣に住んでいるメリー・
ブルングだよ。よろしくねお隣さん」

勝手に扉開けたらノックの意味ないじゃん、でもこのメリーって娘

どこかで見た気が。

「あっ、あっあー。ミントさんと一緒にいた男の人だ。メリーは君に会いたかったんだよ。奇跡だねー」

あの3人娘の1人だ。

茶髪の癒し系だ。

「確かに私は、ミントお嬢様とは一緒にいたっすけどが、なぜ私なんかに会いたいんっすか？」

「それはだねー、君が演技が上手いから。メリーは女優さんを目指しているからわかるのだっ」

いやだ、メリーは俺が一番苦手とするタイプだ。

「演技なんてしてないっすよ」

「だめー、メリーに隠し事は通用しないのっ。だって本当の従者なら荷物を全部持つ筈だもん。メリーは演技の為に人間観察してるからわかるの」

「それは偉いっすね。それでは私は毛布とかを買いに行くっすから。これで」

「毛布？それならメリーが案内してあげる。君とメリーはもうお友達なんだから遠慮しないでいいよ。それで君の名前はなに？」

「コウサ・ザイツ、冒険者っすよ。やっぱりメリーさんに悪いから遠慮しとくっすよ。ほらメリーさんに彼氏がいたら悪いっすから」

メリーは美少女だ。

多分、彼氏が好きな男がいるに違いない。

「ざんねーん。メリーに彼氏はいません。それじゃコウサとメリーの初デートにしゅっぱーつ」

「俺の話聞いてっばー」

「それがコウサの本当の喋り方なんですよ？っすーとかはわざとなんだよね。うん、会って直ぐに打ち解けれるなんてメリーとコウサは、絶対に仲良しさんになれるよ」

side ロッキ

「あの功才君が、ペースを崩されましたか」

「ええ、とても腹芸ができるタイプに見えませんでしたか」

「だからですよ。功才君は打算のない好意に弱いんですよ」

これはラッキーですね。

功才君が、この世界に好意を持ってくれるかもしれない。自分の生まれた世界を捨てるぐらいにね。

ザコの天敵？（後書き）

功才は人の裏をよむタイプですから、メリーみたいに裏表がなく好意的に接してくる女の人が苦手です。

嬉しいから苦手なんです、自分のペースが保てないから。

感想指摘お待ちしております。

メリーの細かい容姿は次話で

ザロとメリーVSミニット (前書き)

昨日 アップしようとしていたら寝てました

ザコとメリーVSミニト

メリーのパーソナルカードを見せてもらった。
てゆうか見せられた。

名前

メリー・プルング

種族

人間・猿人族

年齢

15

身分

一般市民

職種

女優の卵

メリーの身長は160?くらい。

長い茶髪に白い肌、少し垂れ目で愛嬌のある美少女。
なよりの特徴は、立派すぎるその胸。

その美少女が何を好き好んでか俺と一緒にいる。

不思議だ、謎だ、有り得ない。

「ねえねえ、コウサは何であんなに演技がうまいの?でも、あの
っすって言葉遣いはメリーの前では禁止だよ」

「俺の家族は俺以外は全員現役の役者なんだよ。だからよく台本読みに付き合わされていたからじゃないか」

家で暇なのは俺ぐらいだし、家事か台本読みぐらいしか役にたつてなかったし。

「それじゃ今度メリーにも台本読み付き合つてよ。コウサお願い」

「暇ならな。でも言つたろ？俺は冒険者だから暇は少ないかもな」

「冒険者かー。ねっ今度メリーも依頼に連れて行つてよ。冒険者の役を演じる時の参考にしたいし」

「ぜっーたい駄目。依頼は命懸けなんだからメリーには無理」

「いやーだ。それに私は弓が得意なんだよ。お父さんが猟師だったから仕込まれたの」

「だーめ。怪我したらどうすんだよ。女優が顔に怪我したら終わりだぞ」

「いやーだ、絶対について行くんだから。もし怪我したらコウサに責任とってもらおう」

コウサなら絶対にメリーを守ってくれるって信じてるから」

（ちっ、口ではメリーに勝てないか。それなら内緒で依頼を受けりゃ問題ないな）

「もしコウサが1人で依頼を受けたりしたら、コウサのお部屋の前で、ずっと泣いてやるんだから。メリー泣く演技は得意なんだからね」

「だー、わかったよ。でも条件がある。依頼中は俺の指示を聞く事、それと依頼中の俺の口調に文句を言わない事」

何回か怖い目にあえばメリーも諦めるだろうし。

「さすがコウサ。素直にコウサの言う事を聞くし、口調はむしろ嬉しいよ」

side ミント

腹が立つ。

僕とシャイン様は進展どころか、ずっーと会えてないのに。

待ち合わせ場所にコウサ君が女の子を連れて来てイチャイチャしてるんだよ。

それにあの女は、僕の敵だ。

「コウサ君、その娘は誰だい？僕は別に君の色恋に関心はないけども、これから依頼を受けに行くのに、あまり感心しないな」

「あー、この人はメリーさんっす。俺の住んでる下宿屋のお隣さんで役者を目指しているんすよね。それでこないだ大活躍したミントさんの腕前を見て演技の幅を広げたいらしいんすよ」

「それなら納得だよ。こんな可愛い娘がコウサ君なんかと色恋沙汰

になる訳がないんだからね」

(コウサ、コウサ。ミントさんって、もしかして胸も残念な人なの？)

「今、今いーまー。」

僕の繊細で傷つきやすい胸を馬鹿にしたな。君みたいな娘にわからないんだ。僕達みたいな努力が身を結ばない胸をもった乙女の気持ち

「そつちが先にメリーとコウサの仲良しさんを疑ったのが悪いんだよ。それにコウサは魅力的な男性だよ」

「僕にはコウサ君の男性的な魅力はわからないね。いいさっシャイン様は、きつと僕みたいな可愛らしい胸が好きなんだから」

「そう？残念胸ねえーにならなきゃいいね」

「それを言うなら残念無念だろ？それとおあいにく様、最初から僕に胸なんてないんだよ。……って誰が胸なしだっていうんだい」
いいさ、戦闘のプロ魔術騎士の僕が実力を見せつけてやる。

side コウサ

巻き込まれないで良かった。

ブルーメンの依頼はっと。

ジャアントシープ、傷が少なければ30万デユクセン？

何この高額依頼は。

「ジャアントシープの毛は貴族に珍重されているし、腸はバイオリンの弦に使われるんだよ。お肉も皮も売れるみたいだよ。メリー物知りでしょ?」

「メリーさすがっすね。良く勉強してるんすね」

「くっ、コウサ君。羊を数えると夜に寝やすいぞ。どうだ」

とりあえずミントは置いて

データボール参照

ジャイアントシープ

体長最大4m近くになる巨大羊ですよ功才君。その角を使った破壊力は凄まじく岩も砕くそうですよ。
ちなみに羊の目は、結構怖いんですよ。

ロッキ師匠、俺達の会話を聞いてないよな?

ザロとメリーVSミニト（後書き）

指摘感想お待ちしております

ザコとメリーさんと羊（前書き）

依頼料に関する指摘があり改訂しました。

興味のある方は活動報告で確認して下さい。

そして何とザコが日刊ランキング2位となりました。

正直驚きと感謝が隠せません。

ザコとメリーさんと羊

side 功才

「コウサ、ゴブリンって安いね。一匹2千デユクセンだよ」

「仕方ないっすよ。ゴブリンは繁殖力が強いから巢を殲滅させるのが基本なんすよ。精霊魔法や集団魔法で1回で倒すのが基本みたいっすよ。冒険者より宮廷魔術師が担当してるみたいっすね」

冒険者が担当する場合は、ギルドから直接依頼される事が多いらしい。

「ふーん。ところでコウサはジャイアントシープを倒す方法を思いついたの？」

「メリーの協力が必要っすけどね。…後ミントの協力も」

「コウサ君、メリーと仲良くなってから僕の扱いが酷すぎないかい？僕は今回の依頼はパスさせてもらっからね」

「今回の依頼がうまくいったら、メリーがああ劇のチケットを手に入れてくれるそうっすよ」

ミントが見たがっていた、貴族と女騎士の恋愛劇は人気の為、今だにチケットが手に入っていない。

「メリー、君は何て素晴らしい女性なんだ。さあコウサ君、指示をだすんだ」

「先ずは矢を買いに行くつすよ。できるだけごついヤツが欲しいっすね」

それで清水の舞台から、飛び降りる覚悟で買いました。

鉄の矢お値段10万デユクセン。

当然、一本のお値段。

ジャイアントシープを見つけた。

ただいまお食事中らしい。

草原に4mの羊がいるんだから、遠くからでも目立ちまくる。

しかもめっちゃ低い声で鳴いていた。

ええ声芸人ならぬええ声羊。

通訳すると

「不器用ですから」

とかに、なりそうなぐらい渋く威圧感がある。

「コウサ君、言われた通りに木の柵を設置してきたけど、あんなでかい羊に効果があるのかい？」

「細工は流々、仕上げをご覧じろってね」

「コウサ、弓の練習もバッチリだよ」

「さすがは獵師の娘。それじゃジャイアントシープ退治に行くつよ」

まずは

「ミント、ボムをお願いするつす。できたらジャイアントシープの顔辺りで」

「わかったよコウサ君。大気と火のマナよ。力を合わせて敵を弾け飛ばせ。ボム」

食事の邪魔をされて、ご機嫌ななめとなったジャイアントシープが地鳴りをあげて突撃してくる。
だから

「プチパラライズ」

でもジャイアントシープの勢いは止まらない。

それは予想済み

「グラビティソード」

狙うのはジャイアントシープの角。
足が痺れている上に角を重くされたジャイアントシープがつんのめる。

「メリー頼むつす」

メリーが射るのは、予めライトウェポンをかけておいた鉄の矢。

突っ込んできたカウンター効果もあり、鉄の矢は見事にジャイアントシープの額に突き刺さった。

でも、まだ終われない。

ミントが設置した木の柵に向かって

「シールドボール」ジャイアントシープは、ズゴンッと、でかい音をたててようやく止まった。

「コウサす、凄いよ。本当に私達だけでジャイアントシープを倒しちゃった」

「どんなにでかい生き物でも額を貫かれた終わりっすよ。あっミントちよつと剣を貸して欲しいっす」

俺はジャイアントシープの額から、貴重な鉄の矢を引き抜いて、代わりにミントの剣を刺した。

「ちよつ、コウサ君、何をするんだい？ジャイアントシープはもう死んでるだろ？」

「こうしておけば、ギルド職員が傷痕を見た時にミントの剣で倒されたって思ってくれるんすよ」

「コウサ君、発想が殺人犯だよ」

俺とメリーは並んで、ミントが見たがっていた劇を見ている。ちなみにミントは俺達より前の席にいた。

「この劇はね、200年ぐらい前に実在した人がモデルになってるんだって。名前はローズ・ブロッサム」

「ブロッサム？それじゃミントの？」

「うん、ご先祖様。ローズ・ブロッサムは活躍をして本当に貴族のお嫁さんになったんだよ。それからブロッサム家では女の子が生まれると花の名前をつける様になったんだって」

「だからミントの奴、必要以上に騎士ぶっていたのか」

大して強くない癖に無理をしてたんだろ。

「コウサと一緒にだね。自分を偽る為に言葉まで変えて」

「違うよ。俺のは自己保身の為さ。ミントは周りの期待に応えようと必死だったんだろ」

「ミントもさ、この劇みたいにハッピーエンドになれば良いね」

「なれるさ。多分シャイン様はミントに本当の強さを知って欲しくて俺に動向させたんだろっし」

後は、シャイン様の周りも納得するぐらいにミントの評価をあげみせる。

ザコとメリーさんと羊（後書き）

幕間で、功才がいなくなつてた周囲の反応とかも書いてみたいです。
指摘、感想お待ちしております。

今の目標は、二次で書いた曹仁伝を越す事です。

ザコとそれぞれの気持ち(前書き)

なんとザコが日刊1位になりました。

いいんだろっか？

今回はちと暗めな話です

ザロとそれぞれの気持ち

side ミント

僕とコウサ君と一緒に冒険者ギルドに行った帰り道の事。とても、面白いものを見つけた。

(うん、いつもコウサ君にやられっぱなしじゃ悔しいよな。たまにはギャフンと言わせてやるっ)

「コウサ君、見たまえ。あそこにいるのはメリーじゃないか？」

そこにいたのはメリーと演劇仲間だと思う。
全員が見事に美男美女のグループだ。

(あれを見たら流石のコウサ君も悔しがるに違いない)

「あっ、そうっすね。それじゃ俺は道具屋に行くっすから。これで」

「ちよっ、ちよっと待ったー。挨拶に行かないのかい？」

「特に用事はないっすよ。それに友達といる時にわざわざ挨拶に行くほど仲良くもないっすから」

「いやいや、君はメリーが格好良い男の人として何とも思わないのかい？」

「俺がああの集団に混じったらどうなるかを考えたら行動は簡単っす

よ。気づかないふりしてスルーするのが一番なんすよ」

「いやいやいや、意味がわからないよ。」

「道端の小石が宝石に混じってどうするんすか？傷つくか笑い者になるだけっすよ」

「絶対に傷つくのは宝石の方だと思うよ。むしろ小石が宝石を粉々に砕いてしまっ気がするよ」

「砕く？そんな事したら俺も傷つくじゃないっすか？それに俺は自分からは危害を加える気はないっすよ」

「もし、あの中の誰かが君にケンカをうったらどうするんだい？」

「とりあえず相手の拳にライトウエポンをかけて殴らせるんすよ。でpchustanをかけて逃げるっすね。それでシャイン様の紹介状を持って、そいつのパトロンをしている貴族の所に行くっすよ。貴方がパトロンをしている俳優を使って俺を殴らせたとシャイン様に話してもいいですか？って言うんすよ」

「シャイン様の紹介状をそんな事に使うなんて。早く道具屋に行きたまえ」

功才君、キミは自分じゃなく持ち主に宝石を砕かせるんだね。

彼は一体どんな生活をしてきたんだろう。

あの夜から功才さんは依然として行方不明です。

三条財閥の力を使っても不明。

勇牙さんが暴走族のお友達に探させても行方はずかめていません。

功才さんの家族に聞いても、祖父の所に行ったとしか答えてくれな
いですし。

功才さんはお爺様、お婆様が大好きだったから、そこは真つ先に財
閥が調べていますのに。

「小百合、功才は勝手に居なくなっただけですよ」

「隼人さん、私は唯も心配なんですよ。唯さんは功才さんがいなく
なったキツカケは自分だって、ご自分を責めてるんですよ」

「功才の先輩に、あんただけでもザコの心配ができるんだなって言わ
れたみたいですからね」

side 財津栄才

馬鹿息子が行方不明になって2ヶ月近くになる。

今の所はマスコミにもバレていない。
いやバレたらまずい。

実の息子の行方不明を、バイト先の先輩から言われて気づいたんな
んでマスコミにバレたら、私の主演映画も妻美華のCMも長女栄華
のドラマも次女美才のCDも全てなくなるかもしれない。
いっそ、死体でも出てくれたら悲劇の父親になれるのだが。

side 山田先輩

ザコの野郎、帰って来たらタダじゃおかねえからな。
人にこんな心配をかけさせてよ。

でも正直、あいつが帰ってこない気持ちもわかる。

幼なじみの3人は唯って女の心配しかしてないし。

父親に至っては俺に言われて気付く始末。

本気で心配しているのは俺とあいつの爺さんと婆さんぐらい。

ザコのクラスの連中は急きょ転校したって説明をされていたし。

母親と姉妹は話を、してないからわからない。

あいつが、親しい人間を作らなかった理由が分かった気がする。

side 功才

メリーは誰にでも優しい。

メリーは誰にでも明るく笑いかける。

メリーには、イケメンの友達がいる。

何回も何回も、頭の中で繰り返す。

ザコが美少女に恋して、どうする？

無駄な努力はもうしないって、決めたじゃないか。

俺がメリーみたいな素敵な美少女に好かれるなんてのは、思い上が
った勘違いなんだ。

side メリー

くだらない。

この人達は、口を開けば自分の魅力か、三文芝居みたいなセリフしか言えないのかな。

コウサの爪の垢でも飲ませてやりたいよ。

コウサは口では、実力にあわない依頼を受けたくないから、有名にはならないなんて言ってるけど、本当は人をガツカリさせたくないんだと思う。

そしてその為に、必死にみっともないくらいにあがく。

あがいてあがいて手に入れた名誉を簡単に人にあげちゃう。だから誰もコウサのあがきに気づかない。

……

だったら、私が隣で見てあげたいな。

ううん、違う。

私はコウサと旅をして色々な物を一緒に見たいんだ。

ザロとそれぞれの気持ち(後書き)

こんなザロはどうでしょうか？
指摘感想お待ちします

ザロと師匠からのお祝い？（前書き）

久しぶりにロッキ師匠と功才が絡みます

ザコと師匠からのお祝い？

side ロッキ

「そう言えば功才君と例の彼女はどうなりましたか？」

「功才殿はメリー殿の周りにいる美男子に引け目を感じている様でして」

「いけません。せつかく面白くなってきたのに功才君は何をしているんですか？ここは可愛い弟子の為に私が一肌脱いであげましょう。最悪振られた功才君で楽しめますし」

side 功才

メリー出掛けたみたいだな。

俺はメリーが出掛けたのを確認して、絶対結界から出る。絶対結界の中にいる限り、外から俺の気配を伺う事はできない。まあメリーが俺の部屋の気配を伺ってなかったら、ただの痛い自惚れ屋なんだけど。

「功才君情けない、なっさけないです。君は何をしてるんですか。私が折角教えてあげた絶対結界をこんなネガティブな使い方をするなんて」

「へっ？師匠。なんでここに？どっから入ってきたんですか？つか部屋では靴を脱いで欲しいんですけど」

「そんな事を言うのは君たち日本人だけですよ。いえね可愛い弟子

が片思いをしているみたいですから、師匠としては応援してあげたくて、つい来ちゃいました」

「応援って何をするつもりですか？」

「新しい簡易魔法をあげますよ。名付けてアローファクトリー、あらゆる物質から矢を作り出す魔法です」

「お約束で作り出す条件があるんすよね？」

「さすがは功才君、あくまで君の力で加工できる物質のみとなります。だから金属は諦めて下さい」

鉄の矢を作るのは無理と。

「どっちにしろ、この魔法は使う機会はないと思いますよ」

「功才君、美男子に彼女を取られていいんですか？」

師匠に何で知ってると言う質問はしない。
この人に常識通用しないし。

「男の魅力でいったら、俺はゴブリン級で向こうはドラゴン級なんですよ。かなう訳ないじゃないっすか」

「それは一般論でしょ？一般論がどれだけ、あやふやな物か分かるでしょ？」

「一般論が通じない師匠が、それを言っていますか。そんな事より師匠、シールドボールはどれ位までの攻撃に耐えられるんですか？」

大抵の攻撃には1回は持ちますよ？どうかしましたか？」

「いやシールドボールに魔物を閉じ込めて窒息死狙いはできるのかなと思ったんすよ」

「駄目です。そんな闘い方したら、私がつまんないじゃないですか。そんな事できない様に魔法を書き換えちゃいますよ。…これで、ただ窒息死を待っていたら自然にシールドボールは消滅しますからね」
言わなきゃ良かった。

「それで師匠、応援って何をしてくれるんすか？」

「やだなー。弓を使う彼女と旅をする時に便利な魔法をあげたじゃないですか。功才君、頑張ってください。君の優しい師匠は何時でも遠くから見張っていますからね」

そついに終わると師匠は消えた。

転移魔法ってやつだろう。

いや、いや、そんな俺は弓矢使えないのに、こんな魔法くれても。

それに俺が加工できるって言ったら砂とか？

サンドアローなんて弱いに決まってる。

考えても仕方がない、冒険者ギルドに依頼を見に行くか。

冒険者ギルドの前には、今1番会いたいけど会いたくない人がいた。メリーだ、ギルドの壁にもたれかかって誰かを待っている様子。

この後の行動選択肢

- 1・引き返す
 - 2・自然な挨拶をして中に入る
 - 3・気配を殺して気づかないふりをして中に入る
- ……3だな。

目線は地面、考え事をしている様な表情を浮かべながらギルドに向かうべし。メリーの横を通り過ぎ様としたその時。

「良かった、良かったよー。やっとコウサに会えた。コウサ助けて、メリーのお友達が大変なの」

涙目で俺に抱きついてくるメリー。
さすがに逃げられないよな。

「それで友達がどうしたんすか？」

メリーは一瞬表情を強ばらせたが、話を続けた。

「メリーと一緒に演劇をしている人達がね、今度の舞台の参考にす
るからって近くの高い砦に行ったの」

「今度の舞台は、その砦で起きた話なんすか？」

「うん、昔その砦で悲劇的な死を遂げた將軍がいたの。みんな実際に現場を見るのが必要だからって行っちゃって」

「その砦はいわく付きなんすね」

「幽霊とか魔物がでるって噂があるんだよ。メリーはジャイアント
シープと戦って魔物の怖さが身に染みだから、みんなを止めたんだ」

「でも行ったんすね。……わかつたす、俺に任せるっすよ」

メリーのあの涙は、どの男に対するものか分からないけれども、こ
うなりやとことんピエロになってやる。

side メリー

こないだミントに言われたんだ。

「コウサ君は多分メリーの事を好きだと思うな。でもコウサ君は自
分に自信がない様でメリーの役者仲間に引け目を感じていたよ。僕
はコウサ君には感謝をしているんだ。だから君に、その気がないん
なら、もうコウサ君に構わないで欲しい」

コウサ、誤解だよ。

コウサは私が、あの中の誰かの事を好きだと思っているみたい。
それでも、コウサは救出に行ってくれてるって約束をしてくれた。
それなら私も気持ちを決める。

皆について行って、みんなに今後の事を宣言するんだ。

誤解はちゃんと、解かなきゃいけないし。

ザコと師匠からのお祝い？（後書き）

シールドボールに魔物を閉じ込めて窒息死させたら良いのでは、という意見を何通か頂きました。

作者も最初それは気付いたんですけど、それをやっちゃうと必殺技過ぎてザコじゃなくなる気がして、ロッキ師匠によるシバリにさせてもらいました。

指摘感想お待ちしております。

ザコのナメクジ退治（前書き）

新魔法が活躍します

ザコのナメクジ退治

side 功才

やっぱピエロやめよーかな。

「あそこの皆はやばいのがでるぞ。あの役者の卵達も早くしないとやばいかもな」

「な、何がでるんすか？」

「ゾンビスラッグだよ。かなり厄介な魔物だから討伐金額は50万デュクセン。役者の卵達のパトロンをしている貴族様から依頼が出てる」

データボール参照

ゾンビスラッグ

ゾンビに寄生していた肉食のナメクジが、闇のmanaを溜め込んで魔物化しちゃったんです。

しかも、このナメクジ君は死体を次々と吸収して巨大化しちゃう厄介者、ゾンビだから普通の攻撃は効きませんからね。
さあどうします？功才君。

「わかったっす。この依頼を受けるっす。一つ聞きたい事があるんですけども、この近くに…は、あるっすか？」

とりあえず、アンデットにはお約束の聖水（1つ1000デユクセンを20個購入）をバスケットボール大のシールドボールに閉じ込める。

後はあれとあれの、どっちにしようか悩んでいると

「コウサ、メリーも一緒に連れて行って。依頼受けたんだよね」

「友達を助けたいのは、分かるっすけども駄目っす。今回の魔物は見た目がやばいんすよ。ナメクジみたいなソンビがでるんすよ」

「コウサは1人で行くつもりなんだよね？絶対に駄目、誰が何と言おうとメリーが許可しないんだから」

「メリーの許可は必要ないんじゃないっすか？」

「あるの！コウサはメリーの大事な人なんだよ。皆に行った人達よりも大事なんだから。メリーはコウサと一緒に冒険をたくて待ってたんだよ！」

こんな風に言ってもらえたのは初めてだよな。

メリーからは逃げなくて大丈夫かもしれない。

「分かった、分かったから。その代わりにきちんと仕事をしてもらうからな」

「うんっ。やっといつものコウサの話し方になったね」

「メリーが来てくれるなら、後は買う物は塩とおがくずと油だな。それと途中で砂を手に入れていくぞ」

「もう細工は流々なんだね」

「ああ、後は」

「「仕上げをご覧じろ」」

「何つーか雰囲気満点な砦だよな」

古びた砦は3階建てのレンガ造り。

ホーンテッドマンションならぬホーンテッド砦。

「あつ、屋上にいるのがメリーのお友達だよ」

俺には人影にしか見えないがメリーには確認できたらしい。

「今は昼間だからゾンビスラッグはお日様を嫌って屋上には来ないんだろうな。うっし、夜になる前に片付けるか」

その前に荷物から取り出した物を砦の入り口に供える。

「コウサ、何してるの？ワインとお花？」

「この砦で悲劇が起きたんだろ？そうゆう所にお邪魔する前には、きちんと仏様に挨拶をしておかなきゃ駄目だろ？」

ビビリの俺の安心保険。

「ホトケサマ？」

「その辺は通じないか。この依頼が終わったら教えるよ。それじゃお邪魔します」

俺とメリーが中に入った途端、ボタンツと鉄製の扉が閉まった。なんつーお約束な。

ゾンビスラッグが持つ闇のマナの力なんだろう。これでメリーのお友達は逃げれなかったんだな。

砦の中は、これまたお約束に空気が澱んでいた。

「なんかカビ臭いね」

砦の壁や床には、カビや想像をしたくない黒いシミがそこかしこにある。

「ゾンビスラッグが住み着いた所為で手入れが出来なくなっただろ」

幸いと言うか、1階には魔物の影もなく無事に2階への階段を上がる事ができた。

2階にあがり、広間の扉を開けると3m近いナメクジ、ゾンビスラッグが闇の中から現れる。

青黒い巨大なナメクジは、見た目がかなりきつく、死体を吸収しているから、さらにグロい。

だって、ゾンビスラッグが動く度に、体のあちこちで吸収された人の顔も動いているんだぜ。

メリーの顔も青くなってきたし、これは… さっさつと片をつけて、

寝るに限る。

先ずはリユクサククから聖水入りシールドボールを取り出す。それをゾンビスラッグに投げてぶつかる直前に

「マジックキャンセル」

聖水をモロに浴びて苦しむゾンビスラッグ。

体が溶けだしてますますグロさがアップ

次は塩を取り出して

「アローファクトリー」

出来たのは塩の矢。

「メリー頼む」硬さを確認しつつ、塩の矢をメリーに手渡す。

「ナメクジは動きが遅いから大丈夫だよ。まかせて」

メリーの手から放たれた白い矢がゾンビスラッグの体に突き刺さる。良かった、無事に矢が崩れずに刺さってくれた。

どうやら木の矢ぐらいの威力はあるらしい。

塩の矢で闇のManaが浄化された為か、ゾンビスラッグの動きが止まる。

メリーが塩の矢で牽制してくれている間に取り出すのは、途中で手に入れた目の細かい砂。

当然、シールドボール入り。

ナメクジだけに、最初は塩を使うか迷ったけど砦の近くに細かい目

の砂があるのをギルドで聞いたから砂で代用した。

大量の砂を、モロに浴びたゾンビスラッグは体の水分を取られて縮み始める。

次に取り出した、おがくずに油を染み込ませて

「アローファクトリー」

出来たのは、中まで油がタップリと染み込んだ木の矢。

「メリー、俺が突っ込むと同時に射ってくれ」

「任せて。コウサ、無茶しないでね」

立て続けに6本の矢がゾンビスラッグの体に突き刺さる。

後はゾンビスラッグが体勢を立て直さないうちに

「スモールファイヤー」

俺はバースデーケーキの要領で木の矢に火を着けてまわる。

油が染み込んだ矢は勢いよく燃え上がり、水分が無くなったゾンビスラッグを瞬く間に火に包みこんだ。

「ふいー、何とか倒せた。」

メリーは2階のお友達をよろしく。もう少し、したらミントが来る」

「また手柄を譲っちゃうの?」

「ここの皆は、マクスウェル家の所有物なんだよ。今回は、残念魔

術騎士にお礼をしなきゃいけないだろ」

メリーが屋上に行つて、しばらくするとミントがニヤニヤしながら
広間入つてに來た。
何かむかつく。

「なんすか?」

「別になんでもないさ。小石が宝石を助けたんだと思つたら面白くてね」

「うるさいっすよ。これは流れで、こつなつたんすから」

side メリー

私達が降りてきたのを、察するとコウサはさすがミントさんの後ろに移動する。

どつからどうみても、ミントさんの従者。

みんなが口々にミントさんにお礼を言つてる間も素知らぬ顔で頷いている。

コウサ、ここからはメリーをご覧じろ。

「コウサ、みんなはまだミントさんにお礼があるみたいだからメリーと一緒に冒険者ギルドに行こ。メリーもギルドに登録をするから」

啞然とするみんなを尻目に私はコウサの手を取つて歩きだす。

コウサは顔を真っ赤にしながら、口をパクパクさせていた。

コウサ、かつわいいー

ザコのナメクジ退治（後書き）

コウサとメリーが惹かれあつた描写が分かり難いところ指摘を頂き、ただ今幕間制作中です。

幕間 メリーとザコ（前書き）

メリーがコウサに惹かれた描写が分かりづらいところ指摘を頂き搔き
ました。

無理やり感が否めない

幕間 メリーとザコ

side メリー

砦から出た後も、しっかりとコウサを確保しておく。

コウサには色々と聞きたい事があるから逃げられない様しておかなくちゃ。

「さっ、コウサ一緒にブルーメンに戻るっ？」

「お、おっう。わかった」

コウサの顔はまだ真っ赤なまま。

「コウサ、私と初めて会った時の事を覚えている？」

「メリーの乗っていた馬車がゴブリンに襲われた時だろ？確か3人組だったよな」

「正解。あの時のコウサすっごい冷めた目をしてたよね」

その時は手を繋いだだけで、顔を赤くするなんて想像できなかったな。

「冷めた目？メリーそこから見てたのか？」

「最初はヤバい人だと思ったんだよ。でも気付いたらミントさんの

従者のフリをしてるし、終いには1人で歩いて帰って言うから不思議な人だなんて興味湧いたんだ」

今思うと違う想いもあったんだけど。

「それで俺が演技をしていると思ったと、開幕準備から見られたんじゃないか」

「他の人は気付いてなかったよ。私はゴブリンと戦った事があるから、そんなに焦ってなかったし」

「シャイン様の名前を聞いてハシャいでいたから、うまく誤魔化せたと思っただけだな」

「残念でしたー。友達への付き合いでハシャいでいたんだよ」

コウサが啞然としている。
うん、しっかり私のペースだ。

「その後すぐに再会したんだよね。コウサが下宿のおじさんと話してるの聞いてラッキーって思っただよ」

「ちょっと待て。そんな前から俺が隣に住むのを知ってたのか？」

「そうだよ。てっきりコウサも演劇関係の人だと思ってたから、仲良くなりたかったんだ」

「それじゃ何で冒険者ってわかった後も、親切にしてくれたんだ？」

「今はメリーの質問時間だよ。それじゃ次の質問にいきますー。コウサは何で途中から私の事を避けたの？コウサに嫌われたと思ってメリーすっごくー悲しかったんだからね。言葉も戻っちゃうし」

その答えはコウサが、ちゃんと気持ちを伝えてくれてからだよ。

「怖かったんだよ。メリーの周りは格好いい男ばかりだから。俺がいる場所がない感じで、それに美男美女は苦手なんだよ」

「そう言えば、コウサって自分の話をしてくれた事ないよね？詳しく聞きたいな」

コウサは色んな話をしてくれた。

小さい時からお父さん達に必要とされなかった事。

幼なじみ達に引け目を感じて距離を置いた事。

本当は違う世界の人間だって事。

正直、シヨックな内容ばかりだった。

コウサは自分の弱さも武器にしなきゃいけなかったんだね。

「そっか。だからコウサは目立つの嫌いなんだ。ねえコウサは、いつか帰っちゃうの？」

「わからねえ。師匠の条件もわからないし、こっちの生活も気に入ってるしな。向こうで俺がいなくなっただけ心配をしてくれているのは5、6人しかいないって話だ」

「メリーはコウサがいなくなったら嫌だよ。こないだ距離を置かれただけでも、あんなに悲しかったのに」

「うー、悪かったって。いやごめん」

「メリーを今後二度と悲しませないって誓ってくれるんなら特別に許してあげる」

「わかった、誓うよ。それよりメリー本気で冒険者になるのか？」

「コウサと一緒にジャイアントシープを倒して思ったんだ。もっと色んな経験をしなきゃ演技もメリー自身も成長できないって。旅をしながらコウサから向こうの世界の演技を教えてもらいたし」

「一番の理由はコウサに一目惚れしたからなんだけどね。でもコウサには、まだまだ教えない。」

「旅の主導権はコウサが握るんだろうけど、恋愛の主導権は私が握るんだから。」

「私はコウサが元の世界にも、違う女の人の所にも行かない様に繋いでる手に軽く力をこめた。」

幕間　メリーとザコ（後書き）

次の話が3分の2ぐらいできていたから、繋ぐのに大変でした。

馬車の人間で1人だけ功才を見てたのはメリーなんで勘弁して下さい
い

ザロへの依頼（前書き）

今回は討伐依頼ではないです

ザコへの依頼

side メリー

「ちよつ。メリー手が」

街に入っても、コウサの顔は真っ赤なまま。

「？コウサ手がどうしたの？」

魔物が相手なら平然としてる癖をに、私に手を握れただけで照られて困惑しているコウサのギャップがおかしくてたまらない。

腕を組んだらコウサはどうなっちゃうんだろ？

大丈夫だと信じてるけど、周りへの牽制を兼ねてコウサの手を握ったまま冒険者ギルトに入る。

「ザコ、女と手を繋ながらギルドに来るとは出世したな」

「違っつて、じゃなく違うんすよ。今回はメリーが冒険者ギルドに登録したいから一緒に来たわけで」

「それじゃコウサ、メリーがギルドに登録する間、寂しくてもちやんと待っててね」

「それじゃ彼女さん、パーソナルカードをチェックさせてもらっよ。ザコちゃんと待っとけよ」

ギルドへの登録にするとパーソナルデータの私の職種がアーチャーに変わった。

ギルドの人の話だと冒険者ギルドに登録すると、その人の戦い方で職種が変わるみたい。

それを見て依頼に適正があるかを判断するんだって。

「ねえ、コウサの職種は何？」

「しばらく見てないからわからないな。きっと冒険者じゃないか？」

コウサの職種は

小技師7級

「ぶっ。何これ、コウサにピッタリ」

「何だよ小技師って。しかも7級ってなんだよ。小技師だとマスターしても大技使えないの確定じゃね？」

「伝説の冒険者小技師コウサじゃ迫力ないよねー」

「何かこじんまりとした伝説になりそうだよ」

「そうだよねー」。

ジャイアントシープやゾンビスラッグは中級冒険者でも苦戦する時ある魔物なんだよね。

それをコウサみたいな初心者が倒すのは稀なんだって。

それなのにコウサは今だに殆ど無名なんだよね。

演劇仲間からも冒険者じゃなくミントさんの従者だって思われていたし。

side 功才

ゾンビスラッグ退治から数日たったある日の事。

俺はシャイン様から呼び出された。

シャイン様は、ゾンビスラッグがいた砦の関係でブルーメンに来たらしい。

「コウサ、久しいな。今回は冒険者ギルドを抜きにしてコウサ個人に依頼をお願いしたい」

「有名になったミントには頼まないんすか？」

「ミントは正直に話してくれたよ。手柄は全部コウサによるものだから」

あの馬鹿正直、うまく誤魔化せよ。

「わかったすよ。どんな依頼つすか？」

「デユクセン皇帝の御次男ルイス様の為にある蝶を捕獲して欲しい。蝶の名前はジュエルバタフライ」

「蝶なら騎士団に護衛をさせて見に行くの駄目なんすか？」

「ルイス様は生まれ付きお身体が弱くて外出は無理なんだよ。もう

すぐルイス様は7歳の誕生日がお迎えになられる。虫を好まれるルイス様に喜んで頂きたいのだ」

「質問があるっす、シャイン様は皇子様と親しいんすか？それと何故虫が好きだっつてわかったんすか？」

「私はお話相手を勤める事が度々あるのだ。皇子の部屋には昆虫の図鑑が沢山あって、ジェルバタフライの話もよくされておられる」

もし、騎士団を動かしたらどうなるか考えてみる。

確実に領民のヒンシユクは買っし、騎士団の中には虫探しを不名誉と捉える人も少なくないだろう。

シャイン様は皇帝への忠義が厚い方だ。

わざわざ皇帝の名を貶める手段は選ばないだろう。

それに他の貴族にばれでもしたら、ご機嫌取りの為に様々な虫が献上されるだろう。

毒虫が献上される可能性も否定できない。

「わかったっす。幾つか用意して欲しい物があるっす」

「受けてくれるか？くれぐれも内密で頼む」

データボール参上

ジュエルバタフライ

森の宝石と呼ばれる蝶ですね。

森の奥深くに住み人目に触れる事は少ないみたいですわねー。

特徴は宝石の様に輝く羽を持っているんですよ。

宝石と言えば、功才君は、可愛い彼女にプレゼントは贈りましたか？

データボールが、無駄な方向にハイスペックになってきている気がする。

「メリー、ジュエルバタフライって見た事ある？」

「もうコウサ、忘れたの？メリーは猟師の娘だよ。ジュエルバタフライは子供の頃によく捕まえたよ」

やっぱり猟師の娘だけあって、森には詳しいんだな。

「メリー、シャイン様からの依頼に協力してくれ。依頼内容はジュエルバタフライの捕獲だ」

「ジュエルバタフライがいる森までだと片道3日はかかるねー。いきなりお泊まりの誘いなんてコウサったら大胆」

「ちっ、違っつて。そんな掛かるなんて知らなかったし」

「えー、コウサはメリーと旅に出たくないの？シヨックだなー」

「違う、違っつて、絶対にそんな事ないから。むしろ幾らでも一緒にいたいぐらいだし。あっ」

「キヤーツ。コウサつたら大胆。うんっ、メリーも依頼に協力してあげる」

多分、この先ずっと俺とメリーの力関係は変わらない気がする。

「そ、それじゃ依頼内密の詳しい話をする。……しよつと思つ」

「さっすがコウサ。それならメリーは絶対不可欠だよ」

「頼む。それなら旅の準備をするか」

「森に行くのなら足元の装備はきちんとしなきゃね。それと虫に刺されない様に厚手の服とズボンも買わなきゃ」

虫と言えど馬鹿にするなかれ、どんな病原菌を持っているか分かったもんじゃない。

服装は探検隊みたいな感じが良いだろっ。

森の中で鎧なんて着ていたら邪魔なだけだろうし、ましてゲームに出てくる女性キャラみたいになんか丸出しだとお好きだけ刺して下さいだ。

ゼロへの依頼（後書き）

指摘感想お待ちしております

ザコとメリーの準備（前書き）

今回は少し短めです

ザコとメリーの準備

side 功才

「メリー、森にはどんな魔物が出るんだ？」

「森では魔物より獣に気をつけなくちゃ。熊なんてゴブリンを餌にするくらいだし」

「森の中では、スモールファイヤーを使いながら進むか」

「山火事になるから禁止。森の中ではメリーの指示に従う事。わかった？」

フラッシュって言えば良かった

「こつちの森の事は、全然分からないからむしろお願いしたいくらいだよ。それでメリー先生何を買ったらよろしいでしょうか？」

「何日も潜る訳じゃないから、そんなに必要ないよ。食料・雨具・テント・弓矢・塩・飲み水・ナイフ・香辛料ぐらいかな」

「飲み水はあてがあるから大丈夫だけど、塩とナイフ・香辛料つてまさか……」

「鹿とかウサギ美味しいんだよ。心配しなくてもメリーが捌いてあ

げるから。ねっ子兎^{こウサ}」

「メリーさん、なんか最後の発音が違うんじゃないかな」

「気にしない、気にしない。久しぶりに子兎シチューも食べたいな」

「ははっ、メリーは兎を捕るの得意なんだ」

「得意だよ。浮気なんてする悪い子兎を見つけたら直ぐに射っちゃうかもね」

メリー、目が笑ってない。

いや、浮気はしないから、大丈夫なだけだね。

まだ付き合ってないし。

確認はできないけど。

出発前日、ミントに呼び出された。もちろん、メリーにも同席してもらった。

「コウサ君、これが頼まれていた虫籠だ。それとある貴族が噂を聞いて動くらしい。だからこの目立つ虫籠は渡したくないんだよ」

虫籠は檻の形状をしており、丁寧に小さな扉もついている。

虫籠は木製であるが、銀細工や宝石が散りばめれており、人目を惹く。

「その貴族の事を教えてくれるっすか？」

「ゲース・ドンゲル伯爵。爵位こそシャイン様と同じ伯爵だが、人柄は比する事もないほど卑しい。ドンゲル伯爵は、昆虫標本のコレクターでもある」

そりやまたおあつらえ向きな奴が来てくれたな。多分、ドンゲル伯爵はならず者を使ってジュエルバタフライを奪うつもりだろう。

「シャイン様はまだブルーメンにいるんすか？」

「虫籠を預かった時に君達の心配をしておられた」

「なら安心つす。予定変更になるつすが、明日シャイン様とミントさんに見送りお願いしたいつす。できるだけ目立つ格好でお願いするつすよ。それとこの手紙をお願いするつす」

「伝えておくけど、何か意味があるのかい？」

「細工は流々、仕上げをご覧ください。だよねっコウサ」

メリー、それ俺が言いたかったのに。

出発当日

約束通りシャイン様はタキシード、ミントはドレスで来てくれた。

元々高名なシャイン様と最近噂になっているミントが連れ立って見送りをするとあつてかなりの人だからができています。

そして俺はこれみよがしに派手な虫籠をぶら下げて旅立った。

ザコとメリーの準備（後書き）

子鬼のくだりはピトフーイ様から頂きました

ザコとメリーの旅 1 似た者カップル（前書き）

今回の話で功才&メリーコンビにした意味を理解してもらえたら幸いです

ザコとメリーの旅 1 似た者カップル

side 功才

(メリー、後ろの男5人組をどう思う?)

(服装は農夫っぽい服を着てるけど、絶対に違うよね)

(なんで、そう思う?)

(あんなきれいな手をした農夫なんていないよ)

別に男達の手が白魚の手みたいに美しい訳ではない。

農家ならどうしても爪に土が入り黒くなるし、手も節くれだつ。早い話が労働をしている手になる。

一方男達の手には濃い毛はあるが、豆もなく普段から仕事をしていないのが伺えた。

(しかし、もう少し上手く尾行できないのか、俺達の歩速に、一々合わせてどうすんだよ)

功才達が急げば男達も急ぐ、功才達が立ち止まれば男達も立ち止まるの繰り返しであった。

(コウサ、あの人達ばれてないって思ってるのかな?)

(多分な。ドンゲル伯爵が自分の領地から連れて来た連中だろうから、俺達を見失えば即迷子だからあんな風になるんだろ。つつか農

夫が野良着のまま、こんな遠出する訳ないっの)

(シャイン様の部下の爪の垢を飲ませてあげたいね)

メリーの言う通りシャインの部下も尾行をしていた。

尾行する相手は、功才達ではなく、ドンゲルの寄越した男達。

シャインの部下は商人や農夫、町人に紛して功才とならず者を取り囲む様に移動している。

何人かは、途中で違う道に行き新たな扮装をしてくる徹底振りだ。

(もしかして、コウサの指示?)

(ああ、手紙でお願いしておいた。メリー、そろそろ小声は終わりだ。あいつら話が聞こえないからって距離を縮めてきた)

(りょーかい。それならあの話だね)

今回の旅はジュエルバタフライを捕まえる森まで往復6日の旅。仲の悪くない年頃の男女2人連れが、終始小声では怪しまれる。

「メリーは、ジュエルバタフライを見た事あるんだよな?どんな蝶なんだ?」

「水晶みたいに真つ青な羽にエメラルドみたいな緑やルビーみたいに赤い斑点が混じってるんだよ」

「森の奥にしかいないんだろ?」

「そうだよ。獵師にしてみれば、そんなに珍しい蝶々じゃないんだけどね」

「早い話が熊や狼がでる場所にジュエルバタフライもいると」

「獵師の間では、ジュエルバタフライに会えて1人前の獵師って言葉があるくらいだからね。普通の人ならまず無理かな」

side シャイン

「それほど自然な会話だったのか」

「はっ。あらかじめ話を聞いていた我らでも、あれが演技とは思えませんでした」

「つまり、ドンゲル伯爵の部下達は森に入らずコウサ達が捕獲してきたジュエルバタフライを奪う企てをたてると」

「ええ、そのような話もしていました。わざわざ森に入らないでも、あのガキ達の捕まえてきた蝶を奪えば済む。俺達みたいに要領よくやるのが賢い人間だ。」と

「やれやれ、既にコウサの罠に掛かっているとは知らずに呑気なものだな。ミント、本当は一緒に行きたかったんじゃないか？」

シャインが後ろに控えているミントに、からかう様に話し掛けた。

「無理ですよ。僕はあの2人みたいに上手な演技はできません」

この時2人は、自分達もコウサとメリーの悪戯にはめれているとは

知る由もなかった。

side 功才

無事に夜が来る前に街道沿いの村に辿り着く事ができた。

「コウサ、今日は宿に止まるの？」

「うんにゃ、この村の村長の家泊まれる様にシャイン様をお願いしてある」

「わざわざシャイン様をお願いしたの？」

「詳しい話は、村長の家についてからするよ」
シャイン様から紹介とあり、村長宅での歓待は中々のものだった。

side メリー

食事を終えて、やっとコウサと2人つきりになれた。

「まさか、この歓待を受けたくてシャイン様をお願いしたんじゃないよね？」

「それこそまさかだよ。宿屋に泊まったら常にあいつ等を警戒しなきゃいけないから、打ち合わせもできないだろ？それにほらっ」

コウサの指差す先には尾行して来た男の姿がある。

「あいつ等は俺達があいつ出発するか分からないから常に見張ってな

きやいけないんだよ。酒も飲めないし、頭以外はぐっすり寝れないから部下はさぞかし不満がたまるだろうな」

「明日の出発は早朝？」

「そうだよ。頭だけ熟睡したんじゃ不公平だしな。頭もこんな早い時間からは寝れないだろうし。明日は少し早歩きにしてやるか。途中の村を1つスルーするつもりだから」

尾行してる人達にしてみれば、やっと休めると思った村をとばされるのはシヨックだよね。

「だから村長様の奥様から、あんなにパンをもらっていたんだ」

「お世話なつたうえに、早起きまでさせちゃ迷惑だろ？それとメリー森に毒草とか危険な蜂とかはいる？」

「そりゃいるけど。また何か企んでるの？」

こうして、私とコウサの初お泊まりは早寝で終わってしまった。

ザコとメリーの旅 1 似た者カップル（後書き）

指摘感想お待ちしております

ザコのサバイバル 先生はメリー（前書き）

お気に入り登録が2千件を超えました。

曹仁伝ではどうしても越せなかった1,500を超えての2千超えが嬉しくて次話書き上げました。

曹仁伝を読んでくれた人は男の人が多かったけどザコはどうなんでしょう？

どっちにしろ、この駄文を楽しみにしてくれている人がいるなら感謝です。

ザコのサバイバル 先生はメリー

side メリー

ほうほうの体って、あーゆーの言うんだろっな。

ぐっすりと眠れた私達と違って尾行をしている男の人達は疲れ果てていた。

そりゃねー、早朝から午後まで早歩きしたら疲れるよね。

私達や荷物には、コウサのライトウェポンって魔法が、掛かっているお陰で余り疲れてはないけれど。

昼ぐらいに着いた村を通り過ぎた時の男の人達の悲痛さには少しだけ同情しちゃった。

「ねえ、コウサ。昼に食べた、あのサンドイッチって食べ物。美味しいかったから、今度はゆっくり座って食べたいな」

せっかくのコウサの手料理も、早歩きしながら食べたから、きちんと味わえなかったんだよ。

side 功才

「サンドイッチは料理に入るのか？どうせ作るんなら、もう少し手のこんだ料理を作るよ」

「へー、コウサって料理できるんだ」

「お前は結婚できない可能性が高いからって、婆ちゃんに仕込まれたんだよ。メリーどんな料理が好きなんだ？こっちの材料で作れそ

うな料理があつたら今度作るよ」

「じゃ。メリーが何か獲物を捕まえて捌くから、それで何か作って」
メリーは名案と、ばかりに胸の前でポンツと手を叩いた。

仕草は可愛いんだけど、話の内容がワイルド過ぎ。

「このペースだと次の村には早めに着くから、詳しい話はそこです
るか」

できたらジビエ料理は避けたい。

次の日

「ここだよ。この森にジュエルバタフライがいるんだよ。懐かしい
な」

メリーは昔、父親とこの森で猟をした事があつたそうだ。

そのせいか、メリーの狩猟魂に火がついたらしく気合い満点。

「行くよっコウサ。森の中では人の小賢しい知恵なんて通用しない
んだからね。わかつた?！」

いや、その小賢しい知恵がないと俺は役立たずなんだけど。

「わかつたら返事っ!」

「はいっ！！あつ待って。入り口に目印をつけとくから」

道無き道をサクサク進んでくメリー。
ほうほうの体で着いてく俺。

「メリー、もう少しゆっくりと進まない？」

「却下。森の中で夜を明かすのは凄い危険なんだよ。それに日の落ちた森は獣達の天国なんだからね」
昼の森はメリーの天国と。

「コウサ、頭を低くして。ハト蜂の巣があるから」

雀蜂の倍以上の大きさがあるからハト蜂なんだね。

データボール参照

ハト蜂は、とっても危険な蜂なんですよ。

毒性は低いんですけど針が太くて刺されたらヤバいですよー。

オーディヌスには、ハト蜂に豆鉄砲を食らわす勇気なんて言葉もあるんですよ。

ロッキの今日から使えるオーディヌスの諺より

「うー時間がなくて残念。ハト蜂の幼虫とか蜂蜜は、すごい美味しいんだよ。コウサに食べさせてあげたかったのにな」

「そうなの？でも時間がないなら仕方ないよね。うん残念だ、残念。さっ行くっ」

メリーは名残惜しそうにハト蜂の巣を見ているけど、蜂蜜はともかく巨大幼虫は食いたくない。

.....

そして3時間くらい歩いただろうか、メリーが急に立ち止まった。

「ほらっコウサ。あれがジュエルバタフライだよ」

メリーの指差す先には、木漏れ日の中を数匹の蝶が飛んでいる。木漏れ日に反射してジュエルバタフライの宝石の様な羽が煌めいていた。

「凄い。神秘的だよな」

「でしょ。でもどうやって捕まえるの？コウサ虫取り網持ってないよね」

「大丈夫だよ。シールドボール」

ジュエルバタフライに、シールドボールをかけて虫籠に入れてマジックキャンセルを掛ける。

予定通り二匹を確保。

「さて、それじゃ例の物を探しますか」

そう言つて、歩きだそうとした瞬間、メリーに耳を引つ張られた。

「森の中で素人が勝手に歩かない事。わかった？」

「はいっ。わかりましたっ」

色んな意味で、早く森から出たい。

「ほら、コウサこれが探していたモノだよ。普通の人は、先ず見つけられないんだから」

「確かにこれを森に詳しくない人間が見つけるのは不可能だよな。ありがとなメリー」

「へっへー。さっ戻る」

来た道を正確に戻つていくメリー。

途中でキノコやら果実を採集していくメリー。

途中で現れた兎を、捕獲者の目でガン見するメリー。

兎に逃げろっ！と心の中でお願ひする俺。

パーソナルカードのメリーの職業はレンジャーに変わったと思う。

「メリー、もうすぐ出口だよな。先頭代わるよ。もしも場合は打ち合わせ通り頼むよ」

さっ、ここからが俺の出番だ。

待ち人來たる。

例の5人組が入り口で待ち伏せしていた。

「わざわざ目印を残していつてくれてありがとな。さあ坊主達。怪我をしたくなきゃ、その虫籠をよこしな」

「有料で引き取るって取り引きはなしっすか？」

「取り引きだ？この人数相手に取り引きを持ち出すとは良い根性してるな。そんなに死体になりたいのか」

「死体は嫌っすね。それでいくらで買ってくれるっすか？今ならシヤイン様ヘジユエルバタフライは一匹もいなかったっていう報告書付きっすよ」

「このガキしっかりしてら。1万デユクセン払ってやる。虫籠をよこしな」

「金が先っすよ」

「仕方ねえな。ほれっ」

男は俺の足元に金を投げつけてきた。棒に虫籠をくくりつけて男に渡す。

「さあ虫籠をもらっちまえば、こっちのものだ。金もその姉ちゃんも俺達がいただいでやる」

「は、話が違っっすよ」

「はっ、誰も身の安全は保証してないぜ？まっお姉ちゃんの方は、

たつぷりと可愛がつてやるけどな」

俺は下卑た笑いを浮かべる男を見て、笑いを堪えるのに必死だった。畏つてのは、事前に幾重にも張り巡らせておくもんだぜ。

「メリー逃げるっすよ」

例の場所までね。

「ちつ、小僧は殺しちまえ、女は宿屋に連れて来い。俺は旦那に蝶を届けてくる」

今日、散々森を歩いてきた功才と初めて森に入る男達では、移動速度の差がどうしてもでてしまう。

その所為で男達は歩くのに必死で功才に誘導されているとは気づけないでいた。

男達を確認して功才がゆつくりと振り返る。

その顔には珍しく怒りの感情が表れていた。

「大人しく取り引きを終えてりや良かったのによ。俺の大切なメリーに手をだそうとしたお前達が悪いんだぜ。メリー頼む」

今の功才に男達に言い訳をさせる優しさは残っていない。

メリーが弓で落としたのは、ハト蜂の巣。

功才が男達を誘導したのはハト蜂の巣の真下。

功才がそれを発動させるのはハト蜂の巣と男達が重なりあった瞬間。

「シールドボール」

人数が人数なだけに、何時もより巨大なシールドボールではあったが、男達に逃げ場は存在せずに大量のハト蜂を相手に身を縮こまらせるのが精一杯の抵抗であった。

「マジックキャンセル」

毒性こそ低いものの、威力は抜群のハト蜂の針の痛みから逃れようと走り出す男達。
それを追い掛けるハト蜂。

「さっ、ハト蜂がないのを確認したら俺達も帰るか」

「コウサ、あれにシールドボールをかけてお願い」

シールドボールをかけたハト蜂の巣を笑顔で抱えるメリー。

「コウサ凄いや。こんな大きい巣が捕れたらメリーの家ではお祭り騒ぎだよ。幼虫も沢山入ってるし良かったねコウサ」

サバイバルの締め昆虫食を体験させた功才であった。

ザコのサバイバル 先生はメリー（後書き）

ジュエルバタフライ編はまだ続きます。
いつもと少し違うザコはどうでしたか？

ザコの反省と悪戯（前書き）

ジュエルバタフライ編終了です。

討伐系じゃないザコのお話はどうでしたか？

ザロの反省と悪戯

side 功才

「シャイン様これが例のモノつすよ。くれぐれもドンゲル伯爵の事はよろしくお願いするつす。それとそれはデリケートだから開けたら駄目つすよ」

「今回は危ない目にあわせたな。報酬は何がよい？」

「あー皇子様が喜んでからでいいつすよ」

シャインは、功才から受け取ったモノを大事そうに抱えて馬車の中に消えた。

「コウサ、ドンゲル伯爵はどうなるの？」

「どうにもならいさ。せいぜい尾行した男達が処罰されるか、シャイン様の立場が少し有利になるだけだよ」

「へっ？なんで？コウサ襲われたじゃない」

「襲ったのは、あくまで尾行してきた男達。それに一般市民と伯爵を秤にかければ、伯爵に傾くさ。傾かなきゃ俺が困るし」

「何でコウサが困るの？おかしいよ」

「俺は貴族様に逆恨みはされたくないの。だからシャイン様にドンゲル伯爵の事をお願いしたんだよ」

「えー、ドンゲル伯爵は性格が悪いってミントさんが言ってたじゃん」

「ミントがシャイン様と比べたら世の中の全部の男が卑しい性格にされちまうよ。それに性格が悪くて処罰されんなら俺の立場がないだろ？」

「それじゃコウサはただの骨折り損じゃない」

「最初の依頼はジュエルバタフライの確保だけだったんだぜ。あれだけ疲れさせたから、あそこまで見事に罠に食いつくとは思わなかったよ。それに」

「それに？」

本当は蝶を渡して終わる予定だったんだけど、メリーを襲うって聞いた途端に怒りに身を任せてしまった。

「俺があんな風に熱くなるなんて、我ながらビックリだ」

「俺の大事なメリーだよ。メリーは嬉しかったよ」

今回の計画は失敗だな。

下手すりゃ尾行してきた男達に逆恨みされるし、しばらくの間メリーにからかわれると思う。

せめて最後の悪戯が成功する様にと祈る功才であった。

side シャイン

「ミント、私は今回コウサのやり方を真似しようと思う」

「どつされるのですか？」

「コウサのお陰で細工は流々だからな。後は」

「仕上げをご覧ください。無理はなさないで下さい」

「どうかな？コウサのやり方を真似てみると存外面白いものだぞ」

side ドンゲル伯爵

何故だ。

何故、ルイス様はジュエルバタフライの標本を差し上げたのにお喜びにならない。

シャインが差し出した、こ汚い棒つきれをの方を喜ぶんだ？

「ドンゲル伯爵難しい顔をされてどうされました？」

「くつ、シャインお前の棒つきれにどんな細工がしてあるんだ？何故ルイス様が棒つきれで喜ぶ」

「あの木にはジュエルバタフライの蛹がついているんですよ。あれを手に入れた者が言うにはルイス様は病弱で部屋から出れないから標本を好まれないんじゃないかと」

「標本と病弱になんの関係がある！」「外に出られないルイス様は

自由に空を飛べる蝶に憧れていからじゃないかと、標本にされた蝶を見ると部屋からも自由に出来ない自分に重ね合わせてしまうんじゃないかと言っていましたよ。ルイス様が図鑑を好まれているのがその証拠だそうですね」

「くっ、今に見てるよシャイン。ルイス様に気に入られるていからって調子に乗りおって」

side シャイン

「その者はジュエルバタフライも2匹手に入れたのですが男達に襲われて奪われたそうですね。幸い私の手の者が1人を追跡して残り4人の身柄を確保していますが」

コウサが言うには奪わせたらしい。

そしてドンゲルは1匹を自分のコレクションにして、

1匹をルイス様に差し出すだろうと。

「その者が襲われたからどうだと言うのだ？たかが一般市民ではないか」

「ええ一般市民ですよ。私の友人で名前はザイツ・コウサ。この名前に聞き覚えがありますよね。デユクセン皇帝が絶対に手を出すと言われた人物だ！知らぬでは済まされぬぞドンゲル」

ドンゲルが膝から崩れ墮ちていく。

「今ならまだ私の胸に留めておけますよ。コウサからも処断をしな

い様に頼まれていますし」

「私は何をすればよいのだ。教えてくれ、いや教えて下さいシャイン伯爵」

「自分でお考え下さい。せいぜい私を怒らせない様にして下さい。それでは私はルイス様にお話があるので失礼します」

「失礼致します。シャインです。ルイス様宜しいでしょうか？」

「シャイン待つてたよ」

部屋に入ると何時もはベットに臥しているルイス様が椅子に座って嬉しそうにジュエルバタフライの蛹を見ておられた。

「随分とお元気な様で安心しました」

「うんっ、ジュエルバタフライが飛ぶところを見れると思ったら元気が出てきちゃった」

「ジュエルバタフライが飛ぶところを見れるのは今回だけじゃありませんよ。お城の庭にジュエルバタフライの幼虫が食べる草を植えました。来年も楽しみにして下さい」

「うんっ、シャインの結婚もあるしね」

「私の結婚ですか？」

「シャインはジュエルバタフライのお話を知らないの？それに虫籠の中にお手紙が入ってたから」

「お、お見せ頂いてよろしいでしょうか」

手紙に書かれていた内容は

私とミントが身分違いの恋で苦しんでいるから、ルイス様に許可を
して欲しいという内容だった。

コウサの奴だな。

全く要らぬ世話を焼いてくれる。

「あれ、僕の勘違いだったのかな？」

「いえ、間違いではございません。その手紙の通りです」

「そうだよ。ミントのお話をしてくれたシャインはすごい嬉しそうだったもん」

後から調べたらデクセン王国の一部地域では、ジュエルバタフライを未来に旅だつ宝石として、周囲への結婚の意思表示に使われる
そうだ。

ルイス様はまだ幼く、その言葉には誓約は発生しない。
コウサのこんな言葉が聞こえてきそうだ。

「ルイス様の言葉を幼子の戯れにするのも、皇族承認の言葉にする
のもシャイン様の自由っすよ。後はシャイン様とミントさんにお任
せするっす」

ルイス様が元気になったら今回の事を、多分デュークセン皇帝に話されるだろう。
デュークセン皇帝にも承認をしてもらえたら、父上や一族の連中も逆らえない。

（貴族でありながら好きな女性と結婚ができて、お節介焼きの友人もできた。私は幸せ者だな）

ザコの反省と悪戯（後書き）

そろそろパーティーを組みたいんですが、相変わらずキャラは出来ても名前が浮かばない。

私を書いた主人公佐介、豪、功才を気に入ってくれているのは男性だけな気が笑

ザコとメリーと師匠からの贈り物と（前書き）

さあ、使っていない魔法もあるのに、また増やしてしまいました

ザコとメリーと師匠からの贈り物と

ブルーメンの街を異装の紳士が行く。

エメラルドブルーのシルクハットにエメラルドブルーのスーツとズボン。

功才の師匠であるロッキであった。

「さて功才君の想い人は、どこにいますかね」

side メリー

ブルーメンに到着した日の事。

私とコウサは今後の事について話をしたんだ。

「シャイン様から結果報告が来るまで依頼は受けない。とりあえず俺は戦略の研究しようと思う。メリーはどうする?」

「次の依頼でまた旅にでるかもしれないでしょ? 場合によっては活動拠点を他の街に変える必要もでてくると思うの。そうしたらブルーメンの友達とお別れしなくちゃいけないから、悔いが残らない様に演劇の練習に参加するよ」

そしてその人が訪ねてきたのは、演劇の練習中だった。

「メリー、お客様が来てるよ。ちょっと変わった服を着ているオジサンだけど紳士みたいだから、パトロンの申し出かもよ」

「ありがと。でもパトロンはパスだなー。だってコウサがヤキモチを焼いちゃうから」

「はい、はい、ごちそうさま。断るにしても早く会ってきな」

外に出ると真つ青な紳士が話し掛けて来た。

「貴女がメリー・プルングさんですね。私はロッキ・バルボー、功才君の師匠です。今お時間よろしいですか？」

この人がコウサ喚んだんだよね。

私の感情は複雑だった、コウサに会うきっかけをくれた感謝とコウサの平和な日常を壊した事に対する憤りが入り混じっている。

「コウサは部屋にいる筈ですけど、コウサに何かご用でしょうか？」

「私が用事があるのは貴女ですよ。貴女は功才君にとって大切な人になっちゃいましたからね。貴女の気持ちを確かめさせて欲しいんですよ。貴女にとっても私の可愛い弟子が本当に大切かどうかを」

「確かめなくても、コウサは私にとって大切な存在です。コウサの師匠だからって疑うのは酷くないですか？」

「気を悪くしたんなら謝りますよ。でも功才君はこれから色んな試験に打ち勝たなくっちゃいけないんです。その時に貴女がどれだけ功才君を支えられるかを知りたいんですよ」

その試験に合格して、師匠公認になってやるんだから。

「分かりました。それで何をすればいいんですか？」

「なに、簡単ですよ。この小石をどれだけ長く持つていれるか。それだけですよ。あっその小石は魔法が掛けてあるから途中から熱くなるし重くもなりますから」

ロッキさんが、渡してきたのは何の変哲もないただの小石だった。

side ロッキ

コウサ君に大切な存在ができるのは私にとって嬉しい事です。でもその相手も同じぐらいの気持ちをもっていなければ意味がありません。

下手をしたらマイナスになるかもしれないんですから。

だからメリー・プルングを試しているのですが……

「苦しいんなら無理をしなくていいんですよ？」

「ぐっ、だ、大丈夫です。まだ負けません」

ここまで耐えるとは意外ですね。

今の小石は屈強な冒険者でも耐えれないと思うんですが。

……

「合格ですよ。合格祝いに貴女に贈り物をあげましょう。アローブレレットです、説明書をあげるから功才君と試して下さい。あっ小石には魔法なんて掛けてありませんから安心してください。私が貴女に幻術を掛けてただけですから。それでは私の可愛い弟子をよろしく願います」

この娘なら功才君をきちんと支えてくれるでしょう。

side 功才

「コウサ、コウサ。メリー、ロッキさんの試験に合格したんだよ」

「へっ？何の試験を受けさせられたんだ」

「それは内緒。でもこれをもらっちゃった。アローブレスレットって言うんだって。これが説明書だよ」

アローブレスレットには1から7までのボタンが付いていた
まずは1・ロケットアロー。

説明書によるとロケットアローは空中に放てばわかりますよと。

「メリー1のボタンを押してみて」

「わっ本当に矢が出て来た。いくよコウサッ」

矢が途中で弾けた、これってロケット花火じゃん。

「鳥を追い払うぐらいしか役に立たないんじゃないかねーか？」

「コウサ、駄目だよ。追っ払ったら鳥肉が食べれないんだから」

鳥が可哀想じゃなく仕留める邪魔をするなど。

次は2のブロークンアロー。

アローファクトリーで作った弓と合成すると任意の場所で、元の物質に戻す事ができますよ。
エゴは大事ですよ功才君。

3・ミストアロー

対象物に潤いを与えます。
お肌に潤いは大切ですからね。
矢で打たれてまで潤いはいらないだろ。

4・ドライアロー

対象物を乾かします。
洗濯に便利です。
乾かす度に穴が開いてしまうと。

5・ウィンドウアロー

風にのるぐらいに軽い矢です。
無風じゃなきゃ役にたたないと。

6・ホーミングK

貴女の想いをのせて功才君の元へ。
強い想いの前に絶対結界もシールドボールも意味をなしません。
想いは全てを越えていきます。

なんで俺専用？

「これがあれば直ぐにコウサを見つけれるんだね」

俺に逃げ場なしっ。

7・ショックアロー

痛覚神経のみに作用しますから痛みはありますが、怪我は一切しません。

コウサ君が浮気をした時には、お仕置きに使ってください。
ホーミンクKと併用も可能です。

.....

「何だよこれ？意味ないじゃん」

「だよー。浮気なんてしたら、本当の矢で射るのに」

師匠、事態が悪化です。

「あれっ、コウサまだ何か書いてるよ」

書いてました。

説明書の隅っこに。

そう言えば功才君は犬耳少女に会ってみたいとか言ってましたけど会えました？

「これはメリーに会う前の話で、浮気にはならないよねー」

「だねー。でも何かムカつくから、ショックアロー」

「いってー」。血はでないけど、もの凄い痛い」

「犬耳少女に、にやけたりしたらわかるよね。コウサツ」

師匠、俺にとってマイナス要素が~~あり~~過ぎです。

ザコとメリーと師匠からの贈り物と（後書き）

恋姫の時はこのキャラが可愛いとかありましたけど、メリーって人
気あるんじゃないかな？

感想、指摘お待ちしております

ザコの新たな決意（前書き）

いよいよパーティーメンバーの募集です。

1人は曹仁伝を見てくれていた方にはわかるかも知れません。

ザコの新たな決意

side 功才

ギルドで依頼をチエックしていたら意外な人物が声を掛けてきた。

「コウサ君。久しぶりだねっ」

「ミントさん？シャイン様と一緒に首都にいたんじゃないんすか？」

「いたよ。コウサ君にどうしてもお礼を言いたくてブルーメンに来たんだよ」

「って事は、あの悪戯が上手くいったんだな。」

「ルイス皇子様が喜んでくれたんすね？」

「ルイス様もお喜びになられたし……。そのあのシャイン様が僕に側にいて欲しいって言うってくれたんだ。それで君達と冒険ができるからお礼を兼ねて挨拶をして来いってシャイン様に言われて」

「お礼って俺は何もしてないっすよ」

「シャイン様からの伝言だよ。コウサ、君の悪戯のお陰で私は生涯で一番大切な者を手に入れる事ができた。君に何かあったらシャイン・マクスウエルは友人として助力を惜しまないそうだ」

「貴族様が得体の知れない俺に対して友人か……」

「顔だけじゃなく、言う事も格好いいっすね」

俺には逆立ちしても無理。

「それとメリーの友達である僕から命令だ。コウサ君、絶対にメリーを手放しちゃ駄目だよ。メリーは自分の夢を捨てて命を危険に晒してまでコウサ君に付いていくんだよ。メリーはそれに対してなんか言っただかい？メリーはね、貴族の間でも将来を有望視されていたんだよ」

「わかったっす。メリーに自分の夢を追う様に話すっす」

「はあーっ。シャイン様の予想された通りだ。君は魔物の行動は読めても、女心に関してはトルル級の鈍さだね」

「う、うるさいっすよ」

トルルってなんだよ。

俺の恋愛ネガティブアンテナはCIA級の高性能なんだぞ。

「コウサ君は恋愛チキンな上に乙女心に鈍感なんだからメリーを大切にしないと淋しい老後が確定だよ」

「そんなのわからないっすよ」

「いいや断言できるね。君はメリーが美男子の演劇仲間と一緒にいただけで怯えて距離を置く情けない男だよ。わかるかい？君みたいな男に笑顔でついて来られる女性はメリーしかないんだよ」

「いつもと逆つす。俺がミントさんに言い負かされてるなんて」

「答えは簡単。シャイン様をずっと一途に想っていた僕と、少し不利になっただけで恋から逃げるチキンコウサ君とでは恋愛の経験が違っんだよ。反論はあるかい？」

「……ないっす」

「これが僕から君への感謝の証だと思ってくれ。まとも魔法も使えなかった僕に戦い方を教えてくれたコウサ君に対する感謝さ」

「たく、将来の夫婦が揃ってお節介をやきやがって。」

「こんな俺に有り難すぎるっつの。」

「こうなりや本格的に冒険者生活してみせるか。」

「コウサ、大切な話ってなに？」

「パーティーメンバーを増やそうと思うんだ。こないだの森の一件で痛感した、俺はまだまだ弱いザコなんだって」

「コウサは弱くないよ。ジャイアントシープもゾンビスラッグも倒したじゃない」

「あれは倒したんじゃないよ。俺の戦い方は事前に調べて下準備をして倒せる自信ができてからする戦いだ。だから台本にないアドリブに弱い」

「うー、分かったけど。けーどー、どんな人を仲間にするの？」

「前衛を任せれる戦士系がいいな。パーティーメンバー募集や加入希望の張り紙をチェックしに行くか」

side メリー

色んな人達がパーティーメンバー募集や加入希望をだしているんだ。

「ねっ、コウサこの人達なんて強そうじゃない？ドラゴン退治に実績あり。闇のダークヘル戦士団だって」

「却下。実際にドラゴン退治をした事がある騎士団なんて見習いに入るだけでも大変な筈だぜ？何より名前がこけ脅しすぎる」

「あつ、ここはメリーも知ってるよ。フランソワ乙女騎士団が募集をかけてる。フランソワさんって強くて綺麗な人なんだよ。今回は特別に男性1名を急募だって。女性は随時加入者を受付中だから悪くないんじゃない？」

「確かフランソワ乙女騎士団は最近サキュバス討伐の依頼を受けたそうだ。フランソワ乙女騎士団は男性を所属させずに名前を挙げたきた騎士団だぜ。なら答えは1つ」

「コウサ、メリーにも分かる様に言つてよー」

「急募の男性をサキュバスをおびき寄せる餌にしたいんだろ。おおかた彼氏か旦那をサキュバスに奪われた女性からの依頼を受けたのは良いが、肝心のサキュバスが乙女騎士団に興味を持たないんだろうな。依頼不達成の不名誉より騎士団の為に犠牲になってくれる男性が必要になつたんだよ」

「先から文句ばっかりつけて。コウサはどれが良いの」

「そうだな。……これだな」

コウサが選んだのは、

ガーク戦士隊

所属してるのは戦士ガークと格闘家イントル。

「ここは戦士系の2人だけで、そこそこの実績を残しているからな。俺達と組むにはぴったりじゃないか？」

でも張り紙には殴り書きで名前が書いてあるだけで詳しい事は書いていないんだよ。

ザコの新たな決意（後書き）

書けたら今日中に新パーティー編も書きたいです

パーティーメンバーの予想募集をしたりして。

ザコとガーク戦士隊の出会い（前書き）

一気に男臭くなります

ザコとガーグ戦士隊の出会い

side 功才

ガーグ戦士隊と会う手筈が整った。

それでメリーと一緒に待ち合わせ場所へ向かったんだけど……。ばっくれようかな。

「コウサ、あの人達かな？」

「多分そうなんじゃないかなと、あまり信じたくはないよな」

待ち合わせ場所にいたのは、2m近い髭の分厚い坊主頭の男と、その坊主頭より一回り大きい覆面を被っている男。

(や、やべえ。オークよりゴツいってありえねーだろ)

「おい、おめえがザコか。俺がガーグだ。意外にチビなんだな」

目ざとく俺を見つけてくれた髭坊主が、低音ボイスで話かけてきた。

「すいません。ガーグさん、脅かしてどうするんです。ザイツ殿の戦い方を聞いてあんなに感心してたじゃありませんか？あつ、申し遅れました自分はイントルと言う武道家です。この覆面にはやむにやまれぬ事情がありますので了承して貰えたら有り難いです」

イントルさんは大きな身体を縮こまらせて、申し訳なさそうに謝ってきた。

その態度からイントルさんの人の善さが伝わってくる。
うん、覆面は今の所は振れないであげよう。

「こつちからお願いしたんすから構わないっすよ。俺達の事はギルドから聞いたんすか？」

そうだとしたらガーグは守秘義務をモットーとするギルドと強力な繋がりを持っているかもしれない。

「誤解すんなよ。ギルドに俺のダチがいてな、そいつが言うには俺達とお前等が組めば強力なパーティーになるって確信したそうだ。ギルドの守秘義務を補って余りある強力なパーティーがな」

それは逆に厄介な話。

つまりガーグの友人は、ギルド職員としての立場を危険に晒してもガーグ達に荷担したとも考えられる。

つまりガーグに不利益が生じそうなら隠蔽する事も否定できないな。

「それは買い被り過ぎっすよ。俺達はまだ何件も依頼をこなしていない新米コンビなんすから」

「冗談よせや。新米がジャイアントシープやゾンビスラッグを無傷で倒すなんて普通は有り得ないんだよ。それに油断のならねー目をしやがって」

俺とガーグはお互いの目を逸らさずに睨みあう。

「コ、コウサ顔が怖いよ。せつかくパーティーを組むんだから笑顔、笑顔ねっ」

重すぎる空気に耐えれなくなったメリーが顔を強張らせながらも、

その場を取り繕うるおうとする。

「メリー大丈夫だよ。ガーグさんは信用ができる人だ。だから腹の探り合いも演技も止める。ガーグさんイントルさん改めてガーグ戦士隊への加入希望をさせて下さい。俺の名前はコウサ・ザイツ、隣に居るのがアーチャーのメリー・プルングです。俺の戦い方を確認したいんなら依頼と一緒にこなしてもらおうのが一番かと」

「ガーグ戦士隊への加入希望で良いんだな」

「俺の戦い方は聞いてるんでしょ？ザコって油断をしてもらった方が足元をすくいやすんですよ」

「まったく、俺を有名税の暴風壁代わりにするつもりか？可愛げのないガキだぜ」

「そりゃ、可愛げのなさは親のお墨付きですからね」

コウサとガーグが目を合わせてニヤリと笑い合う。

「早速だが新生ガーグ冒険者隊としての仕事がある。サキユバス退治だ。ザイツ良い知恵はあるか？」

「その前に確認をさせて下さい。サキユバス退治はフランソワ乙女騎士団が請け負った筈ですが」

「こないだフランソワの所に入った奴はギルドにいるダチの弟でな。そいつが行方不明になった。」

サキユバスを退治できなかったフランソワ乙女騎士団は依頼失敗扱

「だよ」

データボール参照サユキバス

サキュバスは通称夢魔とも呼ばれています。

男性にエッチな幻術を掛けて自分の結界に取り込んでからジワジワと精を吸収していく悪魔なんですよ。

サキュバスは力は弱いですが、功才君の場合は疑いだけでショックアローが飛んできそうですから気をつけて下さいね。

「ガীগさん、その男が消えた場所と日数を教えて下さい」

「消えたのは一昨日。場所は飲み屋街にある小さな劇場の裏らしい。フランソワ乙女騎士団が見てる目の前で消えたそうだ」

「まだギリギリ間に合うな。ガীগさん俺とメリーでサキュバスを引きずり出しますんで、退治をお願いします。メリー今回は6と7を使う」

「いいけどコウサはどうするの？……うん、わかったよ、思いっ切り射くから安心してね」

微妙に安心できない言葉が聞こえてきた。

side メリー

闇の中、コウサが劇場近くを歩いていると女が声を掛けてきた。

「あら、可愛い坊やね。こんな夜中まで、遊んでいるイケない子はお姉さんがお仕置きしちゃうぞ」

「へえーいい女だね。妖艶って言葉がピッタリくら」

(ガীগさんの言葉は無視。それに今は我慢、我慢。これは作戦なんだから。コウサがにやけているのも演技なんだよね)

やがてケバい女とコウサは闇に消えてしまった。

「ガীগさん、イントルさん、あのケバい女がサキユバスです。だーから遠慮なく倒して下さい」

「お、おう。わかった任しておけ」

「メ、メリー殿。コウサ殿はご無事なのでしょうか？」

「大丈夫ですよ。後1分我慢をすればわかりますから。いやサキユバスに分からせてやるんだから」

闇夜の中で不適に微笑むメリーであった。

ここがサキュバスの結界の中か。

例の男を探すも幻術で隠してあるらしく探せない。

「キヨロキヨロと落ち着かないでどうしたの？もしかして緊張してるのかな」

（この後に起きる事を考えると体がこわばるんだよ。残り時間は30秒って、ところか）

「お姉さんが美人過ぎて緊張してるんっすよ。骨抜きにされちゃいそうで怖いんすよ」

「本当に可愛い坊やね。骨だけじゃなく色んなものを抜いてあげる」

（やべっ。頭がボーっとしてきた、抜かれるのは骨じゃなく魂なんだろうな。20…）

「緊張して来れないのかな？ならお姉さんが行ってあげる」

（サキュバスが来るあれも後10秒で……）

「くすっ、っかまえた。それじゃいただきます」

side メリー

1分たった。

アローブレスレットの6と7のボタンを同時に押す。

「いっけー。ホーミングショックアロー」

私が放った矢は闇夜に消えていく。

「ガーグさんイントルさん、もう少ししたらコウサが光で合図をよこします。そこにサキュバスが現れます」

お願い、私の想いキチンと届いて。

side サキュバス

この男、見た目は悪いけど中々変わった魂を持つてるみたいね。男は私の幻術の効果で既に意識はなくなっている。

「それじゃいただきます」

その時、私の結界の中に風切り音が響いた。

「いつてー。メリーの奴少しは手加減しろよな。それじゃ、すつきり目が覚めた所で」

私の幻術が人間に破れたの？

あの男が私に向かって走り出て来た。

「残念ねー。また幻術で私の虜にしてあげる」

「無駄だよ。今の俺には大切な女の気持ちが入注されているんだよ。くらいなっ、最大光量のフラッシュを」

side ガーグ

プルングから今回の作戦の内容を聞いた。
おもしれえ、あの坊主は噂以上におもしれえな。

自分を餌にしてサキュバスの結界に潜り込み、プルングの矢の痛みで幻術を破る。

闇の眷族であるサキュバスにとって光は苦手以外の何でもない。
それを目の前で喰らわされたら結界は崩れちまう。
つまり光が溢れ出した、そこだつ。

「いくぜ、イントル。ザイツにだけ楽しませてたまるかっ」

「ザイツ殿は楽しんではないと思いますけどね。ガーグさんサキュバスが姿を現しました。一気にきめますよ」

.....

「ガーグさんもイントルさんも見た目通り凄い強さですね。サキュバスを一瞬で倒すんですから」

「いえいえ、私達としてはザイツ殿の見た目にそぐわない強さに驚いていますよ」

確かにザイツは見た目は弱っちいけど、とんでもない強さを持っている。

「よっしゃ、新生ガーグ冒険者隊の初仕事も無事終了。でも一番見た目と違ったのはプルングだよな。サキュバスを見つけた時の目はやばかったぜー」

俺とイントルが、ビビるなんて滅多にないんだからな。

ザコとガーグ戦士隊の出会い（後書き）

指摘感想お待ちしております。

ゼロのお引越（前書き）

途中でてくる予想はスルーして下さい

ザコのお引っ越し

side 功才

サキュバスを倒した後に周囲を探索したら、救出対象であった男を発見する事ができた。

「無事、救出とは言えないか……」

「干からびる寸前って感じだもんね。あの人大丈夫なのかな？」

「大丈夫ですよ。サキュバスとかの夢魔に襲われた男性は治療専門の教会に搬送されます。教会では薬草食を食べて中から魔を抜き、聖水プールに浸り外からも魔を抜くそうです」

メリーの心配にイントルさんが、スラスラと答えてくれた。

イントルさんは、ガーグ冒険者隊の中で、見た目は一番怪しいかも知れないが、実は一番の常識人かも知れない。

「イントルさん物知りですね。でも何で男性だけなんですか？」

確かインキュバスと言う男の夢魔をいるって聞いた事があるが、それは向こうの世界だけなのか？

「サキュバスは女しかいねえんだよ。ガキを産む時は気に入った人間の男を襲って子種を得るんだ。後は襲うのは栄養確保らしいな」

サキュバスって、カマキリの仲間だったりして。

でもこれで前から思っていたある疑念が確信に近付いた。

「それじゃインキュバスは噂でしかないんですね？」

「あー、あれだ。プルングの嬢ちゃんがいる前で大きな声では言えねが、ありや結婚前の娘が貴族に遊ばれた時や、結婚した女が浮気でデキちまった時に言い訳に使われる魔物だよ。だからインキュバスの子供を引き取る貴族も少なくねえのさ」

最初から疑念はあった、俺の言葉が通じるのは師匠の仕業だと分かった。

でも同じ言葉で同じ意味の生き物がいるのは、不自然で、普通に考えれば、こっちの世界でもシープが羊を指すのは不自然なんだよな。ましてやインキュバスは俺のいた世界でも同じ扱いだった筈。

それから予想をたてると向こうの世界と、こっちの世界には何らかの繋がりがあってお互いに影響しあっている可能性が高い。

例えば、俺みたいに喚ばれた人間がいたり、神的な存在が同じであったり、転生した人間がいたり、集合無意識とかいうやつで繋がっていたり。

まあ、あくまで素人の予想でしかないけども、似たような名前の魔物への対抗策は練れるな。

ふと我に返ると、みんなが俺を見ている。

ちと、思考に没頭しすぎたらしい。

話題を変換しとこ。

「つまり俺がサキュバスに狙われたのは、気に入られたからじゃなく餌扱いだつた。つたくサキュバスの対象としても雑魚扱いかよ」

「サキュバスの子種対象は色男で、餌にするのは弱そうな男だそうだから、まっ間違いねえな」

ガーグさんとイントルさんが、生暖かい同情の目で見てくる。

「当たり前だよ。あんなケバい魔物なんかにはコウサの良さが分かる訳ないんだから」

ミント、約束通り俺はメリーを大事にします。

翌日

「ガーグさん達の拠点はどこなんですか？」

「俺達は鉾山の町ドルムーンを根城にしている。ドワーフや色んな人種がいて賑やかな町だぜ」

犬耳がない事を切に願う。

「ドルムーンの家賃っていくら位なのかな？コウサ高かったら一緒に住もつか」

「そうだな。知らない街の不安も2人なら平気かもな」

メリーの顔が、パツと華やいだ。

まあ、俺も少しは積極的になろうかと。

「あつ大丈夫ですよ。ドルムーンには冒険者ギルドが運営しているの長期間滞在型の宿屋がありますから。依頼で遠出している時のセキユリティーも万全ですので安心して下さい」

メリーが顔が一気にドヨンとなった。

「イントル、プルングの嬢ちゃんがへこんじまったじゃねえか。お前もザイツと一緒に女心が分からない奴だな。でもその宿屋はお薦めだぜ。セキュリティーも万全だし、情報も集まる、何より希望すればパーティー同士を隣同士にもしてくれるからな」

ガーグさんは、禿頭をツルリと撫でながら意味ありげな笑顔でメリーに話し掛けた。

「鉱山の街でドワーフがいるって事は鍛冶も盛んなんですか？」

「近くに鉄鉱山・銅鉱山・ミスリル鉱山まであるからかデユクセン皇国で出回っている武具の大半はドルムーン製だよ。値段は張るが、オーダーメイドの武具や防具はお薦めだぜ。使い勝手が段違いだからな」

それならあれやこれやも作れるかな。

「それじゃ、こっちが落ち着つき次第ドルムーンに向かいます。向こうについたら連絡をしますので、連絡先を教えてください」

「連絡もくそも、その辺にいる野郎に俺の事を聞けば直ぐにわかるさ。」

「ガーグさんは人情の機微に通じていますからね、ドワーフ・冒険者・鉱夫でガーグさんを慕っている者も少なくないですよ」

引越しが決まるとメリーはお別れ会や何やらで随分と忙しくなつたみたいけども、俺は親しい人間をメリーぐらいしか作っていなかったから、オーク退治をして金と日数を稼いで過ごしていた。

出発当日

メリーの荷物の多さを、考慮してドルムーンまでは馬車を利用する事に。

「そう言や俺達の出会ひも馬車がキツカケだつたんだよな」

「今ならあのゴブリンさんに感謝したいぐらいだよ。さあドルムーンに向けて出発」

馬車の車輪がゆっくりと回り始め、徐々にその勢いを増していく。一路ドルムーンを目指してコウサ達を乗せた馬車がブルーメンから旅立った。

side ロッキ

「コウサ殿が新しくパーティーに加入されました。それに伴い拠点をドルムーンに移す様です」

ブルーメンは余り冒険者には優しくない街ですからドルムーンの方が、活躍できる機会も増えるでしょう。

それに

「クッククック、アーツハハツ。いいです、いいですよ。流石は私の可愛い弟子です。まさかこんな者達と縁を結ぶとは。功才君、君は本当に私を飽きさせまんね」

ゼロのお引越し(後書き)

書いてすぐ投稿の作者には珍しく書きためが2話あります。
ちなみに幕間的なのは2つ程、いつ投稿しよ

ザコと勇牙と姉妹（前書き）

前にリクエストがあった勇牙編です

ザコと勇牙と姉妹

side 財津栄華

(ざいつえいか)

「カーツトオツ。いいねー、さすがは栄華ちゃん良い演技だったよ」

監督が笑顔でOKをだしてくれた。

当たり前よ。

今のセリフは演技じゃなく本音なんだから。

「流石ですね栄華さん、特にあの“無くして始めて大事な人だって気付かされたなんて。私バカだよ”の台詞。とても演技とは思えませんでしたよ」

マネージャーも、したり顔で誉めてくる。

あんな台詞なんて簡単。

居なくなつて2ヶ月たった弟功才の事を思えばいいんだから。

映画の撮影を終えてた私はあの寂しい家に帰る。

大きいだけで、誰も待つていてくれない家に。

案の定、家には灯りが着いていなかった。

「ただいま、あら美才帰ってるじゃない。あの娘ったら灯りも着けないで」

無駄に広い居間に美才の姿はなかった、いる場所は多分あそこね。

私は美才がいる部屋の戸を開けた。

「やっぱりここにいたのね。美才ご飯も食べないで何してるの」

美才がいたのは功才の部屋。

美才は功才のベッドに座っていた。

「やだ、お兄ちゃんのご飯が食べたいの」

仕方ないかもしれない。

忙しい両親に代わって美才の面倒を見ていたのは功才だったし。

お爺ちゃんお婆ちゃんが家から出て行ってから、ご飯を作っていたのも功才。

美才にしてみれば功才のご飯がお袋の味。

まだ中学生の美才が家に帰って来た時ぐらいは、それを食べたくなるのは無理がない話。

「仕方ないでしょ。功才は、いないんだから」

「お兄ちゃん、帰って来ないのかな？」

「わからないわね。どこで何をしてるのかもサッパリわからないんだもの」

「お兄ちゃんが居なくなっても1ヶ月も気付かなかったんだよね。教えてくれた人も私達の知らない人だったし。お兄ちゃん元気かな？」

あの頃は家族全員が、撮影やレコーディングで泊まりが続いていた。

たまに帰ってきてても、功才とすれ違っているとしたか思わなかったのよね。

ううん、忙しさのあまり誰も功才の事を気に掛けていなかったのね。

「本当にあの子は、どこで何をしてるのかしらね」

side 勇牙

「んだと、隼人もう一回言ってみろ！」

「何回でも言いますよ。これ以上功才を探すのは無意味ですよ。労力の無駄です」

「隼人、ひどいよ。そんな言い方って」

「ひどい？事実じゃないですか。三条財閥が、これだけ探しても見つからない人間をどうやって探すんですか？」

確かに俺や仲間が探しても功才の手掛かりは全く掴めていない。

「でも幼なじみの俺達が探してやんなきゃ、誰が彼奴を探すんだよ。彼奴の親父さんは絶対に探さねえぞ」

「だからですよ。功才を見つけてどうするんですか？家族が1ヶ月も気付かなかつた家に戻って来いでも言っんですか？僕達にできるのは功才の無事を祈るしかないんですよ。それに僕も勇牙も唯さんも小百合さんも高校に入ってから、功才と何回話をしました？みんな功才がバイトをしているのも知らなかったじゃないですか！」

俺が功才と最後に話をしたのは何時だったっけ？

俺は族、隼人は野球、小百合は習い事、唯はバスケットに忙しかった。それでも昼休みとかには4人で集まって飯を食ってたけど。

「俺達、功才が居なくなつて、始めて彼奴の話をしたんだよな……」

side 財津美才

(ざいつみさ)

「みつさつちゃん!!」

「みんなー、ありがとうー!」

私はアイドル。

ファンの前では、どんな時も笑顔でなくちゃいけない。
実のお兄ちゃんが行方不明になつていても。

「美才ちゃん、どうしたの？お弁当をこんなに残して。玉子焼き大好きじゃなかったっけ？」

「マネージャーさん、ちょっと食欲がなくて、すいません」

だって私が大好き玉子焼きは、お兄ちゃんが作ってくれるフワフワの甘い玉子焼きなんだもん。

お兄ちゃんは私が帰ってくる時間に合わせて、私の大好きなご飯を作ってくれていた。

疲れたから、外で食べてきたから、そう言って手を着けなかった事

もあつたな。

「そう？もう少ししたら、次の現場に移動だから待っててね」

マナージャーさんが居なくなつたのを確認してアイドル美才ちゃんから財津美才に戻る。

「お兄ちゃん帰って来てよー。美才もうワガママ言わないから、ご飯も残さないから。玉子焼き作ってよー、美才にごめんなさいって謝らせてよー」

マナージャーが帰ってくるまでの僅かな時間だけ、財津美才に戻つた私は思いつ切り泣いた。

泣いて笑う為に、どこかで見てるかも知れないお兄ちゃんに笑顔を届ける為に。

ザコと勇牙と姉妹（後書き）

妹が強力なキャラになるかも？

ザコの昔バレンタイン&進路編(前書き)

春秋さんからリクエストがあった幼なじみと功才の話です

ザコの昔バレンタイン&進路編

side メリー

やっぱり、コウサはいいなー。

私は隣にコウサが居るだけで、幸せを感じる事ができる。

お別れ会で忙しくてコウサを満喫できなかった分、私は馬車の中でコウサを満喫していた。

「ねえ、コウサ。コウサは向こうにいた時はどんな暮らしをしてたの?」

「どんな暮らしって言われても地味に目立たない様にしてたよ」

「もっと具体的に教えてよー。女の子に告白されたとか、好きな子がいたとかさ」

告白なんてされた事ないし、確実にメリーの地雷じゃん。

「向こうの世界にバレンタインって行事があって、好きな男に対して女がチョコを渡して告白する日があるんだけど」

バレンタイン。

俺が両手に持つ紙袋の中に大量チョコが入っていた。

でも凄い虚しい。

だって

「財津君、これ勇牙君に渡しをお願いっ」

「勇牙用は右だよ。後はチヨコに君のクラスと名前を書いてくれれば俺が届けるから」

バレンタイン。

それはモテない男にとっては厄日でしかない。

さらに俺は長年モテまくる幼なじみへの指定配達人となっており、今じゃ紙袋を持参する程になっていた。

「ほらっ、お前らにお届け物だ。ったくお前らが表に出て来ないから俺が配達人なんてしなきゃいけないんだぞ」

「一回一回受け取って礼を言うのが、面倒臭いんだよ。チヨコなんて大量もらっても困るだけだぜ」

「勇牙、お前は今全国のモテない君の気持ちを踏みにじった。ちきしょー俺なんて1個も貰えないのに」

「功才も唯さんや小百合さんからは貰えるじゃないですか」

「正真正銘の義理チヨコがな。去年なんて唯は無包装の板チヨコだったし、小百合はメイドさんに買ってもらったチヨコだよ。それに俺はこれから速攻帰んなきゃいけないから、今年はそれも無理なんだよ」

「おっ、デートの約束か？」

「ああ、可愛い妹がどこで逆チヨコなんてシステムを覚えたのか、これから帰ってチヨコレートケーキ作りをしなきゃいけないんだよ」

「昨日作れば良かったじゃないですか」

「昨日は姉貴と美才のお配りチョコの手伝いだよ。お手伝いと書いて90%功才のお手製だけだな」

「まだ大丈夫だろ？少しゆっくりしてけよ」

「はっ、これだからモテる奴は。俺がバレンタインの放課後に残ってる姿を見られてみる。チョコを貰えずに僅かな期待にすぎる寂しい男にしか見られないんだぞ。それに美才は細かいデコレーションをした方が喜ぶんだよ」

功才が学校から飛び出して数分後の事。

「あれっ、功才は？今年はちゃんとしたチョコあげようと思ったのに」

「功才は美才ちゃんに頼まれたチョコレートケーキ作りに帰ったよ」

「相変わらず功才さんは美才ちゃんが可愛くて仕方ないんですね。功才さんはお菓子作りがお上手ですから、私達の手作りチョコなんて渡せませんよね」

「小百合だよねー。去年のホワイトデーのクッキーもメチャクチャ美味しかったし」

「お前らのチョコって、まさかお返しクッキーが目当て？」

「……………」

「……………」

「後から功才に今年はクッキーを作るなってメールをしときますね」

幼なじみ2人には本当に感謝しちゃう。

だってコウサの魅力に気付かなかったんだもん。

「でもお話を聞いてると仲が良さそうだよ？何で遊ばなくなったの？」

「俺が勝手に離れたんだよ」

中3の冬

俺の志望校が彼奴等に伝わった日の事
俺は幼なじみ4人に囲まれていた。

「おい、功才。何で美星を受けないんだよ」

「勇牙、答えは簡単だ。成績も銭も足りないからだよ」

「何を言ってるんですか。成績なら僕と小百合が手伝いますし、君のお姉さんも美星に行ってるじゃないですか」

「隼人、美星は私立だろ？親父から公立に行く金なら出してやるって言われたんだよ。親父は姉貴と同じ高校に行って欲しくないらしい」

い
「

「それなら美星の近くの学校でもいいじゃん。何でわざわざ反対側の技塾工業に行くの？」

「そりゃ唯、公立で手に職をつけれる高校はあそこしかないんだよ」「今までずっと5人一緒だったのに。一言ぐらい相談してくれてもいいじゃないですか。私達幼なじみなんですよ」

「小百合、何時までも幼なじみが一緒って訳にいかないだろ？それに俺は高校を卒業したら家を出て働かなきゃいけないんだよ」

言える訳がない

こいつらの取り巻きから、美星に行くなって言われた事を

言える訳がない

お前達と比べられるのに、疲れたなんて

言える訳がない

お前達へのやつかみが、俺に来て大変だとか

言える訳がない

お前達、4人だけでクリスマスを過ごしたのを知っている事を

言える訳がない

こんな俺を心配してくれる大切な幼なじみを傷つけないから。俺は勝手にお前達から離れるなんて。

ザコの昔バレンタイン&進路編(後書き)

リクエストを貰えたら随時書いていきます
作者が書けるならですけど

ザコのクリスマス（前書き）

枕と布団さんからリクエストがあったクリスマス編です

ザコのクリスマス

side 功才

ドルムーンに向かう旅の途中での事。

「ねっコウサ。向こうで太陽祭はどんな風に過ごしてたの？今年の太陽祭はコウサと過ごせるのかー。楽しみだなー」

データボール参照太陽祭

太陽祭は太陽が新しく生まれる日としてデユクセン皇国でも賑やかにお祝いをするんですよ。

冬至に行くから冬至祭とも呼びます。

彼女への太陽祭プレゼントを忘れたらショックアローじゃ済みませんよ、功才君。

ああ、向こうのクリスマスの事が。

「こつちでは、どんな風に過ごすかわからないけど、俺がいた国では家族や恋人と過ごしてプレゼント交換をしたりご馳走を食べたりするよ」

「そっかぁー。それなら同じだね、コウサと2人で過ごす太陽祭かー。あー早く来ないかな」

メリーのお陰で、俺のクリスマス嫌いも治せるかもな。

中学3年の冬の事

「はぁー、クリスマスか。嫌な季節になったよな」

「ザコよ、お前もか。クリスマスなんて虚しい行事を嫌うのは」

今話をしているのは、俺と同じくクリスマスの予定なんて今後も埋まる事がない男坂本虎馬。

「当たり前だったの。毎年1人クリスマスなんだからよ」

「あれ家族は？」

「芸能人は年末が稼ぎ時に顔繋ぎの季節だからな。確か今年は俺を抜かした財津ファミリーは財界人や芸能人が出るクリスマスパーティーの予定だよ。勇牙達も家族と過ごすみたいし」

「えっ?! あっーそうなんだ。まっ、平和に過ごせるから贅沢な話だよな。うんっそうだ」

後からコイツの優しさに感謝したっけな。

クリスマスを楽しみにしていたのは何才までだったろう。

少なくとも爺ちゃん達がいた頃は楽しみだったな。

今は家で1人のクリスマスか。

「唯、どうしましょう?。」

「中学最後のクリスマスはみんなで過ごしたいよね。でも招待枠が4人分しかないのかー。うーんやっぱり功才かな。功才は華やか場所が嫌いだし」

「しかし、それでは功才さんが可哀想では…」

「内緒にしたら分からないって。それに功才ならバレても笑って許してくれそうだし」

side 美才

「お姉ちゃん、あの4人組は何様のつもり?三條財閥が何かわからないけど、お兄ちゃんを除け者にしてクリスマスパーティーに来るなんてさ」

「美才止めなさい。聞いた話だと、招待枠が4人しかなかったみたいだし、大方バレなきや大丈夫の感覚なんですよ?。」

「だーかーら腹がたつの。都合いい時はお兄ちゃんを友達とか幼なじみとか言う癖にさ。あーあ早くお兄ちゃんを丸ごと受け入れてくれる人が現れないかな」

「いつかくるわよ。ほらっ記念写真を撮るみたいよ。笑顔、笑顔ね」

「わかりましたーっ。あいつらの部分を拡大してお兄ちゃんに見せてやるのかな」

side 功才

数日後の事。

「うー、さびつ。郵便物はっと、これは親父、こっちはお袋でつと。これは、こないだのパーティーのやつだな」

基本家にいる俺が家族の郵便物を仕分ける。

それでプライベートの郵便物以外は開けてチェックを行う。

意味がわからない手紙やカミソリ入りの手紙を美才には見せたくないし。

それが仇となつたんだよな。

俺は写真に同封された主席者リストには幼なじみ4人組の名前が載ってるのを見つけたんだ。

このリストが渡るのは主招待者のみ。うちで言えば親父だし、小百合の所は当主の爺さんだろうな。

つまり、俺が気づかないふりをしてれば問題ないと。

坂本の親父さんはホテルに勤務しているから、そこから話を聞いたんだろうな。

「なっにそれー。なんでコウサは平気な顔をして話せるの!」

「いや、メリーが怒ってどうするんだよ。逆に俺が参加して誰か除け者になる方がやだつての。俺が気付かなきゃ丸く収まった話なんだし」

「決めたーっ。お爺ちゃんとお婆ちゃんになっても、太陽祭はメリーと過ごさず事。コウサ約束だよ」

「ありがとうな。クリスマスは嫌いだけど太陽祭は好きになれそうだよ」

ザコのクリスマス（後書き）

ゲームの花火大会とかで良く2人で抜け出そうみたいのあるじゃないですか。

あれをみんながやって1人残った人がいたら、どうなるんだろうと。そのクリスマス編です

ザロ、ドルムーンに着く(前書き)

過去編への反応が、凄くて驚いています

ザコ、ドルムーンに着く

side 功才

ようやくドルムーンに着いた。

ドルムーンは周りを岩山に囲まれており、ブルーメンとは真逆の簡素な造りの建物が立ち並んでいた。

雰囲気は質実剛健って感じで、あまり女の子受けはしないだろう。

「コウサ、見てみて。あの岩山に山羊とか鹿の仲間がいそうだよ。

ここなら強力な弓矢も手に入りそうだから楽しみだなー」

さすがは狩猟娘、そっちに反応するんだね。

「岩山は危ないからほどほどにね」

「大丈夫だよ。あれぐらいの高さなら良く登ったもん。コウサと一緒に見晴らしの良い景色を見ながらの狩り。ドルムーンに来て良かったー」

たった今、俺の高地トレーニングが決定しました。

「と、とりあえずガークさん達を探るか。冒険者ギルドに行くのが、手っ取り早いだろう」

しかし本当に色んな種族がいるんだな。

ドワーフ・猫人族男性・ホビット。

猫人族は帽子をかぶったら、俺達と区別がつかない感じた。

「ねっねっね。コウサ弓矢専門店だって。あそこでギルドの場所を

確認しよっ」

メリーは、まるでおもちゃ屋を見つけた子供みたいにはしゃいでいた。

「そうだな。値段を見れば幾ら稼げば良いか決めれるし、行くか」

流石に弓矢専門店で、彼女があんなに欲しがっているんだから、彼氏が買ってあげなっつて展開はないだろうし。

まあ、メリーと俺が彼氏彼女に見られたらの話なんだけど。

「ふわー。ロングボウもコンジツトボウもある。弓の弦もこんなに種類あるんだ。ヤジリも沢山あるよー」

メリーのテンションが急上昇しまくりっ。

「女連れで、こんな店に来るとは冷やかしか、腕自慢の小僧かと思つたら、彼女が来たかつたみたいだな」

店主だと思われるドワーフが俺に話しかけてきた。

「あー、あの娘は猟師の娘で彼女もアーチャーをしてるんすよ。」

「なる程、だから弓矢に詳しいんだな。納得したよ」

「あの様子じゃちよくちよく来ると思うつすから、宜しくお願いするつすよ。それと冒険者ギルドはどこにあるんすか？

ガーグさんに会いたいんすっけど」

「ガーグ？お前は彼奴に依頼に来たのか？ここを出て左に行けば、でかい宿屋があるから、そこにいる筈だ」

「うわー、どうしよう。ミスリル銀のヤジリだってー、これならアーマーバツファローも倒せるかな？あー、この弦も捨てがたいっ。でもでも東洋の竹弓もあるしなー」

「とりあえず彼女が満足したら行ってみるっす」

.....

「コウサ、依頼いっぱいこなそうね。欲しい物が沢山できちゃった」

「そうだな。メリーの弓矢は、俺の戦術に不可欠だし。優先して買うか」

「だめっ。まずはコウサの防具が先だよ。コウサはすぐに自分をエサにしようとするだもん」

メリーは真剣な表情で詰め寄ってくる。

本気で誰かに心配をしてもらってるって、こんなにも嬉しいんだ。

「わかったよ。優先するのは俺とメリーの防具にする。それじゃガーグさんの所に行くか」

宿屋は直ぐに見つかった。

て言うよりドルムーンに入った時から見えていたデカイ建物が宿屋だった。

「すんませーん、ここにガーグさんがいるって聞いて来たんですけど」
「うん？依頼客か？ちょっと待ってな」

ちなみに宿屋の主人は猫人族らしいが、語尾にニャーはつけなかった。

まあ猫人族が猫から進化してニャーを言うなら、猿から進化した人間もウツキーをつけなくちゃ不自然になるし。
当たり前っっちゃ当たり前だ。

そんなくだらない事を考えていたら

「おっ、ザイツ来たか。ちょうど面倒くさい依頼を頼まれた所だから助かる」

「ガーグさんが、面倒な依頼なんて、余り聞きたくないよーな」

「詳しくは私から説明させてもらいますよ。討伐対象はミスリルゴーレムです。近くのミスリル鉱山でミスリルゴーレムが暴れており採掘ができない状態なんですよ」

データボールを参照しなくても、ザコが関わっっちゃいけない魔物だとわかる。

「普通、ゴーレムって術者によって制御されているんじゃないですか？」

「いや、このゴーレムは元々採掘・運搬用に使われていたんだけどよ。術者が女に振られた腹いせに鉱山でストライキを起こしちまっただよ」

魔物は強烈だけど、理由はシヨボいな。

「説得はしてみたんですか？」

「全く聞く耳持たずだ。まあ結婚式目前に、女を横取りされちゃ怒るわな」

術者は真面目な性格だけど、あまりモテる方じゃなかったそうだ。そんな術者を好いたのは幼なじみの女の子。

でもたまたま遊びに来た貴族に彼女が気に入られてしまう。

殆ど略奪に近い形だったらしい。

貴族は彼女の家族や術者の家族を脅したらしい。

泣く泣く彼女は貴族の元へ。

でも術者は、彼女を諦められない。

それでやけになったと。

「ちなみにその貴族の名前は？」

「ゲード・ドンゲル。ドンゲル伯爵の長男だ」

いーね。

見せてやるうじやないか。

モテない男の幸せを邪魔する貴族様には、同じくモテない男が制裁を加えてやる。

ザコ、ドルムーンに着く(後書き)

ミスリルゴーレムなんて出してしまった。
強すぎたかな。

ゼロの罫(前書き)

功才が暗躍します

ザコの囃

side 功才

データボール参照ミスリルゴーレム

ミスリルゴーレムはとにかく硬くて、ミスリル製品でも傷をつけるのは難しいでしょう。

コウサ君ならミスリルゴーレムのデコピン一発で帰らぬ人になっちゃいますよ。

そりゃね、鉄の壁に鉄の剣で斬りつけても、刃こぼれするだけだしな。

つづか、ミスリルデコピンなんて誰でも一発で昇天だったの。

「鉱山では何でわざわざミスリルゴーレムを使ってたんすか？」

「あそこの鉱石は純度が高いですから、アイアンゴーレムやロックゴーレムだと直ぐに駄目になるんですよ。歩く度に鉄や岩が削られてしまいますから。それ以上に今回のミスリルゴーレムには特別なんですよ」

何でも今回のミスリルゴーレムは半生物で、ミスリルを主食として動くらしい。

主食と言ってもミスリル銀が起こす魔法反応を糧としており、その時に取り込んだ他の鉱物は排泄してしまう。

それでもって半生物であるミスリルゴーレムは成長もするらしい。

早い話がミスリルゴーレムは純度の高い生きた成長するミスリル鉱石、ちなみに生きたミスリルゴーレムは術者の一族の秘伝との事。

「それでミスリルゴーレムで、どうやって採掘をさせていたんすか？下手すりゃゴーレムが削れちゃうっすよ」

「爆裂系の魔法をかけて、他の鉱物が砕けた所にゴーレムがミスリル鑿くとミスリルハンマーで砕いていたらしい」

ミスリルノミって。

高度な魔法の割に、地味な採掘だな。

「次に術者の情報を教えて欲しいっす」

術者の名前は、トム・チキーン！。

青白い顔をして細身。

性格は他人行儀で、臆病。

当然、ケンカや格闘技の経験はなし。

うん、トムとは絶対に友達になれる。

「トムは食料や水はどうしてるんすか？」

「トムは何かあっても良いように、普段から水や食糧を備蓄してるんだとよ」

トムと親友になれるかも。

「それなら今は待機っすね」

side シャイン

「シャイン様、コウサ君じゃなく…コウサから手紙が届きました」
ざいます」

ミントは私の側仕えになってから、さらに大袈裟な言葉遣いをする様になっていた。

「ミント2人きりの時は、言葉は普段通りで構わないだよ」

その言葉を聞いて安心したのか、私にしか見せない少女の自分をみせてくれる。

「だってはしたない奥様って思われたくないんだもん」

「今のミントなら大丈夫だよ。あの旅で色んな事を学んだろ？」

「うん。コウサ君みたいな人は中々いないから。良くも悪くもね」

「それで手紙はっと、珍しくぶ厚いな」

あれ以来、功才は私に何回も手紙を出してくれていた。

手紙の内容は旅で得た情報を私の政治に役立つ様にまとめてあり、滅多に城を動けない私にとって今や貴重な情報源となっている。

「ふむ……………ミント見てみる」

「これは…許せません」

今回、コウサがシャインに寄越した手紙は3通。

ゲードの犯した罪が、いかにデユクセン皇国に不利益をもたらすか

をしたためた斬奸状。
ミントの行動指針。
術者に対する処遇。

まずはデクセン皇帝のに報告をしなければならぬ。

「シャイン、それは真か？」

「信じがたいが事実の様です。部下に裏をとらせました。ちなみに情報をもたらしたのはコウサ・ザイツです」

「ゲース・ドンゲルを呼べ。今すぐにだ」

side ゲース・ドンゲル

皇帝からお呼びですが、かかったと喜んだら、またシャインの奴がいた。

「ゲースよ。そなたの息子のゲードは元気か？」

そうか、皇帝は我が息子を覚えておられたか。

「はいっ。元気であります。ちと過ぎる程ですが」

「それは安心。ゲードは旅で、女を得たらしいな」

「ええ、確かドルムーンの者と聞いております。私に似て好き者で困ります」

「その女に婚約者がいたらしいですね」

「婚約であつて、既婚ではありません。シャイン殿それに何か問題
がおありと？」

平民の婚約なんて、貴族が齒牙にかけるものではない。

「その婚約者の男性がミスリル鉱山に立て込もつてしまひましてね
「それがどうした？そんな人騒がせな民は誅せばよかるう？」

「わかつた、もう良い。シャイン、斬妖状を読み上げろ」

斬妖状？

息子にどんな罪があると？

「ゲード・ドンゲルの罪その1・越権行為、ドルムーンはドンゲル
伯爵の領地ではなく、故に貴族特権は効力をなさない。これは明らか
かな越権行為である。

罪その2・ドルムーン領主への侮辱行為。ドルムーンの領主である
グラン子爵は民に対する仁愛を常としている。その民の婚約を貴族
特権で破棄させたのはグラン子爵への侮辱以外の何物でもない。

罪その3・デユクセン皇国の経済を損なわせた罪。ドルムーンのミ
スリル銀はデユクセン皇国の重要な輸出物である。この度の一件で、
それが途絶えたのは皇国の経済に重大な影響を与える。

罪その4・デユクセン皇国の戦力を減少させた罪。ドルムーンのミ
スリル装備は皇国騎士団の重要な装備である。此度の一件で、それ
を入手できなくなり皇国騎士団の戦力減は必須である。

罪その5・デユクセン皇帝への反逆罪。

デユクセン皇国は法治国家であり、民の模範たる貴族が自ら法を破
つたのならば、それは即ちデユクセン皇帝への反逆に等しい。

罪その6・デユクセン皇国から貴重な魔術を失わせた罪。ドルム
ーンの子キーンー家は、生きたミスリルゴーレムを秘伝の魔術とし、

永年皇国に仕えた忠臣である。そのミスリルゴーレムの秘伝を失うのは皇国の損失を通り越して、他国からの嘲笑を招くものである」

まずい、このままでは息子ゲードだけでなく我が誇り高いドンゲル家を取り潰しにあってしまふ。

「この罪をもって、ゲード・ドンゲルを貴族から民に降格。その罪を法廷で明らかにする為に、デユクセン皇国騎士団女性騎士団を派遣し、身柄を捕獲させる」

ゲードは見捨てるか。

しかし何故、女性騎士団なんだ？

side ミント

今の僕の格好はフルアーマに純白のマントを身につけている。そして僕が率いるのは、憧れていた皇国騎士団の女性騎士団。

(コ、コウサ君。背中に集まる視線が痛すぎるよ、本当に大丈夫なんでしょうね)

僕は憧れていただけ入団するのは無理だった。

その僕に率いられると、あっては、女性騎士団の方々も面白くないに違いない。

その女性騎士団の皆様はゲードの邸宅への襲撃も、あっさりと終わらせる。

コウサ君の手紙では、ゲードの家を探索した時にこそ、僕の活躍の場があるらしいんだけども。

生き残りの関係者を問い詰めると、地下に隠し部屋があるらしい。地下に降りていくと、そこには

「これは酷い……。これが人のする事が？」

地下には鎖に繋がれた半裸の女性が大勢いた。そして露出し肌はムチで打たれた様で、赤くシミズ張れになっている。

流石に騎士団の皆様を唾然としているようだ。

僕は素早く自分のマントを切り裂き半裸の女性にかける。

「何をしている。早くこの方達を保護したまえ」

マントは騎士の誇り。

それを民の為に、躊躇なく切り裂く行為を行えば女性騎士団の僕に対する態度も変わるらしいのだけど……

コウサ君、僕は時々キミが怖いよ。

女性騎士団の皆様がコロツと変わったし、キミのもう一つ狙いも成功だ。

騎士団の皆様は、高貴な家柄の女性が多い。

父が男爵であったり、男性騎士団の団長を婚約者にもつ人もいる。

その女性達が、ゲードに嫌悪を露わにした。

つまり自分の家に戻れば今回の事を、自分の身近で一番権力をもつ人間に報告するに違いない。

そうしたらドンゲル一族に味方する者は殆どいなくなるだろう。

僕もシャイン様に事実を伝えるし。

「ねっ、コウサ。本当にゲードのした事は罪になるの？」

「わかんね。俺はこっちの法律は詳しくねーもん。あれはゲードのした事がどれだけデユクセン皇国に不利益をもたらしたかっていう難癖みたいなもんだし」

「な、難癖ね。それなら何でミントに女性騎士団を率いさせたの？」

「ミントじゃなきゃ俺のやり口を納得しないからな？それに多分ゲードは強引に連れてきた女性を軟禁しているだろう。それを男の騎士団が保護しちゃババいだろ？」

「確かに、そんな状態なら男性を怖がるもんね」

「ああ、後はミスリルゴーレムを倒せばいいだけだ」

ゼロの罫（後書き）

次はいよいよミスリルゴーレム編です。

ザコとミスリルゴーレム(前書き)

久しぶりに戦闘します

ザコとミスリルゴーレム

side 功才

シャイン様から作戦成功の連絡が届いた。

それなら将来のお友達トム・チキーン君に会いに行きますか。それでは細工の開始。

「ガーグさんとイントルさんって、どっちが力が強いんですか？」

「そりゃイントルだよ。まあ俺もそれなりには力があるぜ」

ならイントルさんにあれをやってもらうか。

「わかりました。それと道具を作る鍛冶屋を紹介して欲しいんですけど」

「構わねえけど、何を作らせるんだ？」

「ゴーレムを倒すのに使う道具ですよ。出来次第、鉱山に行くのでその前にみんなに作戦を伝えておきますね」

今回用意する物

とりもち

鉤付きロープ

水入りシールドボール

力自慢のパーティーメンバー2人

嫌になるぐらいに、狙いが正確なアーチャー

小技師

よっし、これで準備完了。

ミスリル鉱石の採掘場は洞窟状に掘り進められていた。

何故かそれを見たイントルさんから大きな溜め息がもれる。

「あれ、イントルさん。どうしたんですか？大きな溜め息なんてついて」

「不思議なんですけど、昔から鉱山にある洞窟を見ると憂鬱な気分になるんですよ。嫌な事があったとか狭い所が嫌いとかじゃないんですけどね」まあ、イントルさんは俺やガーグさんと違ってナイーブそうだからな。

洞窟の中は、薄暗く物静かで、俺達が歩く足音が反響している。

「それでトム君はどこに住んでるんですか？」

「あー、この道が開けた所にいるそうだ」

開けた場所に着くと、ゴーレムが待機していた。

あー、そうきたか。

ゴーレムは、意外に細身ってか虚弱な感じ。

多分、術者のトム君が動かし易くする為に自分の体に近づけてあるんだろう。

「誰？僕はここを動かないかないよ。絶対に動かないんだから」

トム君の気持ちは痛い程わかる。

下手に騒げば家族に被害が、公的な機関に訴えでもしたら捕まっている彼女に被害が及ぶ。

だから、周りに嫌われてでも誰かに気づいてもらえる可能性が高いであろう、この手段を選んだんだろう。

「興奮して聞く耳持たないって感じだな。ザイツ指示を頼む」

そりゃこの暗い洞窟にネガティブな状態で過ごしていたら、疑心暗鬼にもなるわな。

ましてや、トム君は大事な彼女を守れなかった自分を責め続けていただろうし。

トム君と俺達の間、ノミとハンマーをもった細身なミスリルゴーレムが立ちはだかった。

先ずは

「フラッシュ」

狙うのはゴーレムじゃなく、しばらく光から遠ざかっていたトム君。

トム君の目が眩ん所為でゴーレムの動きも止まる。

「ガーグさん、イントルさんお願いします」

「おう、任しときな」

「ザイツ殿、次の指示をお願いしますよ」

そして次は

ゴーレムに

「ライトウエポン」

続け様に

「アースタン」

地面にミスリル製の出っ張りが出来上がる。

その出っ張りに

「シャープネス」

出っ張りの鋭さがます。

それじゃ

「ガーグさん、イントルさんゴーレムに钩つきロープを引っ掛けて倒れそうになったら教えて下さいね。メリーは2番のボタンを押してコイツと合成。狙うの場所はわかってるな」

「大丈夫だよ」

「ザイツ、ゴーレムが倒れるぞ」

ゴーレムのバランスが崩れた瞬間に

「マジックキャンセル&グラビティソード」
体を重くされたゴーレムが、鋭さをました出っ張りに倒れ込む。
ゴーレムが手放したハンマーとノミの激突音と、ゴーレムの倒れる音が、洞窟に鳴り響いた。

「ふいー、とりあえず一段落かな？……ありゃトム君意外に根性があるのね」

頭を抱えながら、ふらつきながらもトム君が立ち上がってくる。

「レミの苦しさはこんなもんじゃないんだ。レミの悲しみはもっと深いんだ。レミはもっと悔しい思いをしているんだー!!」

トム君の気合いが移った様で、ゴーレムは体に食い込んだ出っ張りを、つけたまま強引に立ち上がる。
人間なら生々し過ぎて見れないよな。
だって、お腹に杭が刺さってる感じになってるんだぜ。

このままじゃ、トム君にも悪影響がでるかもしれない。
だから一気に決める、俺以外のメンバーで。

「メリー、頼む」

「コウサ任せて。戻ってブーロクンアロー」

ベチャリと音がしたかと思うと、トム君から悲鳴が聞こえる。

「これなに？動けない」

必殺トリモチアロー

アローファクトリーでトリモチを矢にする。

それをメリーがトム君の頭上を狙ってくつつける。

あとはブロークンアローで戻すだけ。

そしてまた、ゴーレムの動きが止まった。

ゴーレムが手放したミスリルハンマーに向かって

「ライトウエポン、イントルさんお願いします」

「よつと。ザイツ殿の任せられました」

イントルさんに狙ってもらうのは、ゴーレムが体につけているアースタンの出っ張り。

イントルさんが叩く度に、ゴーレムの体の穴が広がっていく。

「ザイツ殿、最後行きますよ」

ゴーレムに

「グラビティソード」

体を重くされたゴーレムは衝撃を逃がすの難しくなり砕け散る。

そして最後に俺の仕事。

水入りのシールドボールをトム君の頭に持ってきて

「マジックキャンセル」

地道にトリモチを取っていく。

予想通り、トム君は茫然自失となっていた。

「ほい、これプレゼント。シャイン・マクスウェル様の領内にある最近発見されたミスリル鉱山への紹介状だ。トム君はゲードがミスリルを略奪しに来たのを防いでいた。OK?」

「何で殺してくれなかったんですか？僕は生きたくないのに……」

「こないだブロッサム家の令嬢ミント様がゲードの家に襲撃をかけられた。その時多くの女性を救出したんだけど、その中にどんなに怪我をさせられても体を許さなかった女の人がいたらしいよ。名前は確かーネミじゃなくレイでもなく、そうそうレミだ。レミ・バルドーだ」

「レミは、レミは無事なんですか？」

「命に別状はない、ただ先のミスリル鉱山の近くで入院してるんだけど、生活が苦しいらしくてな。誰かに助けて欲しいんだよな」

「ありがとうございます。ありがとうございます。今直ぐに旅立ちます」

「トム君ー。今出たら捕まっちゃうよ、周りはトム君に同情してるけどさ、それと法律は別物だよ」

「そんなせつかくレミに会えると思ったのに」

「トム君彼女が本当に大切なんだね。わかるよ、すごい分かるよ、その気持ち。モテない男に彼女ができる奇跡がどれだけ嬉しいものか、もの凄いわかる」

「で、ですよ。ありがとうございます」

うん？トム君が納得したって事は、見た目だけでもモテナイ君と認定されたのか？

「話は変わるけど、違う鉱山でミスリルゴーレムを動かすには何が必要なの？」

「あつ、そつだ。良かったー。このコアと形を形成できる分のミスリルがあれば直ぐ動かせます」

トム君が大事そうに抱えているのは、手の平大の水晶玉。
それで増えるなんて、カスピ海ヨーグルトみたいなゴーレムだな。

「ほんじゃ採掘に必要な最低限のミスリルを、この袋に詰めて。……
それで残ったミスリルはどうしたら良い？」

「皆様には、お世話になりましたから、差し上げます」

「本当？催促したみたいで悪いねー、それじゃトム君も袋の中に入
ってちょうだい」

(ザイツ、白々しいな。あれは催促つてよりタカリだぜ?)

(ガーグさん、人聞きが悪い。でもこれでミスリルの所有権は、ト
ム君から俺達に移りました。ガーグさん残りのミスリルを袋に詰め
て下さい。あつイントルさん袋にライトウェポンを掛けときますの
で鍛冶屋をお願いします)

ガーグさんに袋を持ってもらって街の入り口に待機しているマクス

ウエル家の馬車に積み込んでもらう。

馬車にはトム君とレミさんの家族も乗っていた。

俺はトム君が入っている袋の隣にもう1個の袋を置く。

(トム君、これは街のみんなからのお祝いだつてさ。彼女さんと幸せになつてくれよ、俺も君もモテない同士なんだから応援してるよ)

side ガーゲ

しかしザイツには呆れたと言うか何とと言うか。

依頼料の他に質の良いミスリル鉱石、腕の良い採掘術士を手に入れやがって。

しかしあれだけ頭が回る癖に、何でああなるのがわからないのかね。

「ねっねっねっ、コウサ。モテない男に彼女が出来る奇跡って何？

メリー詳しく知りたいなー」

「いや、絶対分かってるだろ。あんなこっ恥ずかしいセリフはもう言いません」

「メリー、コウサと違って馬鹿だから分からないの。コウサー」

「イントル、休むぞ。ザイツはあの様子じゃプルングの嬢ちゃんに1日中いじられるだろうよ」

「しかし不思議な少年ですね。弱いのか強いのか、判断しにくい」

確かに、実力は初級冒険者の癖に、結果はベテラン冒険者並みの結果を残しやがる。

ザコとミスリルゴーレム(後書き)

何と90万PVを超えました。
感謝いたします。

ザロとイントルさん その1 新たな依頼（前書き）

今回の話の中心は、ガーグ冒険者団の良心イントルさんになります。

ザコとイントルさん その1 新たな依頼

ミスリル鉱石で作った物

イントルさん

ミスリルステイック

早い話がミスリル製の六角棒。
それとミスリルの胸当て。

ガーグさん

お約束のミスリルソードとミスリルメット。
ガーグさんは頭の防御が心配だから。

メリー

ミスリルヤジリ数個。

ミスリルローブのメリーバージョン2着。

ミスリルを織り込んだ布で服とズボンを作成。
普通のローブだと動きにくいとの事。

俺

メリーと同じくミスリルローブの服とズボンバージョン×2。

ミスリルローブは光沢があり目立つので、茶色く染めた、見た目は
完璧に町人A。

そしてドワーフのおじさんに無理を言いました。
ミスリル特殊警棒。

普段は短くできて、持ち運びにも便利。
一振りで、シャキーンと長くなります。

何よりも隠せば、目立たない。
見た目は完璧に無腰の町人Aに。

出来れば服は、もう何枚か欲しいんだよな。
だって戦闘以外にも危険はあるんだし。

「ねえ、コウサ。ガーグさん達のフルネームって知ってる？」

「知らないよ？ パーソナルカードも見た事ないし。あの人達の性格からして言えるなら言ってるさ。俺だって、この世界の人間じゃない事を話してないんだし」

「そう言えばそうだったね。コウサが側にいるのが当たり前過ぎて忘れてたよ」

「それにガーグさんは無茶苦茶な所があるけど、イントルさんなら信用できるだろ？」

「そうだね。イントルさんは、他の人達からの信頼も高いみたいだし」

高いというか、ガーグのお守りはイントル以外は無理なんて言われてるんだよな。

「後は依頼をこなして、俺達を信用してもらっしかないだろ？」

そんなある日、俺とメリーは、ガーグさんに呼び出された。

「討伐依頼が来たぜ。対象者は魔術士イ・コジ。こいつが誘拐をしているんだよ」

「誘拐？身の代金目当てですか？」

「いえ、魔術実験の為らしいですよ。被害者は老若男女問わず、被害も行方不明から重篤な症状となった者、健康になった者まで様々です」

マッドサイエンティストならぬマッドマジシャンかい。

「でその危ない魔術士はどこにいるんですか？」

森にある一軒家とか古びた洋館とか？

あっ、こっちじゃ全部が洋館になるんだよな。

「ドルムーンとブルーメンの間にある古い城に住み着いているんだよ。追い出そうにも、境界をはって入れないんだと」

さらにベタなのが来た。

「食糧とかはどうしてるんですか？」

「ゴブリンを操って、近くの森から採集させたり、周囲の村から略奪をさせているそうですよ。話に聞くとかなりの人間嫌いらしいです。そのゴブリンを捕まえたら、魔法が付与された石を持っていたそうです」

「それを持っていると境界を通り抜けれるんだとよ。今回はフランソワ乙女騎士団との一緒に組んでの仕事になる」

「そりゃまた何で？」

「こないだのサユキバス的一件で、俺達に目を付けたらしいな。あそこは美人揃いだから嬉しいだろ？」

ガーグさん、勘弁して下さい。

隣に座っているメリーから、不機嫌オーラが噴出しています。

「目を付けたのは、フランソワ乙女騎士団の面目を潰したからですよ。それに俺にはメリーがいますんで」

我、無事に不機嫌オーラの鎮火に成功。

確かに美人と仲良くなりたくないと言えば嘘になるけど、メリーと不仲になる、メリーが不機嫌になる、メリーが悲しむとデメリットが多すぎる。

とりあえずフランソワ乙女騎士団の詳細を聞いてみる。

フランソワ乙女騎士団は、フランソワ・ホーリックが作った女性冒険者団体。

乙女騎士団の由来は、フランソワ・ホーリックが騎士の家柄で、女性のみ50数名で構成されているからとの事。

それで今回、フランソワ騎士団の代表が、ハンナ・ハンネスと言う女性らしい。

「ふえー。ハンナが来るんだビックリしたー」

「メリーは、ハンナさんと知り合いなの？」

「うん、同じ村の幼なじみ。私は女優を目指してハンナは冒険者を目指して村を出たんだ。その関係でフランソワさんとも顔見知りになったんだよ」

「へー、ハンナさんも弓矢を使うのか？」

「ううん、ハンナは斧を使うんだよ。ハンナの家は木こりをしてるから斧の扱いはお手の物なんだよ」

「なんだか恐そうなお友達だね…」

「ハンナは美人だよ。コウサも一回会ってるし」

「へっ？記憶にないぞ？」

「ほらメリーとコウサが初めて会った時に、赤い髪でポニーテールの娘いたでしょ？」

あー、あの気が強そうな人。

「でもあの後、メリーと一緒にいる所は見なかったぞ」

「私は劇の練習があったし、あいた時間はコウサといたでしょ。それにハンナはあの後すぐに長期の依頼にでちゃったからね」

「ハンナさんに俺の事は話してあるの？」

「うん、素敵な人と出会えたって手紙で教えたよ」

あー、ハンナさんガツガツするだろうな。

ザコとイントルさん その1 新たな依頼（後書き）

ザコにミスリル製品と思うでしょうが、鉄の槍ではダメージをあたえられない魔物対策です。

イントルさんの正体とは？

わかる人にはわかります

ザコとイントルさん その2 ハンナさん登場

side ハンナ

自分達は、ガーグ冒険者隊との待ち合わせ場所に到着した。

ここで久しぶりにメリーに会えるんだよな。

そしてメリー自慢の男にも会える。

あのメリーが惚れた男だから、きつと強くてハンサムで素敵なお男な
んだろう。

.....

コウサつて、どの人なんだ？

「ハンナ、久しぶり元気だった？」

「自分から、元気をとつたら何も残らないよ。それでメリー手紙で
言っていたコウサさんは今日来てないのか？」

「いるよ、そこに」

「えー、この弱そうなブサイクが？メリー大丈夫か？いくら何でも
あれはないだろ？」

「ハンナ、その答えは、この依頼が終わればわかるよ」

side 功才

メリー、手紙に何て書いたんだろ。

でも、どんだけハードルを上げたとしても、本人の前で… あれはな
いだろ… って。

一応、騎士団の代表なんだしさ。

「こりゃ随分と社会勉強不足なお姉ちゃんだな。依頼協力を申し出
てきたのは、そちらさんだぜ？」

「ガーグさん、あちらも悪気あつて言った訳じゃないみたいですし。
とりあえず作戦を決めませんか？」

流石は苦労人のイントルさん、素早いフォローだ。

「わかりました。自分達の考えですが、城にいる大集団のゴブリン
も討伐する必要があるので、ゴブリンが帰って来て落ち着いている
日暮れに攻め込むのが得策かと」

「だよ、ザイツはどう考える？」

「俺が攻めるなら午前10時頃っすね。ここ何日か観察して分かっ
たんすけど、ゴブリンが城をでるのが8時頃、帰ってくるのは遅い
者で夕方4時頃っす。ゴブリンの大多数が出払って、イ・コージが
研究に没頭して警戒が緩まる時間の10時ぐらいいいっすね。そ
れに夜に攻めて火を消されたら最悪っすよ」

「なっ、それではゴブリンは無視しろと」

「イ・コージを倒せば、ただの少集団のゴブリンになるっすよ。無
駄な戦いをする必要はないっす」

「だよ。次はどこから攻める？」

「自分は警備が手薄と予想できる裏手から攻めるべきだと」

「ないっすね。裏手の警備が手薄って確認をしたっすか？攻めるなら正面のゴブリン専用入り口から行くべきっすね。裏口からイ・コージの部屋まで行く時間が掛かり過ぎる可能性が高いっすからね」

「浅いな。イ・コージは臆病な性格の者なんだろ。それなら避難通路があるはずだ」

「臆病者が背後に通じるドアに鍵を掛けない筈ないじゃないっすか？ましてや避難通路は狭い可能性が高いんすよ？攻め手が不利になるだけっすよ」

「ぐっ、一々何なんだお前は。だったらお前の作戦を聞かせてみる」
メリーに目配せをすると、goサインをだしてくる。
ハンナさんのフォローは任せた。

「いいっすよ。先ず夜明け前にこの場所に来て結界をはるっす。
ゴブリンの最後尾が出てから大体2時間後に攻め込むんすよ。
先ずはメリーとそちらのアーチャーで見張りを倒したら、ゴブリン専用入り口から侵入するっす。あそこから侵入して多少の物音がしてもゴブリンが帰って来たぐらいにしか思われないっすから。
交代時間がくる1時間のうちにイ・コージの研究室に攻め込むっすよ」

「メリー、こんな作戦は臆病で卑怯な男にしか思いつかない筈だ。」

早く別れる事を勧める。中身はきつとゲスに違いない」

あー、反論できなくなって、そっちに来たか。

「正解すよ。俺は臆病で卑怯者、自分や仲間が傷つかない為ならどんな卑怯な手でも使っすよ。ゲス？どこが悪いんすか？高潔な精神で被害を拡大させる英雄なんて、まっぴらごめんすよ」

「ハンナ、止めといた方がいいよ。屁理屈でコウサには適わないから」

だから、メリーは弓で対抗すると。

「メリー、こんな男のどこがいいんだ？ただの口だけ男なんじゃないか？」

「だから言ったでしょ？依頼が終わればわかるって」

そりゃね、久しぶりに会った幼なじみの男が、こんなんじゃ怒るのは当たり前か。

「それじゃコウサの策で問題はないな。決行は明日。そちらも問題はないな」

side ハンナ

「ぐっ、行くぞ。メリー」

「行っくってどこに行くの？」

「自分達の宿营地だ。久しぶりにゆっくり話をしたい」
メリーは、あのコウサとか言う男を気にしている様だ。
そのコウサは動く気配すらない。

「メリー、積もる話もあると思うから先に行ってくればいいですよ。
俺も適当に、見切りをつけてから上がるっすから」

「見切りって何だ？」

「メリー達は、ここ何日か交代制で、お城を監視してるんだよ。ま
ったく、コウサは殆ど寝てない癖に無理をし過ぎだよ」

「何でそんな事を？」

「予測は予測。実際に見て得た情報が一番信頼出来るんだってさ。
メリーにはお肌には悪いからとか、ガークさんにはお酒を飲みたい
でしょとか、実戦ではイントルさんに頑張ってもらいますからとか
言ってるコウサは、長時間監視をしてるんだよ」

「監視なら、それが普通だろ？」

「分かってるけど、コウサが心配なの。俺はいつつも楽してるか
らとか言ってるのに無茶するんだから」

あのメリーが、ここまで男を想うなんて正直驚いた。
メリーは、昔からモテた癖に、恋愛に興味を持たずに狩りに没頭し
まくり。

村に来た劇団を見て女優を目指してからは、さらにモテていたけど、
相変わらず恋愛に興味がない様だったし。
理想の条件が狩りが一緒にできて、演技がうまくて、勇気がある人。

ブルーメンに来て、周りにいる俳優の卵達に目もくれずに、自分の所に入り浸っていたよな。
それが、こうなるかね。

「コウサのバカ。」

何が俺は臆病者よ、ジャイアントジープの時もゾンビスラッグの時もサキユバスの時もミスリルゴーレムの時も命がけだったじゃない。いつつメリーの前にいた癖に。どれだけメリーが心配していたか分かってないんだよ」

はい？

「メリー、それ本当に、あのコウサが倒したのか？全部強力な魔物ばかりじゃないか」

「そうだよ。全部メリーも一緒だったから」

「いやいや、自分もまだ戦えない魔物ばかりだぞ。何人で倒したんだよ」

「多くて4人、ゾンビスラッグはメリーとコウサの2人で倒したよ」

「うそつ。有り得ない」

「ザイツ・コウサって何者なんだ？」

ザロとイントルさん その2 ハンナさん登場（後書き）

今回の功才の台詞はある感想で、功才の行動がゲスで嫌いだと言われたんで

ザコとイントルさん その3 城攻め開始(前書き)

なんとPVが100万を超えました。
大感謝ですけど、いいんでしょうか？

ザコとイントルさん その3 城攻め開始

side 功才

絶対結界は敵から見つからないだけで、吹きさらっしになるんだよな。

つまり日が暮れると、かなり寒い。

でもテントなんて持ち込んだら、片付ける時に目立つから今回は使えない。

俺が寒さに震えていると、暖かい声が聞こえた。

「ザイツ殿、そろそろ休まれては如何ですか？明日の作戦に支障を来しますよ」

「イントルさん、そうですね。今無理をして明日に支障きたしたら笑えませんよね」

明日は夜明け前に動かなきゃいけないから、早めに寝ないとよろしくない。

「プルングさんの機嫌もありますから。早く帰った方がいいですよ」

「まじっすか!?!」

「マジですよ。ハンネスさんにずっと愚痴ってましたから」

「イントルさん帰りましょ。つつか教えてくれてありがとうございましてー」

俺はイントルさんに素直に頭を下げる。

「はいはい、メリーさんがザイツ殿の体を温めてあげたいってシチユーを作って待ってますから」

イントルさんは、愚痴るメリーと寒がってる俺を心配して、ワザワザ来てくれたんだろう。

この人がいなかったら、ガীগ冒険者隊は空中分解していてもおかしくない。

「そう言えばイントルさんとガীগさんって付き合いは長いんですか？」

「大体6年ぐらいになりますね」

「その間は2人で行動をしてたんですか？」

「基本はそうですね。臨時でパーティーを組む事はありましたけど。ほら、ガীগさんは誤解されやすい人ですから」

ガীগさんは、口が悪い、態度も悪い、さらに見た目が怖いの子揃ってるもんな。

「あの人はその誤解を解く気がないでしょ。それでいてガীগさんを慕う人は少くないんですよ」

「ガীগさんの友人は種族で言えば猿人族・ドワーフ・ホビット・猫人族・犬人族・リザードマン等。職種で言ったら王族・貴族・騎士・冒険者・商人・職人・農夫と幅広いですよ」

「それはイントルさんも一緒じゃないですか。人生相談とか良く受

けてますよね」

酒を飲むならガーグさん

悩み相談はイントルさん

冒険者ギルトには、そんな言葉まである。

「私は人生相談をできる程に経験を積んでませんよ。人の話を聞くのが好きなだけだから」

イントルさんが、照れ臭そうに微笑んだ。

イントルさんって、大人の男だよな！。

s i d e ハンナ

本当に、ザイツ・コウサは強いのだろうか？

体格は普通、迫力は欠片も感じれない。

一番の疑問は、その装備品だ。

布の服に無腰なんて戦いに行く格好とは、とても思えない。

「ハンネスさんでしたね。難しい顔をされてどうされましたか？」

「貴男は確かイントルさんでしたよね。いえ、自分にはメリーが言

う様にザイツ・コウサが強いとは思えないのです」

メリー曰わく、ガーク冒険者団の事で相談をするなら、このイントルという男性が一番だそうだ。

「普通の物差しで言ったらザイツ殿は強くはないですね。普通に戦えばフランソワ乙女騎士団には手も足もでないと思います。しかしザイツ殿の強さは普通じゃない戦いを平然とできる所なんですよ。まあこればかりはご自分で見ないと納得出来ないでしょう」

先程からイントルさんは、やたらと普通を強調している様に思える。

「普通ではない戦い方とは、闇討ちや背後から斬りつけるとかですか？」

「ザイツ殿の物差しで言えば闇討ちや背後から斬りつけるとかは、普通の戦い方になるのかも知れませんが。正確に言えばどうやれば、効率良く闇討ちをできるかを考える方ですから」

効率良く闇討ち？

「メリーさんじゃないですけど、依頼が終われば分かりますよ」

この依頼が終われば、何でメリーが、あの男を選んだのかも分かるだろうか。

side 功才

背中に感じる視線が痛い。

俺のはった絶対結界の中にはガーグ冒険者隊の4人とフランソワ乙女騎士団の10人の計14人がいる。

作戦を提案してしまったから、俺が作戦開始の合図をださなきゃいけない。

当然、いる場所は先頭。

フランソワ乙女騎士団の人達からすれば、俺は無腰で戦場に来ている素人にしか見えないと思う。

既に今回の作戦における反省点が出来た。

彼女の友達がいるからって、格好をつけてしまった事。

初めて俺を見た人が、俺の戦闘力に期待をする訳がない。

むしろ期待されたくないんだし。

敵に侮れるのは、好都合なんだけど共同作戦の相手には信頼性が重要になる。

(下手すりゃフランソワ乙女騎士団のお姉さん達は俺の指示を聞いてくれないだろう。それなら最初から戦力として計算しないでおくか)

日が昇り始めると、目の前の古城から続々とゴブリン達が出て行く。俺が今回ゴブリン達と戦うのを避けた理由の1つが、その数の多さ。そのゴブリン数は約300匹。

もう1つが装備の良さ。だって、きちんと鎧や兜を装備しているゴブリンまでいるんだぜ。

当然、武器に錆なんてなくキチンと研がれている。

これだけ多くの装備をイ・コージが1人で管理するのは難しい。

俺の予想では、イ・コージはかなり自由にゴブリンを操る事ができる。

つまりイ・コージに襲撃がバレた時点で300匹近いゴブリンが全

力疾走で戻ってきちゃうんだよな。

今回の作戦の成功は、作戦開始のタイミングにかかっている。

と思う、だって、俺イ・コージがどんな魔法を使えるか分からないんだから。

ザコとイントルさん その3 城攻め開始（後書き）

100万PV突破記念にイントルさんの正体を当てて方先着3名様に見たい幕間のリクエストを受け付けます

作者が答えられる範囲で、そんなご奇特な方がいたらの話ですけど

ザコとイントルさん その4 城攻略とイントルさんの決意(前書き)

今日は仕事の都合で夜は感想を返せないので今投稿です。

ザコとイントルさん その4 城攻略とイントルさんの決意

side 功才

最後のゴブリンが城を出て2時間。
見張りのゴブリンも交代した。

「皆様、石は持ったつすか？メリー見張りのゴブリンをできるだけ離れた場所から倒して欲しいです。見張りが倒れるのと同時に城に突入するつすよ。先頭はガーグさんとイントルさん、できたらフランソワ乙女騎士団からも2人程出て欲しいです。後フランソワ乙女騎士団からは見張りを2人出してほしいです」

「この人数から2人も見張りだと？何故だ」

「ハンナさんは300匹近いゴブリンと戦う自信はあるつすか？1人はゴブリンが帰ってきたら匹数が少ないうちに退路を確保しておいて欲しいんすよ。もう1人はフランソワさん達だけが分かる伝令で退却を知らせて欲しいつす」

「……分かった。先頭は自分とジョアンナが行く。見張りはブリッドとアリーセに頼む。エルザはメリーと一緒に見張りのゴブリンを弓矢で倒せ」

「なら行くつすよ」

そう言っても先頭には行かないんだけどね。

城の中は、古びた外見とは違い掃除が行き届いておりチリ1つも落

ちていない、快適住環境。

武器手入れゴブリンの他にお掃除ゴブリンもいるのか？

いや、まさかのメイドゴブリン… いる訳ないよな。

「ザイツ、イ・コージはどこにいますか？」

「城の中を進んで行けば結界で進めない所がある筈ですよ。イ・コージはその先にいる筈です」

「進めないなら、どうやって行くというのだ？言う割には作戦に抜け穴ばかりだな」

ハンナさんが絡んできた。

やっぱり俺をメリーの彼氏って認めてないのね。

「もうハンナったら。コウサはキチンと考えているよね。ねっコウサ」

「簡単ですよ。あの小石を捨てれば行ける筈ですから。イ・コージはゴブリンに研究の邪魔をされない様にしてると思うっすから」

あの小石には、城の結界を超える術と、研究室の結界を越させない術が施していると思う。

城の中でゴブリンと遭遇する事はなかった。

イ・コージは、それだけ自分の結界に対する自信があるんだろう。怖い物見たさで、メイドゴブリンにちょっとだけ期待していたんだけど。

2階に上がり中央部に近づいていくと、先頭のガーグさんが立ち止

まる。

「っと見えない壁があるな。これが結界か。ザイツ小石を捨てればいいんだよな」

「そんなにうまくいく訳ないだろ。ここはだな、城のどこかにある結界装置を壊して」

.....

「ハンナ早く行こ。みんな進んでるよ」

「あつ、メリー待って。くつ、自分はまだ認めないぞ。研究所がこの先にあるとは限らない」

そりゃ可能性が高いつて、だけで確定ではないんだし。

でもハンナさんは先から周りをちゃんと見ていたんだろうか？

side ハンナ

「ここっすね」

「ああ、ここだな」

ある部屋の前でガーグ冒険者団の一行が立ち止まる。

「何でこの部屋って分かるんだ？どうせ当てずっぽうだろ？」

「ハンナは気付いてななかったの？お部屋の前にトイレとか食堂と

か書いてある板が下がってたんだよ」

そんなのあったっけ？

ちなみに、この部屋の扉には赤い板にラボと書いてある。

「罫の可能性があるじゃないか」

そしたらあのコウサは平然とこう言ったんだ。

「自分の生活空間に罫をはる馬鹿はいないっすよ。恐らく看板はゴブリン達の目印っすね。ゴブリンは字は読めないっすけど色はわかるから、何をしたい時は何色の板がある部屋に行けっすって教えてあるんすよ」

「ハンナ、メリーのコウサは凄いでしょ。コウサは頭も良いし、演技も上手だし、勇気もあるんだよ。それに何よりかわいなんだよ」

メリー頭が良いのも勇気があるのも認めてもいいけど、あれを可愛いとは認められないよ。

side 功才

扉を開けると、ぽっちゃりな男性が机に向かって一心不乱に研究をしていた。

「何回言えば分かるんだ？この部屋は掃除しなくて良いんだよ。メイドはメイドらしく決めれたら場所を掃除してれば……誰だ？お前

達は？」

メイドゴブリン、本当にいるんだ。

「イ・コージだな。誘拐の罪で、自分達フランソワ乙女騎士団が誅してやる」

(すげっ、戦いの前の口上なんて本当にやるんだ。)

「ふんっ、これだから猿人族は。自分達は他の種族を平気で実験に使う癖に。それに魔術の進歩には犠牲が付き物なんだよ」

(おおっ、これまたマッドな人のお約束な台詞)

「言い訳はギルドで聞いてやる。大人しく捕まれ」

「捕まれと言われて、大人しく捕まる人なんていませんよ。それにここは私の城ですよ。むしろ捕まえれるなら捕まえてみなさい」

そう言うと、イ・コージは隣の部屋に逃げて行く。

(これぞ、お約束展開)

当然、隣の部屋に行くとイ・コージは背もたれが付いた豪華な椅子に座っていた。

(これもお約束だけど、後ろにあるクリスタルは何だ？それにしても天井が高いよな)

「ようこそイ・コージのゴブリン王国へ。愚かな猿人族さん。出でよ、我が兵隊達」

イ・コージの言葉に合わせて出て来たのは、立派な装備をしたゴブリン6匹と捕虜と思われる猿人族の戦士が3人。

おかしい。

あの戦力で、この人数に対抗できる訳がない。

それならイ・コージの自信はどこからきているんだ？

よく見るとイ・コージが指で何かを書いている。あれは魔法陣？

「間に合え、シールドボール」

イ・コージから放たれたのは紫色の気体。

紫色の気体にゴブリンも猿人族の戦士も巻き込まれた。

そして

「人だけが倒れた？……人にのみ効く魔法かよ」

幸いに紫色の気体は少しすると薄れた。

「正解です。でもどうします？猿人族の皆様、ゴブリンと戦闘をしていたら魔法の的、時間が経てば大勢のゴブリンが帰ってきますよ」

どうすっかな。

イ・コージだけなら何とかできるんだけども。

俺が思考モードにはいると、イントルさんが声を掛けてきた。

「ザイツ殿、1回シールドボールを消して下さい。私ができますから」

「イントルさん。駄目ですって、あの魔法は」

「猿人族にしか効かないんでしょ？だったら大丈夫ですよ。何しろ

私は……」

そう言つとイントルさんは覆面を脱ぎ捨てた。

ザコとイントルさん その4 城攻略とイントルさんの決意(後書き)

引き続きイントルさんの正体あてを募集中。

ザコとイントルさん その5 イントルさんの正体

side 功才

「この馬鹿イントル。今まで必死に隠してたもんを自分からバラしてどうすんだよ」

ガーグさんの必死の叫び声が響いた。

そりゃ隠すよな。

「ほう、トロルですか？どうりで私の魔法が効かない筈です」

覆面を脱いだイントルさんの顔は、どっからどう見てもトロル。確かにあのでかき、力の強さ、猿人族じゃないのは予想はついてた。でも

「違うっすよ。あの人はイントルさんっす。ガーグ冒険者隊の良心イントルさんっす」

後ろにいるフランソワ乙女騎士団の方々もざわついている。

「あの醜い容姿はトロルではありませんか？」

「トロルは討伐対象の魔物ですよね」

「あんな醜い魔物と一緒に行動してたなて」

うん、いくらメリーの友達がいる騎士団とは言え、ここは怒ってい

いよな。

「トロールだからなんだって言うの？イントルさんが貴方達に何かした？イントルさんはメリー達の大切な仲間なんだから。自分の秘密をバラしてでも、みんなを助けようとしてくれた大切な仲間なのっ！」

メリーやるねー。

それなら俺も頑張りますか。

幸いイントルさんが、ゴ布林達を抑えてくれているし。

紫色の気体がなぜ薄れたのかを考える。

あの気体は当然、猿人族であるイ・コージにも効くんだよな。

ある程度意識的に放てるとしても、自分もいる空間に充満させる訳がない。

……だから天井が高いのか。

「メリー、次は俺が出る。俺が合図をしたら5を俺に向かって撃て」

「コウサ待つて。細工は流々なんでしょ？だったらメリーも仕上げに参加する」

「いや、まだ安全が確定した訳じゃないから」

「安全じゃないならメリーは、コウサが出るのを認めないからね」

メリーが俺のズボンを掴んだ。

「いや、大丈夫と思うから行くんだし」

「それならメリーも、一緒に出る」

「だーから、あくまで可能性が高いだけで、メリーを危険に晒したくないんだよ」

俺とメリーのやり取りにフランソワ乙女騎士団の方々が啞然としてる中、ガーグさんだけが突っ込んできた。

「こらこら、こんな場所でいちゃつくな。ザイツどつちにしろ今動かなきゃ300匹のゴブリンとケンカする羽目になるんだぜ？俺はとつと片を付けて、イントルに酒を奢らせなきゃいけねんだよ」

「わかりました。それならガーグさんはイントルさんに加勢して下さい。メリーは俺に5を何本か撃ったら後ろのクリスタルを壊してくれ。それとシールドボールの中のハンナさん達が息苦しいようなら直ぐに教えてくれ」

気体が薄くなった。

先ずは

「マジックキャンセル」

素早くガーグ冒険者隊が動く。

続いて

「シールドボール」

ハンナさん達をシールドボールで囲みなおしたら

「ウインドアーマ×3」俺達を風の鎧が取り囲む。

風を下から上に巻き上げるイメージにする。

「自分達からやられにきましたか。それっ」

紫色の気体が俺達に襲いかかる。

しかし紫色の気体は俺達が身にまとった風の渦に巻き込まれると消えた。

やっぱり、イ・コージが使った気体魔法は空気よりも軽くしてある。風向きで毒の気体が自分に来たら自滅しかねない。

だからイ・コージは天井を高くしたんだな。

多分、天井には気体を排出する窓も設置しているだろう。

気体に色をつけたのも、間違って自分が吸わない為の安全策とみた。敵が風の魔法とかで、跳ね返したら背を低くしてかわすつもりだったんだろう。

「それじゃガーグ冒険者隊、一気に決めにいきますか」

「いくよコウサ。ウインドアロー」

メリーの放った魔法の矢が俺の周りの風にのる。

名付けてウインドアローアーマ。

「ガーグさんはイントルさんと一緒にゴブリンを倒して下さい。俺はイ・コージと戦います」

「そんな貧弱な装備で私に勝てるとお思いですか？」

それなら見せてあげましょう。

俺は懐から、ミスリル特殊警棒を取り出す。
一気に伸ばしてイ・コージに近づく。

「その輝きはミスリル銀？そんな物で魔術師を殴ったら危ないんですよ」

いや、イ・コージさん、気体魔法の方がヤバいんじゃないの。

「わかってるっすよ。」

だから俺が殴るのはこっちすよ」

俺はビビっているイ・コージを無視して後ろのクリスタルを壊しまくる。

ゴブリン操作、結界、猿人族限定魔法、これだけの強力な魔法を同時に使うには触媒が不可欠。

触媒は、多分俺が壊しまくっているクリスタル。

イ・コージは慌てて、この部屋に逃げこんだんじゃなく、この部屋でしか紫色の気体魔法を使えないから逃げてきたんだ。

特殊警棒と体にまとった矢が次々にクリスタルを破壊していく。

メリーの矢もクリスタルを壊していく。

どれがどの魔法のクリスタルなんて分からない。

それなら片っ端から壊すだけ。

気体の魔法を使わない所を見ると、もう壊したのかも知れない。

それでも手は緩めない、だって他にどんな魔法を隠しているか分からないんだから。

ちなみにイ・コージが俺に襲い掛かろうとしたらメリーが威嚇射撃をしてくれた。

流石はメリー、俺の考えはわかってるのね。

「さあ触媒のクリスタルはもうないっすよ。覚悟するんすね」

俺とガーグさん達に挟まれてビビりまくりのイ・コージ。

でもあれは演技だ。

「イントルさん、ガーグさん多分どこかに、まだ触媒のクリスタルを隠していると思います。ひんむいちゃって下さい」

多分、イ・コージが死ぬと同時に発動する魔法。

パンツ一丁にしたイ・コージをハンナさん達に引き渡す。

side ハンナ

自分は目の前で繰り広げれた光景が信じれなかった。

絶対絶命のピンチを切り抜ける作戦を考えついたのは弱い男。

その男を信じて、己の命を危険に晒した親友。

死闘を繰り広げて起きながら、あっさりと手柄を渡そうとするリーダー。

そして己が必死に隠し通してきた秘密を、仲間の為に自ら暴露してみせたトロール：いや素晴らしい戦士。

考え事をしている所を見つけたのか、メリーがニヤニヤしながら近づいて来た。

「ハーンナ。ヘッヘー、わかったでしょ。凄いでしょ。あれがメリーのコウサなんだよ」

「そのコウサの彼女に聞く。自分達は今回何もしていないんだが、なぜ手柄を譲るんだ」

「コウサ風に言うと、俺達が欲しいのは実利の報酬だけっすからね。それにフランソワ乙女騎士団にこれ以上目を付けられるのは勘弁して欲しいっすもん」って感じかな」

「そ、それだけの理由でか？」

これだけの手柄を建てれば色々な栄誉が手に入ると思っただが。

「後は」何も活躍できなかった事を広めて欲しくないなら、イントルさんの事もお願いするっすよ」かな」

「わかった。あの御方の事は決して口外しない」

魔物とバシたら討伐対象にされるかもしれないのに、自らそれを晒した素晴らしき方の事を話す訳がない。

ザコとイントルさん その5 イントルさんの正体（後書き）

イントルさんの経緯は次話で明らかにします。

そして次は幕間を数話。

見たい幕間を募集中…ってないか

ザロとインテルさん その6 インテル(前書き)

インテルさん編最終回です

ザコとイントルさん その6 イントル

side 功才

イ・コージの魔法の効果がきれたお陰で、城からゴブリンが逃げ出して行く。

その中にはメイド服を着たゴブリンも混じっていた。

イ・コージさん人嫌いは分かるけどゴブリンにメイド服を着せるのはいかがかと。

俺達が呆気にとられている中、イントルさんが身支度を始めていた。

「ガーグさんザイツ殿ブルングさん今までありがとうございます」

「おい、こらイントル。どこに行くんだよ。リーダーの許可も無しにパーティーを抜けるんじゃないよ」

「そうですねよイントルさん。第一イントルさんがいなくなったら誰が酔っ払ったガーグさんを大人しくさせるんですか？誰がガーグさんの酒代管理をするんです？俺には無理っですよ。頼みますから行かないで下さい」

「イントルさん、メリーからもお願い。イントルさんはコウサに大人の男としてお手本になつて欲しいの」

ガーグさんの輝く頭が若干びくついている。

「皆さん、私が討伐対象になると、皆さんも危険に晒されるかもしれないんですよ」

つまりイントルさんは1人になって討伐されるつもりだと。本当にこの人は、覆面を脱いだのもガーク冒険者隊に人外の者が、いるとなりや隊そのものが討伐対象にされかねないからだろう。

「それはないですよ。討伐依頼を許可するのは、冒険者ギルドですよ。冒険者ギルドにはイントルさんの事を知っている人もいますよね？それに……」

「確かにパーソナルカードを確認しなければ冒険者ギルドには登録できませんから、ギルドには黙認してもらっていましたが。それに何ですか？」

「イントルさんがいなくなったガーク冒険者隊は悪評しかたちませんよ。俺の戦い方なんて姑息ですし、ガークさんは周りの評価なんてくそ食らえな人なんですから。今まではイントルさんが周りとの軋轢を解消してくれていたから問題が起きなかったんじゃないですか」

結局、イントルさんはドルムーン冒険者の人達も許可をしてくれたら今まで通りパーティーに所属すると言ってくれた。

俺は色々な根回しを考えていたが、それは杞憂に終わる。ドルムーンの冒険者で、イントルさんに世話になった事がない人の方が少ないぐらいだったからだ。

直接世話になっていなくても、イントルさんの篤実な性格は多くの冒険者に慕われていた。

まあトロールは、その粗暴性から警戒されている訳で、粗暴性とは無縁のイントルさんを警戒する必要はないと。

色々と落ち着いたある日、イントルさんから詳しい話を教えてもら

える事になった。

「私は元々は普通のトロルでなんです」

イントルさんは人言を話すだけでなく、その教養の高さは貴族並みに高い。

「普通の頃はどんな生活をしていたんですか？」

「仲間と一緒に狩りをして食べる、それだけを繰り返す日々でしたね。あの頃は食糧を保存するなんて感覚は持ち合わせていませんでしたから」

「それなら何でイントルさんは普通のトロルじゃなくなったんですか？」

「ある日、私は冒険者に襲われて仲間とはぐれてしまったんですよ。逃げていた途中で私は崖から落ちてしまい、さまよい歩きました。そこで導かれる様に1本の木まで辿り着いたんです。その木には見た事のない実がいくつかなっていました」

「それを食ったのかよ？ ったく俺が酒のつまみにしようとしたキノコは却下した癖によ」

ガーグさん、木の実とキノコじゃリスクが違い過ぎます。

「お腹が空いていた私は、それこそむさぼる様に木の実を食べました。すると不思議な声が聞こえてきたんです。これ以上実を食べないで下さい。代わりに私が知っている知識を授けますからと」

「木が喋ったんですか？」

「正確には木に宿っている精霊の言葉でしたね。その木は知恵の木、私が食べたのは知恵の実だったんですよ」

「へー、知恵の木なんて御伽話の中だけだと思ったら本当にあるんだね」

「それで、知恵の木の精霊から色々な知識を学ばれたんですか」

改めてイントルさんを尊敬する。

イントルさんは学んだ知識を確実に理解して吸収しているんだから。

「ええ。それでイントルの名前を頂いたんですよ。インテリジェンストール。」

知識のあるトルルの略称だそうですよ」

「それでこのバカは、止せばいいのにせっかくの手に入れた知識を確かめたいなんて人里に降りてきたんだよ。言葉が通じれば人と争わなくて済むと思ったんだよ」

「今思えばお恥ずかしい限りで、誰も私の話を聞いてくれずに絶望していた中、唯一話を聞いてくれたのがガーグさんだったんですよ」

「俺もちょうどパーティーを組みたかつたしな。それでこいつに覆面を被せたんだよ。ギルドは俺が実績で証明するって事でナシをつけたんだが……。腹がたつ事に、たった数週間でギルドの連中は俺じゃなくイントルを信用し始めたんだぜ」

いや、そりゃねー。

チンプラ口調のガーグさんと、穏やかな口調のイントルさんじゃ、どっちが接しやすいかは歴然だし。

side ガーグ

予想外の奴から呼び出しをくらった。

「これはフランソワお嬢様。相変わらずお美しい事で」

「ガーグさん。気持ち悪いから、その話し方は止して下さい。怖気がたちますわ」

「おめえが、俺に口が汚いだなんだ文句をつけるから、キチンとしてやったんだろ？今回も無理な依頼を振ってきた癖によ」

「それに関しては感謝してますわ。ハンナを始め今回向かわせた娘達は才能はあるんですけども、まだ未熟な部分が多くて、貴方達の戦い方を見れば成長を促せると思いましたが」

「それで、その為だけに来たんじゃない？」

「当たり前ですわよ。先ず1つはイ・コージの取り調べ結果について、イ・コージは本気でゴブリン王国の王になるつもりだったみたいですわ。イ・コージは親しい人間も作らずに魔術の研究に没頭していたみたいね。それで人間関係がうまく築けなくなって、人間関係嫌いになっただけじゃないわね」

「人に受け入れられないからゴブリンに言う事を聞かせて王様になるってか。なんとも寂しい話だね」

「それとこれはお願いなんですけども、ハンナ・ハンネスをガーグ冒険者隊に出向させて欲しいんですけど」

「はあ？んでだよ」

「本人の希望とハンナの更なる成長を願ってですわ」

「断る。お前の所から来る様な真面目娘はうちには合わねーよ」

「もちろん、ただでとは言いませんわ。イントルさんの事は口外させませんし、それなりの謝礼も払いますわよ」

「お嬢様は交渉が上手な事で」

「貴方の事は、あのお方達から頼まれていますしね」

side 功才

う、嘘だろ。

なんでアイツがいるんだよ。

「自分の名前はハンナ・ハンネスであります。フランソワ乙女騎士団から出向して参りました。今日から宜しくお願い致します」

赤髪の強気ポニーテール、ハンナ・ハンネスがフランソワ乙女騎士団から出向の名目で来た。

「ハンナこれからよろしくね。でもいきなりどうしたの？」

「ガীগ冒険者隊に学びたい御仁を見つけたんだ。イントル殿よろしく願いますっ！」

ハンナさんがイントルさんに向かって、応援団ばりにオスツて感じに頭を下げる。

「ハンネスさん私に教えられる事なんて少ないですよ」

イントルさん、若干ひき気味。

「いえ、自分はイントル殿の騎士道に感激したんです」

「私は騎士じゃなく、冒険者です。それにトロルなんですよ」

イントルさん、ちよいつと迷惑そう。

「ご謙遜をされる等、流石はイントル殿だ」

ハンナさんは、目を輝かせている。

うん、これをフランソワ乙女騎士団に帰すのは、かなり手こずるに
違い。

俺は心の中で、ハンナさんの世話役にはイントルさんを任命する事に決めた。

ザコとイントルさん その6 イントル（後書き）

幕間を書いて次に話に

十代の方から五十代の方まで、感想を頂けて感謝の限りです。
しかし女性から来ないのが、なんともこの小説らしいです

幕間 ザロのお料理（前書き）

突っ込むがあるかもしれないけど、ながして下さい。

幕間 ザコのお料理

side イントル

「イ、イントル殿。じ、自分は悔しいです」

「ハannesさんどうされましたか？」

「自分の事は、ハンナと呼んで欲しいです。メリーがコウサに泥のスープや泥団子を食べさせられていました」

「あー、あれはコウサ殿の故郷の食べ物らしいですよ」

side 功才

「ねえ、コウサ、ちょっと聞きたい事があるんだけど……。コウサはオーディヌスに来て、どれ位たったの？」

「うーん、だいたい3ヶ月ってところかな。まっお陰で充実した生活を送れてるよ」

「3ヶ月かー。だいぶ慣れた？」

「まあ不便な部分もあるけど、何とか。でもたまに向こうの飯が食べたくなるけどね」

デクセンの主食は、黒パン。

副食はジャガイモと肉が中心で、主な味付けは塩・香草・バター！。

俺は婆ちゃんのご飯で育ったから、和食派。
米・味噌・醤油が恋しい。

「向こうのご飯って、手に入らないの？輸入品で似た物があるかもしれないよ」

確かにオーディヌスは、魔術の恩恵で食品の保存期間や移動速度は、予想外に優れていた。

だけでも

「こつちに俺がいた国と同じ文化があるとは限らないからな。それに、こつちで作るのは不可能に近いと思う」

米なら植える所からだし、味噌や醤油は、その米がないと作れないらしい。

「うーん。メリーもコウサの故郷のご飯食べてみたいな。ロッキさんがコウサを喚んだんなら、ロッキさんに頼めないかな？」

「師匠か。連絡を試みるかな、砂糖も安く手に入るかもな。こつちは甘味が少ないから」

「あー馬鹿にした！。甘味ならハト蜂の蜂蜜があるもん。しかも幼虫と蛹付きなんだからね」

いや、そのオプションがきついんだって。

「蜂蜜と砂糖じゃ作れるお菓子が違うんだよ」

「コウサお菓子も作れるんだ！」

「向こうにいた頃は良く美才にせがまれて作ったからな」

「ミサちゃんって妹さんだよ。コウサはミサちゃんが可愛いくてしょうがないんですよ」

「小生意気なだけだよ。何かっていえば、あれが食べたい、これを作ってなんだぜ」

（美才の奴、ちゃんと飯を食ってるかな？ 師匠にその辺も確認したいよな）

師匠に手紙を出して数週間たったある日の事。

電源をきってある携帯が鳴った。

電波もないオーディオスで普通なら有り得ない現象だけでも、電話の相手は多分普通ではない人？ だから仕方がない。

「師匠ですよ。色々ツツコミたい所ですけど、何の用事でしょうか」

「いやだなー功才君。自分からお願いしたじゃないですか。今メールを送りましたから、そこからアクセスしてみてください。あっ、私の名前をちゃんと登録しておいて下さいね」

送れてきたメールのURLにアクセスすると、

（ロッキのオンラインショッピングってなんだよ。しかも案内役の

キャラがプチロッキ君って何なんだよ。返事が遅いと思っただらこれに時間を割いていたんだな)

商品のラインナップは、調味料や食材・調理器具が殆ど。他には美才や姉貴の写真集やCD。

このサイトで使えるのは金じゃなく、俺の活躍度で貯まるポイントを使用するらしく、オーク1匹で、砂糖500グラムに相当するとの事。

普通ならオーデイヌスで砂糖を売って大儲けとか考えるんだろうけども、リスクが多すぎるからパス。

だって出自不明の高級品なんてのを売るはやバ過ぎだし。とりあえず米・餅米・醤油・味噌・白砂糖・土鍋・ホンダシを注文する。

これでジャイアントシープ1匹分に相当。

納豆や豆腐にも惹かれたが、日持ちの観点から見送った。

ちなみに美才の写真集は、ゾンビスラッグ1匹で買えるらしい。

注文をした3日後には俺の部屋に注文をした品だけが置かれていた。食材はドルムーンで買える物を使う事にして調理を開始。

今日のメニューは、土鍋で炊いたご飯・ジャガイモの味噌汁・功才特製玉子焼き・猪の角煮・デザートにはおはぎ。

久しぶりに作ったけど、味は上出来。

…でもメリー以外には食べてもらえなかった。

ご飯はともかく、

味噌汁は泥水に見えるから、

玉子焼きは甘い味付けの玉子料理なんて有り得ないと言われて、

角煮は醤油の黒い色が不吉、

おはぎに至っては泥団子扱いをされた。
いや、良いんだよ。

一番食いたかったの俺なんだし。
それにメリーは、喜んでくれたし。

「コウサ、この玉子焼きって甘くて美味しいね」

「婆ちゃんに教えてもらった財津家秘伝の味だよ。美才の好物さ」

(そういや、美才もこんな風に嬉しそうに玉子焼きを食べてくれてたよな)

「やっぱりコウサは優しいお兄ちゃんなんだね。」

「何だよ?」

「ミサちゃんの話をする時のコウサは、すごい優しい顔をしてるんだよ。ミサちゃん元気だといいいね」

「ありがとな。俺の知らない写真集も出てたから大丈夫だろ」

(無事ではいるみたいけど、元気がどうかは別だけどな)

幕間 ザコのお料理（後書き）

最初はアankoを作る話にしようと思ったけど、この設定で砂糖を手に入れるのはきついかと。

米なんてもつと無理だし、味噌や醤油に至っては米麹とかが必要だったりする。

微妙に次の幕間に繋がっています

幕間 ザロの爺さん婆さんと美才と師匠（前書き）

リクエストのあった功才の爺さん婆さんの話です

幕間 ザコの爺さん婆さんと美才と師匠

功才の祖父、財津万才の家で、今時珍しい黒電話が鳴り響いた。

「はい、財津ですが。なんじゃ栄才か！功才が見つかったのか？」

「功才は見つかってはいません。もしそっちに功才が立ち寄ったら、海外留学の準備が出来たから家に帰ってくる用に伝えて下さい」

「それは功才が望んだ事なのか？いや、それはないな。お前にそんな優しさがあったら、功才は家出なぞしておらぬか」

「功才は家出じゃありませんよ。既に海外留学をしている事になってますから。一度そちらの高校に転校しましたが、馴染めずに海外留学をした事にしましたから」

「ふん、相変わらず腐った根性をしておるわ。功才が見つかれば二度と電話なぞ寄越すなよ、馬鹿息子が！！」

孫の功才が居なくなつて3ヶ月がたつ。

功才は家出と騒がれているが、そうとは思えぬ。

あの子は、逃げ出すよりも、耐えて状況を好転させる強さをもつておる。

「貴方、先程の電話は誰からでしたの？」

「栄才からじゃよ。あの馬鹿息子、功才を海外留学扱いにしおつた

わ

栄才は、見た目だけは鳶が鷹を産んだ様なもの、功才はフクロウと言った所かの。

他の鳥が苦手とする闇夜で実力を発揮するフクロウじゃな。

side 財津 梅

いつからでしょう。

息子栄才と孫の功才の仲が歪なものになったのは、待望の長男の誕生に、栄才はとても喜びました。

自分の名前から一字をとって、俳優として成功する才能の持ち主だから功才と名付けたくらいですから。

しかし姉の栄華や妹の美才に比べて、功才の容姿が優れていないのがわかると、栄華と美才の芸能活躍に力を入れ始めました。

また功才の幼なじみの存在も、栄才にしてみれば悔しかったのでしよう。

容姿、才能ともに輝かんばかりの能力を持つ幼なじみ達と功才を比べて失望をしたなんて話すくらいですから。

結局、功才に対する期待が大き過ぎたんですね。

その分、私とお爺さんは功才に愛情を注ぎました。

何しろ功才以外の家族は常に忙しくて、テレビ局で顔を合わせる機会の方が多かつたみたいですし。

それに功才は決して劣った才能の持ち主じゃありません、ただその才能が発揮されるのは華やかな世界ではない気がします。

side 美才

今日のお仕事は

“都市伝説を検show”

噂の都市伝説を、アイドルやグラビアの人達が現地に検証しに行くっていうお仕事。

私の担当は、ド派手な格好をした的中率が高い外国人占い師がいるっていう都市伝説。

なんでも、その占い師は夜中にでるらしいけども、どこに出没するかは、わからないみたい。

だから見たって噂がある場所を見て回るだけのロケ。一応、闇夜を怖がるリアクションは撮っておく。

「美才ちゃん、ちょっと周りを下見してくるから待っていてくれる？」

「わかりました。それじゃロケバスで待ってます」

そしてロケバスに行こうとしたら、それまでは無かった占いの看板を掲げた真っ赤なテントが立っていた。

あれだけ派手なのに、周りの人は関心を示していない。

（もしかして、あれが噂の占い師？ならお兄ちゃんの事を聞いてみようかな）

勇気をだして、テントに入ってみると、そこにいたのは

年は、50才くらい。
体型は、細いマッチョ。

顔は、渋くて俳優さんにもおかしくない。

モミアゲから続く、おヒゲが渋さを増している。でも、真っ青なシルクハットに真っ青ジャケット、ズボンも靴も青一色なんだよ。

「はい、いらっしやいませ。ロッキさんの占いテントよ、ようこそー」

服も派手だけど、テンションも高いんだ。

「あのロッキさんは何でも占ってくれるんですか？」

「大丈夫ですよ。恋愛から行方不明者までピタリと当ててみせますよー」

「それならお兄ちゃんが、今どうしてるかを教えて下さい。兄の名は財津功才です」

「功才君ね、いいですよ。……見えましたっ。この方はとてつもなく遠い所にいます。でも元気な様ですから御安心下さい」

「お兄ちゃんは今なにをしているんですか？嫌な思いとかはしていませんか？」

「どうやら彼は肉体労働的なお仕事をしているみたいですね。人間関係は御安心ください。優しい師匠に暖かい仲間もいますし、何より可愛らしい彼女がいる様ですよ」

「彼女？お兄ちゃんに彼女？」

「ええ、私には彼が作った玉子焼きを2人で仲むつまじく食べる姿が見えます」

「美才の玉子焼きを他の女に食べさせたの？お兄ちゃんのバカッ！美才がこんなに心配しているのに、玉子焼きを彼女と一緒に食べるなんて。バカッ」

「功才君も美才ちゃんの事を、とても心配しているみたいですよ」

「知らないっ！認めないっ！美才のお兄ちゃんだから！」

「おやおや、でもメ：彼女はとても功才君を深く愛している様ですよ。むしろ功才君が押され気味なぐらいですから」

「お兄ちゃんに会う方法はないんですか？」

「貴女が大切に想っていれば絆が導きますよ」

side ロッキ

いや、兄妹って似ないものなんですな。

あの功才君の妹さんが、あんなに可愛らしいなんて。

とりあえず私は頂いた占い料で、功才君に頼まれた品を買って帰りますか。

幕間 ザコの爺さん婆さんと美才と師匠（後書き）

何と次の幕間は功才とメリーのデートのお話になります。
恋愛チキンの功才君が頑張ります

ザロとメリーのデート（前書き）

ポンスさんからリクエストがあった功才とメリーのデートです

ザコとメリーのデート

side 功才

最近ドルムーンへの観光客が増えている。

ドルムーンで1年に1回行われている月光祭が目当てらしい。

データボール参照

ドルムーン月光祭

月の神ニーマの誕生をお祝いするお祭りですよ。

ドルムーンでは、月の神ニーマが人々に授けたと言われる月光石の産出で出来た街ですよ。

だから街の名前にムーンがつくんですね。

この日は、男性は恋人に月光石の宝飾品を送る慣わしがあるそうです。

まっ、そんな事が出来るのは貴族様だけでしょうけど、覚えておいて損はしませんよ、功才君。

何だろ、いつも以上に説明が長い上に微妙なプレッシャーを感じる。つまりメリーをデートに誘って月光石をプレゼントしろと。

.....

無理っ!!

だって、まだ正式に付き合ってたさいつて言っていないんだし。

誘いを断られたら、気まずいじゃないか。

誘いにのってくれたとしても、月光石を断られたどうしよう。

しかし、今の状況で誘わないのも不自然だ。
誘っておいて、月光石がないのはヤバい。

それなら月光石は用意しておいて、ポケットにしまっておこう。
それでメリーの反応が芳しくなかったら、質屋に行けばいいんだ。

でも何を準備しよう。

指輪はいきなりすぎるだろ、サイズ知らないし。

イヤリングって、狩りの邪魔にならないかな？

首飾りとかは、メリーの趣味に合わないときついか。

とりあえず、宝飾店に行ってから決めるか。……………

高っ！！

何この値段？

月光祭値段なのか？

しかし、あまり安すぎるのもあれだしな。

結果、15万デュクセンの首飾りを購入。

月光石と銀で作られたシンプルな首飾り。

気合い入りすぎてひかれないか心配。

ここまでして、誘いを断られたらネタにするしかないよな……。

side メリー

「メ、メ、メリー。あのその良かったらで、いいんだけど。良かったら月光祭と一緒に過ごしてくれないかなーなんて思ったりする訳で……………」

コウサ、耳まで真っ赤っにして、指なんかモジモジさせているし。
ハンナがないのが残念なぐらいにコウサが可愛い。

「コウサの誘い待ってたんだよー。メリーも家族以外と過ごす月光祭は初めてだから楽しみだなー」

もっつ、コウサったら。

そんな嬉しそうな顔しちゃって。

やっぱりハンナは、いなくて良かった。

コウサはメリーが独占したいし。

side 功才

月光祭当日

だ、第一段階クリア。

後はデートをうまく成功させて首飾りを渡せば良いんだよな。

月を見るお祭りだから、待ち合わせ時間は夜。

夜ご飯を食べて近くの丘で、月を見るのが流れらしい。

でも、でもメリーが待ち合わせ場所に来なかったらどうしよう？

遅れてきたら、どれ位待てば良いんだろう？

真夜中ぐらい？

それに俺なんかが、メリーとデートをしていてピンシユクを買わないだろうか？

「コウサおっ待たせー。さっ行こっ」

楽しそうに歩くメリー。

かたやガツチガツチな俺。

駄目だ、普段通り、普段通りに。

「それじゃ、予約しておいたレストランに行くか」

俺が予約したのは、市民が行ける中では、それなりのレストラン。イントルさんに紹介してもらった。

ガーグさんに聞いたら酒場しか言わないし。

（確かにうまいけど、この味付けで、この値段か。今度から作った方がいいかもな）

メリーは、味付けは良いけど肉の取り扱いに不満があったらしい。

そして俺がメリーを案内したのは必死に探した月見スポット。

「ふぁー。お月様が綺麗に見える。さすがはコウサ」

月の光に照らされたメリーは、いつも以上に綺麗に見えた。

「メリー良かったら……これ」

「ふわっ。いいの？もらっちゃって」

「俺が持ってたなら明日には質屋行きだよ」

「ダメ、ぜっーたい駄目。もうこの首飾りはメリーの物だもん。誰にも渡さないんだから」

「それで、そのさ……メリーの事、彼女って思っていていいんだよね」

side メリー

私はずっと、そのつもりだったんだけども。

コウサは臆病だ。

戦い方も恋愛も、凄く臆病。

戦い方も勝てると分かるまで戦おうとしない。

だから恋愛も言葉にしてあげないと不安なんだと思う。

「メリーは、初めて会った時から。ううん今はもっとコウサの事を好きなんだよ。」

そしてこれが答えだよ。メリーも初めてなんだからね」

月明かりの下、私は異世界から来た弱いけど強い、臆病だけど勇気がある、大切な愛しい少年に口付けをした。

ザコとメリーのデート（後書き）

功才の恋愛チキンが炸裂しました。
こんなんで良かったのか不安

ザコとガーグ その1 ガーグと宮廷魔術師(前書き)

幕間が終わって新展開です

この話は長めになります

ザコとガーグ その1 ガーグと宮廷魔術師

side 功才

(イントルさん、確かガーグさんにエルフの知り合いはいない筈ですよね)

(ええ、私の知る範囲では。なにせエルフは美しく繊細な者を好む種族ですから)

ガーグさんは、最低限の身だしなみ以外に興味はないむさ苦しい坊主頭。

性格は豪快そのもので繊細さのせの字もない。

しかし功才達が見たのは少女と見間違える程の男性エルフとガーグが肩を組んで親しげに酒を酌み交わしている姿である。

事の発端は1時間程前の事。

功才達が定宿にしているドルムーンの宿にガーグを訪ねてきた人物がいた。

金髪碧眼のエルフが

「誠に申し訳ありません。こちらにガーグと言う男性がいると聞いて来たのですが」

その場にいた者の殆どは、ガーグが酒を飲んでエルフに絡んだ報復か女性エルフにチョッカイをだして苦情を言いに来たと思ったと言う。

それ程に男性エルフと彼らが良く知るガーグには接点が見当たらなかった。

少しすると、酒場に野太い男の声が響いた。

「ミツシエルじゃねーか。わざわざドルムーンくんたりまで何しに来たんだよ」

言葉は荒いが、ガーグは満面の笑みを浮かべてエルフを迎える。

「久しいなガーグ。しかし、クツその頭はどうしたのだ？怖い顔にますます迫力がついてるぞ」

「ちょっとと思う所があつてな。まあ酒でも飲みながらゆっくり話をしようや」

.....

今までの流れからすると、エルフはガーグさんがイントルさんとパーティーを組む前からの知り合いだろう。

しかもかなり親しい、そしてイントルさんも知らないって事はガーグさんが内緒にしている名字に関係があるのかもしれない。

昔エルフを危機から救ったとか

ガーグさんが無茶をして行き倒れた所を助けられたらとか

「おいつ！お前ら紹介するから来いつ。こいつはミツシエル・スターローズ、俺の古い馴染みだ。ミツシエルこいつらが今パーティーを組んでる連中だ。中々面白い奴らだぜ」

「ガーグ冒険者隊の噂は私も聞いた事がありますよ。皆様、改めま

しては私はミツシエル・スターローズ、バルドー聖王国で宮廷魔術師をしております」

データボール参照バルドー聖王国

デユクセンの隣国の国ですよ。

特徴としては華麗な文化を好む国ですね。

エルフや犬人族の様な美しさや可愛さのある者達には寛容ですけれど、功才君にはキツいかもしれませんね。

いよいよ犬耳少女とのご対面ですよ。

ちなみにお金の単位はバル。

1デユクセンは2バルで計算して下さい。

早い話が1バルは0・5円と。

もしバルドーへ行く事になっても、犬耳少女には成るべく関わらない事にしておこう。

折角くできた可愛い彼女の方が何倍も何万倍も大切なんだし。

「バルドーか。確か自分の団長もバルドーの生まれと聞いております」ハンナさんが団長と言うのなら、フランソワ乙女騎士団の団長フランソワ・ホーリーツクさんか。

なーんか色々と微妙に繋がってそうな予感。

「それでスターローズ様は、ガーグ隊長にどのような御用がおりませんか？まさか旧交を暖めに来ただけじゃないっすよね？聖王国の宮廷魔術師様」

「貴男がザイツ・コウサさんですね。お噂は聞いておりますよ。お噂通り油断のならないお方だ」

あー、俺の事を知っているって事は、フランソワさんと繋がっている可能性が高いな。

「噂なんて当てにならないですよ。特に又聞きの噂なんて眉唾物ですよ」

「ええ、だからこうして来たんじゃないですか。噂のガーグ冒険者隊をね」

流石は宮廷魔術師さんおつかないねー。

「それでミツシエル、どんな依頼を持ってきたんだ。まったくお前といいザイツといい腹が黒すぎなんだよ」

失礼な俺の腹はどす黒いんだよ。

「なに簡単な話だ。バルドーに拠点を移して欲しい。どうもうちの国の冒険者は頼りなくてな。お前になら私から直接頼む事ができるし」

「かーっ、調子がいいねー。お前等の所の貴族様達が冒険者を嫌って嫌がらせをしてるからだろ？」

「私が貴族に文句は言わせると思つか。それにお前と噂のザイツ・コウサがいれば貴族に負ける事はあるまい」

ミツシエルさんが、怖い笑顔をする。

まあミツシエルさんが宮廷でどれだけの実力があるかと、どれ位の後ろ盾になってくれるかだけだ。

「ザイツ何か確認したい事はあるか」

「安全な宿の提供・冒険者を嫌う貴族の一覧・好意的な貴族の一覧・実力のある商人の一覧・ミツシエルさんがどの程度の後ろ盾をしてくれるか・裏組織の詳細・パーソナルカード確認の免除・シャイン様への移動嘆願書をだす事・女好きの貴族への牽制っすね。後は現地についてから言っすよ」

「多いねー、しかし最後の女好きの貴族ってのは、プルングの嬢ちやんに対してだろ」

「当たり前っすよ。メリーに危険が及ぶんなら行かないっすよ。もし危険が及んだら、どんな手を使っても報復するっすけどね」

side ロッキ

「聖王国ですか」

「はっ、スターローズ家の者からの依頼です」

「エルフですか。しかもローズの名前を関してるなら王族に連なる者ですね。仕方ないですね、場合によってはエルフも牽制しておきますか」

ザコとガーグ その1 ガーグと宮廷魔術師（後書き）

ようやく功才とメリーのコンビを落ち着きました

活動報告にも書きましたが、キャラが約30人

次の幕間で人気投票とかしてみたい

一票でも着そうならやります

ザコとガーグさん その2 ガーグ冒険者隊の話し合い

side 功才

とりあえずガーグ冒険者隊での話し合いをした後にミッシェルさんに返事をする事にした。

「ガーグさん、イントルさん質問があります。デユクセンとバルドーの大きな違いって何かありますか？」

「言葉は変わらねえし、飯も変わらねえ。一番の違いはあれだな。奴隷制がある事だろうな」

メリーやハンナさんが、顔をしかめた所を見るとあまり関わらない方がいいな。

「聖王国で奴隷か。都合の悪い事は神様の思し召しで取り繕うパターンですね。奴隷は敗戦国の猿人族ですか？」

「いえ、正確には敗戦国の猿人族・猫人族・犬人族が主ですね」

次の瞬間、隣に座っていたメリーが俺の太ももをつねってきた。

「いてっ、メリーなんでつねるんだよー」

「今、犬人族って聞いた時にコウサが、一瞬にやけたからだよ」

メリーは頬を膨らませて、そっぽを向く。

ちきしょー、可愛いじゃないか。

「メリーは、本当にどこでもいちゃつけるんだな。自分には無理だよ。コウサ、ミツシエル殿に突きつけた条件を自分に詳しく教えて欲しい」

ハンナさんは、ガীগ冒険者隊の戦い方を貪欲に吸収したい様だ。

「まずは安全な宿の提供。これは寝首をかかれるのを防ぐのと毒物混入の防止

貴族の冒険者の好き嫌いは依頼をされた時の判断に必要なからだよ。冒険者を嫌う貴族が無茶な依頼を持つてくる可能性があるからな。実力のある商人は、自分の利益に敏感だから掴んでおかなきゃいけないんだよ。下手に毛皮や鉱石を安く売ったりしたら目をつけられるだろうし

ミツシエルさんがどの程度の後盾はどの程度無茶をして大丈夫かを謀る為

裏組織の詳細は関わりをできるだけ防ぐ為

パーソナルカード確認の免除は、イントルさんの正体をばらしたくないから

シャイン様への移動嘆願書は何かあった時の保険だよ
納得してくれた？」

「コウサ、大事な約束を忘れてるよー」

メリー、あれを何回も言うの恥ずかしいんだけども

「女好きの貴族への牽制は、メリーもハンナさん美少女だから、貴族特権で連れて行かれるのを防ぐ為だよ」

メリーが先つねった所を撫でてきた。

機嫌が治ったらしい。

「わかったけど、何でそんなに細かく条件をつけたんだ」

「宮廷魔術師さんがわざわざ来たからだよ。多分俺達の事はフランソワさんから聞いたんだろうけども、ミツシエルさんは実力もあって信頼のおける冒険者を確保しておきたいんだと思う。つまりある程度の活躍をしたら、かなりの無茶振りをしてくる可能性が高い」

「おい、ミツシエルはそんな奴じゃねーぞ。あいつの事は俺が良く知っている」

「だからですよ。ミツシエルさんは周りに信頼がおける者がいないか…」

「漏れたら不味い事を抱えているかでしょうね」

イントルさん、それ正解

「後はガーグさんに任せますよ。俺の知らない事情もありそうですし」

「ったく、言いたい放題言いやがって」

「コウサの世界にも奴隷ついていたの？」

「昔はかなりいたみたいだよ。まあ正直言って関わりたくもない」

「男の人って、可愛い娘奴隷を欲しがるって聞いたけど」

価値観が違うねー。

「人1人の人生を預かる器量は俺にはないよ。俺に必要なのは、自分の意志を持つているパートナー。俺のする事に全て“はい”で答えられていたら、調子がおかしくなるよ」

「コウサらしい答えだね。でも貴族に奴隷を持つてて言われたどうするの？メリーの知り合いの人がバルドーで公演したら貴族の人から奴隷を持つ様に勧められたって話だよ」

ステータス扱いかよ

「まっ、うまく誤魔化して何とか対策考えておくよ。勧める人もいれば、快く思わない人もいるだろうしな。ましてやデユクセンに帰ってくる事を考えたらリスクが大き過ぎるよ」

ミントなんてマジ切れしそうだし、美才にバレたら泣きながら責められそうだよな。

side メリー

やっぱりコウサを選んで正解だった。

前にバルドーに行った先輩は犬人族の娘を奴隷として連れてきた。しかも、その娘がいる目の前でメリーを口説くんだもん。

「奴隷は人間じゃないから当たり前前だろ」

何て言うし。

でも、もしコウサの魅力に気付く娘がバルドーにいたらどうしよう。私もコウサみたいに対策をたてなきゃ。

side 功才

次の日、ガーグさんから呼び出しが掛かった。

「俺は1人でも、バルドーに行くぜ。付いて来るかどうかはお前達の自由だ」

「リーダーがいる所に付いて行くのが、冒険者隊ですよ。それにトロールが入られる冒険者隊なんて他にありませんよ」

さすがにイントルさん決断が早い。

「ガーグさんとイントルさんだけじゃ貴族の謀に対応できないですよ。ミッシェルさんは俺も含めて指名してきたんですから、ザイツ・コウサも行かせてもらいます」

「もうコウサったら、昨日から行く気満々だったじゃない。コウサとのバルドーでのデート楽しみだなー」

「全く、メリーの決断理由はコウサしかないのか。自分はガーグ冒険者隊に出向した身分です。どこまでも付いて行きますから」

早い話がガーグ冒険者隊は全員バルドーに行くよ。

ガーグさんが嬉しそうに、にやけていた。

△サいオッサンのシンデレってキツいよな。

ザコとガーグさん その2 ガーグ冒険者隊の話し合い(後書き)

次から舞台はバルドーへ。

次話では、また新キャラが登場。

犬人娘は未定。

書きためがあるので、今日中に何話か載せる予定です

ザコとガーグさん その3 無表情?メイドエルフ(前書き)

またもや新キャラの登場です

ザコとガーグさん その3 無表情？メイドエルフ

side 功才

ここがバルドーか。

なんつーか、貴族趣味丸出しだね。

俺達が着いたのはバルドーの首都ロディーヌ。

やたらと装飾が細かい門の入り口は貴族様と市民用に別れている。

「ガーグ、皆さん良く来てくれたね。ようこそバルドーの首都ロディーヌへ」

胡散臭い爽やかな笑顔でミッシェルさんが出迎えてくれた。

あの笑顔は、俺達にじゃなく周りへの演技だな。

「それでミッシェル、俺達は、これからどうすればいいんだ？」

「先ずは宿泊先に案内をする。話はそれからだ」

確かに宮廷魔術師様が、こんな所で立ち話なんかしていたら注目の的だよな。

「分かった、んじゃ行きますか」

当然、先頭はミッシェルさん。

「この者達は私の連れだ。そのまま通してくれ」

「すみません。規則ですので。確認させてもらいます」

門番は猿人族だろう、種族差別つてやつかもな。
美しいエルフを見るのは良いけども、上には立たれたくない。
でも、このままじゃイントルさんが不味い。

でも、その時ガーグさんが動いた。
パーソナルカードをチェックさせて一言。

「俺の連れだ。文句はないよな」

言葉だけ聞けば、ただの脅迫。

でも門番の態度を見る限りただの脅迫じゃないよな。

(コウサ、ガーグさんは何をしたの?)

(予想はつくけど止めとく。

藪を突っついたら蛇じゃなく大蛇が出てきそうだから)

そして案内されたのは

「ここは私の別宅だ。料理や面倒を見てくれるのは、セシリー・エルレイン。エルフだ」

初めて女性エルフを見たけど、確かに綺麗だけど、無表情じゃね。
でもそれ以上に気になるのが

(メリー、セシリーさんがガーグさんを見る目って冷たくない?)

(うん、多分セシリーさんはガーグさんに敵意を持ってるとよ)

(あまりにもワイルド過ぎる外見でひいたのかな?)

「セシリー・エルレインです。皆様、宜しくお願い致します。」

皆様?

確かエルフって誇り高い種族なんだよな。

「呼び方はさん付けまでしか認めねえからな。様付けなんぞ胸糞が悪くならあ」

「私はメイドですので、どの様な方でも、お仕えするなら様付けです」

セシリーさんは、相変わらず無表情。

「別に無理にあんたに面倒を見てもらわなくもいいさ。ここにいる連中は自分で自分の面倒はみれるからな」

確かに俺を始めガーグさん、イントルさんは女性に面倒を見てもらうより自分で動いた方が早かった人だし。メリーもハンナさんも一人暮らし経験者だからな。

「メイドが一度受けた仕事は好悪に関わらず遂行するので受け付ける事はできません」

うわっ、空気おもっ。

「ガーグ、お前が折れてやれ。皆さん、ここにいるセシリーは昔ガーグに命を救われましてね。」

それでその時の恩を返せると自分から希望してきたんですよ」

命の恩人にあれ？

「ガーグさんいいじゃないですか。セシリーさんは宮廷魔術師でもある尊い身分のミツシエルさんから、命の恩人でもあるガーグさんの面倒を見る様に命令された。ガーグさんはミツシエルさんの知人だから失礼のない様にとね。それなら様付けでも違和感ないでしょ。ねっガーグ様」

「ザイツこの野郎。相変わらず口だけは達者だよな。わかつたよ、わかりました。ガーグ様でも、ガーグちゃんでも、好きに呼べばいいだろう」

「納得してくれましたか？それでは皆様。今お茶をお入れしますね」
無表情でお茶を配るセシリーさん。
苦い顔でお茶をすするガーグさん。

「さて、ガーグ。最初の依頼だ。ロディーヌの近くの川べりにギガントスネークが出没した。退治を依頼する。依頼料は200万バル悪くはない話だろ」

（コウサ、藪をつつかないのに大蛇が出てきちゃたね）

（すまん、今度から気をつける）

（大丈夫、メリーは蛇も好きだから）

今度は大蛇料理か…。

それで200万バルって事は日本円にしたら、100万円だから1人頭は、20万円かよ。

データボール参照

ギガントスネーク。

20mを越す巨大な蛇ですよー。

でも安心して下さい。毒はありませんから、ただジャイアントシープを絞め殺す力の持ち主ですけどね。

ギガントスネークの皮は丈夫で長持ちする素材で人気がありますよ。

そりゃ、そんだけデカくて力が強ければ毒は必要ないよな。
俺がいた世界のアナコンダも毒ないし。

「皆様、私はここで御無事を祈っております」

セシリーさんは、この状況でも無表情。

「別に祈ってもらう必要なんざねえよ」

なんか、ガーグさん感情的になってない？

「うーん。ギガントスネークの鱗ってガーグさんのミスリルソードで傷つけられますか？」

「はっ、当たり前だせ。真っ二つにしてやら」

「余り傷はつけないでくださいよ。皮の値段が下がりますから。後
ミッシェルさんロディーヌに手袋を売ってる店がありますか？」

「ありますよ。オーダーメイドを受け付ける店もありますから」
セシリーさん返しが早っ。

ありゃ、ガーグさん、なんか不機嫌になったら。

ザコとガーグさん その3 無表情？メイドエルフ（後書き）

今書きため中ですが、セシリィさんの所為でハンナが埋もれる危険が？

今日の書きため具合によっては、もう1話載せるかもしれません。
見たい人がいたらですけど

ザコとガーグさん その4 ギガントスネーク(前書き)

久しぶりに討伐系です

ザコとガーグさん その4 ギガントスネーク

side 功才

ギガントスネークは、川に水を飲みに来るジャイアントシープを狙うらしい。
だからミツシエルさんに教えられた川の川べりを歩いているんだけども。

いやね、ただデカくなりや良いってもんじゃないでしょ。

ギガントスネークは探すよりも、存在を無視する方が困難なぐらいに目立っていた。

確かにあんだだけ、デカけやジャイアントシープも一飲みできそうだよな。

「あれってバルドーに普通にいるんですか？」

「ギガントスネークは、本来もつと人里から離れた湖とかにいる蛇です。それでなきゃバルドーの首都を、ここに作りませんよ」

流星はイントルさん、でも何でハンナさんも誇らしげにしているんだろ。

向こうの世界の湖にギガントスネークがいたらネツシー扱いされそうだよ。

「希望としては餌を追って来たパターンであって欲しいですよね。」

ギガントスネークを追っ払う魔物とかは、あまり居ないですよね？」

「ザイツ正解だ。けどあくまであまりな。まっそんな化け物級の奴が出たんなら、もっと大騒ぎになってるさ」

ガーグさん、俺からしたらギガントスネークも充分過ぎる程に化物なんですけど。

「コウサ、あの蛇をどうやって陸におびき寄せるんだ？川の中に引きずり込まれたら終わりだぞ」

ハンナさんの態度が気持ち柔らかくなっている。

多分、メリーに首飾りを散々自慢されて諦めたんだろう。

「それはキチンと用意していますよ。イントルさんお願いします」

「ザイツ殿、本当にこれでギガントスネークは上がってくるんですか？」

俺が準備したのはお湯が入ったシールドボール。

「大丈夫ですよ。まずはギガントスネークの手前の川岸にある草むら辺りに1個投げて下さい。熱いからキチンと手袋をはいてお願いしますよ」

ドンツと音がしてシールドボールが草むらに着地した。

（よっし。ギガントスネークが反応した）

「イントルさん、次はもう少し後ろにお願いします」

「わ、わかりました」

イントルさんが投げたシールドボールが着地する瞬間に、手前のシールドボールに対して

「マジックキャンセル」

獲物が逃げたと勘違いしたギガントスネークが、次のシールドボールに標的を変える。

「イントルさん次もお願いします」

「わかりました。しかしザイツ殿、なぜギガントスネークはシールドボールに反応したんですか？」

「正確にはシールドボールの中のお湯に反応したんですよ。蛇は熱で獲物を感知する生き物ですから。…マジックキャンセル」

うん、大分川から離れたな。

ギガントスネークがシールドボールを飲み込んだのを見計らって

「マジックキャンセル」

体の中に直接熱湯を流し込まれたギガントスネークは悶え苦しんでいる。

さてとギガントスネークに捕まる前に決めますか。

「メリー、4をギガントスネークに満遍なく撃って」

「コウサ、わかったよ。ドライアロー」

蛇って、体が乾くと弱るんだよね。

案の定、ギガントスネークの動きが鈍っていた。

「イントルさん、ギガントスネークの頭をミスリルスティックで思いつきり潰す様にして叩いて下さい」

「ザイツ殿、了解です」

蛇を退治するには、頭を潰すのも、効果があるんだよ。

蛇って生命力強いから体に傷がついたくらいじゃ即死しないから。

「それじゃガーグさん、ハンナさん、ギガントスネークの首を切り落として下さい」

確実に蛇の命を断つには、これが一番効果的。

「動かない蛇なんて欠伸がでら」

「自分はキコリの娘だぜ。丸太を切るのに比べたら楽勝だよ」

ハンナさん、確かに太さは丸太級だけどね。

「なんか呆気なかったね。でかいとはいえ、所詮は蛇か」

ハンナさんギガントスネークに触るつもりじゃないだろうな……

(ちっ、間に合え。シールドボール)

「へっ?うわっ!」

なんとかギガントスネークの体をシールドボールに閉じ込める事ができた。

首を無くしたギガントスネークの体がシールドボールの中で暴れている。

「ハンナさん、早く来て下さい。下手すりゃシールドボールが持ちません」

シールドボールは球体だから、攻撃に強い訳で、中からの攻撃には脆いかもしれない。

（危ねー。ハンナさんがもう少し遅かったらギガントスネークに潰されていたかも）

.....

壊された。

物の見事にシールドボールが。

ギガントスネークの体はのた打ち回りながら、そこら中の地面にかい穴をあけていた。

あんなのもらっていたら、ノシコウサの出来上がりだよな。

「駄目だよ。ハンナ、蛇は首を切っても体が動く時があるんだから。キチンと血抜きが終わってからじゃなきゃ危ないよ」

流石はメリー。

視点は何時でも獵師。

「ザイツ、あれはまだ生きてるのか？」

「ガーグさんもう死んでますよ。ただ反射神経が、まだ有効なだけです。それじゃミツシエルさんに連絡をお願いします。あっギガントスネークの皮はミツシエルさん経由で売りますから」

「えー、ギガントスネークのお肉食べたかったのに」

メリー、やっぱり狙ってたんだ。

「代わりに俺が何か作るよ。メリーそれなら文句ないだろ？」

side ミツシエル

まさかギガントスネークをこんなに綺麗な形で仕留めるとは、嬉しい誤算ですね。

ガーグお前の仲間に期待しているぞ。
これはお前の為でもあるんだからな。

ザコとガーグさん その4 ギガントスネーク(後書き)

区切りを良くしたいので、もう1話投稿します

ザコとガーグさん その5 ガーグVSセシリー

side 功才

ありがたい事にギガントスネークの皮は、180万バルになった。
あの大きさに無傷の状態は珍しいとの事。

ちなみに肉や肝は50万バル、ギガントスネークの肝を食べると精
がつくらしい。

赤マムシならぬ、巨大蛇でパワーを付けたい貴族も少なくないと。
良かったついでに、こっちも面白い事になっている。

ミッシェルさん別宅に帰って来た時の事。

「皆様お帰りなさいませ。御無事で何よりです」

セシリーさんは、相変わらず嬉しさが全くこもっていない笑顔で出
迎えてくれた。

「けっ。あの程度の依頼を無傷で、こなせなきゃデュクセンじゃ冒
険者なんてやってらんねよ」

ガーグさんて、何かセシリーさんに突っかかるよな。

「皆様、ガーグ様はデュクセンでよくお怪我をされていたのですか
？」

何故だろう、セシリーさんの笑顔が何時も以上に冷たい。

「ははっ、無茶、無謀、無理やりがガーグさんの特権ですからね。ザイツ殿と組む前は、怪我をするのは日常茶飯事でしたね」

イントルさん、やっぱりそうなんだ。

「へー、ガーグ様は、自慢する割には弱いんですね」

エルフって人間を嫌いなのかな。

「誰もあなたに自慢してねーよ。胸くそわりい酒でも飲んでくらっ
！」

「都合が悪くなると、お酒にお逃げなるんですね」

「あっ、なんか文句あんのかよ？」

ガーグさん、そんなムキにならなくても。

「も・ん・く？大有りよ。て言うか文句しかないわよ。私がどれだけ心配していたか分かっているの？」

あれっ？セシリーさん？

「誰が心配してくれって頼んだよ」

あっ、ガーグさん嬉しそう。

「うわっ、子供じゃないんだから素直にありがとうがとっつて言いなさい

よね。何よ、坊主なんかにしちゃってさ」

「俺は何時でも素直だよ。素直じゃねーのはお前だろうが？お前の澄ました面を見てたらむず痒くなるんだよ」

「いい年こいて、礼儀も碌にできてないハゲよりマシよ」

「うわっ、可愛くねー。そんなんだから嫁の貰い手がねえんだよ」
「何よっ。人の気も知らないで！！ガー君の馬鹿・ハゲ・意地悪」

ガ、ガー君？

「セシリー久しぶりに会った幼なじみに対して、普通そんな事を言うか？」

やっぱり知り合いだったんだ。

「そうよ。久しぶりよ、私がいくら心配してもガー君は手紙の1つもくれないんだから、随分と久しぶりなんだからねっ」

「俺にも事情があるんだよ。この分からず屋エルフツ」

「ハゲツ」 「泣き虫」 「鈍感」 「ガキツ」

子供だ、子供のケンカだ。

(コ、コウサ。ガーグさんどうしちゃったの？)

(多分、セシリーさんは連絡を寄越さないガーグさんに腹をたてていて、ガーグさんは久しぶりに会ったセシリーさんの態度が冷たい

から意地になってたんだろ(うな)

(さっすがコウサ。他人の恋愛には鋭い)

はい、それに関しては反論の仕様がございません。

「はあ、あの2人は進歩がないですね。お互い素直じゃないと言うか何と言うか」

いつの間にか入ってきたミツシエルさんが、大きな溜め息をついていた。

「ミツシエルさん、やっぱり3人は幼馴染みだったんですね」

ミツシエルさんは俺と近い人種だと思う、下手に演技するよりも探り合いに集中しておこう。

「ええ、私とガークとミツシエルは幼なじみですよ。コウサさんは何でそう思ったんですか?」

「ガークさんはデユクセンでは必要以上にエルフを遠ざけていましたからね。それに普段のガークさんなら冷たい態度をとられても相手にしませんもん。それでアレはいつ終わるんですか?」

「ほっといて大丈夫ですよ。久しぶりに会えて嬉しさのあまりにいちやっついてるだけですから」

「「「いちやっついてねーよ(ないわよ)」「」」

「ほらね、もう息がピッタリだ」

side ガーグ

「それでミツシエル。今度は何の用だ？」

ちきしょー、ザイツだけじゃなくイントルやプルングの嬢ちゃんまでにやついていやがる。

「ギガントスネークを退治してくれた御礼ですよ。それと次の依頼です」

「そんなこつたるうと思つたぜ。それで次は何をすりゃいいんだよ」

「護衛を頼みます。護衛対象は宝石商のアルダス・マコーリーから買った物です」

「そりゃわかつたが何で俺達が護衛につくんだ？お前が依頼をしてくる宝石商なら私設の護衛隊位いるだろ？」

「国でマコーリーから精霊石を買ったのですが、宿っている精霊が国の兵隊やマコーリーの私設兵を嫌がりましてね。その点、ガーグなら大丈夫ですし」

「ちつ、わかつたよ。でどこからどこまで運べばいいんだよ。何が護衛だよ、護衛兼運搬じゃねーか」

「リーゾンからロディーヌの大聖堂まで頼む」

「ガー君、精霊石なら私も付いて行ってあげよーか？ガー君がどう

してもって言うんなら付いて行ってあげてもいいよ」

「ああセシリー頼む。戦闘になればお前に精霊石を任せるからな」

side ロッキ

「精霊ですか。お前の顔見知りの精霊ですか？」

「いえ、あの程度の下位精霊に知り合いはいませぬ」

「でしょうね。その精霊に言っておきなさい、功才君に力を貸しちやいけませんよと」

「わかりました。もし精霊が功才殿に危害を加えようとしたら如何いたします」

「私の弟子に手をだす愚かな精霊ですよ？石ごと粉々にしてやりなさい」うん、これでオツケーです。

功才君が精霊魔術なんて覚えちゃったら、私がつまんないですもん。まして功才君が精霊に攻撃されたら即お陀仏ですからね。

ザコとガーグさん その5 ガーグVSセシリー（後書き）

実は最初セシリーさんは、全然違うキャラでした。

ガーグ様な感じの一途キャラでしたがどメリーとかぶる気がして変更をしました。

そしてやりたいです

人気投票

今日か明日に

皆様の意見を聞いて開催したいです

幕間 ザコの母と姉

side 財津美華

今日はドラマの宣伝を兼ねたラジオのトークショーだけでも、あまり乗る気がしない。

今は功才の家出もあり、私生活の事はあまり話したくないから。事前に功才は一般人だから触れない様に伝えてある。

「今日は女優で母親でもある財津美華さんをお迎えして色々なお話を聞いていきたいと思います。子育てと女優の両立は大変じゃありませんか？」

「いえ、うちの子達は聞き分けが良すぎるくらいで、それに子供達が小さい頃は主人の両親に随分と助けてもらいましたから」

そう言えば功才がワガママを言ったのは何歳までだったかしら？あの聞き分けがいい功才が家出をするなんて。

「そうですか。美華さんは、お子さんの学校行事にも積極的に参加なされるそうですけども、何か思い出はありますか？」

「そうですね。栄華は今はいんな感じですけども、小さい頃はお転婆で運動会で活躍していましたね。逆に美才は小さい頃は恥ずかしがり屋さんで、授業参観に行っても手を挙げられなかつたんですよ。まさかあの子がアイドルになるなんて、私が驚いています」

功才との思い出は……駄目だ。

功才が赤ちゃんの頃しか思い出せない。

私は功才を産んですぐに仕事に復帰したし、学校行事もお義父さん、お義母さんに任せきりだったものね。

「意外ですね。それでも今は一緒にお仕事できて嬉しいんじゃないですか？」

「ええ、家にいるよりテレビ局で会う事が多い変な家族ですから」

それなら功才とは、どうやって会ってたかしら。

ああ、そうね。

功才は私に代わって家事をしていたもんね。

「母さんは、仕事で疲れてるから暇な俺がやっておくよ」

その言葉に甘えて、あの子の背中しか見てなかったのかもね。

功才なら聞き分けてくれる

功才の事はお義父さん達に任せておけば大丈夫だ。

功才がいるから家の事は大丈夫だ。

でも今は功才がいない。

そうか。

私がこの仕事に乗る気がなかったのは、功才をきちんと見ていなかった自分を確認するのが嫌だったのね。

無関心も暴力、そんな言葉があったわよね…。

side 財津 栄華

功才の部屋に入って、あの子のアルバムを見てみた。

功才の写っている場所は、いつも目立たない隅っこの方。

特にあの4人と写っている時は、成長するに連れて距離が出来ていた。

（家が金持ち？だから何？貴女はいくら稼げるのかしら？
読者モデル？

たまにしか雑誌に載らないのに？
いいわよ。きちんとプロのモデルになったら業界の厳しさを教えてあげる。

野球でエースで4番？甲子園に出てプロになったら認めてあげる。
暴走族のリーダー？ケンカが強い？プロの格闘家の人が聞いたら笑うわよ）

功才にも、これ位の強さがあれば良かったのに。

（功才ごめんね。お姉ちゃん自分の忙しさにかまけて貴男に伝えていない事があったの。功才が私の健康を気遣って作ってくれたご飯にお姉ちゃんは、凄く助けられたんだよ。どんな辛いお仕事をしても家に帰れば、功才が作ってくれた温かいご飯が待っていてくれたから。）

功才、貴男の素晴らしさは誰かの為に一生懸命になれる事なのよ）

（功才、忘れないで。貴男は大切な可愛い私の弟。それは何があっても変わらないんだからね）

幕間 ザコの母と姉（後書き）

この幕間を載せないと人気投票ができないので、栄華姉ちゃんは、強気キャラです。

ザコの人気投票（前書き）

1票か2票しか入らないかもしれない。

でも1度はやってみたかった人気投票企画。

ユーザー登録していない方も書き込めますので、投票して下さい。
お願いします。

ザコの人気投票

1・財津功才

この小説の主人公。

職業は小技師、面白いと言っただけで師匠によってオーディヌスに喚ばれる。

自分の弱さを自覚しているから、師匠から教わった欠陥魔法を組み合わせて戦う。

2・メリー・プルング

コウサ大好きな元女優の卵。

今はコウサの彼女兼アーチャー。

趣味は狩りの本格的アウトドア美少女。

顔は癒やし系、性格は若干ヤンデレ気味。

胸はご立派な大きさ。

3・ロツキ・バルボア

功才をオーディヌスに喚んだ張本人。

怪しさ満点、自分が楽しむ為には労力を惜しまない。

人間では扱えない種族を従えたり、デユクセン皇帝を脅す力を持つ。
自称魔導師。

4・ガーク

ガーク冒険者隊のリーダー。

強面坊主頭で豪快な性格。

功才のいい兄貴分。

5・イントル

ガーク冒険者隊の良心。

その篤実な性格を多くの冒険者に慕われている。
実は知恵の身を食べたトロールで武道家

6・ハンナ・ハンネス

フランソワ乙女騎士団から出向きたメリーの幼なじみ。

一人称は自分の硬い性格。

騎士に憧れている。

今はイントルさんにも憧れ中。

7・ミント・ブロッサム

功才と最初に組んだ色々と残念な魔法騎士。

口調は劇に出てくる騎士なみに大袈裟、でもシャインの前では甘えん坊になる。

顔は美少女でショートカット。

胸は残念胸。

8・シャイン・マクスウエル

伯爵家の長男にして銀髪的美男子。

功才を気に入り認めている。

ミントを好きだったが身分の関係で我慢していた。
功才の企みにより、晴れて両思いに。

9・ミッシェル・スターローズ

ガーグの幼なじみにして、バルドーの宮廷魔術師。

スターローズ家の三男で王族に連なるも継承権はない。
功才と同じぐらいに腹が黒い。

10・セシリー・エルレイン

ガーグの幼なじみのエルフ。

ガーグとよくケンカをする、でもガー君は大好き。

11・財津栄才

功才の父親にして有名俳優。

若くから売れっ子俳優になった為か、独善的な性格。功才以外の家族には優しい。

12・財津美華

功才の母親。自分と娘の仕事の忙しさと功才の聞き分けの良さから無関心状態に。

13・財津栄華

功才の姉で若手人気女優。

功才の事は可愛いが、仕事の忙しさと構う余裕がなかった。幼なじみ4人組みを井の中の蛙として軽蔑している。

14・財津美才

功才の妹にして人気アイドル。

思いつ切り甘えられる存在だった功才をなくして落ち込み気味。お兄ちゃんとお兄ちゃんの作る玉子焼きは美才の物。

15・財津万才

功才じいちゃん。忙しい両親に代わり功才を育てた。

功才の才能を信じているからあまり心配をしていない。

16・財津梅

功才のばあちゃんにして料理の先生。

栄才と功才の仲を一番理解している。

17・三條小百合

功才の幼なじみにして三條財閥のお嬢様。

18・夏海結

功才の幼なじみにして、功才がオーデイヌスにくる切欠を作ったスポーツ美少女。

功才がいなくなった原因の為に悩んでいる。

19・鷹丘勇牙

功才の幼なじみにして暴走族のリーダー。

功才がいなくなって始めて溝に気付く。

ワイルドなイケメン。

20・風雅院隼人

功才の幼なじみにして、顔、頭、運動神経が優れている。

頭が良い為に、諦めも早い。

21・山田先輩

功才の高校とバイトの先輩。

家柄や幼なじみを抜きにして功才を可愛がってくれる先輩。

功才が自分の世界で心を許した数少ない存在。

22・デククセン皇帝

デククセン皇国の皇帝。

本来は厳格な性格であるも、ロッキ師匠に脅されて万年胃痛状態。

23・ルイス・デククセン

病弱なデククセン皇帝の次男。

虫は好きだけでも標本は嫌い。

頭も性格も良い。
シャインを慕っている。

24・フランソワ・ホーリック
バルドールの騎士家に生まれるが、奴隷制度を嫌いデュクセンにてフランソワ乙女騎士団を作る。
ミッシェルからガーグの近況報告を頼まれていた。

25・トム・チーキン
ドルムーンにてミスリルゴーレムを使ってミスリルを掘っていた。
ゲードに恋人のレミを奪われてミスリル鉱山に籠城する。
功才の企みで救われる。

26・レミ
トムの幼なじみで恋人の美少女。ゲードに連れ去られるも、怪我をしても体は許さなかった。

27・イ・コージ
人嫌いでゴブリン大好きな魔術師。
一番のお気に入りにはメイドゴブリン。

27・ゲース・ドンゲル
デュクセン皇国の伯爵。
功才に間接的に関わって、立場をスタボロにされる。

28・ゲード・ドンゲル
ゲースの次男。
モテない男の幸せを壊して功才の怒りを買って、一般市民に落とされる。

29・デュラン・マクスウェル
シャインの弟。

精霊魔術を使うが、思慮は低い。
只今皇国騎士団にて鍛え直し中。

ザコの人気投票（後書き）

なぜこんな無謀企画をしたかと言うと、今後ガーク冒険者隊以外のキャラも本編に絡ませていきたいからです。

作者のお気に入りキャラと読んでくれている方のお気に入りキャラ

（いたらですけども）違うと思いますので。

調子にのりすぎて炎上しないだろうな。

1位になったキャラの幕間は書きたいです

調子にのった企画をしてすいません

期間は皆様の票次第で、少ないと自然消滅になるかも
せめて一週間は待ちます

ザコとガーグさん その6 腹黒2人に、はめられるガーグさん(前書き)

人気投票が、予想を遥に超える反響で驚いています。

明日、途中集計しよ。

ちなみに作者のお気に入りはガーグ冒険者隊、美才、そして今回活躍のミッシェルさんです。

ザコとガーグさん その6 腹黒2人に、はめられるガーグさん

side 功才

データボール参照精霊石

力の弱い精霊は自然物に宿って存在を維持するんですよ。
でも弱いといっても、あくまで精霊基準。

人族じゃ太刀打ちできませんし、授けてくれる魔法も強力なんです
から。

でも功才君は安心して下さい。

貴男の優しい師匠は、その精霊さんをおど…じゃなく精霊さんとお
話をして功才君に深く関わらない様に言っておきましたからね。

師匠の規格外は置いといて、つまり俺は師匠が脅した精霊と旅をし
なきゃいけないと。

うわっ、気まずー。

やっぱり、ゲームみたいに“我が力を汝に貸し与えよう”の展開は
ない訳ね。

「それでミッシェルさん、マコーリーは精霊石をどこで手に入れた
んですか？」

「元々は地方貴族の家宝だったんですけども、マコーリーに借金の
形として渡したらいいです」

何とも世知辛い話

「それで精霊は怒ったりしないんですか？我が守ってきた一族を陥れてとか」

「あー、そんなのはねーよ。精霊は人族の祈りの力にしか興味ねえからな。きちんと祀れば力を貸すし供える祈りの力が途切れたら、直ぐに鞍替えしちまうよ」

精霊って、結構現金なのね

「それじゃ金にあかせて奴隷を大量購入して祈らせておけばいいんじゃないですか？」

「それが彼奴ら贅沢だよ。純粹に自分を敬った祈りの力しか好まないんだよ。まっ確かに無理やり祈らされた力なんざ食いたくねーはな」

奴隷の恨みつらみがこもった祈りの力が、辛くてエグミがありそうだもんな。

「それじゃ何で精霊は動くのを拒否しているんですかね。大聖堂なんて行ったら祈りが食べ放題でしょ？」

「普通の人間は精霊と対話が出来ねえんだよ。出来ても一方通行か短い時間しか会話ができねえのさ。いきなり祈りが途絶えた上に安置されていた場所から動けって言われて納得する奴はいねえだろ？」

ガーグさんって、精霊の事を妙に詳しいんだよな。でも、まだ突っ込むのは早い。

「それじゃ盗賊とかが奪いに来る可能性は低いんですね？」

確実に精霊に拒否されそうだもん。

「来るとしたら、俄か盗賊さ。信者を増やしたい神殿とか聖堂の関係者のな」

あー、精霊にしてみれば飯（祈りの力）が重要であって手順は関係ない。

でもそれなら

「もし襲ってくる奴らがいたらバレたくない手前、必死に攻めてくる可能性が高いですね」

盗賊の真似事をする神殿なんて、誰も拝まないもん。

それなら移動は日中で人目の多い場所を行った方が安心だよな。

いや、むしろ...

「ミッシェルさん、ちょっとばかり相談があるんですけども」

side ミッシェル

「なんですか、コウサさん？……ほづつ、それは面白い。いっその事、ごうじませんか？」

「あー、そうきましたか。それなら…はどうですか？」

「いいですね。早速手配をしますよ」

ガーグ、君は本当に私の親友だ。
こんな面白い発想を持つ人を見つけてくれたんだからな。

side 功才

「おいっころらっ。ミッシェル、ザイツこれは何のつもりだ」

「何って鎧ですよ？ガーグさんが着る」

「俺が言いたいののは、この派手なふざけた鎧は何なんだって聞いているんだよ！」

ガーグさんが指差す先にあるのはプレートアーマー。

ただしスカイブルーに塗られて、頭には羽飾りがついてボディに過剰な装飾が施している。

「大丈夫ですよ。兜を被ればガーグさんだって分かりませんから」

「だ・か・ら・何で、こんな派手な鎧を着なきゃいけないんだよ」

「ガーグそれはな目立つ為だよ。事前に通過する村々には、有り難い精霊石を拝めるまたとない機会だって触れ回っている。精霊石に宿る精霊の名前も含めてな。これだけ騒ぎになった精霊石を奪おうとする馬鹿はおるまい？」

因みに鎧は俺の提案で、村へのお触れはミッシェルさんからの提案。

「そりゃそうだけでもよ。これじゃ見え辛くて護衛にならねぞ」

「ガーグさんが乗る特製馬車は、俺達が護衛しますから」

「何だよ、その特製馬車ってのは」

「気になります？見てみますか？」

今回用意してもらったのは名付けてオープン型パレード対応馬車。

屋根のない馬車を使う事で周囲からも精霊石を眺める事ができる仕組み。

当然、装飾はド派手。

精霊石は中央にあつらえた台座に置く。

そして台座を囲む様に2脚の椅子を設置した。

「こんな所に精霊石を置いた振動で落ちたらどうするんだよ」

ガーグさん必死だな。
でも

「安心して下さい。台座ごとシールドボールをかけますし、クッションも置きますから」

「くー、ザイツ貴様ー。なら何で椅子が2つもあるんだよ」

「ガーグ分らないか？精霊石の護衛にはもう1人予定していた人がいるだろう。セシリー入ってくれ」

セシリーさんが身にまとっているプレートアーマーは真っ赤に染められている。

ガーグさんとの違いは色と兜からセシリーさんの金髪が出せる事。何よりも

「セシリー？おいセシリーそんな重たい鎧を着て大丈夫か？ザイツ、エルフ族は筋力が弱いんだぞ！。ましてセシリーは、か弱い女なんだから」

side ガーグ

嫌な予感がする。

俺の叫び声を聞いた腹黒2人が目を合わせてニヤリとした。

「ガー君、みんなの前でそんな照れちゃうな。あつ大丈夫だよ、この鎧は凄く軽いんだよ。ザイツさんが魔法を掛けてくれたんだよ。か弱い私が着ても大丈夫な様にね。そっか、ガー君は私を心配してくれたんだ」

腹黒2人が揃った所為で、相乗効果が生まれやがった。

「あつ、料金は心配しないで下さい。マコーリーさんには、沿道で精霊石を見に来た客相手に商売をしてもらいますし、この馬車も今回の護衛が終わったら貴族のコレクション発表に有料で貸し出す手筈を取りましたから」

楽しんでやがる。

あの2人は成果を万全にしながらも、俺をダシにして楽しんでい
がる。

確かに、これだけ派手に動けば奪いにくる馬鹿は少ないだろう。

精霊石を拝む時は宿っている精霊の名前を言わなきゃ効果がな
い。だから精霊の機嫌を損ねて大惨事になる事はないか。

ザコとガーグさん その6 腹黒2人に、はめられるガーグさん(後書き)

反響が嬉しかったから、これから頑張って執筆します。

ザコとガーグさん その7 ガーグ冒険者隊それぞれの旅模様（前書き）

人気投票が予想以上の反響で感動しています。

なんで、そのキャラが好きなのが教えてくれる方もいて嬉しくてたまりません。

5日まで継続しますので、このキャラにも投票したいって思ったら再度投票して下さい。

ザコとガーグさん その7 ガーグ冒険者隊それぞれの旅模様

side メリー

ロディーヌからリーゾンまでは馬車で片道2日。

でも帰りはゆっくり行くから+1日の計5日間の旅になるんだって。帰りは緊張するから、行きはコウサとゆっくりお話ができると思っただけども。

コウサは道のチェックに専念していて、あまりお話をしてくれないんだよね。

ハンナはハンナで、イントルさんに色々な質問を浴びせているし。でも

「この道は詩人ジャネット・シャルルの光の小径によまれた場所なんですよ。あの詩の通り街道脇の木々に光が反射して得も言われぬ風景を作り出していますね」

「はいっ！自分もジャネットさんは好きです。初めて会った時は感激しました」

ハンナ…。

ジャネット ・シャルルって100年前に死んでるんだよ。

「ガー君、ガー君。…おい、そのハゲ無視をするな。ちゃんと返事をしろっ」

「それなら、そのこつ恥ずかしい呼び方を止めるっ」

「なんでよガー君はガー君じゃない」

「俺はアヒルじゃねえんだよ。これでもデユクセンじゃ口が悪い・態度が悪い・顔が怖い・三拍子揃ったガーグって恐れられているんだぜ」

「それ自慢？鈍感・意地悪・酔っ払いの三拍子の間違いでしょ」

「んだと泣き虫エルフ！！」

「何よ！！鈍感ハゲツ」

「お前は先からガキかつ！」

「そうだよ。私はまだ子供。だから子供の頃から呼び慣れているガ
ー君で呼び続けるんだから」

この2人は、あれでケンカにならないから不思議なんだよね。

それで肝心のコウサは、やっと街道チエックを終えたみたい。

「コウサ、ここの道路はチエックしないで平気なの？」

「これだけ遮蔽物がない所で、襲う奴はいないだろ。地図でいくと
メリーにも協力してもらいたい場所があるからよろしく」

「うん、わかったよ。それじゃ、それまでゆっくりお話しよ」

何といつても、私は功才のパートナーなんだから。

それから30分ぐらい走ると、両脇を森に囲まれた道に着いたんだ。

「あつ、すみません。1回止めて下さい。俺とメリーはここで降りますから。出口で待っていて下さい」

「コウサようやくメリーの出番だね。それで何をすればいいの？」

「この森で大人数身が隠せて襲撃ができそうな場所を教えてください。身を隠せて馬車を見張れる、そして襲撃もしやすい場所なら限られてくる筈だから」

「うーん、条件を満たすのは、あそこぐらいかな。コウサ毘でも仕掛けるの？」

「今毘を仕掛けても、外されちゃうよ。襲撃場所が限定できたら対策がたてやすいからさ。さっ行くこつ」

side 功才

森を抜けると、馬車がちゃんと待機していれくれた。

「お待たせしました。そーいや精霊石に宿っている精霊ってどんなのかガーグさんはわかります？」

「宿っている石は、蛍石。精霊の名前はフローラル、下級精霊だけでも人間は先ず勝てないな。授けてくれる魔法は遠見の魔法って聞

いたぜ」

やっぱり、精霊って下級でも強いんだね。
改めて師匠に感謝しなきゃ。

精霊の情報も聞けたし、俺のエネルギー源、メリーの笑顔を補充し
よっと。

「メリー、飴食べる？」

飴って言っても、ベッコウ飴。

こないだの砂糖が余ったからベッコウ飴にしといた。
ベッコウ飴は婆ちゃんが昔よく作ってくれて、俺は美才によく作っ
た。

「飴？お菓子なの？、食べる、食べる」

「そっぴやメリーは好きな花ある？」

美才には、良く動物を作ってたけど、メリーに好きな動物を聞いた
ら意味が違う答えが返ってきそっぴだし。

「うーん、チューリップかな」

良かった、それなら何とかかなりそっぴだ。

先ずは

「アイスキューブ」

「ヒートハンド」

水を作って良く手を洗う。

そして、自分の手に

「プチデス」

殺菌消毒を施工。

メリーの為なら手にいる常在菌も消毒。

「ヒートハンド」

固まっているベッコウ飴を柔らかくして加工。

「アイスハンド・ヒートハンド・アイスハンド……」柔らかくして、形を整えてアイスハンドで固める。

あくまで手はかざすだけで、触れない様にする。

「こんな物かな。はいっチューリップ、ちゃんと食べれるから」

side メリー

コウサが、手渡してくれたのは琥珀色をした一口サイズのチューリップが4個。

これ、食べれるのかな？

勇気を出して口に含むと優しい甘さが口に広がった。

多分、コウサは道を調べて私の相手ができないのを予想して準備してくれたんだ。

よく友達からは、男の人は付き合う前の方が優しいって聞いたけども。

功才は違つんだよねー。

ザコとガーグさん その7 ガーグ冒険者隊それぞれの旅模様（後書き）

とりあえず精霊石編が終わったら、リクエスト頂いた幕間を数話書かせてもらいます。

予定は

トムとレミその後

イ・コージの華麗なるゴブリンとの日々

監視役の気持ち

等を予定しています

ザコとガーグさん その8 ザコと精霊(前書き)

久しぶりに師匠が出て来ます。

ちなみに人気投票でマイナス票が入ったのは、師匠と功才父だけでした。

ザコとガーグさん その8 ザコと精霊

side 功才

無事にリーゾンに到着。

結局、襲撃の可能性が高い場所はその森しかなかった。

「それで精霊石は、どこにあるんですか？」

「マコーリーが管理している貴族の屋敷にあるそうだし」

管理ね、大方貴族の財産も管理してるんだろうな。

「それじゃ、精霊さんに会いに行きますか？」

そう言えば蛍石は、フローライトって言うんだよね。だからフローラルか。

名前で精霊少女を創造した俺が馬鹿でした。

うん、蛍石だもんな…。

精霊は眼鏡をかけた人間と変わらない大きさの蛍だった。

しかも性格が微妙と言うか何とか言うか。

「君達の言いたい事はわかるんだけど。だけど。ほらっ、俺って精霊な訳じゃない？そう簡単に人間の都合で動けると思われたら困るんだよねー」

うわっ、尻を7色の光に光らせてやがる。
これを敬えってのか。

「まあ、やっぱり条件次第だよー。精霊石の取り扱い方とか大事じゃん？俺の精霊石って、俺と一緒に傷つき易い訳よ。わかる？美しいものほど傷つきやすいんだよー。悲しいけどこれって自然の摂理なんだよねー」

やばっ、ガーグさんの輝く頭に青筋が浮かんでいる。

「フローラル様よくわかったっすよ。あっ申し遅れたっすけど、交渉を任せられているザイツ・コウサ、猿人族っす。フローラル様と2人で条件を煮詰めたいんですけどお願いしていいっすか？」

「仕方ないなー。俺って基本優しい精霊な訳よ。近くに可愛いメス蚩がいる場所だったりすると気分良く動いちゃうかもよ」

フローラルが俺の肩に手？（足）を乗せてもたれかかって来た。
しかも尻をピンクに光らせていやがる。

こんな精霊でも2人つきりは、ヤバいらしくみんなが心配をしているみたいだ。

メリーは顔が真っ青だし。

それじゃ師匠に電話をかけてハンズフリーにしておけば準備が完了。

「それで、君の名前はなんだっけ？……まっ、猿人族だから猿でい

いか。なっ猿」

「呼び方はフローラル様の自由で構わないっすよ。それで移動なんすけども」

「だから猿は駄目なんだって。まずは俺のモチベーションをあげなきゃ」

「そうだ。ひとつ言い忘れていたっす。俺の師匠の事なんすけど」

「いって猿の師匠はどーせ、猿でしょ？聞かなくても聞いても変わらないよ」

「おかしいっすね。師匠はフローラルさんとじっくり話をしたって言うってたんですけども」

「猿の事なんて一々覚えてる訳ないじゃん。ほらっ、俺って結構な人気精霊な訳だから」

師匠、ありがとうございます。

ロッキ爆弾を投下させてもらいます。

「ちなみに俺の師匠の名前はロッキですよ。ロッキ・バルボー」

あっ、フローラルが硬直した。

尻が白く光ってるって事は、頭も真っ白なんだろうっか。

「嘘っ、嘘嘘嘘。いや確かにこないだのロッキ様は見えられました

よ。お弟子さんの話もしてましたし。だからてっきり来るのは上位精霊だって思ってたんですよ」

フローラル、テンパリまくり。

「はっはーん。さてはお前あれだな、ロッキ様の名を語って俺の事を拘束しようとしたな？猿の癖に滅っしてやる！」

フローラルの尻が赤く光って、もの凄い力が溢れ出して来た。まともに戦えば俺なんか瞬殺されるだろう。

でもまともに戦う気なんてないけど。

一応、シールドボールをかけておいて

「あつ、師匠聞こえてましたか？残念ながらフローラルは師匠の事を覚えていませんでした」

「ええー功才君、よく聞こえましたよ。私は標本を集める趣味がありますね。ちょうど巨大蛍の標本が欲しかった所ですから今からそっちに行っちゃってホタルを逝かせちゃいますね」

「これからロッキ師匠来るそうですよ。心配しなくても師匠は転移魔法も使えますから」

「ここは俺の結界内だぜ。そんな簡単に来れる訳がないだろ？」

それじゃフローラルの後ろにいるお方は誰なんでしょうねー。

それは無言でフローラルの触覚を鷲掴みするロッキ師匠なんだけども。

「あれっ。ロ、ロッキ様いついらしたんですか？やだなー、ドッキリですか？ほらっ猿人族の君、今すぐお茶をお出しして。……あっ、触覚をそんなに強く引っ張っらないで下さいよー」

「彼の名前はザイツ・コウサ君、私の可愛い弟子ですよ。貴男は精霊が人に力を振るっちゃいけないのを知らないんですか？」

「いやだなー。忘れる訳がないじゃないですか。あっ何をするんですか？頭に何か塗ってませんか？」

あー、蛩って、真っ黒になるとゴキみたくなるんだよな。

あっ、光が消えた……。

「師匠ありがとございました。助かりました」

「いえいえ弟子に頼られるの師匠冥利につきますから。それに私は安心したんですよ。功才君はちゃんと自分が適わない相手を見極めたんですから。」

功才君は最近活躍していましたから、精霊と戦うんじゃないかって心配してたんですよ」

「俺は自分を知ってますよ。師匠から教わった魔法がなきゃオークにも勝てませんから」

師匠はそれを聞くと優しく笑ってくれた。

「それでいいんですよ。ほらっ精霊石です、あつても私が何時でも電話に出れるとは思わないで下さい」

精霊石を持って帰って来たら、メリーが抱きついて来た。ずっと泣いていたんだろう、顔がグシャグシャだ。

「ゴウザ、ゴウザよがっだー。なんか凄い力を感じたがらメリーすっごい心配しだんだよー」

メリーは、泣きながら喋っていた。

「ザイツ殿、ご無事でしたか。良かった、本当に良かった。」

イントルさんは安堵の溜め息を漏らしている。

「まったくザイツ。無茶は俺の特権なんだからな。あまりリーダーに心配をかけるんじゃないよ」

ガーグさんには、叱れた。

「すみません。ヤバかったですけど、共通の知り合いがいて助かりました」

俺は幸せだよな。

俺の為に、直ぐに駆けつけてくれた師匠。俺を心配して泣きじゃくっていたメリー。心から心配してくれていたイントルさん。

本気で叱ってくれたガーグさん。
ありがとうよな。

ザコとガーグさん その8 ザコと精霊(後書き)

引き続き人気投票を継続したいです。

ザコとガーグさん その9 ザコと商人

side 功才

どうしよう？

てっきりメリーにショックアローを撃たれると思っていたのに。

メリーは半ベソ状態で、俺の手を握ったまま一言も喋ってくれない。

「その、ごめん。次かは何をするかメリーにはきちんと話すから。不安にさせてごめん」

.....

メリーが小さくコクツて頷いてくれた。

これは罪悪感が半端じゃない。

「ザイツ殿はプルングさんにとって大切な人なんですから心配させた事を反省しなきゃ駄目ですよ。勿論ここにいる全員が心配したのを忘れちゃいけませんよ」

イントルさんが優しく諭してくれる。

「さて、湿気た話は終いだ。ザイツは罰としてプルングの嬢ちゃんに指輪でも買ってやれ。確かリーゾンには有名な宝石店がある筈だ」

(イントルさん、ガーグさんフォローありがとうございます！)

心の中で感謝をしていると、パチパチと湧いた拍手が聞こえてきた。

拍手をしていたのは、引き締まった体をした短髪の男。

「これはこれは精霊を説得してくれただけでなく、私の店でお買い物をしてくれるとは有り難い限りです」

「アルダス・マコーリーさんっすね」

「良く私だとお分かりになりましたね。ミッシェル様からお話は聞いておりますよ。ザイツ・コウサ様」

「この屋敷に入れて、店を経営している人間。そして精霊石の事も知っているのはマコーリーさんだけっすもん」

マコーリーさんは、確実に厄介な人だ、金を稼ぎながらも、欲には溺れている感じがしない。

敵に回せば厄介極まりなく、味方になったら利用されまくられるに違いない。

「流石はミッシェルさんが買うだけあって鋭い。出会いの記念に可愛い彼女さんにお好きな宝石をプレゼントさせてもらいますよ」

だから余計な貸し借りは作りたくない。

「遠慮しておくっすよ。大事な彼女には身の丈に合ったプレゼントをしたいっすから」

無料で宝石なんかを貰ったら、その倍以上の利益をマコーリーさんにもたらさなきゃいけないなるだろう。

「そうですね。それが一番です。それではミッシェル様もお待ちしておりますので明日からの事について話し合いますよ」

「リーゾンまで来て襲撃が可能な場所は1つしかありませんでした。…それなら何でミッシェルさんは襲撃を想定したんですか？」

俺達に依頼すなら、精霊の説得だけでも良かった筈。

「どんな精霊が宿っているにしろ精霊石は高値で取り引きがされま
すからね。バルドー以外に売れば、後は知らぬ存ぜぬで通す事も
できますし。神殿なら精霊石が自ら降臨したって言い訳をしかねませ
んからね」

商人も神官も面の皮の厚さが大事なんだね。

宮殿魔術師なんて、もっと厚くなきゃ無理だろうし。

「つまり具体的な動きは確認出来ていないんですね？」

「具体的ではないですけども、複数の団体が動いた形跡は確認で
きています。今回のお祭り騒ぎで諦めた所が殆どですけども」

まっ、具体的に動いたら捕まるしね。

「残ったのは、盲信的な神殿関係者ですか」

国と対立しても平気な人達といったら限られてくるし。
これだけ騒ぎになった精霊石は国外でも買い手は付きにくいだろう
し。

「それじゃマコーリーさんの私設兵隊も護衛に加わってもらう事はできるんすか？もう精霊は文句をつけないと思いますし」

「おい、ザイツ。俺達だけじゃ不足だったのか？」

ガーグさん、そうゆう事には反応するのね。

「俄か盗賊なら何とかなるっすけども、興奮した民衆を抑えるには4人じゃ無理があるんすよ。特製馬車の宣伝に失敗するよりもお得だと思っつすよ」

マコーリーさんの私設兵隊なんて、絶対に俺より迫力があって目立ってくれると思うし。

「仕方ありません。そう言われては依頼料の値引き交渉もし難いですしね。威圧感のある兵を厳選して出しますよ」

威圧感のある兵がいる事で、精霊石に威厳をもたらす事ができるしね。

「それなら俺とメリー、イントルさんとハンナさんは、両脇の民衆に混じって護衛をしたいと思います。俺以外は目立ち過ぎますし、俺は馬車より先行して下調べをしておきたいので」

メリーとハンナさんは美少女で、イントルさんに至っては覆面を被った大男だからね。

覆面を被って、しかもトルルなのに周囲の信頼が厚いイントルさんって何気に凄い人だと思う。

「目立つのは、お嫌いですか？」

マコーリーさんが、試す様に質問をしてくる。

「有名税のきつさは、よく知ってるんすよ。それじゃメリー買い物に行くとするか」

芸能人の家族で得した事はなくても、きつい目に合った事は多々ある。

得した事がないってより、俺が利用しなかっただけなんだけども。利用せずとも面倒事は向こうからやってきたし。

.....

マコーリーさんの店は、セレブな雰囲気満載で俺は完璧に浮いていた。

まあ、メリーの笑顔が復活したからよしとするか。

「コウサ。これ、これが欲しい！」

メリーが選んだのは銀で作られたペアリング。

メリーがいない時に、つけてたら贈る相手がないのに買っちゃった人に見られそ。

俺の答えを待たずにサイズ合わせをするメリー。

そして流石は、マコーリーさんの所の店員さん、有無を言わせぬ間に俺のサイズもはかってイニシャルを刻む手筈を整えちゃうんだか

ら。

.....

これ、普段から、つけておかないとマズいのかな。

ザコとガーグさん その9 ザコと商人(後書き)

指摘、感想お待ちしております

ザコとガーグさん その10 ガーグ冒険者隊の護衛風景(前書き)

昨日はツイッターに挑戦する為に書きために消費してしまいました。

ザコとガーグさん その10 ガーグ冒険者隊の護衛風景

side 功才

ミッシェルさんの宣伝効果なのかマコーリーさんの屋台が人気なのか、それともただ単に娯楽が少ない所為なのか沿道は人で溢れかえっていた。

「コウサ、すごい人だねー。あつ、あのお爺ちゃんなんて有り難いって泣いちゃってるよ」

「精霊を知ってる立場にしてみりゃ、なんか罪悪感を感じるよな」

あのデカ蚩を敬う気には、どうしてもなれない。

「アハハツ。それわかるー、あつコウサあつちの屋台を見に行こっ」

メリーが俺の手を握ったまま歩き出した。

いや、人前で手を繋ぐのは恥ずかしいんだけど、メリーから

「こんなに人がいたら手を繋いでないと、はぐれちゃうよ。それにコウサがまた無茶したら駄目だもん」

うん、反論できませんでした。

はい、きちんとペアリングもつけています。

「それにしても色んな屋台が出てるよな。」

串焼き、蛍石パン（黒パンにジャムみたいのが乗せてある）、黒パンのサンドイッチ、果物……

フローラルちゃん人形って。

なんであの蛍が美少女になるんだよ。

「ねえ、コウサ。なんでマコーリーさんは、精霊石を買ったのかな？コウサの説得がうまくいかなかったら損をするだけだよな」

「精霊石だから買ったんじゃないやなく貴族が家宝にしている宝石だから買ったんだろうな。そしたらあんなのがオマケで着いて来ちゃったんだよ。精霊石は高く売れるけども、下手に機嫌を損ねりゃタダで済まないからミッシェルさんに相談したって感じだよ」

「ミッシェルさんはエルフだから、精霊と対話できるからねー」

「俺もセシリーさんが呼び掛けてくれたから、デカ蛍と交渉が出来たんだしな」

「それじゃ何でミッシェルさんが、説得しなかったんだろ？」

「ミッシェルさんはエルフで美男子、しかも大国の宮殿魔術師だぜ。ついでにエルフの王族の血もひいてるらしいんだよ」

「えっ、ミッシェルさんって王子様なの？でもそれだと、どうして駄目なの？」

「ミッシェルさんには王位継承権は無いんだって。それでも精霊に多少なりとも知り合いはいると思うんだ。あの俗っぽい精霊にしてみれば、ミッシェルさんは恵まれ過ぎていてムカつくんだろ？」

「あー、俺は精霊様だって威張れないもんね。ミッシェルさんならもっと凄い精霊の知り合いがいそっだし」

「言ってみりゃ、フローラルは精霊のザコなんだよ。俺と一緒にさ」
下手に大聖堂なんて行ったら、自分よりも上位の精霊がいるかも知れないから拒否してたのかもな。
見下している人族に、大聖堂に自分より強い精霊が居るんなら行きたくないなんて言えないだろうし。

「コウサはもうザコじゃないよ。メリーの大事な彼氏なんだから」
「恋愛だけは、ザコから卒業してもいいのかな？」

「うんっ、メリーが卒業証書をあげるっ」

森までは、まだまだ距離があるから今はデートを楽しもう。

side ハンナ

メ、メリーは何をしてるんだ？
依頼の最中にイチチャイチャして、うらやま…じゃなく不謹慎な。

「ハンネスさん、難しい顔をしてどうされました？」

「イントル殿、自分の事はハンナと呼び捨てにして下さいってお願いしたじゃありませんか」

「ハンスさんみたいに魅力的な女性が、そんな事を言ったら私は世の中の男性から嫉妬をされて大変に事になりますよ」

イントル殿は、紳士過ぎます。

強くて頭も良いけど、決して傲り高ぶらない。

「周りは関係ありません！！自分が呼んで欲しいんですから」

「分かりました。この依頼が終わったら考えておきますね。今は依頼中ですし」

メリー見ろっ。

イントル殿のこの真面目さ誠実さを。

「期待しています。イントル殿はコウサが人を見つけて欲しいと言っていた意味がわかりますか？」

コウサが民衆の中から見つけて欲しいと言った人は

1・馬車が来る道を真剣に見ている

2・真新しい服に、最近ついた汚れがある人

3・周囲と比べて足揃えがしっかりしている人

「ザイツ殿が探しているのは襲撃をかけようとしている団体の物見役ですよ。真剣に道路を見ているのは、馬車が来るのを確認してから知らせに行くからでしょうし、服は正体を誤魔化す為に新しい服を買ってください。そんな服を着て森から出たら当然新しい汚れがつ

「いちゃいますよね。ところでハンネスさんは足捲えの意味がわかりますか？」

「イントル殿。意地悪を言わないで下さい。自分は頭を使う事が苦手なんですから」

「ふむ、それでは正解をしたら何かご褒美をあげましょう。屋台で好きな物を買って良いですよ」

「ご褒美？」

「それならあれしかない。」

「絶対に当てて見せる。」

「……………」

「何で、コウサは周りの人の足捲えと言ったんだろうか？」

「そう言えばメリーから足捲えはしっかりしておく様に言われたよな。」

「それは戦いに備えてなんだろうけども……………」

「イ、イントル殿。自分はわかりましたよ。物見の者は森に戻る必要があるから足捲えをしっかりとしておく必要があるんですね。それと違って観衆は沿道を歩くだけだから足捲えに気を配る必要がないんですよね」

「はい、ハンネスさん正解ですよ。どの屋台がいいんですか？」

「自分が今欲しい褒美は、食べ物なんかじゃない。」

「イントル殿、褒美として自分の事はハンナと呼んで下さい」

「イントル殿は、苦笑いをしながらも頷いてくれた。」

side ガーグ

まったく、イントルもザイツも依頼とプライベートの区別がつかねーのかよ。

人がこんな、こっ恥ずかしい鎧をきて晒し者になってるのによ。

(ガー君ガー君聞きだいたい事があるんだけど)

(んだよ。早く言ってみるよ)

(いや敵は何人で攻めてくるかわからないのに、たった4人で大丈夫か心配じゃないの?)

(あー平気だよ。うちの連中は戦わないから)

(へっ?)

ザコとガーグさん その10 ガーグ冒険者隊の護衛風景（後書き）

なんとお気に入り登録が2800を超えました。

よく考えたら、この駄文小説を楽しんでくれている顔も知らない人がいるんですもんね。

改めて感謝です

ザコとガーグさん その11話 闘わない戦いと闘った後の戦い

side 功才

いた。

つーか、見事なまでに物見役の作業に没頭している。

「……コウサ、もしかしくてもあの人」

「……多分つーか絶対そうだよな」

周りから浮きまくっているし。

「お祭り騒ぎなんだから、楽しむ演技も取り入れなきゃ駄目なのにね……」

笑わなくても眉間に皺を寄せて街道をガン見するのは止めて欲しかった。

ちなみに俺はメリーの隣に立ってメリー越しに相手を観察している。

反対側ではイントルさんハンナさんコンビも待機を始めた。

んでもって物見役は馬車を見た途端に慌てて走り出した。

「メリー行くか。あの様子じゃ後ろに気を配ってなさそうだし」

いやさ、今まで馬車を待つてる振りをしてたんだからさ、馬車を確認した途端に慌てて走り出したら全部が水の泡になっちゃっただけどね。

「うん。それじゃメリーの後に付いて来て」

森の事は獵師に任せるのが一番。

久しぶりに見ましたメリーのハンターモード。

獲物に気付かれない場所を常にキープしてるんだから流石だよな。

俺の後ろからは、イントルさん達も付いて来てくれているし。

(コウサ止まって。あそこにいるよ)

メリーの指差す先には、盗賊風に扮装した男10人が待機していた。

今回のターゲットを発見。

戦闘の為に連れて来た僧兵だろう。

1人だけ体格がずば抜けた男がいる。

人数と装備から推測すると、先ず何人かが飛び出して馬車を止める。

そして僧兵が壁役となり、その間に術者が精霊術を詠唱する。

そんでもって回収役が精霊石を素早く回収する作戦なんだろう。

馬車が近付いて来た。

牽制役が飛び出した、次に動き出した僧兵の足元を狙って

「アーススタン」

狭い森の中で、体格のデカイ奴が転べば先頭は押し出されて、後ろの術者達はけつまずく。

流石はマコーリーさんの私設兵の皆様、物音にすぐさま反応して戦闘体制を整えている。

飛び出すのをためらっている襲撃者達の後ろの木に向かって

「シールドボール」

シールドボールで背中を押してあげる。

いくら強力な精霊術を使っても詠唱中に弓矢で狙われちゃ勝てる訳がない。

牽制役や僧兵が抵抗していたけども、戦闘のプロに勝てる訳もなく直ぐに捕縛、術者は戦闘になると同時に弓矢で殺された。

俺達は馬車が無事に動き出したのを確認して街道へ戻る。

「鮮やかなお手並みですな。さすがはマコーリーさんの私設兵ですね」

人を殺すのに、ためらいが全くなかったもんな。

「イントル殿、自分もそう思います。しかしあれなら自分達でも勝てたのでは？」

「ハンナ違うんだな。コウサはワザと戦わなかったから。何で分かる？」

いや、メリー俺の作戦って、姑息な手段が多いから誇らしげにされると辛いんだって。

「うう。イントル殿。メリーが苛めます、助けて下さい」

ハンナさん露骨にイントルさんに甘えているな。

「ハンナそれはですね。マコーリーさんの私設兵の面目を保つ為ですよ。彼等は自分達の仕事である護衛役を私達に奪われましたからね。襲撃者の戦闘まで横取りされたら面白くないでしょ?」

あの堅物イントルさんが、ハンナさん呼び捨てに?

「それにまだ襲撃者の素性がわからないでしょ? ミツシエルさんしか後ろ盾がないメリー達じゃなく色んな貴族にコネがあるマコーリーさんに任せた方が安心なんだって」

「後はミツシエルさんかマコーリーさんが黒幕とうまく交渉してくれるさ」

俺なんかが、交渉しに行ったら直ぐに闇討ちされてお終いだと思う。

side ガーゲ

「ガー君、ガー君の所って本当に冒険者隊?」

「ザイツが加わってから、ずっとあんな感じだよ。でも面白れーぞ。セシリーお前も入らねーか?」

セシリーはヒーラーで神聖魔法が使えるから加入してもらえると助かる。

「ガー君それって一緒にいたいって言う告白?」

「どんだけ深読みしてんだよ。勧誘だよ勧誘。うちの連中は仲間の

危機になりや直ぐに無茶をするからな、優秀なヒーラーが必要なんだよ」

「うわっ、ガー君。リーダーみたい」

「みたいじゃなく俺はリーダーだ。まっ無理にとは言わねえさ、お前の立場もあるからな」

「いいよっ。私がガー君って呼ぶのを認めてくれたら加入してあげる」

.....

「2人っきりの時限定じゃ駄目か？」

「駄目」

こいつ、速攻拒否した上にそっぽを向きやがった。

「それならせめてデュクセンに戻ったらガーグって呼び捨てしてくれ」

「嫌。ガー君はデュクセンで聞かれたら不味い女でも出来たの？」

「んなもんいるか！デュクセンじゃ荒くれ者のガーグで通ってるんだぜ」

「ならいいじゃない。私にとってガー君はガー君なんだから。誰かが怪我をしたらキチンと治療するからさ。昔よくガー君の治療もしてあげたじゃない」

「わかったよ。ただし俺の昔話は厳禁だぞ。彼奴等にはまだ何も話してねえんだよ」

俺の面倒事に巻き込むつもりはなねえからな。

side 功才

無事に精霊石が大聖堂に届いてから数日だったある日の事。マコーリーさんが、わざわざ訪ねて来てくれた。

本当は居留守を使いたい相手なんだよな。

「いやいや、この度は大変お世話になりました。お陰様で精霊石と沿道の露天商で中々の利益をあげることができました」

「そうですか。お忙しい中わざわざその話をしにきてくれたんですか？」

商人が動くのは利益がある時、よっぽどの事がなきゃわざわざ来る訳がない。

「これは話が早くてありがたい。こないだ無傷に近いギガントスネークの皮が市場に出たんですよ。できたら、あの様な貴重な品はウチの店で取り扱いをしたいもので」

「売り物は市場原理が鉄則ですよ。それを補う魅力があれば冒険者も優先的に売りたいくなるんじゃないでしょうか？」

「それでしたらウチの店の品を割り引いて差し上げますよ」

確かミツシエルさんにもらった資料だと、マコーリーさんが取り扱っている品は、宝石・武器・奴隷・食料品など多岐に渡っているらしい。

「つか奴隷・宝石なんて扱うから私設兵が必要になるんだろうな。」

「割り引きなんて申し訳ないですよ。それならマコーリーさんのお力をお借りしたい事があるんですけども」

奴隷を扱っているなら、これのコネをもっている筈。

「なんででしょうか。私にできる事ならなんなりと言って下さい」

私設兵を持たなきゃいけない位に恨まれている人と親しくするのはデメリットが多すぎる。

だからこちらかのお願いはこの1回だけにしておきたい。

「いえね、暫定でもいいですからバルドーの市民権が欲しいんですよ。貴族特権が効かない様なのをガーグ冒険者隊全員分」

「コウサさんは、利益より安全を好みますか」

「過ぎたる利益は嫉妬やら何やらで身を滅ぼしますからね。貴族の方々とも親しいマコーリーさんが保証してくれた市民権が、あれば色々と動きやすいですからね」

「いいですね。ミツシエルさんが気に入る訳だ。ここで金・武器・

宝石・奴隸なんかを要求されていたら付け入る隙を見つけられたのですが。わかりました、馬鹿貴族が一切手出しをできない様にしておきますよ」

「ねえ、コウサ今の付け入る隙って何の事？」

「メリー。そりゃ金や武具を要求すりゃ物欲で、宝石を要求すりゃ名誉欲で奴隸を要求すりゃ色欲で付け入るつもりだったんだろ」

本当に怖い人だよ。

「ったく。また腹黒が増えたな。ミッシェルとザイツだけで充分だつてのによ」

いや、俺もあの2人は充分きついんですけど。

ザコとガーグさん その11話 闘わない戦いと闘った後の戦い（後書き）

次からは幕間が続きます

感想指摘お待ちしております

人気投票結果（前書き）

最初は人気投票なんかしても多くて10票ぐらいだと考えていたんですけども、開始したら多くの人が投票してくれて方に感謝です。

人気投票結果

なんと参加してくれた人が103人もいました。
大感謝です。

1位財津功才43票

流石は主役、同情票や女性票も多かったです。

2位山田先輩27票

メインを抑えて2話、しかも前半にしかでていない山田先輩が2位。
山田先輩の幕間を書きます。

3位メリー・プルングス22票

この作品のメインヒロイン・メリー。

メリーも女性票が割とありました。

功才と狩りが大好きな所に人気がでたみたいです。

4位ロッキ師匠20票

この作品で唯一のチート存在、ロッキ師匠。

財津栄才とロッキ師匠のみマイナス票がありました。

5位財津美才19票

これまたメインを抑えてお兄ちゃんっ子、美才がランキング。
本編に絡ませるか悩み中です。

6位イントル 17票

ガーグ冒険者隊の良心イントルさん。

正体は知恵の実を食べたトルル、面倒のいい穏やかな性格が評価されました。

7位財津万才16票

実質、功才の育ての親の万才さん。

8位財津梅9票

功才の料理を仕込んだおばあちゃん。

8位財津栄華9票

功才姉は個人投票が入って驚きました。

10位ミント7票

最初はメインヒロインの予定だったミント。

でも功才の性格から貴族・騎士みたいな上流階級との恋愛は無理と思っ仲の良い異性キャラに。

11位ガーグ6票

ガーグ冒険者隊のリーダー・ガーグさん。

口は悪いが面倒見は良いガーグさんの秘密も徐々に明らかに。

11位トム・チーキン6票

功才のモテない同盟の親友トム君。

トム・レミの幕間も書きます。

13位財津美華4票

功才母、票の内訳は財津ファミリー票が3票なんで実質1票かも。

13位シャイン・マクスウェル4票

デユクセンでの功才の後ろ盾の伯爵様。

15位レミ3票

名前しか出て来てないのに3票獲得。しかもレミのみに入れてくれた人も。キャラ考えなきや。

15位イ・コージ3票

メイドゴ布林大好き魔法使い。幕間リクエストもありました。

15位ロツキの手下3票

ランキングに名前もなく見た目も描写してないのにもかかわらずにも3票。

15位夏海結3票

結個人に1票入り幼なじみ達から抜け出した形に。

19位デユクセン皇帝2票

師匠の所為で胃を病んでる姿に2票が入りました。

19位メイドゴ布林2票

こちらもランキングに名前がなくても2票獲得。

萌え要素ゼロのメイド。

この作品に萌えはないけど。

19位三条小百合・鷹丘勇牙・風雅院隼人2票

幼なじみと一括りで票が来たのでまとめてみました。

19位財津栄才2票

同じくファミリー票で2票。マイナス票を入れたらかなりのマイナス位置に

19ミツシエル2票

腹黒エルフに2票が入りました。

まだ出番が少ないのに2票。

27位ルイス1票

デクセン皇国の次男、殆ど出番がなくても1票

27位デュラン1票

成長を見てみたいと1票、最初はミントの相手はデュランでした。

27位セシーリ1票

ガーグの幼なじみのエルフ。

冒険者隊に入って出番が増えると

27位ハンナ1票

ミントの次にヒロインに予定していたけど、功才が強気キャラは避けそうだからヒロインじゃなくなり冒険者隊にはいるも票なしな不幸キャラ。

票もガーグ冒険者隊にのまとめで入りました。

人気投票結果（後書き）

この人気投票をして嬉しかったのが、この作品を見てくれている方
を実感出来た事です。

でも功才やロッキ師匠、イントルさんみたいなある意味イロモノキ
ヤラが人気なのがこの作品の特徴かと。

幕間頑張ります

幕間 イ・コージ 中年研究員が反旗を翻した理由(前書き)

作者も中年独身サラリーマン。

思わず感情移入しそうに、いや中年独身サラリーマンはみんなイ・

コージの気持ちかわかる筈…

幕間 イ・コージ 中年研究員が反旗を翻した理由

side イ・コージ

今の自分の立場を考えると思わず笑ってしまいます。

遊びも恋も何もかも犠牲して手に入れた結果が、牢屋に繋がれる囚人という身分なんですから。

子供の頃に学校の先生はこう言いました

“努力は人を裏切らない”と。

私イ・コージはその後に一言を付け足したい。

努力は人を裏切らないが、努力した人でも人に裏切られる。思い出す。

私が、この立場に堕ちる結果を作った奴の顔を。

その頃私は皇国魔法研究所に勤めており、来る日も来る日も、魔法陣の研究の日々でした。

徹夜も珍しくない不規則な日々、当然体型はふくよかに。

そんなある日、研究者の所長に呼び出されたんです。

「魔物を操作する魔法ですか？」

「そつだよ、コージ君。できるでしょ？君は優秀な魔法使い何だからさー。簡単でしょ？これができれば魔物の被害を減らせるから賞金も貰えると思うよ」

所長とは言え貴族の次男坊が能力に関係なく着いただけです。簡単に言ってくれますが、これは難しい研究でした。

「それなら先ずゴブリンの研究から入らせてもらってもよろしいでしょうか？」

「ゴブリン？もう少し強力な魔物にしてよ」

これだから素人は。

「ゴブリンは人族と同じ二足歩行の上に能力が限定されています。ゴブリンが農作業や刀の手入れをして見せたら操作の効果が分かりやすいですから」

キチンと納得してくれたのかは、分かりませんが所長が頷きました。これで研究員の倍以上の給料を貰うんだから、貴族様は本当に羨ましいですよ。

その日から私のゴブリン研究が始まったんです。

イ・コージのゴブリン研究結果抜粋

ゴブリンは餌をくれる者や自分より強い者に従うらしい、らしいと言っているが通じない為に確認ができていないからである。

そしてゴブリンは決して同種を意味なく責めたりはしない、力の優劣が決まれば上が下を守り、下は上に従う様だ、この点は人間よりも優れている。

.....

(久しぶりに研究所以外で飯を食べるか。…リディちゃんいるかな？)

私はその時久しぶりに恋をしていたんです。

相手は研究所近くでウエイトレスをしているリディちゃん、可愛く良く笑う娘でした。

今思えば愚かな行為ですね、所詮人族は能力よりも見た目や金が大切なんですもんね。

あの頃はリディちゃんの笑顔を私だけにむけた特別な笑顔だと信じていましたけども。

いえ… そう思いたかったのでしょうか。

それを原動力に研究も頑張れましたし。

そしてついにゴブリンを自分の意志で操作する事ができる様なり、所長に報告に向かいました。

「よくやったねー。さすがはコージ君。でさ相談なんだけども、これ俺の手柄にしてくんない？俺への結婚祝いとしてさ」

「所長は結婚なされていたではありませんか？」

「あんな女別れたよ。新しいのはコージ君も知っているリディだよ、あつコージ君は結婚式呼ばないから。リディが君をキモイとか言っていたし。そうだ、ゴブリンを兵にすれば戦争に有利だぜー。人族の兵を傷つけずに戦争ができるんだしな。ヒヤッハッハッハー」

この状況を相談しようにも、研究しかして来なかった私には友人と呼べる人はいませんし。

所員同士はお互いの研究を秘密にしたいから交流をしていません。

私の努力は、私の恋は、私の評価は、私の存在は、私の成果は誰も必要としてくれないのか？

イ・コージと言う人間は必要とされないのか？

それなら、それなら、それなら私は人族を止めて不当な扱いを受けているゴブリン達と国を作ってやる。

私はその夜、研究資料と研究対象にしていたゴブリンを引き連れて研究所を捨ててやりました。

目指したのは、あの馬鹿所長の一族が所有している古城。

誰も城に訪れないから研究に没頭できました。

研究により大勢のゴブリンを従える方法、人族のみを殺せる魔法等を見つけました。

ゴブリン達も私に良く従ってくれ、生まれて始めて充実した日々を送っていましたね。

略奪？それは人族が良くする事じゃないですか？

私の研究成果を奪おうとした人族が罰せられないのに、私を罰しようとしたら、あの男の罪を並べ立ててやるつもりでした。

でも私に弁明の機会は与えられず牢屋に繋がれる日々。

ここには牢番以外は誰も来ません。

私はここで朽ちていくのでしょうか。

笑えますね……………。

ある日牢屋に牢番以外の人族が来ました。

これで最後なんでしょうか？

それとも……

幕間 イ・コージ 中年研究員が反旗を翻した理由（後書き）

人気投票の結果 書く幕間は

山田先輩と幼なじみ

ロッキ師匠VS栄華

トム君とレミさんその後

ロッキの部下の功才観察日記

その他あのキャラの幕間が見たいとかありましたらがんばります。
あまり条件が細かいと困りますけど

幕間 トムとレミその後（前書き）

女性の方から、リクエストが多かったトムとレミのその後です。

幕間 トムとレミその後

side トム・チーキン

マクスウェル家の領内にあるゴーズラと言う名の町に来て2週間がたちました。

僕の新しい職場はゴーズラの近くにあるミスリル鉱山。
幸いな事に新しいゴーレムも順調に成長しています。

……… だけどレミには、まだ会えていません。

レミの母親から

「トム君、ごめんね。あの娘よっぽど怖い目に遭ったみたいでお父さんにも怯えているのよ。トム君の事は様子をみて、私から伝えておくから今はレミを待ってあげて」

そう言われたんです。

情けない事に今の僕に出来ることは鉱山に潜る事だけ。

「兄ちゃん、兄ちゃんの使う人形は随分と便利だな。俺達の倍以上の速さで採掘するんだからよ」

「ドガンさん、僕の名前はトムです。それとこれは人形じゃなくてゴーレムですよ」

ドガンさんは、この鉱山の採掘主任、僕に色々と気を使ってくれる。

「細かい事は気にすんな。その人形のお陰で俺達は楽をさせてもらっているんだからよ」

「でも、このゴーレムはまだまだ小さいんですよ。ゴーレムも僕も、もっと体格を良くしないと」

「確かに兄ちゃんは体が細いからな。男は力がなきゃいざって時には大事な者を守れねえで後悔するぜ」

後悔は充分しましたよ。

だから後悔はやめて僕もゴーレムも成長するんです。

side レミ

「こーらっ、レミちゃん。また、ご飯残してる」

「ドガンさんすいません、あまり食べたくなくて」

この人は私の担当ナースのリリー・ドガンさん。

ドガンなんて威つい名前をしているけども、とても可愛らしい女人。

「まっ、食べたくない時は誰にでもあるよね。私も今朝は食欲なかったし」

「ドガンさんが食欲ないなんて珍しいですね」

「本当だよ、これは午後からは雨だな」

ドガンさんはアゴに手を当ててわざとらしく、しかめっ面を作ってみせる。

「具合が悪いんですか？」

「あー、違う違う。馬鹿親父が昨日遅くまで飲んだくれてさ。何でも親父が働いているミスリル鉱山にゴーレムを使う採掘師が働きたみたいで、親父がその子を気に入ったらしくて家に連れて来てお酒に付き合わせていたのよ。他の採掘師も来たからうるさくて寝れなかったのよ」

ゴーレムを使う採掘師？

まさかトム？

「その男の人の名前は？どんな人でしたか？教えて下さい！！」

「確か名前はトム、採掘師には見えない細い男の子。でも良い目をしてたわ」

トムだ、絶対にトムだ。

良かった、トム元気なんだ。

トムちゃんとご飯食べてるのかな？

ゴーレムのメンテナンスに熱中して徹夜してないかな？

でも……会えない。

会うのが怖い……。

私の体には醜い傷が残っているし、お父さんの時みたいにトムも拒

絶するかもしれない。

「お母さん、トムがゴーズラにいるって本当？」

私は見舞いに来たお母さんに詳しい話を聞く事にした。

.....

「トムがガーグと戦った？あの荒くれガーグと？」

トムがガーグなんかと戦って無事で済む訳がない、ガーグはドルム
ーンでは有名な冒険者、顔も怖く言葉遣いも悪い。

「ガーグだけじゃなく、4人組の冒険者隊と戦ってゴーレムも壊さ
れたのよ」

「うそ.....」

「でも大丈夫よ。ゴーレムは新しくなったし、トムも新しい鉱山で
一生懸命働いているみたいよ。負けたくない友達を見つけたんだっ
て」

その時俄かに病院が慌ただしくなっただけです

「お父さん、大人しくして。斬られたんだよ」

あの声はリリーさん。

「うるせー。トムの坊主がまだ鉱山に残ってたんだよ」

トムに何があったの？

side トム

採掘現場に突然現れた男は刃物を振りかざしてミスリルを持ってくる様に要求した、しかも取り押さえ様としたドガンさを斬りつけて。僕と男がミスリルを取りに行っている間に何とかドガンさんを逃がす事ができたけど。

「その弱そうな僕、ごっついオッサンを逃がしたのいいけど1人でだーいじょーぶ？」

「少なくとも泥棒の将来よりは大丈夫かと」

「生意気言うじゃねーよ。早くそのミスリルをよこしな」
「どうすればいい。」

こんな時どうすれば、こんな時コウサ君ならどうするかな？

男が持っているの鉄のナイフ……

それなら

「お前なんかにやるぐらいなら捨ててやるよ」

僕は手に持っているミスリルを投げ捨てる。

「ガキッ、調子にのりやがって」

案の定、男は僕に向かってきた。

……

鉄がミスリルに勝てると思ったら大間違いだよ。

ゴーレムを操作して、男に立ち向かわせる。

「そんな小せえ人形で何しようてっんだ？」

先ずは

男に向けてパンチを出させる。

「けっ、そんな大振りが当たるかよ」

男はゴーレムにナイフを突き立てようとする。

確かに大振りだよ、わざとだけどね。

ガギンツと鋭い音が採掘場に響く。

「このゴーレムはミスリルで作っているんです。鉄のナイフなんかじゃ、かすり傷もつけませんよ。そう言えばミスリルが欲しいんですでしたよね？それならあげますよ」

……

「ただし差し上げるのは、ミスリルの拳ですけどね」

ナイフが届く程の距離で、ミスリルゴーレムのパンチを腹にもらった強盗は呻き声を洩らしながら崩れ落ちた。

その後、念の為と言われて僕は病院に連れて来られた。
どうもみんな僕が1人強盗を倒したのが信じられないらしい。

side レミ

トムが強盗と戦って病院に運ばれてきた、そう聞いた私はいてもたってもいられずに気づいたら駆け出していた。

(良かった、トムは怪我をしていないみたい)

でも、怖い。

トムの近くに行くのが怖い。

私がつめらつっていると、トムが走り出して来てギュッと抱き締めてくれた。

「レミ会いたかったよ。話たい事が沢山あるんだ。新しくできた凄い友達の事……それに2人の新しい生活の事も。時間はいっぱいあるんだ、これから2人でずっと一緒に歩いて行くんだから。……僕はお金も大きなゴーレムも無くしちゃった。それでも良かったら僕と結婚して下さい」

私は泣きながら頷いていた。

あの地下室で流した悔し涙じゃない嬉し涙を流してトムに返事をする。

「喜んで」

久しぶりの笑顔で、そう返事をした。

幕間 トムとレミその後（後書き）

やっぱり、作者は爽やかな話よりイ・コージみたいなひねくれた話が似合うかも…

トムレミに投票してくれた方が満足してくれたか不安です

幕間 栄華姉ちゃんVSロッキ師匠(前書き)

最初は栄華姉ちゃんと山田先輩を絡ませようとしたんですけども

幕間 栄華姉ちゃんVSロッキ師匠

side 栄華

家に帰ると、美才が不機嫌さを露わにしていた。

「お姉ちゃん。今日占いで視てもらったら、お兄ちゃん元気なんだって！」

「占いでも気休めになるじゃない。なんでそんなに機嫌が悪いのよ？」

「だってお兄ちゃんに彼女がいて、その彼女と一緒に美才の玉子焼きを食べてるって言うんだよ。あれは美才の玉子焼きなのに」

「功才に彼女？随分と胡散臭い占いね」

功才が、家族以外の女に心を開く事はないと思うんだけど。

「でも、でもその占い師さんが言うにはお兄ちゃんの方が押され気味だって言ってたよ。……美才は認めないんだから」

（おかしいわね。占いにしては言ってる事が具体的過ぎる）

「美才、もう少し詳しく、その占い師の事を教えてちょうだい」

美才が怪しい占い師と会ってから数週間後のオフ日。
私はそのテントを探していた……

あれね。

色は赤じゃなく虹みたいに七色だけど、ロッキさんの占いテントって書いてある看板があるんだもの。

中にいたのは、50才くらいの細身な男。

でも、あの変なキャラクターが書かれたスーツは何なのかしら？

「はい、ようこそ。ロッキさんの信じれない位に、あ・た・る・
占いテントへ」

確かにテンションが高いわね

「どうしました？座って下さい。もしかして、このプチロッキ君柄
のスーツが気になりました？」

それが気にならない人はいないと思うけど

「私の弟の功才が行方不明なんですけども、どうしているか占えま
すか？」

「いいですよ。彼はとても遠い所にいるみたいですね。でも元気な
様ですから安心して下さい」

「遠い所、外国かしら。功才はなぜ帰って来ないのかしら。それと
も帰って来れないのかしら？」

「嫌ですよ。占いでそこまで分かったら怖いじゃないですか」

「そうね。功才に彼女がいるって聞いたけども本当かしら」

「ええ、とても可愛らしくて一途な女性ですよ…怖いぐらいに」

「功才とその娘はどれ位仲がいいのかしら？」

「熱々ですよ。この間、功才君は彼女にペアリングをプレゼントしたみたいですよ」

あの功才が、ペアリング？

有り得ないわね。

「そうなの。功才はよくペアリングを買えたわね。何か仕事をしているのかしら？」

「肉体労働的なお仕事をしている様ですよ」

「肉体労働？工事現場とかですか？」

「さあわかりません。でも前に比べて大分筋肉がついた様ですよ」

やっぱり、この占い師はおかしい。

「前って何時の功才と比べてかしら？それにペアリングや玉子焼きが見えて国や仕事が詳しくわからないのは何故かしら？」

side ロッキ

さすがは功才君のお姉さんですね。

見た目は似ていないのに、粗探しがうまい。

「それが占いですよ。それに好奇心猫を殺すって言葉もありますからね」

軽く脅してみますか

「実の弟が行方不明なんですもの。多少の危険は平気なつもりですけども」

ほう、功才君と違って度胸がありますね

「随分と愛情深いんですね。とても少し前までは功才君に無関心だった人とは思えませんよ。でも御安心下さい、彼は前と比べ物にならない位の多くの絆を築いていますから」

ちよつと、揺さぶってみますか。

「実の姉である私よりも、その彼女の方が功才を愛していると言っ
んですか？」

これはこれは、興奮するのは後ろめたさがある証拠ですよ

「彼女は、功才君と添い遂げる気持ちを持っていますよ。いえメリ
ーだけじゃありません。多くの者が功才君と強固な絆を結んでいま
す。こつちの世界で功才君を本当に必要としている人間は何人いま
すかね？案外と疎ましく思っている人もいるんじゃないですか？」

「だから功才を諦めると言いたいんですか？」

ありゃ、怒っちゃいました？

「嫌ですね。これはただの占い。当たるも八卦、当たらぬも八卦ですよ。でもどうします？もし功才君が1回帰って来ても、今いる場所に戻る事を望んだのなら優しいお姉さんはきちんと見送れますか？」

「そうね、占いよね。それなら占い師さん、功才に伝えてもらえませんか？玉子焼きやペアリングをメリーちゃんにあげたのを知った美才が怒っているって。それと大事な彼女がいて半端な形で戻って来たら家には入れないつもりでいなさい。でも彼女に振られて戻って来るんなら、お姉ちゃんがしつかりとダメ出しをしてあげるってね」

「分かりました、伝えておきますよ」

「それとお姉ちゃんは、いつか成長した功才と可愛い彼女に会えるのを楽しみにしているからって伝えて下さい」

功才君、とても素晴らしいお姉さんじゃないですか。

お姉さんの言葉は貴男が必要とする時に私から伝えますよ

side 栄華

「ねえお姉ちゃん、占い師さん何か言ってた？」

「そうね。功才の彼女の名前はメリー。何でも功才からペアリングをもらったそうよ」

「ペ、ペアリング？お兄ちゃん絶対に許さないから」

功才、お姉ちゃんや美才に心配を掛けてるんだから、美才の可愛いお説教ぐらいは我慢しなさいよね。

幕間 栄華姉ちゃんVSロッキ師匠（後書き）

イ・コージに続き微妙に伏線が果たして回収はできるのか？
感想指摘お待ちしております

幕間 ハンナの気持ち イントルさんの気持ち(前書き)

LOCKさんリクエストのハンナとイントルさんの幕間です

幕間 ハンナの気持ち イントルさんの気持ち

side ハンナ

久しぶりに自分とメリーの2人で食事をしていた時の事。

「ハンナは彼氏作らないの？いいよー恋人がいると、すっごい新鮮なんだから」

昔と違いメリーの話題は恋愛関係が殆どになっている

「メリー自分は武人、恋とは無縁だ」

「まーた無理しちゃって。ハンナが硬い話し方をする時は無理をしてる時だもん」

「くっ。メリーこそ、コウサがミッシェル殿と打ち合わせに行って寂しい癖に」

せめて、これ位は言い返さないと何か悔しい。

「大丈夫だよ。功才はメリーの所に絶対に帰ってくるから」

メリーは胸をはって自慢気に言い放った。

「うわっ、ノロケた。こいつ平然とノロケたよ」

「ハンナ違うよ。ノロケじゃなく事実なんだもん」

くー、こないだまで恋愛には興味がないとか言ってた癖に

「どっちにしろ自分は恋愛に興味を持っていない!」

「ふーん。じゃイントルさんは?」

.....

「あ、あ、あのお方は自分が目標とすべき尊敬するお方であって恋愛等の浮ついた対象では決して.....ないと思う」

「本当にー。その割には最近イントルさんにベツタリだよー」

「それはイントル殿は高い教養を持っていて勉強になるからであつて」

「それならハンナもある程度勉強をしておかないとね。ジャネット・シャルルが百年前に死んでる事位は覚えておこうね」
へっ.....?

「うそ.....自分、イントル殿に会った事があるって言っちゃったよ」

「イントルさんは大人だから流してくれたけども、尊敬するなら知つたかぶりは止めとこうよ」

つ、次からイントル殿にどんな顔をして会えばいいんだ?

「メリー、どうしようー。自分イントル殿に馬鹿だと思われちゃったかな?」

「ハンナは昔からお勉強が嫌いな脳筋娘なんだから、見栄をはらずに分からない事はイントルさんに聞けばいいの。人間素直が一番だよ、色んな意味でね」

そんな事を言っただって、まだ恋愛として好きなのかも分からないのに

side ガーグ

「イントル、ハンネスの嬢ちゃんはどうするつもりだ？」

「どうって？どうもしませんよ」

「たく、わざとらしく分からないふりしやがって」

「あの位の年の娘は自分の気持ちに気付いてもえないのは結構シロツクなものなんだぜ？」

そして気付かない振り続けるのもな…

「あの位の年の少女は年上の男性に憧れるものですよ」

「まつ、精々後悔をしない様にしとけよ。大事な女に泣かれるのは、かなりきついぜ」

本当に嫌になる位に辛いんだぜ

side 功才

「コウサ、ハンナとイントルさんってお似合いだと思わない？」

懐かしいな、よく言われたんだよ。

勇牙君と　ちゃんってお似合いだと思わないとか。

「あまり思わないな。つーかイントルさんが恋愛をするとは思えない」

「コウサツ、いくらコウサでもハンナを馬鹿にしたらメリー怒るよ」

「ハンナさんだからじゃないよ。イントルさんは誰が相手でも恋愛はしないと思うよ」

「また、コウサはすぐそうやってもったいぶった言い方をするんだから」

「これはあくまで俺個人の見解だし、俺はイントルさんを尊敬している。それを理解してくれるんなら話すよ」

「わかりましたー。イントルさんの事は自信ないけど、コウサの考えなら理解したいから聞かせて」

「イントルさんは何であんなに理性的で教養を好むのか考えた事がある？ 理性的なのは粗暴さを嫌うからだし、教養を好むのは知恵に憧れがあるからだし、無知の怖さを知っているからだと思う」

「うん、それで？」

「イントルさんはトルだ、これは変えようがない事実。トルは

粗暴で無知な生き物と揶揄されている。イントルさんが必要以上に理性的で教養を高めているのには昔に戻りたくない恐怖もあると思うんだ」

「それと恋愛に何が関係あるの？」

「好きになった相手に種族を理由に拒絶される恐怖、自分が何を切欠にして昔のトルルに戻ってしまうか分からない恐怖、もし結婚をして生まれた子供が粗暴なトルルだったらどうしようという恐怖、イントルさんは俺以上に恋愛に対して臆病っーか恐怖感を持っていると思う」

「うー、それじゃ同じトルルと恋愛をする可能性はあるの？」

「それはもつとないと思うよ。イントルさんは文学や音楽を好む人だせ？それを理解できるトルルがいると思うか？」

「いないよねー。コウサー何とかならいの？」

恋愛話は苦手だけど、これだけは自信を持って言える

「メリー、俺に他人の恋愛を助けれる技術があると思う？」

「ないよねー。メリーよくコウサと両思いなれたって自分を誉めてあげたいもん」

向こうの連中はメリーの写真を見せたら誰も信じないと思う

「とりあえずハンナさんに詩集か何かをプレゼントしようか？少しは会話の幅が広がると思うし」

s i d e イントル

トロルが人に恋をしたって、幸せになれる訳ないじゃないですか。猿人族とエルフ、猿人族と犬人族、異種族が結ばれるのは決して珍しい話じゃありません。

でも私は…トロルは魔物扱いなんですから…

相手の気持ちも自分の気持ちも気付かない振りをするが一番なんですから

幕間 ハンナの気持ち イントルさんの気持ち（後書き）

イントルさんが不幸になったら叩かれる予感がある今日この頃

幕間 先輩と幼なじみ（前書き）

出番がないのにランキングは3位の山田先輩の幕間です

幕間 先輩と幼なじみ

side 山田先輩

「あれっ、店長今日ザコの奴休みですか？」

「山田君、それがさ携帯に電話しても出ないんだよ、履歴書には家の電話番号は書いてないし」

「まったくザコの奴サボリかよ。明日俺が叱っとくんで勘弁してやって下さい」

この時は俺はザコが体でも壊したんだと思っていた。

ザコがバイトをサボる事なんて今までなかったし、むしろ他のバイトが休んだ時にヘルプで来るぐらいだったし。

次の日

「おっつ、ザコはいるか？」

「あっ、山田先輩ちーす。それがザコの奴、昨日から来てないんですよ」

「はっ？あの学校とバイトを生き甲斐にしてる奴がか？悪い物でも食ったんじゃないだろうな？」

「携帯に電話しても電源が入ってないみたいですし、家電は誰も知らないんですよ」

ザコの担任に聞いてみても結果は芳しくなかった。

家に電話はしても留守電だったって話だし、プライバシーの保護とかで電話番号を聞く事は出来なかった。

まっ、先生があそこの一家の電話番号を漏らしたらマスコミで叩かれそつだもんな。

彼奴の事だ、美才ちゃんに頼まれてマネージャーの代行でもしてんだろ。

一週間たつてもザコはバイトどころか学校にも顔を出す事はなかった。

周りでは家出とか騒いでいるけども、そつは思えない。

可能性として高いのは入院か。

ザコの話じゃ、芸能界じゃ財津家は4人家族で通っているみたいだし。

それから俺はザコの家の電話番号を調べてみたが、全く分からなかった。

ザコの親父さんの事務所に電話してみたら

「功才？ 所長にはそんなお子さんはいませんよ」

なんてぬかすし。

成果をあげられないまま、1ヶ月がたった。

ネットで調べてみたら、彼奴の親父さんは映画のロケをしているらしい。

「すみません、サインお願いしていいですか？」

本来なら顔も見たくない奴だけでもファンを装って近づく。

胡散臭い笑顔でサインを書いている男に小声で確認をする。

「俺は功才の先輩なんですけど、彼奴は入院しているんですか？それとも家出ですか？」

「何を言っているのかわからないですが。功才とは誰の事でしょうか」

「俺の可愛い後輩です。学校とバイト先のね、彼奴ここ1ヶ月学校にもバイト先にも顔を出していないんですよ。マスコミが知ったら面白がるでしょうね、財津家に長男がいて、しかも父親は1ヶ月も行方不明に気づかなかつたんなて」

「あの馬鹿息子！我が家の立場を考えられないのか？それで君の目当てはなんだい？金かコネか女か？」

そりゃこんな親がいたら卑屈にもなるわな。

「言ったでしょ？俺は後輩を心配しているんだって。俺の要求は彼奴を探す事と居場所が分かったら教える事、それだけです」

俺は携帯番号を書いた紙を突きつけて、その場を後にする。

あの親父は、本当に功才の父親なんだろうか？

次の日には財津功才を転校にしちまうし。

「山田、お前なんかやらかしたか？勇牙さんがお前に会いたいんだとよ」

俺に話し掛けてたのは、マッドエンペラーって族に入っているダチ。

「何もやってねーよ。多分ザコが行方不明になっている件だろ」

待ち合わせ場所に行くと、美男美女が勢揃いしていた。

(こん中いたら、ザコが引け目感じるのは当たり前か)

「それで何の用だ？」

「惚けないで下さい。貴男が功才と親しくしていたのは分かっています。功才が家出する先に思い当たる節はありませんか？」

こいつが三条隼人か。

家出確定はないだろ？

「お願いします。唯も気に病んでいますので、少しでも手掛かりが欲しいんです」

でこれが三条小百合と。

功才のこの字も出しやがらねえ。

「小百合止めてよ。私が夜出歩いたのがいけないんだ。あの時すぐに誰かを呼んでれば良かったのに」

でこれが夏海結と。

これまた自分の反省しかないのか？

「ここでこうしても埒があかねえよ。俺が仲間と探してくる」

最後は鷹丘勇牙と。

ちなみに世間一般では、それを暴走行為と言う。

「でもどうして功才さんは私達に何の相談もしてくれなかったんでしょうか？」

「功才は昔からそうでしたよ。1人で抱えて1人で解決しようとして。今に始まったじゃありませんよ」

「やっぱり強引にでも美星学園を受けさせれば良かったんだよ」

「あん時も功才は1人で決めたる？あの馬鹿、俺達に心配ばかりかけて」

いや此奴等笑わしてくれるね。

「へー、貴方らでもザコの心配が出来るんだ？こりゃ意外だ」

「年上とはいえ聞き捨てなりませんね。功才を心配しているから僕等は忙しい中集まっているんですよ？」

「はっ？心配しているのはその夏海って女の事だろ？お前等からは、一言もザコを心配する言葉を聞いてねえぜ？ザコが1人で解決

「お前らのこつた相談した所で私達が助けてあげるとか言ってる？何で彼奴がお前らと違う学校を選んだから教えてやるのか？お前らの取り巻きが文句をつけたんだとよ。美男美女4人組の邪魔だつてな」

「おい、テメエそれを誰から聞いたんだよ？適当な事を言つとタダじゃおかねえぞ」

「聞いたのはザコ本人からだよ。つうかお前ら最近ザコと連絡とったか？違う学校に慣れたかとか？最近何をしてるかとか？まっ、バイト先に顔を出さない所をみれば分かるけどな」

（仕方ないか、こいつらは周囲が自分達を必要とするのが当たり前なんだろうから）

「教えてやるよ。ザコは1回もお前らの悪口も自慢もしなかったよ。ただ大切な友達としか言つてねえぜ。今お忙しいみたいだけど、その中に何人ザコみたいなのがあるんだ？きちんと財津功才が自分にとってどんな存在だったのかを考えてみるっ！

……まっ身近にすぎた大事な者ほど価値が解らねえのかもな」

俺にとって、ザコは気を使い過ぎる可愛い後輩でしかないんだし。

幕間 先輩と幼なじみ（後書き）

次からは本編 頑張ります

ザコとガーグさん その12 新しい依頼は、ヤバい臭いがいっぱい(前書き)

幕間が終わりガーグさん編の最終段階へ

ザコとガーグさん その12 新しい依頼は、ヤバい臭いがいっぱい

side メリー

最近、1日の大半をコウサと一緒に過ごしている。

今日は依頼もないし、朝から雨が降っていたからコウサの部屋でお話をしているんだ。

「ねえコウサ、美才ちゃんってどんな娘？」

コウサは向こうの世界の話をしたがらないけど、将来の義姉としては色々とおかなくちゃね。

「直ぐ泣く、直ぐ怒る、色気より食い気の手のかかかると妹だよ。写メって名前の絵姿があるんだけど見てみる？」

シヤメは絵を描くんじゃなく、ケイタイって道具で姿をそのまま写すんだって前にコウサが教えてくれた。

「これがミサちゃん？かわいいー！ねっエイカお義姉さんは？…きれいいー。前に言ってた幼馴染みの女の子のシヤメもあるの？」

コウサが見せてくれたのはコウサと幼馴染みが一緒に写っているシヤメ。

1年前に撮ったシヤメだってコウサは言ってたけど……

（うわっ、コウサ可愛いー！そしてこの娘達がコウサの幼馴染みね。後からコウサの魅力に気付いても、ぜっーたいにコウサは渡さな

いんだからね!!)

「俺の隣にいるのが勇牙で…」「メリーはコウサ以外の男の子には興味ないから説明はいらないよ、ねっコウサとメリーも一緒にシャメを撮れるの?」

「できるよ、師匠に充電をしてもらったし。……こんな風にホラッ」
ケイタイの画面には私とコウサが写っていた。

(私、コウサと一緒にいる時って、こんなに笑顔になっているんだ)
「ねっコウサもっと一緒にシャメを撮ろう!」

side コウサ

これを見られたら姉貴には
”彼女を泣かせてないでしょうね?”
とチエツクを入れられて
美才には

”お兄ちゃん不潔”
とか言われるんだろうな。

なんせメリーが、これでもかって位に俺に抱きついてるシャメや、俺の頬にキスしているシャメとかを20枚近く撮ったんだから。

…まっ、向こうに戻る事はないんだろうけどね。

「このシャメって絵姿メリーも欲しい」

「わかった。師匠に相談してみるよ。」

写メを師匠に転送すれば、プリントサービス出来そうだし

そんな話をしていると、ノックと言うには激しすぎる音が部屋に響いてきた。

「コウサ、メリー部屋にいるんだろ？依頼人が来たから、ガーグ殿が下に集まれってさ」

何故かハンナさんは、興奮気味。

「ハンナどうしたの？そんなにイライラして？」

「別に。人が何回もノックしても反応をしなかった癖に、中からイチヤイチャした会話が聞こえた位で自分は不機嫌になんてならないよ」

ハンナさんは、メリーと俺が一緒にいると思って最初は遠慮気味にノックをしたんだろう。

それで応答がないけど、俺とメリーの会話は聞こえていたと……

下に降りるとガーグさんとミッシェルさん、そして初めて見る初老の紳士がいた。

何か知らないけどガーグさんは不機嫌になっている。

「コウサさん、こちらが商人ギルドのギルド長アドファス・マッキンリー様です。マッキンリー様先程申し上げだ通り依頼の判断はこちらのザイツ・コウサが行っています」

商人ギルドのギルド長とは、ミッシェルさんは面倒くさい人を連れて来たな

「とりあえず依頼書を確認させてもらうつすよ」

下手に会話して、向こうのペースに巻き込まれるのは勘弁して欲しい……

あー、これでガーグさんは不機嫌になっていたんだな。

依頼主は商人ギルド。

最近ロディーヌの商人の荷馬車が魔物に襲われる被害が続出しているとの事。

被害にあってるのは、食料、宝石、奴隷等々。

魔物は森や山道等の人気のない場所で待ち伏せをしているらしく、屈強な護衛をつけた商人に被害は出ていないらしい。

……

ガーグさんの不機嫌の原因は、これ魔物はトルルだって事。

依頼を受けたらイントルさんがトルルと戦うはめになる。

それに……

「この依頼書に疑問があるんですけど、質問していいですか？」

「儂で分かる事なら答えましょう」

流石は商人ギルドのギルド長、若造だからって見下した態度はとらないんだねー、油断大敵。

「どんな宝石や奴隷が被害にあっているんすか？それと武具は被害にあってないんすか？」

「食料はその場で食い尽くされておるが、宝石は根こそぎ持ち帰られ奴隷は若い女奴隷のみが連れ去れておる。確かに武具には被害はでていません。しかしなぜ疑問に思いましたか？」

「トロールは嗅覚で獲物を探すって聞いた事があるんすよ。だから食料を襲うのや武具は鉄の臭いがするから襲わないのも納得できるんすけど…宝石は臭いがしませんし、人が大勢いる奴隷商を襲うのはおかしいんすよ。」

それなら護衛の臭いと奴隷達の臭いをトロールが判別している事になるんすよ」

なーんか嫌な予感がしてきた

「ゴブリンが宝石や女性を襲うのと一緒じゃないですか？」

「トロールとゴブリンは全く別種族っすよ。トロールは光物や人族の女性に興味がない筈っすよ……くっ…な、何でもないっすよ」

（メリーなんでつねるんだよー）

（コウサがトロールは人族に興味がないとか言うからハンナが落ち込んじゃったじゃない）

ハンナさんを見ると、ドヨンと暗いオーラを発していた。

「しかし実際に被害はでておりますので、依頼料は1人100万バルの600万バルをださせてもらいます」

「わかったつす。依頼を受けさせてもらうつすよ。結果はミッシェル様を通じて報告するつす」

返事を聞いて安心したマツキンリーさんはミッシェルさんと一緒に帰って行った。

「おいつ、ザイツなんで依頼を受けたんだよ！下手すりゃイントルが同族と戦うはめになるんだぞ」

俺に掴み掛かろうとするガーグさんを止めてくれたのはイントルさなんだつた。

「ガーグさん達も同じ猿人族と戦っているじゃないですか。それに受けないと不味いんですよね、ザイツ殿」

「そうですね。このまま被害が拡大したら今回の件と無関係のトロルも討伐される可能性が高くなります。それにこの件あれに似てませんか？イ・コージの事件に」「コウサ、でもイ・コージさんは牢屋だよ」

「誰かがイ・コージの魔法をパクったんだろ？イ・コージは宝石や奴隷を奪わなかったしな」

今回は、何重もの予防策が必要かもな。

ザコとガーグさん その12 新しい依頼は、ヤバい臭いがいっぱい（後書き）

イントルさん対トロルは感想版の質問から発展しました

ザコとガーグさん その13 作戦開始と不安(前書き)

久しぶりに書きためする事ができました。
なんか安心

ザコとガーグさん その13 作戦開始と不安

side 功才

さて、どうするかな。

自室で策を練っていると、扉を優しくノックする音が聞こえた。

「イントルさんですよ。入って下さい」

これまた優しく扉を開けてイントルさんが入ってくる

「ザイツ殿、良く私だっけわかりましたね」

「簡単ですよ、この部屋に一番来るメリーはノックと同時に扉を開けますしガーグさんは外から叫びます。ハンナさんはメリーがいる時しか来ませんから」

これだけ極端なら誰でも分かるって

「相変わらず良く見てますね。ザイツ殿お願いがあります。今回の件、私に同族を説得させて欲しいのですが」

確かにイントルさんはトル語も話せるけど

「でも今回のトルルは操られている可能性が高いんですよ。説得に耳を貸すでしょうか？」

「食料をその場で食い尽くした所を見ると完全には操られていないと思うんですよ。蛇の道は蛇じゃありませんが、トルルの事は私が

「一番分かっています。彼等が何に一番なびくかも分かっていますよ」
確かにオーディヌス広しと言えどトルルを説得させたらイントルさんの右に出る人はいないと思う

「わかりました。ところでイントルさんはデユクセンやバルドーの法律に詳しいですか？」

「まあ、冒険者は国を渡りますから軽くは覚えてますよ」

流石はイントルさん、こんな質問は他のメンバーにはできない

「もし今回の黒幕がデユクセンの貴族階級だと、どうなりますか？」

「……難しいですね。下手をすれば戦争に発展しかねませんから超法規的措置がとられると思います」

「つまり、相手の爵位や勢力次第ですね。トカゲの尻尾切りになるか、何らかの取り引きで無罪にするか……。ミッシェルさんとシャイン様に打診をしておくか」

でも確証がないのにシャイン様に動いてもらうのは不味いか

「保険ですね。それに貴族階級なら精霊魔法を使うかもしれませんよ」

精霊かー。

低級のフローラルでも、あの強さだもんな

「とりあえずミッシェルさんに相談しておきますよ」

俺はセシリィさんに頼んで、ミッシェルさんに連絡をしてもらった。俺やガーグさんがお城に行ったら怪しまれるだけだし。

「黒幕がデユクセンの貴族階級の場合ですか？」

「可能性は低くないと思うんですよ。その場合のバルドーの立場を聞いておきたくて」

ミッシェルさんにイ・コージの一件と俺の推測を伝えた。

イ・コージの一件の後、シャイン様に確認してもらったらイ・コージはデユクセンの魔法研究所の職員だったらしいが、事件後はその痕跡すらないとの事。

498

「大丈夫ですよ。こちらには取って置きの切り札がありますから」
そう言つとミッシェルさんが黒い笑いを浮かべる、俺も策を練る時はあんな顔をしているのか？

黒幕対策はミッシェルさんに任せるとして、俺はトルルを誘き出す方法とトルルと戦いになつた時の事を考えなきゃ。

そうと決まったら俺がとる行動は1つ

「メリー、今大丈夫？」

そうメリーと一緒に策を練る事

ガーグさんハンナさんはイントルさんに対する感情が強すぎて、今回の相談には向かない。

何よりもフローラルの一件の後に策を練った時は実行前にメリーに報告をする約束になったからだ。

「コウサなら何時でも大歓迎だよ。入って、入って」

端から見たら、ただの仲の良い恋人同士なんだろうけども、話している内容は血生臭い。

「メリーは黒幕がどうやって襲う相手を決めていると思う？」

「貴族なら1人で国外に来る事はないと思うから部下の人に下見に行かせてるのかな？」

「それしか考えられないよな。でもそれだと怪しまれるし、奪った奴隷や宝石はどこに隠しているんだろ？」

「そう言えばブルーメンにバルドーの貴族が別荘を持ってたよ」

あー、そういう事ね

「メリー、ありがとう。黒幕のやり口は予想がついた。……次はトルルとの戦い方なんだけど」

データボール参照トルル

トルルの特徴は何と言っても、その力の強さと打たれ強さです。基本は1匹で行動しますが、複数のトルルはさらに厄介な相手になりますよ。

人を襲う時は人が持っている食料を奪う時しかないそうですよ。あつ、奪うと言えば美才ちゃんにメリーさんの事を話したら”お兄

ちゃんを奪われた”って怒っちゃいました。

いや、砂糖とか仕入れてくれているから、向こうと繋がりがあるのは予想していたけども…

師匠なにをサラツと告白してるんですか？

美才は顔は可愛いけども怒ったら、なだめるのが大変なんですよ

(美才、ごめんよ。お兄ちゃんはオーディヌスでメリーと幸せに暮らす予定だからさ…祝福してくれないかな？そっちに行く手段もないし、師匠に言ってもはぐらかされて、おしまいだろうからさ)

「コウサ？どうしたの？冷や汗をかいたりして」

「な、何でもないよ。それよりトルルだよ。何匹出てくるかだよな」

「下手に大人数で行ったら警戒されそうだなもんね」

ガーグさんがいたら、それだけで警戒しそうだし。

こればかりはみんなと相談しなきゃ決めれない。

結果、俺とメリー・イントルさんとハンナさん・ガーグさんとセシリーさんの3組に分かれて、それぞれ商人に変装をしローディヌスの宿屋に泊まる。

それぞれが商品を仕入れて30分置きにローディヌスを出発。

襲撃された地点を過ぎたコンビは変装を解いて折り返して、他のコンビが襲われていたら加勢をする事にした。

ザコとガーグさん その13 作戦開始と不安(後書き)

明日は休みで暇してるから書きためしようかと
感想お待ちしております

ザコとガーグさん その14 イントルさんとハンナさん(前書き)

ガーグが主役回なのにイントルがメインに

ザコとガーグさん その14 イントルさんとハンナさん

side 功才

メリーの希望で、俺達は若い商人夫婦に変装している。

「さてメリー。俺達は何を仕入れる？」

「あなた、魚なんてどうかしら？この時期は脂がのった魚が捕れま
すから」

……は…恥ずかしい。

何でメリーはノリノリなんだろう。

「魚か。干し魚と鮮魚を仕入れていくか」

干し魚は日持ちするから仕入れるのが自然だし、鮮魚は臭いがする。
アイスキューブで埋めとけば、しばらく持つだろうし。

side ガーグ

ザイツの奴らは演技が巧いのか、あれが素なのか自然に夫婦を演じ
ていやる。

「そ、それではお嬢様、今日は何を仕入れましょう」

(何でザイツ達が若夫婦で俺とセシリーがお嬢様と使用人なんだ？
ちきしょーセシリーの奴、覚えとけよ)

「そうね。ガーグ香水なんてどうかしら？」

.....

「ガーグ？」

こいつ催促していやがるな

「そ、そうですね。お嬢様の様な美しい方が仕入れた香水なら若い娘が喜んで買つと思ひます」

「あら、ガーグをお世辞を覚えたのね。それならガーグ命令よ。お前も私に似合う香水を仕入れてみなさい」

セシリーの奴、調子にのりやがって。

俺が香水だと

「わ、私の様な無骨な者は香水等は分かりませんので……」

「ガーグ、これは命令よ」

分かったよ、買つよ、買えばいいんだろ！

side ハンナ

自分とイントル殿は、商人と見習い商人に扮している、イントル殿は顔を布で覆って大商人の雰囲気満点だ。

「さてハンナ。私達は果物を仕入れていきますよ」

「は、はいっ。わかりました！」

イントル殿は大丈夫なんだろうか？

猿人族の為に同種族と争うかもしれないんだ。

「ハンナ大丈夫ですよ。もう決めた事ですから……」

でもその顔には悲しみが溢れていた……

自分では支えにならないのかな

side イントル

ここが襲撃があつた森ですね。

…久しぶりに嗅ぐ同族の臭いがしています。

「ハンナ、ここからは私1人でいきます。もし私が遅くなったら貴女はガーグさんと一緒に来て下さい」

ハンナは私の言葉を聞くと、うつむいてしまいました

「嫌です！自分はイントル殿に付いて行きます。決して足は引つ張りませんので一緒に行かせて下さい」

困った事にハンナは涙目になっています

「違いますよ。私はハンナの事を足手まといななんて思っていないません。ハンナにはトロールとしての私を見られたくないんです」

幾ら人族の振りをして私にはトロールなんですけどね

.....

理解してくれましたでしょうか？

「か、関係ありません！自分はイントル殿がトロールと知って付いて来たんです。イントル殿も他のトロールと一緒に猿人族の女は嫌いなんですか？それとも自分の様な物を知らない女が嫌いなんですか？」

..... 本当に困りましたね

「危なくなったら逃げて下さいよ」

「はいっ！！」

そんなに素敵なお顔で喜ばれると困るんですよ。

ハンナさんに惹かれたのは何時からでしょう。

私がトロールと知っても側に居てくれたからでしょうか？

私の話を目を輝かせながら一生懸命に聞いてくれたからでしょうか？

多分、気がついたら惹かれていたんですね。

何時の間にか彼女の笑顔を求めて、何時の間にか彼女に話し掛けられるのを心待ちにしています。

その度には自分はトロールだと言い聞かせて、彼女の輝かしい未来の邪魔にしなければならないと言い聞かせてきました。

こんなに苦しいのなら知恵を持たなければ良かったと何回思った事でしょう。

だから何があっても彼女だけは守ります。
例え同族を殺す事になっても。

森の道を進む程に同族の臭いが濃くなってきました。

「ハンナ、身構えて下さい。トロルが4人と薄くですが猿人族の臭いがします」

あそこですね。

あそこに行けば前後で囲うつもりなんでしょう。

私はこれでも何年も冒険者をしてきたんですから。

むぎむぎ敵の策にのるつもりはありません。

ハンナに目で合図を送り、その場所につく一歩手前で石を投げて、バックステップで距離をとります。

私達の動きにつられて同族が出て来ました。

「
「

(めしおいてけ)

「
「

(なかま聞け。ここあぶない)

「
「

(だめ。ピカピカやひとをもつてく。めし食える)

やっぱり、操られた上に餌付けされてましたか。

「○ * \$ §」

(おまえ達利用されてる)

お願いです、引いて下さい。同族とは戦いたくありません。

「おい、トロル共。何をグズグズしてるんだ？チャラ様に叱れるぞ」

side ハンナ

こいつがトロルを操ってイントル殿を苦しめている奴。
そう思っただけで、体中が煮えたぎる感じがしてきた。

「へー。こりや上玉だ。おい姉ちゃんそんなむさ苦しい奴よりチャラ様の所に来ないか？」

「断る。イントル殿の素晴らしさも知らない奴がほざくな」

「イントル？……なんだ、そいつもトロルじゃねーか、こりやラッキーだ。新しい手駒に新しい女。こりやチャラ様から褒美を貰えるな」

「仲間を解放してもらえませんか？」

イントル殿が低く悲しげに話す

「こりやいい。人の言葉を話すトロルか？見世物小屋に高く売れる

ぜ」

男は懐から小さな水晶を取り出して呪文を唱えた

「おいトル共。そいつ等を連れて帰るぞ」

イ、イントル殿が動かない？

まさか操られたの？

トルルが自分とイントル殿に手をかけようとした瞬間、イントル殿のミスリルスティックが煌めいて、トルルが吹き飛んだ。

「させませんよ。ハンナは私の大事な人です。貴男方には指一本触れさせません！」

今なんて？

ハンナは私の大事な人！

ハンナは私の大事な……

絶対にイントル殿と一緒に帰るんだ！！

ザコとガーグさん その14 イントルさんとハンナさん（後書き）

今人気投票をしたら、ハンナにも票が入るんでしょうか？

ちなみに前は冒険者隊に全員としての1票のみで個人票は0でした

今なら通勤、通学の暇つぶしに見てくれる人がいたら嬉しいです

ザコとガーグさん その15 ガーグ冒険者隊(前書き)

書きためが出来たので今日は2話めを投稿します

ザコとガーグさん その15 ガーグ冒険者隊

side イントル

不味いですね。

向こうはトロルが4人に多分、魔法使いの猿人族が1人。

私もハンナも必死に抵抗していますが、徐々に押されて体の傷も増えていきます。

「なーにが守るだよ？トロルが人族の相手になる訳ねえーだろ？最後に、その女の色んな姿を見せてやるよ」

なんとか、ハンナだけでも逃がさなくては。

その時です、あの人の声が聞こえたのは

「おい、イントル。お前が早く片を付けねえからセシリーのお嬢様ごっこが長引いたんだぞ。で俺のダチに何してくれたんだ？そのクズ野郎！」

不思議ですね。

この人の罵詈雑言は、私をとても安心させてくれます。

「ガーグさん！良かった、これでハンナを守れます」

良かった。

ハンナを守れた。

「けっ！やっと素直になりやがったか。セシリー、イントルの傷を

治せ。イントル、ハンナとつと片を付けるぞ！ガーグ冒険者隊にケンカを売ったらどうなるか、きっちり教えてやれ！」

ガーグさんの言葉を聞いた男が不敵な笑みを浮かべました

「2人増えても数はこつちが上なんだぜ？それに戦士ばかりで俺の魔法に耐えられるかな？」

男が呪文を唱えて始めました。

この場所では直撃してしまいますね…

それは火の玉が私達に当たる瞬間でした

「シールドボール！メリー男が持っている玉を壊して」

「コウサ任せて」

それはピンチの時程、頼りになる仲間です

「ザイツ殿、プルングさん！」

side 功才

それじゃ本気で怒ったガーグ冒険者隊の凄さを体感してもらいますか。

「メリー、トロルの耳元に向かってロケットアローを」

「コウサ、わかったよ」

耳元でロケットアロー（爆竹もどき）が爆発した事により、トロル

が硬直する。

それでもって、トロルの目に向けて

「フラッシュ」

耳が聞こえない上に、目も眩しくて見えなくなったトロル達は、その場にうずくまった。

「それじゃ仕上げをガーグさん、イントルさん、ハンナさんお願いします」

マジ切れしている3人が近づいて来た事により、先までの威勢はどこへやら男は一目散に逃げ出した。

「あっ、追わなくいいですよ。逃げ場所は分かっていますから。それよりもイントルさん、改めてトロルの説得をお願いします」

イントルさんに説得されたトロル達は茫然自失といった感じで森の奥に消えて行った。

何故だろう。

ハンナさんとイントルさんの間に他人を近づけない空気が流れている。

邪魔をしちゃまずいと思ったのか、ガーグさんが話しかけてきた。

「ザイツこれからどうするんだ？」

「ミツシエルさんと合流して黒幕の所に行きます。黒幕の名前はチャラ・イース。デユクセンのイース公爵の次男でデユクセン皇国魔法研究所の所長。ついでにイ・コージの元上司です」

「あっん！何でデユクセンの貴族がバルドーでふざけた真似してんだよ」

「多分、チャラはイ・コージの研究をパクったんでしょうね、でもデユクセンで実験はできないから別荘があるバルドーで実験をしたんでしょ。ついでに大好きな宝石や女も手に入れるって寸法かと」

他国で他人の禪で相撲をとった上に略奪までしちゃうとは何とも困った貴族様だよな

一度ロディーヌに戻り、ミツシエルさんと合流する。

先の襲撃の件を聞いたミツシエルさんが真っ黒な笑みを浮かべる。

それは俺が思わずチャラに同情してしまう位に迫力のある笑顔だった。

「それでチャラの別荘に着いたけど、いつ乗り込むんだ？」

ガーグさんは、放っておくと单身別荘に乗り込みかねない

「もう少し待って下さい。あつ来ましたよ」

「あれって確かロディーヌの商人だよ。そうか食料を届けに来た商人が襲撃する相手を教えていたんだ」

「そして部下がトロルを引き連れて商人を襲うって手筈だと思う」

座りしままに食うはチャラ・イスってか
良い御身分だ事

「それじゃ皆様行きますよ。久しぶりに私の腸を煮え繰り返してくれたお坊ちゃまに現実というモノを教えにいきましょう」

ミッシェルさんから、どす黒いオーラが立ち上っていた。

「失礼いたします。バルドー宮廷魔術師のミッシェル・スターローズと言う者ですが、チャラ・イスを逮捕に来ました」

ミッシェルさん新聞の勧誘じゃないんですから

対応したのはトロルを引き連れていた男

「あつ、チャラ様を逮捕だとふざけた事をぬかすんじゃない。って
お前達は」

いや、そこは知らないふりをおかないと

「どーしたの？僕のスイートタイムを邪魔するのは誰なんだーい？」

確かチャラ・イスって20代後半の既婚者だよな…
こんなチャラくて大丈夫なのかよ？

「小僧スイートタイムは終わりだ。お前の罪は重すぎる」

「何を言ってるんだい？僕はデユクセンのイス公爵の次男だよ。
僕を逮捕するならデユクセン皇国の承認が必要なんだぜ」

うわっ、こいつムカつく

「ガーグ様よろしいでしょうか？」

ガ、ガーグ様？

ミッシェルさんがガーグ様？

「その小僧には俺もムカついてんだ。任せら」

「ありがとうございます。これよりチャラ・イスの罪を述べる。
1・バルドーでの貴族特権の使用 2・バルドーでの犯罪行為…
そしてこれが一番の重罪だ。エルフィン聖王国の王族への敵対行為、
これによりチャラ・イスの身分はエルフィン聖王国の管理となる。
お前はバルドーとエルフィンの2カ国にケンカをうったんだよ」

ザコとガーグさん その15 ガーグ冒険者隊(後書き)

活動報告へ何人かの人から答えてくれ嬉しかったです。
この小説が1日の気分転換になれていたら、幸いです。

ザコとガーグさん その16 ガーグ王子? (前書き)

活動報告で聞いたら色んな人が、ザコを楽しみにしてくれてい感動しました。

書籍化はなんて有り得ない作品ですけど、読んでくれた人が楽しんでくれたら嬉しいです

ザコとガークさん その16 ガーク王子？

side 功才

王族？

ミツシエルさんって王位継承権は無いんじゃないっけ？

「この者はエルフィン聖王国の王位継承者、ガーク・エルフィンローズ様に不逞を働いた者。捕まえてエルフィンに護送せよ」

ミツシエルさんの合図と共に20人近いエルフが現れてチャラ・イス達を取り押さえた……

ってガークさんがエルフの国の王子様？

いやいやエルフってよりドワーフかオーガじゃん

「皆様すいません。皆様も証人としてエルフィンと一緒に来てもらいます」

ミツシエルさんが深々と頭を下げる

データボール参照エルフィン聖王国

エルフのエルフによるエルフの為の王国です。

人族は滅多な事じゃ入れませんよ。

今はシャルレーゼ・エルフィンローズ女王が統治しています。

シャルレーゼ女王は300歳を越えていますけど、年の話は禁句ですからね

エルフィンローズ女王？

ガーグさんはガーグ・エルフィンローズだよな
つまりガーグさんは現女王の直系？

そんなこんなしているうちにガーグさんはセシリーさんと一緒にや
たらと豪華な馬車に乗ってしまった。

俺達にあてがわれたのも、かなり豪華な馬車。
どう見ても市民が乗れるレベルの馬車じゃない

「イ、イントルさん。ガーグさんがエルフで王子って本当ですか？」

「私も信じれません。ドワーフやオーガの傭兵の息子なら分かるん
ですが」

やっぱり同じ発想になるよな

「コウサ、この馬車を見ると嘘じゃないと思うんだけども…」

「チャラ・イースは檻だしな。とりあえずエルフィンに着けば答え
が分かるか」

マジでガーグさんは王子かも…

だって馬車を引っ張ってる馬が有り得ないスピードで走ってるんだ
もん

「イントルさん、あの馬の事分かりますか？」

「分かりますけど本物は初めて見ました。あれはシルフィードホー
ス、風の精霊シルフの加護を与えた馬です。精霊と親しいエルフ

の国だから飼える馬ですよ」

だからこんなに早く走っても揺れないのか

馬車の中は、ようやくゆっくりとし空気が流れ始めた

「イ、イントル殿。そのあの……先は嬉しかったです。……自分もイントル殿を大切に思っていますから」

あの、ハンナさん。

俺が言えた義理じゃないんですけども、馬車の中でデレデレオーラを出されると気まずいんですけど

「イントルですよ。次からはイントルと呼び捨てにして下さい。ハンナ良かったら、ゆっくりと私達の間を作っていきますよ」

「はいっ！！イントル改めてよろしくお願い致します」

（メリー、2人に何があったの？）

ハンナさんはともかく、あのイントルさんがデレてる？

（先トロールに襲われた時に私の大切なハンナに手は出させないってイントルさんが公言したんだって）

流石は女子、その手の話をするのが早い

（ハハッ。なーんか似たようなセリフを言った記憶が）

（俺の大切なメリーに手をだそうとしたお前達が悪いんだぜ、だよ
ね。きちんと覚えてるよ）

（今思えば良くあんな似合わない言葉を言えたよな）

馬車の中は満ち足りた空気に包まれていた。

オーデイヌスに来て、初めて見る物ばかりだったけれども、これには圧倒された。

エルフィンで俺達を出迎えたのは数千いや下手したら数万人近いエルフ。

ガーグさんは敬意と再会の喜びに包まれ、俺達はガーグさんの仲間として貴賓の様に扱われていた。

かたやチャラ・イス達に向けられているのは包み隠さない殺意。

エルフは人族を好まない、しかもチャラ達は自分達の王族を襲おうとした不逞の輩。

いや、チャラは好きじゃないけど同情をしてあげよう。

誰もあの敵ついハゲ頭の荒くれガーグさんがエルフの王族なんて考えないだろ。

エルフの対応を見ている今でもドツキリを疑っているし。

エルフの特徴は細身で美形、尖った耳と金や銀の輝く髪を持つ。

ガーグさんはゴツく強面、尖った性格と輝く頭を持つ。

（特徴が一致しねー）

（コウサ、ガーグさんって本当にエルフの王子様？）

（王位継承者だからな。まっ何となく予想はついてきたけど。……
って考えるのが一番自然だろ？）

（流石はメリーのコウサ。だからガーグさんは冒険者をしてるんだ）

俺達が案内されたのはエルフィンのお城。
城は過剰な装飾とかは無いけど磨き上げたら壁や床が荘厳さを感じさせる。

「凄い事ですよ。エルフィンのお城にエルフ以外が招かれるなんて滅多に無い事です」

流石のイントルさんも興奮が隠せない様子だ。

しかも呼ばれたのが獵師の娘・キコリの娘・トルル・異世界人とバラエティーに富んだメンバーなんだし。

「ここで少しの間お待ち下さい」

俺達を客室まで案内してくれたメイド姿のエルフが恭しく頭をさげて退室しようとする。

「申し訳ありませんが、ガーグ様はどうされていますか？」

「ガーグ様は自室にお戻りなれたかと思えます」

ちよっ、何でガーグ様の所で頬を赤らめてるの？

絶対にガーグさんはエルフの好みでいくと、ストライクじゃなくボークかデットボールだろ。

しかも頬を押さえたまま退室するなんて…。

啞然としている俺にメリーが話しかけてきた

「コウサ、なんでガーグ様なんて言ったの？」

「今までの対応を見るとガーグさん何て言ったら不敬者扱いをされちまうよ。とりあえずガーグさんはエルフに嫌われてはいないみたいだな」

「だよねー。今の娘なんて顔を真っ赤にしてたし。コウサ、うらやましい？」

「別にうらやましくないよ。周りがモテる状況には慣れてるから」

ラブレターポスト財津功才をなめないで欲しい

ザコとガーグさん その16 ガーグ王子? (後書き)

次話でようやくガーグの過去です

感想・指摘お待ちしております

ザコとガーグ その17 インプラスエルフ（前書き）

ガーグ編が予想以上に長くなりました。

ザコとガーグ その17 インプラスエルフ

side 功才

これはガーグさんやエルフによるイジメなんだろうか？

あの後部屋に執事エルフが来て案内されたのは、重厚な作りの謁見の間

そこで膝をついて女王様が来るのを待っているんだけど、玉座の隣にいるのは、派手な刺繍が施された服と、半ズボン白タイツを身にまとったガーグさん……。

笑いを堪えるのがキツイ。

に、似合わねー、写メを撮ってドルムーンにバラまきてー。

隣を見るとメリーやイントルさん、ハンナさんも笑いを堪えている。当のガーグさんも俺等の様子に気付いており額がびくついている。

(やべっ、他のエルフも同じ格好しているのに、ガーグさんだけコソントの馬鹿王子じゃん)

早く謁見を終えて笑い転げたい。

笑いの我慢が限界に達した時にようやく女王様が謁見の間に現れた

「客人、面をあげい。儂がシャルレーゼ・エルフィンローズじゃ」

シャルレーゼ女王は見た目は20代前半、10代でも通るだろう。見た目が美しい以上に人目を惹くのは、エメラルドを思わせる光り

輝く緑色の長い髪。

（そついやガーグさんの年って何才なんだろ？見た目は30代か40代だけど）

「汝等には儂のひ孫ガーグが大変世話になったようじゃな。ひ孫に変わって礼を言おう」

（ひ、ひ孫？見た目はガーグさんが親でもおかしくないのに、シャルレーゼ女王がガーグさんのひいおばあちゃん？）

「してミツシエルの言った事は本当か？もしかやデユクセンでは他種族を操る魔法を作るつもりなのか？」

やばっ、下手したら戦争になりかねない

「お言葉ですがシャルレーゼ女王様、私にはデユクセンの貴族に知己の人がおります。名前はシャイン・マクスウェル、デユクセン皇帝の側近でございます。その方に確認した所、魔法作成の指示及び無断使用はチャラ・イースの独断と思われまます」

「ふむ、その辺はデユクセンに確認しよう。汝等はエルフィンの客人だ。後ほど歓迎会を開く故、部屋で待っておれ」

部屋に戻ってきた俺は笑い転げるよりも、冷や汗を拭うのが先になった。

「しっかし偉い迫力がある女王様でしたね」

「あれ位じゃなければ女王は務まらないのかも知れませんよ。しかしガーグさんは本当にひ孫なのでしょうか」

長い付き合いのイントルさんでも未だに納得ができていない用だ。

「そつだと思えますよ。でもガーグさんは純血エルフではないと思います。それなら色々と辻褃があいますから」

「辻褃ですか？」

「ほらロディー又に入る時にガーグさんがパーソナルカードを見せて有無を言わせずに通つたじゃないですか？あの時ミツシエルさんは無理だつたんですよ。つまりガーグさんはエルフィンの子族に連なるミツシエルさん以上の立場じゃなきゃおかしいんですよ」

ミツシエルさんはスターローズ家の3男だけど王位継承権はない。つまりガーグさんは王位継承権を持っている可能性が高い。

「コウサ、それじゃガーグ殿はエルフじゃない可能性もあるだろ？」

「ハンナさん忘れたんですか？ガーグさんミツシエルさんセシリィさんは幼馴染みなんですよ。王族に連なっているミツシエルさんがエルフィン出身じゃなきゃおかしいじゃないですか。ましてやガーグさんがタダの子族ならエルフィンに住める訳がない」

エルフィンの子族が入国するのさえ難しい国なんだし

「ガーグさんは純血エルフじゃないからエルフィンから出れたんだよね。冒険者をしているのは身分より実力が評価される世界だから

「なんでしょ？ねっコウサ」

「純血で王位継承権があるエルフが国外に出る可能性はないからな。もし出れたしても、そんな人を雇う所なんてないでしょ。あってもお飾り、あのガーグさんがお飾りになる訳ないでしょ」

「ガーグさんが魔法研究所の所長なんかをしてたら所員に戦闘訓練をやらせてそうだし」

「でもこのタイミングで呼ばれたのは裁判の為だけじゃないと思うんだよな」

「でましたガーグさんの嫌がらせ第2段。」

「俺にもあのコントの馬鹿王子みたいな衣装を用意してくれた。」

「歓迎会に出席する為の衣装らしいけど、メリーやハンナさんは美少女だからドレスが似合うからいいさ。」

「イントルさんはサイズの関係でスーツに、ガーグさんから事情の説明があつたから覆面もなし。」

「だから俺だけがコントの馬鹿王子。メリーに写メを撮られまくったし。」

「よう、ザイツ似合うじゃねーか。中々笑えるぜ」

「ガーグ王子様、庶民は普通の服で良いと思うのですが……」

「うるせーよ。人の格好を見て笑いやがった癖に。それに俺は王子じゃねえ、ババアが女王なだけだ」

あの女王様もババア呼ばわりできるのは、ガーグさんだけかと

「それよりもガーグさん、何で俺等が呼ばれたのか分かりますか？
裁判の証人だけじゃないでしょ？」

できたら飯を食う前に逃げたいよなー

「あのババアから逃げようとしても無駄だぞ。国内でなら軍隊を動かしかねないからな」

だからガーグさんも大人しく馬車に乗ったのか

「そう言えばガーグさんって何才なんですか？」

「俺は24だぜ？それが何かしたか？」

嘘……

「何でエルフの血を引いていて年より老けて見えるんですか？俺は
てつきり40近いかと」

確実に子供とかいいそうなのに

「誰が40だ。それに俺はエルフの血が薄いんだよ。爺さんでハ
フエルフだからな」

つまりガーグさんの親がクォーターエルフで、ガーグさんはインプ
ラスエルフ？

エルフの血が8分の1しか入ってないと。

ザコとガーグ その17 インプラスエルフ（後書き）

クオータの下がインプラスと言っらしいです。
ネット調べで自信はありません。

ザコとガーグさん その17 ガーグ・エルフィンローズ（前書き）

今日は遅番だから、この時間に投稿。 書きためが消費されていく

…

ザコとガーグさん その17 ガーグ・エルフィンローズ

side 功才

俺は異世界人、メリーは猟師の娘、ハンナさんはキコリの娘。

つまりテーブルマナーとかこういう場所でのマナーなんて分かる訳もなく、3人共イントルさんの動きに注目しながらの食事。

いや、イントルさんが凄いんだって。

トロルだって白い目で見ていたエルフがイントルさんの洗練されたマナーや高い知識に尊敬の眼差しを浴びせているんだもん。

文学から音楽、美術まであらゆる物に造詣が深いイントルさんの周りにはエルフの人集りが出来ているし、ハンナさんは輪に入れず拗ねている。

「コウサ、野菜や果物ばかりだね。お肉少ない…」

エルフの顔や体型を見たら肉食より草食系なの丸分かりなんだけど。

「メリーがエルフィンに住むのはキツいかもな。狩りができる森にも制限があるみたいだし」

「そんなの無理だよー。狩りは獲物に感謝をしながら狩るんだしさー。メリーはエルフィンに長くいるんなら狩りが必須条件だよ」

メリーがテーブルにパタンと伏せた。

多分長くなるから俺が肉料理を作るとするか。

「どうですか？楽しまれていますか？」

胡散臭い爽やか笑顔で、俺達に話し掛けてきたのは、この状況の仕掛け人であるミッシェルさん。

「楽しむも何も今回俺達を呼んだ目的を聞いていませんし、まだガーグさんの両親にも挨拶をしてませんよ」

「ガーグ様のご両親は既に亡くなれております…」

「待てミッシェル。そこからは俺が話そう。客人済まぬが別室にご足労願う」

シャルレーゼ女王は俺達を別室に案内してくれた。

「あれはまだ俺がうら若き200才の乙女の時じゃった」

(200才の乙女って…)

(コウサ、失礼だよ)

「エルフィンに人族のパーティーがやって来たのじゃ。何でもデユクセンでエルフの精霊魔術師が悪さをしているから俺等の知恵を借りたいと言って来ての。そのエルフはエルフィン出身じゃったから王家の長女たる俺が同行する事になったの」

(大方その悪者エルフが王家に近い奴だから責任をとったって所か)

「炎の勇者ブレイブ・水の僧侶ウォルター・風の格闘家ウィング・そして荒くれ戦士ガーブとの旅が始まった」

（１人だけ扱い酷くね？つうかガーグさんのひいじいさん確定じゃん。勇者とエルフの姫様が結ばれるのが定番なんだけどな）

（もう女の子が全員勇者を好きになる訳ないじゃない）

（メリーも俺の事を、好きになってくれたしな）

「旅をする中で僕は１人の男に惹かれていった。自分では荒くれとか言っておったが優しい男での。僕が恋するのに時間はいらなかった……」。

しかしエルフの姫と戦士、父親には反対されての。ガーブの奴はエルフィンに残れと言いおったが僕は強引について行った。やがて子が生まれ、孫も生まれガーグが産まれた…ガーブや嫁との別れもあつたが幸せじゃつたよ」

（エルフと人の別れか…）

「ガーブの血筋か僕の一家は冒険者一家での。冒険に出ている間を僕が幼子見ていたんじゃよ。ガーグのオムツも取り替えてやったしの。今はあんなのじゃが小さい頃はおば様おば様と甘えてきて可愛かつたんじゃぞ」

（想像できねー）

「ガーグが６歳の時じゃつた、僕とガーグ以外の一家が全員が帰ら

ぬ者となった。依頼の時に高位の精霊魔法を放たれたんじゃよ」

（それでガーグさんフロールルの時に怒ってくれたんだ）

「丁度その頃エルフィンで父が亡くなったんじゃが、残った者で王位を継げる様な者がおらんで。儂に女王になって欲しいと言ってきおった。さすがに儂も疲れているのガーグを連れ帰る条件でエルフィンの女王になったのじゃよ、ガーグは人に好かれる器の持ち主の様でエルフィンにも直ぐ馴染みおった」

.....

「女王様、そこから私に話させて下さい。お願いします」

「セシリーか、お前にも関わる話じゃからの。任せるぞ」

「私の名前はセシリー・エルレイン。エルレイン家は代々王家に仕えてまいりました。私もガーグ様にお仕えする事なつたのですが、ガーグ様はあの性格故に様付けで呼ばれるのを拒否されまして」

「それでガー君になった訳ですか？その頃にミッシェルさんとも知り合っただんですね」

「ええ、私達は同い年なので。ガーグ様の遊び相手も兼ねまして」

絶対にガーグさんはガキ大将だったろうな

セシリーさんの表情が暗くなる

「エルフィンの子族の者は16才の誕生日になるとある試練を受けなければ行けません。王家の墓場に1人で行かなければならないのですが、私が見届けたくて外に出たばかりに、ガー君はガー君が……」

その後セシリーさんをなだめたシャルレーゼ様の話によると、ガーグさんが王家の墓場に入る直前にタイミングよくセシリーさんが魔物に襲われて助けに入ったガーグさんが怪我をして試練は中止。

そして純血エルフを尊ぶ勢力によりガーグさんはエルフィンから出るはめになったらしい。

シャルレーゼ様もガーグさんはエルフィンよりも外で冒険者をする方が良いと思い反対はしなかった。

ちなみにミツシエルさんはロディーヌとの外交官兼ガーグさんの情報収集役だったとの事。

「そーなんですか。でもガーグさん凄い人気ですよね」

「ガーグは僕の自慢のひ孫じゃからの。旅の途中でガーグに救われたエルフもおるし、エルフィンでは手に入らない薬とかも送ってよこすんじゃないよ」

「それで先のメイドさんはガーグさんの名前を言っただけで頬を赤らめたんだ……」

セ、セシリーさんからヤバいオーラが……

「そのエルフの名前は分かりますか……？」

「いや直ぐにいなくなったから聞いてませんが…」

「ミリーかしらレニかしら。それともエレン？良いわよ……ガー君は渡さない。エルフィンで待ってただけの女にガー君を渡してたまるかー！！」

ガーグさんすいません、修羅場に巻き込んだみたいです。

ザコとガーグさん その17 ガーグ・エルフィンローズ(後書き)

感想・指摘お待ちしております

次回作は荒くれ戦士とエルフのお姫様？
幕間レベルか……

ザロとガーグさん その18 エルフィンでの生活(前書き)

話を1話とばして更新していました

すみません

ザコとガーグさん その18 エルフィンでの生活

side 功才

「シャルレーゼ女王様、質問をしてよろしいでしょうか?」

女王にこんな質問をすろと思っただけで、喉がカラカラになる

「お主はコウサ・ザイツじゃったの。申してみるがよい」

……俺はまだ名乗ってないよな

「ガーグさんは王子として呼ばれたのですか?それともガーグ冒険者隊として呼ばれたのですか?」

「ふむ、ガーグやミツシエルの言っただ通り面白い猿人族の少年じやな。裁判の為に呼んだと聞いてはないか?」

つまりミツシエルさんから予め報告を受けていたと

「裁判の為だけなら歓迎会は必要ないですし、私はまだ自己紹介をしておりませんよ。私はてつきりエルフだけでは解決できない問題があるのかと思いましたが」

賭けだ、これは賭け。

今回の藪には大蛇以上の者がいるに違いない。
それなら早めにつつついて策を練った方がましだ。

「ガーグが気に入リミツシエルが推すだけあるの。なにエルフィン

には冒険者がおらんからの、しばらくは普通に依頼をこなしてくれば良い。じゃがエルフィン森は深いからの。あまり深入りすると迷子になるぞ」

つまり、依頼をこなして信用を築いたら本題をだすと。それとあまり探ると森で襲わせると……

オツケー！分かったよ。

言う通りにしてやる！

誰が国の最高権力者に逆らうか！

エルフィンでの俺達の宿はガーグ邸に決まった。

…でけえ…

まあ現女王の唯一の直系の屋敷だもんな。

「ガーグさん、この無駄にでかい屋敷はなんですか？使用人工ルフトかいたりしませんよね」

「商業が発展していねえエルフィンじゃ使用人は数少ない仕事の1つだからな。本当は使用人なんざ雇わずにメエで掃除すりゃいいんだけどよ」

「ガー君の言う通り。ガー君のお世話はエルレイン家の役目。つまり私の仕事。他のエルフ（女）は立ち入り禁止！」
ガーグさんすいません。

屋敷はセシリー台風の暴風域に入った様です。

「セシリー、お前は実家に戻るんだろ？」

「ガー君、何を言ってるの！ガー君は炊事・洗濯が出来るの？」

「何言ってるんだ。出来なきゃデユクセンで生活が出来ねーよ」

「くー、無駄に生活力をつけて。それでもガー君は王族なの？」

(…メリー、目が良かったよな。屋敷の前に人影が見えるんだけども、もしかしなくてもあれは…)

(コウサ、セシリーさん荒れるよ。あれ先のメイドさんだもん)

「ガ、ガーグ様お帰りなさいませ。本日からお屋敷でメイド長をさせて頂きます。ニーナ・コロンです、ガーグ様皆様よろしくお願ひします」

ニーナさんは、エルフにしては珍しく小柄で、どこか小動物を思わせる可愛さをもつ女性だ。

ガーグさんと一緒にいると良くて親娘、下手すりゃガーグさんが白い目で見られかねない。

でもメイド長って？

「それぞれの担当メイドには後ほど挨拶に行かせますので」

セシリー台風だけじゃなくメリー台風、ハンナ台風も発生した。

「メリーとコウサにはメイドさんなんて必要ないの。むしろ邪魔！」

「イントルは複雑な事情を抱えている。気位が高いエルフがいたら心が休まらないだろう。悪いが自分とイントルのメイドも必要ない！」

いや、2人共そんなに過剰反応しないで...

でもメリーに美男子執事エルフがついたらやだよな。

「とりあえず担当メイドは遠慮しておきます。ただ俺達の部屋以外の掃除はお願いしますね」

「コ・ウ・サ・なーんでメイドさんをキッチンと断らなかったの？メリーと一緒に嫌!?!」

メリーが半泣きで詰め寄ってくる。

ハンナさん達がいなきゃっギョツとしたい。

2人っきりの時は違う言い訳をして、結局はしなないんだけどさ。

「多分メイドの件はシャルレーゼ女王の命令だと思うよ。俺達を監視させたいんだと思う。下手に断れば、お城生活にされちまうよ」

「女王様はメリー達を信用してないの？」

「逆だよ、逆。俺達を逃がしたくないから素早く不満を解消しておきたいんだろ？もつと正確に言えばガーグさんを手放したくないんだろけども……逆効果だったかもな」

あれじゃな…

「ガー君、何で断らなかったの？私以外の世話役エルフも欲しいの？このエロ坊主！」

「ばばあから断るなって命令されてんだよ。お望みなら世話はいらねーよ。もちろんお前の世話もな」

「ガー君は王子でしょ？生活力つけてどうすんのよ？世話役の仕事を奪うな！この世間ずれ王子」

「普通、世話役がそんな態度をとるか？この減らず口エルフ！」

「何よつ！この中途半端エルフ」

……

地位と純血か。

あの2人も厄介な物を抱えてるよな。

（ねえコウサ、ガーグさんとセシリーさんって好き同士だよね…）

（1人はエルフの純血に1人は王族の地位に遠慮して、よくケンカをする幼馴染みのままでいるけどな。それに…）

メリーつつか若い女性の前では、あまり言いたくはない内容なんだけれども

(それに?)

(ガーグさんは王位継承者だ。王位を継がないとしてもセシリーさんが正妻になれる可能性は低い。ましてやガーグさんは猿人族の血が濃いから)

(猿人族の血が濃いとエルフの血が薄れるから駄目なの?)

(うんにゃ。エルフが長生きな割に種族数が少ないのは性欲が薄く妊娠もしにくい為だと言われている。だけどガーグさんなら王族の血を広げられる可能性が高い。エルフィンに残るなら正室の他に側室を持たされるだろう。本人の意志には関係なくな)

(それって酷くない?それならシャルレーゼ様がお婿さんをもらえばいいじゃん)

(相手がいりゃそうしてるさ。だけど下手すりゃそいつが王様になるんだぜ?国民の為を考えたらガーグさんかその子供に王位を継がせたいんだろ。それでもって今回俺達が呼ばれたのはガーグさんの活躍を国民にみせる為でもあるのさ)

(今まで自由にさせておいて、なんで今更?)

(1つはガーグ冒険者隊が活躍したからさ。多分、今までのガーグさんの活躍は国民に伝えられていたみたいだよ。それにガーグさんは大事な儀式より、幼馴染みの世話役エルフを命掛けで助けた国民的英雄だから人気が高いらしいよ。お偉いさんはともかく一般エル

フはガール王子の帰還を心待ちにしていたらう)

(なんか偉い人って面倒臭いね。もう一つは?)

(わかんね。多分何重にも蓋をして隠してあるだろうから。まっ俺達は否応なしにそれに関わるんだろけど)

(コウサも勇者や王様になって、側室とか沢山欲しいの?)

(俺はメリーがいれば充分:いや、言い方が悪いな。俺はメリーが側にいてくれる限りメリーだけを愛してるさ。つつか俺は浮気できる程もてないって。……メリーひいたんなら、つつこんで!)

(コウサ今の言葉ケイタイのボイスレコーダーで記録しちゃった!)

最近、写メを撮るのにはまっていると思ったら、何時の間、そんな機能まで使いこなせる様になってたの?

(メリー、それ消しちゃ駄目?)

(駄目。永久保存が確定いたしました)

ザコとガーグさん その18 エルフィンでの生活(後書き)

活動報告にも書きましたが幕間を書いてから次のシリーズにいくか
悩み中

書くとしたら

イ・コージその後

ガーグ少年旅立ち編

ガープとシャルレーゼ

とかでしょうか。

他はリクエストが来たらです。

幕間 イ・コージ その後（前書き）

前話ですが間違っって違う話を投稿していました。

ガーグとセシリーの口喧嘩がある方が正解です

そして

悲哀サラリーマン

イ・コージの幕間です

幕間 イ・コージ その後

side ????

「ゴブリンを操る魔法か。その様な者をみすみす死なせるのは惜しい。何としても我が国に連れて来て留める手筈を整えよ」

side イ・コージ

カツカツと地下牢に響いていた足音は私の牢屋の前で止まりました。

「イコージさんですね。貴男をスカウトに参りました」

私に話し掛けてきたのは、年の頃は20代前半ぐらいといった所でしょうか？

美しい銀髪に容姿も整っている男性です。

「私は犯罪者ですよ。それに今更外に出て何をしろと言うのですか？」

「我が主は才能ある魔術師を集めるのに熱心でしてね。貴男にも興味を持たれたようです」

「お断りしますよ。私は人族はコリゴリなんですから」

「失礼ながら貴男の経歴を調べさせてもらいました。私に着いて来てくれるならば悪い様にはしません。私達が求めるのは才能なのですから」

才能ですか。

私は、その中途半端な才能で、地下牢にいるんですけどね。

「貴男におじさんから1つアドバイスを差し上げます。貴男は才能もあり見た目も優れておりますから、私には眩しすぎるんですよ。若い娘や冒険者なら話に乗るかもしれませんが。でも私は美味しい餌はタダではもらえないのが骨身に沁みているんですよ」

貴男みたいに恵まれた人がいるのに、危ない橋を渡ってまで私を欲する必要はないんですから

「わかりました。貴男が信用できる者を遣わします」

次の日に私の元を訪れたのは年は30代後半でしょうか？

私とは間逆の痩せすぎで頭も寂しい男性でした。

「先日は部下が失礼を致しました。単刀直入に言います、イ・コージさんを我が国の魔法研究所にスカウトします。ただし貴方の立場上、開発した魔法に名は残せません。しかしデュクセン以上の待遇はお約束します」

悲哀を感じさせる姿
誠実さが溢れる言葉
のるとしますか。

「わかりました。しかしここからどうやって出るんです？手続きは煩雑になりますよ」

何しろ犯罪者を他国に連れ出すんですから

「手続きはいりませんよ。直接ここから転移するだけですから」

男の名前はヤ・ツレ、魔法大国ルーンランドの魔法研究所の所員との事。

地下牢への転移魔法は、マジックアイテムワープボールを使用した物でした。

ワープボールはマジックアイテムと言っても移動距離は数m、しかもあらかじめ移動場所に1つのワープボールを設置しなければなりません。

ヤ・ツレ殿はネズミに魅了の魔法をかけてワープボールを設置したそうです。

地下牢に設置したワープボールを回収した後に私達は地下牢から脱出しました。

地下牢の外にあるワープボールは先日やってきた若者が持っているとの事。

「ヤ・ツレ殿、デユクセンからはどうやって出るのですか？」

一応、私は犯罪者な訳ですし検問や関所なんか、あつたら大変な事になります。

「ご心配なさらずに。この馬車なら中まで改めませんよ」

ヤ・ツレ殿指さした先にあつたのはルーンランド王家の紋章が描かれた馬車でした。

確かにこれなら大丈夫でしょうけども……

事が大きすぎる気がします。

ルーンランドまでの道のりは快適そのものでしたが、それがかえって私の不安を煽ります。

私には国あげて迎えられる様な才能なんてないんですから。ルーンランドに着いて不安がさらに増しました。

この私に助手が用意されていたんです！

しかも女性なんですよ。名前はリア・クローゼ

年や容姿はボサボサの髪と眼鏡を掛けているから不明です。

私とリアに与えた研究課題はゴブリンの被害を抑えるというもの。リアが言うには

「ルーンランドは戦士が少ないんだよ。だからゴブリン退治が大変なんだ」

だから私を呼んだんでしょね…

確かにルーンランドの魔法は優れていました。

でも魔法は実際に使えてなんぼですよ。

魔法理論を考えたら運用レベルまで持っていけなきゃ意味がありません。

ルーンランドでの研究に如何に巨大なファイヤーボールを作りだすかという研究がありました。

確かに理論上は巨大な火球を生み出せる様ですけども、詠唱時間や術者、触媒を考えたら中ぐらいの火球を連射した方が効果があるに決まっています。

話は逸れましたが私の魔法を応用すればゴブリンの被害なんて簡単に抑えれますよ。

「クローゼさんできましたよ。これがゴブリンの被害を抑えるマジ

ツクアイティム”ゴブリンバイバイ”です」

おじさんにネーミングセンスを期待しちゃいけません。

「えっ？イ・コージさんが来てまだ一週間ですよー」

「私は元々似たような研究をしてましたからね、このゴブリンバイバイは早い話がゴブリンのみに効く結界を作り出すマジックアイテムです。被害のでた地域に設置するだけで被害を減らせますよ」

結果、ルーンランド魔法研究所が売り出したゴブリンバイバイは、かなりの利益を上げた様です。

これで最低限の義理は果たせました、ゴブリン達も悪戯に冒険者に退治される事もなくなるでしょう。

幕間 イ・コージ その後（後書き）

中途半端な終わり方は後編を望む声があればです

幕間 イ・コージ その後2 (前書き)

まさかのイ・コージ幕間が三部作に

幕間 イ・コージ その後2

side ヤ・ツレ

ルーンランド謁見の間

「新しい客人の様子はどうか？」

「早速大きな成果を上げています。ゴブリンの被害が激減しただけでなく、イ・コージの作ったマジックアイテムによる収入により国庫が潤っております」

「デユクセンも愚かな男よ。家柄や騎士道ばかり重んじて手元の宝を逃すのだからな。彼の者なんとしても我が国に留めよ」

「我が王の命とあらば」

先ほどから私にお声を掛けて下さっていたのは、ルーンランドの王フサルク・ルーディック様でございます。

フサルク王は家柄等に関係なく実力に応じて役職をつけて下さる聡明な王。

本来なら私等は王の側にいるのも不敬と見なされても仕方がない生まれなんですから。

その敬愛する王からの命にどうやって応じましょう。

先ずは一番身近な者に聞いてみますか。

リア・クローゼ

彼女をイ・コージの助手にしたのはリアの価値観が魔術にのみであり、イ・コージを見た目で判断して不快な思いをさせる確率が低いからです。

「イ・コージさんが好きな物ですかー？」

「ええ、食事や服装で何か気付いた事はないか？」

「ないですよー。前に物質的な事への興味が薄れたと言っていましたー」

これは難しいですね。

「リスクが多き過ぎますけども、女を使いますか…」

金を握らせれば容姿に文句を言わない女もいます。しかしバレた時のリスクが大きいんですね。

side リア・クローゼ

私は目の前にいる上司の正気を疑った。

ヤ・ツレ、その魔力と権謀術数の高さをフルサク王にかわれて魔法研究所の所長まで出世した男。
でも…

「無理だと思えますよー。だってイ・コージさんは助手の私と話すのにも時間が懸かったんですよー？そんな人にどうやって疑われずに接するんですか？まして所長が良く知っている香水臭い女にはイ・コージさんは身構えるだけですー」

イ・コージさんは女性事務員と話すのさえ億劫がり私に任せる人なんだから。

「何か何かないのか？君が一番イ・コージの身近にいるんだから
所長が珍しく焦った様な態度をとります。」

「所長にしては、随分とご執心ですねー」

「彼が他人に思えないんだよ。いや私だけではく仕え人で私達位の年代なら彼を何とかしてあげたいと思う者が少なくない筈だ」

そして私はイ・コージさんがここまで来る経緯を聞かされました。

side イ・コージ

私は何をしているんでしょうか？

飯を食って働き、そして寝る。

ただ惰性で生きている気がします、場所が変わっても人が変わらな
きや結局同じなんですな。

「イ・コージさんは少しは慣れましたか？」

話掛けてきたの私をスカウトしてくれた一応の恩人ヤ・ツレ。

「特に問題はありませんよ。飯を食べて仕事をして糞をして寝る。
その繰り返しをしているだけですから」

「そんな味気ない話をしないで下さい。有名になれずとも貴男は既に自由の身なんですよ？ 旨い物を食べるのも、美美的服を着るのも、良い女を抱くのも自由なんですから」

「あの一件以来、色んなモノが色褪せて見えるんですよ。朝に旨い物を食べても夕には糞になる、美しい服は似合う人が着ればいい、良い女には良い男がつけばいいってね…でもね、夕になれば腹が減るし少しでもみすばらしい格好はしたくない、良い女がいれば目がいく…虚しい位に人な自分を毎日感じてしまい色褪せるんですよ。でも何も変えれないんですけどね」

結局、成果も家庭も築けずにイ・コージと言う人間は消えるだけなんです…

「しかし貴男が開発したゴブリンバイバイで救われた人間は大勢いるんですよ。それは誇りに思ってください」

誇りですか…

また所長らしくもない青臭い事を

「御心配を掛けてすいません。次の研究課題をお願いします。何だかかんだ言って働いている時が一番充実していますから」

愚痴っても変わりませんから、仕事をしますか。

side リア

「強力な魔法装備の作製ですかー？」私達に与えた新しい研究課題は我が国のヘッポコ騎士団でも、それなりに戦える為の武器の作製。

訓練をしると言いたい所ですが、騎士団の大半は貴族のお坊ちゃま、実際の主力は傭兵さん達ですし。

「ええ中々難しい注文ですね」

そんなのは強力な魔法を武具や防具に込めればいい気もするけど違うらしい。

下手に強力過ぎる魔法を込めると経験のない騎士は、自分の実力と勘違いしてしまうとの事でデユクセンでは強力過ぎる魔法装備の作製は数が限定されていたらしい。

「それならどういう装備を作るんですか？」

「軽量化、疲労回復、沈着は必須ですね」

「軽量化や疲労回復はわかりますけどー、沈着や不安は何ですかー？」

「ルーンランドの騎士団の大半は貴族の子息なんですよね？下手に死なれたら私達が困る事になりますらー」

あー、自分の息子の実力を棚にあげて怪我や死亡の原因を装備の所為にされかねないと。
だから沈着を。

「どうしてイ・コージさんは、そんな発想ができるんですかー？」

「少し前に面白い若者と関わりましてね。それ以来色んな考え方をしてみる事にしたんですよ」

この人と一緒に働いていれば、私もそんな考えがもてるかもしれないま

せん。

幕間 イ・コージ その後2（後書き）

イ・コージ魔法研究所でオリジナルを書けるかもしれないと思っ
り。
でもサラリーマン以外は読まない可能性が…

幕間 イ・コージのその後3 (前書き)

やばい、元はネタキャラだったイ・コージが

幕間 イ・コージのその後3

side イ・コージ

騎士団のお坊ちやま達は簡単に魔法装備を作れといいますけど、これは完璧なオーダーメイド。

騎士団に支給されている装備に基本の軽量・疲労回復・沈着の他に個人の希望や素養に合わせた魔法を付与しなければなりません。

.....

貴族のお坊ちやま達って、何でこんなに自由なんでしょう。

要望1 疾風のように早く動ける様にして下さい

君の筋肉がスタボロになりますし、動態視力もついていけないかと

要望2 光の魔法を付与して欲しい

君の実力だと、鎧が輝く位です

要望3 女にモテる様にしてくれ

鎧を脱いだ途端に振られますよ

「どうしたのですかね」

あまりにも馬鹿馬鹿しい要望ばかりで溜め息が出て来ます。

厄介な事に彼等の要望にある程度答えないとクレームが出かねません。

「イ・コージさん溜め息なんてついてどうしたんですかー？幸せがにげちゃいますよー」

話掛けてきたのは相変わらずボサボサ髪に白衣と眼鏡が特徴の助手リア・クーロゼさん。

私から逃げる幸せがあるんなら、お目に掛かりたいんですけども

「これですよ。これが原因です」

私はリアさんに騎士団からの要望書を手渡しました。

「ありゃー…これはまた身の程知らずばかりですねー。こんな無視しちゃうでしょうよー」

「そももいきませんよ。とりあえず要望書を区分けします。先みたい人達は派手さがあれば満足しますから。逆にこれなんて研究者心をくすぐってくれますね」

「普段の生活にも使える動かし易い籠手ですかー？」

「ええ、その方は戦場以外にも危険があるのを分かっているようです。手をやられては剣も槍も使えませんからね」

戦場でロープを使ったり水分補給の度に籠手を外す訳にはいきませんからね。

「それなら鉄の籠手に軟化を付与するんですかー？」

「それだと鉄が金属疲労を起こしかねませんから丈夫な魔物の皮に硬化の魔法を付与します。私は徹夜をしますけどリアさんは帰って

下さいね」

side リア

イ・コージさんは子供みたいな笑顔をしたかと思っただけ、突然張り切り始めました。

（イ・コージさんは私よりもずっと年上だけど、あんな無邪気な笑顔もできるんだー）

それよりも、せっかくイ・コージさんの魔法付与が見れるのに見逃す手はない。

魔法付与もただ付与すれば良いって訳じゃないらしい。
皮手袋に硬化を付与するなら手首や手の甲に重点的にまわる様にす
るし、逆に手の平とかは簡略化した方が良く、経験に裏打ちさ
れた技術がある。

「私は助手ですから一緒に仕事をしますよー」

side イ・コージ

はい?!

「駄目です。第一リアさんは何歳なんですか？」

「今年で二十歳ですよー。何で駄目なんですかー？」

「二十歳?! 駄目です! 親御さんや彼氏が心配しますよー」

「家は放任主義ですし、彼氏はいないから大丈夫ですよー」

まあ研究しかしませんし、若い女性と私に何かあるなんて考える方が非現実的ですよね。

「仕方ありません。でもハードなので夜食や仮眠セットを用意してきて下さい」

私は寝ませんけどね。

納期っていう会いたくない腐れ縁な親友の姿が見え隠れしていますから。

先ずは区分けからです。

派手にしておけば満足する方と新しい工夫が必要な方。研究所にある触媒で補える魔法と発注が必要な魔法。

付与する魔法の確認も必要です、後から

”これじゃないんだよねーっ”

とか言われた困りますし、それなら途中で言えこの野郎！！完成前に何回も確認したじゃないか！

なんて腹の中で叫んだ事が何度もありましたし。

そして個別の方針が決まったらスケジュール作り。

仕事はなくても騎士団ですから装備がなくては困ります。

特にこの騎士団は装備がないと騎士か遊び人か不良か分からないみたいですから。

.....

私は何度か仮眠をとったけどイ・コージさんは殆ど寝ていない

「明け方の空気って大好きなんですよ。ヒンヤリとしているけども夜と違って、これから一日が始まるって気持ちになるんですよ。晴れた日なんか年甲斐もなくワクワクするんですよ」

徹夜明けの所為かイ・コージさんは多弁になっている。

「イ・コージさんは眠くないんですかー？」

「何かをしている最中は大丈夫ですよ。それに意志確認がとれるまでは、やれる事が減りますからね。その時間で睡眠をとりますよ。あつリアさんは帰って下さい、付与は早くても明日からですし」

この人は私がスケジュール管理をしないと、直ぐに自分の生活や時間を犠牲にしまいそうだ。

「イ・コージさんは何でそんなに頑張れるんですか？他の研究所はもっとお気楽ですよー？」

巨大ファイヤーボールを研究している部署なんて定時出勤・定時帰宅なんだし。

「仕事だからですよ。特に今回の仕事は人の命に関わりますからね、騎士の皆様には親御さんや友達、恋人がいます。私にはその人達に対する責任もありますから。私には何も無いからって手を抜く訳にはいきませんよ」

私は感心もしたが、でも腹もたった。

「何もないってなんですか？今隣には可愛い助手がいるんですよー」
ボサボサの髪に寝起きで化粧もしていない娘が可愛いって言うのは
我ながら厚かましい感じもするけども。

「だってリアさんは私の部所に希望して来た訳じゃないでしょ？お
じさんには関係ないじゃないですか」

イ・コージさんは苦笑いをしている。

言葉はきついでけども表情は優しく悪戯坊主みたい。

「それなら今ここでイ・コージさんの助手に正式に立候補します」

ここは魔法王国ルーンランド、実力のある魔術師の元には弟子が集
まる。

名は出せずともイ・コージ部署に希望者が来てもおかしくはない。

私には一番弟子のポジションを譲る気持ちは全くなかった。

「…そうですね。それなら改めてよろしくお願いしますよ」

イ・コージさんの顔が赤いのは朝焼けの所為なのか、照れているか
らなんだろうか。

私の中で色んな物が動き出した感じがした。

幕間 イ・コージのその後₃（後書き）

これは幕間じゃない気が…

ザコの番外編でイ・コージがオリジナルになりそうな予感が

幕間 セシリーの思い出（前書き）

リクエストがあったセシリー視点の昔話です。
女性視点は難しい

幕間 セシリーの思い出

side セシリー

ガー君はあの時の事をどう思っているんだろうか？

あの時私が大人しくしていればガー君は冒険者なんて危ないお仕事をしないで平和にお城で暮らせていたのに…

ガー君と始めって会ったのは私が6歳の時。

「おかあさん、おさるの人こわくない？」

「セシリー、これから会うガーグ様は貴女がお仕えする方なのでから、おさるさんなんて言うんじゃないやありません」

この頃の私は猿人族はお話に出てくる怖い猿みたいな存在だった。ガー君を初めて見た印象も怖いだったんだけども。だって、エルフは細身な人しかいなのにガー君は、その頃から筋肉質なやんちゃ坊主だったんだもん。

「セ、セシリー・エルレインです。よろしくおねがいします」

「ガーグだ。よろしくな」

そう言ったガー君の笑顔はお日様みたいだった。

今じゃ頭がお日様だけ。

それでも幼い私にとって猿人族のガー君は怖い存在だったのよね。

あの時までには…

「おにんぎよさん、かえしてよー」

よくある話で私は悪戯坊主に人形を取り上げられていた。

相手は確か、その頃で8才か9才だったと思う。

貴族の子供にとって私は丁度良いからかい対象だったに違いない。その頃の私は大事なお友達を取り上げられても泣くしかできなかった。

「エルフってなさけないなー。おんのをいじめてたのしいか？」

「チビ猿がうるさいんだよー」

相手はガー君より年上だから舐めてかかったんだろう。

「ぼうけんしゃをなめるなー」

今考えると何の不思議がない事なんだけど、エルフは背が高くても筋力はつきにくい体質、かたやガー君は冒険者一家に育ったから剣術やトレーニングを、その頃からしていたんだって。

「ほらよにんぎょうだ。次とられた時はいらいをうけてやるからな」

ガー君は照れくそうに人形を渡してくれたっけ。

私は世話役としての勉強、ガー君は礼儀作法や神聖魔法、精霊魔法、剣術の勉強。

そしてあいた時間にはミッシェルと3人で遊んでいた。

でもいつの間にかガー君の周りにはエルフの子供が集まる様になっただよね。

ガー君は口も見た目も悪い癖に面倒見が良いから。

そして14歳になると、私のガー君への気持ちが確かな物になっていた。
でも私だけじゃなかったんだけどね。

「皆様は誰がお好き？エンリト様？ミツシエル様？……それともガーグ様？」

「ガーグ様はちょっと、私は断然ミツシエル様ですわね」

「私はエンリト様です」

ガー君は、ある程度の家柄の娘に不人気だったけども……

「ねえねえみんなは誰が好き？ガーグ様？ミツシエル様？……それともエンリト様？」

「断然ガーグ様だよ。王族なのに偉ぶらないし口は悪いけど優しいし」

「だよなー。こないだの家の弟が足をくじいた時にわざわざおぶつて来てくれたんだよ」

「ちょっと、ミリー貴女ガー君に何させるてるのよ！ガー君はエルフインの王子なのよ」

「それならセシリーのガー君の方が失礼じゃん」

「レニ、ガー君はガー君公認だから良いの。それに私はガー君の世話役なんだからね」

今思えばあの頃は楽しかったな。

会おうと思えば直ぐにガー君に会えたんだし。

そして16歳の試練の時

「ガー君、ハンカチは持った？傷薬は？」

「セシリー、墓参りに行くだけだぜ？心配すんなよ」

でも私は心配でガー君の後をついて行ったんだ…

王家の墓近くに魔物が現れる事なんて殆どなかったから、でも殆どは絶対じゃないんだよね…

ガー君が王家の墓に入ろうとしたその時に私に魔物が襲い掛かってきた。

「セシリー？ちっオークか！」

気付いた時には血まみれになりながらもガー君がオークと戦っていたんだ…

ガー君が怪我をしたから試練は中止になり、その数日後の事に家に引きこもっていた私をミッシェルが訪ねてきた。

「ガーグがエルフィンを出るそうです。純血派の策略ですね…」

嘘？ガー君がいなくなる？

私の所為？まだ何も伝えてないのに？

「ガーグからの伝言です」そのうちにエルフィンに聞こえる位の冒険者になってやる。楽しみにしておけ」だそうですよ」

「シャルレーゼ様は反対をされなかったの？」

「ガーグの意志に任せたいですよ。冒険者はガーグの夢でしたし、あつ私も何年かしたらエルフィンを出ますから」

私はミツシエルも居なくなる事よりも、ガー君が何日かしたらエルフィンから出て行く事の方が重要で気付いたら走り出していたんだ。

「ガー君行っちゃうの？ごめん私が邪魔しなければ…」

「何言ってたんだ。俺は王族より冒険者になりたいんだぜ？謝る必要はねえよ」

「でも私はガー君に行つて欲しくない…」

「バーカ、一生の別れじゃねえんだからよ。気がむけば帰つて来るさ」

あの時は若かったなー。

素直にガー君を待とうって思ったんだから。

そして今

「ガー君！」

「んだよ。何か用か？」

「ガー君は私と再会できて嬉しかった？」

「お前な、そんなのは幼馴染みなら分かるだろ？」

「分かんないから聞いてるんだよー」

私はガー君と腕を組む

せつかく再会できた大切な人を二度と逃さない為に

幕間 セシリーの思い出（後書き）

なんとイ・コージをオリジナル小説にしました。

良かったら見て下さい

幕間 シャルレーゼ秘話(前書き)

次からは本編にいきます

幕間 シャルレーゼ秘話

side シャルレーゼ

エルフィン聖王国の城から少し離れた場所に、それはある。

本人の体格には似つかわしくないコジンマリとした墓には儂の最愛の男が眠っている。

ガープは王族ではない為に王家の墓場で弔う事ができずに、森の中に小さな墓を作った。

儂とガープの思い出の場所にはガープを始め儂の大事な家族が眠っておる。

(ガープ、儂等の曾孫のガークは沢山の仲間に囲まれて賑やかにしておるぞ。お前も息子のガードや孫のガーク達とそっちで、賑やかに暮らしておるのか?)

それに答えるかの様に風が優しくシャルレーゼの緑色の髪を撫でた。

(早く儂を迎えに来ぬか、この馬鹿ガープ。儂はお前に思いつきり甘えたいんじゃないぞ)

目を閉じると次々に浮かんでくる。

ガープがくれた幸せな日々が。

100年前のエルフィン聖王国

「父上、なぜ猿人族を我が国に招いたのじゃ?」

「シャルレーゼ、事情が事情じゃ仕方あるまい。丁度良い機会だ、お前も彼等に同行してデユクセンに行け」

へっ？

「父上なぜ儂が同行せねばならないのじゃ！」

猿人族の国なぞ汚らわしい

「彼等の国でエルフが暴れておるそうだ。名前はセント・ブラックローズ」

その名前は忘れたくても忘れられない。
何しろ儂の元婚約者なんじゃから

「わかりました。彼等に同行します……」

しかし猿人族の男は良く喋るもんじゃの。

特にブレイズとか言う男は、エルフが珍しいのか

「姫様足は痛くないですか？」

「姫様外の世界はいかがですか」

とうるさくて仕方がない。

それにたいして精霊の加護を受けてない癖に炎の勇者ブレイズ・水の僧侶ウォルター・風の格闘家ウィンドウと名乗って恥ずかしくはないのか？

そんな中1人だけ儂等から離れて歩いている男がおった。強面の顔に分厚い髭、敵つい体をした、その男は気怠そうに1人後方を歩いている。

「お前の名前は何と言っじゃ？」

「ガープだよ」

「名前を聞いたんじゃから、ちゃんと名字を答えんかい」

「ちっ、チョーマだよ。ガープ・チョーマだ」

「これまた随分と可愛い名前じゃの、チョーマちゃんか」

「ガープだ。ちゃん付けは止めろ」

顔を赤くして可愛いのおー。

これなら退屈しないで済みそうじゃ

「儂の方がお前より遙かに年上なんじゃぞ」

まっ儂に認めさせたら考えてやるわ。

「それでチョーマちゃんは何で離れて歩いているんじゃ？儂に話しかけられないで拗ねておるのか？」

「誰が拗ねるかっ！あんな風に話し込んでいたら誰かが背後からの攻撃を警戒しなきゃいけないだろ？」

「それならもう少しシャッキッと歩かんか。ダラダラとみっともない」

「これはな、いざって時の為に脱」「脱力じゃろ？知つとるわ」

「なら聞くなー！」

期待通りの反応じゃの

「おいお前等メシが出来だぞ！」

ガープは顔に似合わず料理が出来るらしいのじゃが味が心配じゃ。猿人族は肉料理を好むらしいからの。

「ガープさん今日のメニューは何ですか？」
穏やかな口調で聞いているのは、確か僧侶のウォルターとかいう奴じゃ。

「今日はジャガイモのシチューだよ」

それなら肉を除ければ食えるかもしれん。

「どれ味は…うまいっ。しかも肉も入っておらぬ、香辛料も少なめでエルフ好みの味付けじゃ」

しかも勇者や武道家の分には炙った干し肉を後から入れた所をみる

と儂に気を使つての料理らしい。

「シャルレーゼ様、ガープのご飯は気に入りましたか？」

「ああエルフでも食える味付けじゃ」

「ガープさんが言っていましたよ。」 姫さんは俺等のわがままに付き合ってくれてんだ、飯位は楽しんでもらわねえとな” だそうです」

後からガープに何である時、儂に言わなかったかを聞いたらアヤツは顔を赤くしながら、何も聞かない方が飯を楽しめるだろと言ったんじゃよ

それからガープと話す機会が増えて気づけばガープの隣にいるのが当たり前になってつおつた。

それは儂がちよっと席を外していた時の事。

ガープとウォルターが話をしているのを偶然に聞いたんじゃ。

「ガープさんはシャルレーン様の事を好きなんですか？」

「俺は無駄な事はしねえ主義なんだよ。俺なんかじゃ釣り合わねえ女を好きになつても苦しいだけだ……」

嬉しすぎて心が痛くなったのを今でも覚えておる。

ガープも儂の事を好いておると分かったのじゃからの。

そのお陰でセントと対峙した時も冷静でいられたしの。

「シャルレーン可哀想に、猿人族に無理矢理連れて来られたんだろ
う？さあ僕の元へおいで」

「僕は自分の意志でここへ来たし、お前なんぞの所へ行く気はないわ」

ただでさえガープの前で元婚約者と話すのが嫌なのにセントのウザさに腹がたった。

高位の精霊術が飛び交う中では猿人族が出来る事は皆無と想ってた。

なのにガープは単身飛び出して満身創痍になりながらもセントを斬り捨て地面に倒れたんじゃ。

僕はガープを抱きしめながら問うた。

「ガープしっかりせい！なんでこんな無茶をしたんじゃ？」

「姫さんに惚れた男を殺させる訳にはいかねーよ。まっそいつに対するヤキモチもあつたけどな」

馬鹿……

「僕か惚れている男はお前じゃ。種族も地位も関係ない！僕が欲しいのはお前との未来じゃ」

そう言うとお前は顔真っ赤にしながら笑ったの。

そしてこの森でお前について行く事を話しプロポーズされたんじやよの

ガープ息子や孫と一緒に待っておれ

曾孫のガーグの冒険話を土産に持ってくからの

幕間 シャルレーゼ秘話（後書き）

書きためがなくなった

ザコモイ・コージも感想・指摘お待ちしております

ザロのエルフィン滞在記 新しい依頼（前書き）

久しぶりの討伐です

ザコのエルフィン滞在記 新しい依頼

side 功才

ミッシェルさんが新しい依頼を持ってきてくれました…。

俺達は王子様の連れな訳で、こんなに早く依頼を持ってこなくても良いんだけども

しかも討伐対象は熊。

エルフィンのブラックフォレストと言う町にロックアーマーベアって熊が出没しているらしい。

訳して岩の鎧の熊。

データボール参照ロックアーマーベア

体長7mを越える岩の甲殻をまとったクマさんです。

堅くて力も強く洒落にならない実力を持っていますよ。

コウサ君ヒーラーが加入したから怪我をしても平気ですよね。

怪我で済めばラッキーなんですけどね…

やっべっ！マジにやばい

なんとか、この依頼を断りたいんだけども…

「コウサ、クマだよ熊肉だよー。ロックアーマーベアは岩の鎧の下には美味しいお肉があるんだよっ！。絶対に狩るんだからっ」

メリーの気合いが半端じゃないんです

「ガー君、やるよっ！依頼をこなしまくって地位を確立して側室を持たなくても文句が言われない王族を目指すんだから」

セシリーさん後半は個人的な希望なんじゃ…

これは俺がいなくても依頼をこなせるかと期待をしちゃったんだけども

「ザイツ、被害がでる前にクマを倒すぞ」

ガーグさんが真剣な表情で俺の肩に手を乗せてくれました。

断ったら、この3人に殴られそうだよな…

「分かりましたよ、策を練ればいいんでしょ。確実に倒せる策を。まずはブラックフォレストの領主の事を教えて下さい」

「エンリント・ゴールドスキー、ガチガチの純血主義者。エルフは一番素晴らしい種族だから他種族の血が混じるのは汚れたって騒いでいるお馬鹿。あつガー君、私は他種族の血はウエルカムだから」

セシリーさん、説明よりアピールに力が入ってます

「それなら何で俺達に依頼をよこしたんですか？依頼が成功すればガーグさんの手柄になるんじゃないですか？」

答えてくれたのはミッシェルさん

「エンリト卿は魔物の相手は野蛮な人族の血が入っているガーグが向いていると騒いでいるそうです。元々民衆の支持が低いのにガーグを馬鹿にした所為で人気は急降下していますよ」

ガーグさんは民衆の人気も高いらしいけども、ミッシェルさんが動いたんだな

「ロックアーマーベアってよくブラックフォレストに出没するんですか？」

伝説のロックアーマーベア退治の獵師がいたりして

「彼奴は俺の獲物だ。素人が手をだすんじゃないぞ！」

そんな展開を希望しているんですが

「あの熊は普段はブラックフォレストから離れた岩山に住んでいるだよ。町まで降りてくる事は滅多にねえよ」

そんな希望をあっさりとガーグさんが打ち砕いてくれた。

いや、まだ諦める訳にはいかない。
だって熊だぜ。

「それなら軍隊が出た方が確実なんじゃないですか？」

「エルフは弓と魔法が主体武器なんですよ。弓じゃロックアーマーベアに致命傷を与えるのは難しいですし、エルフィンで上位魔法を使う時には精霊の許可がいるそうなんです」

次に俺の希望を砕いてくれたのはイントルさん。

まあ確かに森で火災系の魔法使えば森林火災だし、冷気系の魔法を使えば木に被害がでるもんな。

「それに軍隊なんかが出たらロックアーマーベアは警戒して森から出てこないと思う。イントル、自分の考え間違っていないよね」

「ハンナ正解ですよ。野生動物は人の気配に敏感ですから。軍隊がいたら警戒するでしょう」

ハンナさんとイントルさん、息があってきたよな

「それなら何でクマは町まで降りてきたんですか？」

ほらっ、子熊がさらわれたとかなら戦っちゃいけないじゃん。

「ロックアーマーベアはハチ蜜が好物で岩山からブラックフォレストの森に降りてきてハト蜂の巣を襲うんだよ。でもエンリトも最近ハチ蜜にハマっているらしくて、町の人間に税金代わりに納めさせているんだよ」

へっ？

「それならロックアーマーベアの方もエンリトが捕ったって事ですよ？自業自得じゃないですか」

決まり！助ける必要はなし！

「ああ、エンリトは自業自得だ。だからブラックフォレストの民に被害をだす訳にはいかねえ」

ガーグさんが王族モードになっちゃいました。

（コウサさん、エンリトはガーグの試練を邪魔した男ですから、遠

慮はいりません)

ミッシェルさんが黒く呟く。
でもそう言う事なら、やる気をだしますか。

「ミッシェルさん、ブラックフォレストの町の地図とエンリトの屋敷の見取り図をお願いします」

そして俺は師匠にあれを注文して…

「ガーグさん……は手に入りますか？」

「それなら何とかなるぞ。って事はザイツ細工は流々なんだな」

「ええ、後は…」

「仕上げをご覧じろっ！だよね。コウサツ」

メリーが俺の背中に抱きつきながら笑顔で決めてくれた。
久しぶりだから、俺も言いたかったのに。

side ガーグ

「ガー君、ガー君のパーティーの人達って変わってるね」

確かに変わっている奴しかいねえどよ

「それがどうかしたか？」

「だって、あの人はエルフィンと関係ないのに、あんなに一生懸

命なんだよ。エンリトなんて自分の領地なのに開わる気がないし。昔話の勇者みたいだね」

約1名、やけくそになってる奴もいるけどな

「バーカ、依頼だから一生懸命になるんだよ。それに俺達は勇者なんて胡散臭い者じゃなく冒険者だぜ。誰かの為に戦うんじゃなく、自分か仲間の為に戦うんだよ」

でもウチの腹黒小僧は、見も知らぬエンリトを罠にかけるんだろうけど

ザロのエルフイン滞在記 新しい依頼（後書き）

最近、功才よりイ・コージの人気の方が高い感じします
感想・指摘お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606x/>

ザコ 勇者 ザコにはザコの闘い方

2011年11月19日17時25分発行